茨城県教育財団文化財調査報告第136集

北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

大作遺跡
大畑遺跡

平成10年3月

日本道路公団東京第一建設局
財団法人　茨城県教育財団

210231
I 11
(HB)

茨城県教育財団文化財調査報告第136集

北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

大作（おおさく）遺跡
大畑（おおばたけ）遺跡

平成10年3月

日本道路公団東京第一建設局
財団法人　茨城県教育財団

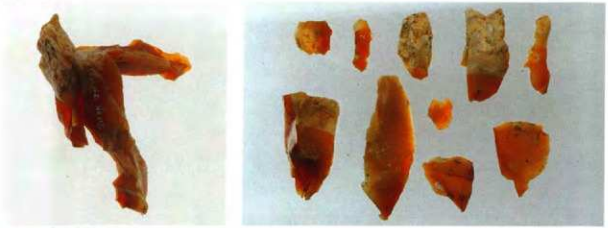
98613003

大畑遺跡

大畑遺跡遠景(南から北方向を望む)

大畑遺跡出土弥生土器

大畑遺跡



旧石器 接合資料1

旧石器 接合資料2

第1号石器集中地点出土石器

序

北関東自動車道は，北関東３県の主要都市と常陸那珂港を結ぶ高速道路です。また，東京から放射状に延びる３本の高速道路を横断的に結ぶことにより，均衡のとれた交通体系の整備を図るとともに，太平洋側と日本海側を結ぶ高速道路として北関東地域における総合的な発展を推進する基盤施設であります。

北関東自動車道（友部～水戸）建設予定地内には，埋蔵文化財の包蔵地である大作遺跡，大畑遺跡が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は，日本道路公団から北関東自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査事業について委託を受け，平成８年４月から平成８年12月にかけて，上記２遺跡の調査を実施してまいりました。

本書は，大作遺跡及び大畑遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が，研究の資料としてはもとより，郷土の歴史の理解を深めると共に，教育，文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理を進めるにあたり，委託者である日本道路公団からいただきました多大な御協力に対し心から御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，茨城町教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導，御協力をいただきましたことに，衷心より感謝の意を表します。

平成10年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　橋本　昌

例　　言

1　本書は，日本道路公団東京第一建設局の委託により財団法人茨城県教育財団が平成8年4月から12月まで発掘調査を実施した大作遺跡，大畑遺跡の発掘調査報告書である。遺跡の所在地は，次のとおりである。

大作遺跡　　茨城県東茨城郡茨城町大字駒渡字大作818番地ほか

大畑遺跡　　茨城県東茨城郡茨城町大字大戸字穴戸道517番地ほか

2　大作遺跡，大畑遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		橋本　昌	平成7年4月～
副理事長		中島弘光	平成7年4月～
常務理事		梅澤秀夫	平成8年4月～平成9年3月
		齋藤紀彦	平成9年4月～
事務局長		小林隆郎	平成8年4月～平成9年3月
		西村敏一	平成9年4月～
埋蔵文化財部長		沼田文夫	平成8年4月～
埋蔵文化財部長代理		河野術司	平成6年4月～
企画管理課	課長	小嶋弘明	平成8年4月～平成9年3月
	課長	河崎孝典	平成9年4月～
	課長代理	根木達夫	平成7年4月～
	課長代理	清水　薫	平成9年4月～（平成8年4月～平成9年3月係長）
	主任調査員	小高五十二	平成8年4月～
経理課	課長	河崎孝典	平成8年4月～平成9年3月
	課長	鈴木三郎	平成9年4月～
	主査	田所多佳男	平成8年4月～
	課長代理	大高春夫	平成8年4月～平成9年3月
	主任	小池　孝	平成8年4月～
	主任	宮本　勉	平成9年4月～
	主事	柳澤松雄	平成8年4月～平成9年3月
	主事	小西孝典	平成9年4月～
調査課	課長（部長兼務）	沼田文夫	平成8年4月～
	調査第二班長	根本康弘	平成8年4月～平成9年3月
	主任調査員	池田晃一	平成8年4月～平成8年12月調査
	副主任調査員	長谷川　聡	平成8年4月～平成8年12月調査
整理課	課長	小泉光正	平成9年4月～
	副主任調査員	長谷川　聡	平成9年7月～平成10年3月整理・執筆・編集

3　本書で使用した記号等については，凡例を参照されたい。

4　本書の作成にあたり，窪田恵一氏にご指導をいただいた。

5　発掘調査及び整理に際して，御指導，御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

ふりがな	きたかんとうじどうしゃどう(ともべ～みと)けんせつこうじちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書II
副書名	大作遺跡　大畑遺跡
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第136集
編著者名	長谷川　聡
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　℡ 029-225-6587
発行機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　℡ 029-225-6587
発行年月日	1998年（平成10年）3月20日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大作遺跡	茨城県東茨城郡 茨城町大字駒渡 字大作818番地ほか	08302	36度 18分 10秒	140度 23分 57秒	19960401 ～ 19960531	2,380㎡	北関東自動車道建設工事に伴う事前調査
大畑遺跡	茨城県東茨城郡 茨城町大字大戸字 宍戸道617番地ほか	08302-078	36度 18分 27秒	140度 25分 26秒	19960601 ～ 19961231	10,879㎡	

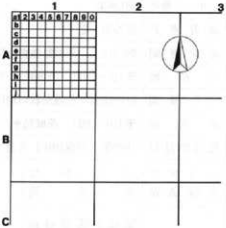
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大作遺跡	集落跡	旧石器時代		石器（尖頭器）	
		縄文時代	炉穴　7　基	縄文土器片（早期）	縄文時代の炉穴
		古墳時代	竪穴住居跡　1　軒 竪穴遺構　1　基	土師器（坩，甕） 土製品（球状土錘）	古墳時代の集落
大畑遺跡	生産跡 集落跡	旧石器時代	石器製作跡　1か所	剥片，礫石	メノウ剥片101点出土
		縄文時代	竪穴住居跡　1　軒 陥し穴　3　基	縄文土器片	
		弥生時代	竪穴住居跡　10　軒	弥生土器（十王台式，一軒屋式），土製品(勾玉，紡錘車)，鉄製品（鉄鏃，鎌）	弥生時代後期の集落跡
		古墳時代	竪穴住居跡　1　軒	土師器（坏）	
		中・近世	道路跡　1　条 地下式壙　2　基 井戸　2　基 炭焼き窯　4　基 墓壙　4　基	土師質土器片，陶器片 陶器片 内耳鍋 煙管，古銭（寛永通宝）	中世の井戸から内耳鍋が多数出土

凡　　例

1　遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし，大作遺跡はX＝＋33,680m，Y＝＋50,720mの交点を，大畑遺跡はX＝＋34,040m，Y＝＋52,960mの交点をそれぞれ基準点とした。

大調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西，南北に各々10等分し，4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ1，2，3…とし，「A1区」，「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は，北から南へa，b，c…j，西から東へ1，2，3…0とし，位置を表示する場合は，大調査区の名称を冠し，「$A1_{a1}$区」，「$B2_{0j}$区」のように呼称した。



第1図　調査区呼称概念図

2　遺構，遺物及び土層に使用した記号は，次のとおりである。

遺構　住居跡－ＳＩ　土坑－ＳＫ　井戸－ＳＥ　溝－ＳＤ
　　道路跡－ＳＦ　不明遺構－ＳＸ

遺物　土器・陶器－Ｐ　土製品－ＤＰ　石製品－Ｑ　金属製品・古銭－Ｍ　拓本土器－ＴＰ

土層　撹乱－Ｋ

3　遺構・遺物の実測図中の表示は，次のとおりである。

炉　焼土　粘土　硬化面

● 土　器　□ 石器・石製品　○ 土製品　△ 金属製品　▲ 拓本記録土器

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5　遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法については，次のとおりである。

(1)　遺跡の全体図は400分の1，住居跡や土坑は60分の1に縮尺し掲載した。

(2)　遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては，個々にスケールで表示した。

(3)　「主軸方向」は長径方向あるいは炉を通る軸線を主軸とし，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N－10°－E，N－10°－W）。

なお，［　］を付したものは推定である。

(4) 土器の計測値は，A－口径　B－器高　C－底径　D－高台径　E－高台高　F－つまみ径　G－つまみ高　H－頸部最小径　I－胴部最大径とし，単位はcmである。

なお，現存値は（　）で，推定値は［　］を付して示した。

(5) 遺物観察表の備考の欄は，土器の残存率，実測（P）番号，出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。

6 遺構番号については，調査の過程において遺構の種類ごとに調査順に付したが，整理の段階で遺構でないと判断したものは欠番とした。

目　　次

序
例　言
凡　例
第1章　調査経緯 …… 1
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査経過 …… 1
第2章　位置と環境 …… 3
　第1節　地理的環境 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 4
第3章　大作遺跡 …… 9
　第1節　遺跡の概要 …… 9
　第2節　基本層序 …… 9
　第3節　遺構と遺物 …… 9
　　1　縄文時代の遺構と遺物 …… 9
　　2　古墳時代の遺構と遺物 …… 17
　　3　遺構外出土遺物 …… 20
　第4節　まとめ …… 22
第4章　大畑遺跡 …… 24
　第1節　遺跡の概要 …… 24
　第2節　基本層序 …… 24
　第3節　遺構と遺物 …… 25
　　1　住居跡 …… 25
　　2　方形竪穴遺構 …… 76
　　3　地下式壙 …… 80
　　4　井戸 …… 81
　　5　土坑 …… 94
　　6　墓壙 …… 112
　　7　溝 …… 115
　　8　道路跡 …… 122
　　9　炭焼窯跡 …… 124
　　10　ピット群 …… 130
　　11　不明遺構 …… 133
　　12　旧石器時代の遺物 …… 138
　　13　遺物包含層 …… 151
　　14　遺構外出土遺物 …… 156
　第4節　まとめ …… 160
附　章　自然科学分析　　パリノ・サーヴェイ株式会社

挿 図 目 次

第 1 図　調査区呼称概念図
第 2 図　大作・大畑遺跡周辺遺跡分布図 …… 6
第 3 図　大作遺跡基本土層図 …… 9
第 4 図　大作遺跡調査区設定図 …… 10
第 5 図　第 9 号土坑実測・出土遺物拓影図 …… 13
第 6 図　第 1・2・3・4・7 A・B
　8・10・11・12 号土坑実測図 …… 14
第 7 図　第 1 号柱穴遺構実測図 …… 15
第 8 図　第 1 号住居跡実測図 …… 17
第 9 図　第 1 号住居跡出土遺物実測図 …… 18
第 10 図　第 1 号竪穴遺構・出土遺物実測図 …… 20
第 11 図　遺構外出土遺物実測・拓影図 …… 21
第 12 図　大畑遺跡調査区設定図 …… 23
第 13 図　大畑遺跡基本土層図 …… 24
第 14 図　第 9 号住居跡出土遺物拓影図 …… 25
第 15 図　第 9 号住居跡実測図 …… 29
第 16 図　第 1 号住居跡実測図 …… 29
第 17 図　第 1 号住居跡出土遺物実測・
　拓影図(1) …… 29
第 18 図　第 1 号住居跡出土遺物実測・
　拓影図(2) …… 30
第 19 図　第 2 号住居跡実測図 …… 31
第 20 図　第 2 号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 32
第 21 図　第 3 号住居跡実測図 …… 34
第 22 図　第 3 号住居跡出土遺物実測図(1) …… 37
第 23 図　第 3 号住居跡出土遺物実測・
　拓影図(2) …… 38
第 24 図　第 3 号住居跡出土遺物実測図(3) …… 39
第 25 図　第 4 号住居跡実測図(1) …… 40
第 26 図　第 4 号住居跡実測図(2) …… 41
第 27 図　第 4 号住居跡出土遺物実測図(1) …… 43
第 28 図　第 4 号住居跡出土遺物実測・
　拓影図(2) …… 44
第 29 図　第 5 号住居跡実測図 …… 46
第 30 図　第 5 号住居跡出土遺物実測・
　拓影図(1) …… 47
第 31 図　第 5 号住居跡出土遺物実測・
　拓影図(2) …… 48
第 32 図　第 6 号住居跡実測図 …… 51
第 33 図　第 6 号住居跡出土遺物実測図(1) …… 52
第 34 図　第 6 号住居跡出土遺物実測・
　拓影図(2) …… 53
第 35 図　第 6 号住居跡出土遺物実測図(3) …… 54
第 36 図　第 7 号住居跡実測図 …… 57
第 37 図　第 7 号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 58
第 38 図　第10号住居跡実測図 …… 60
第 39 図　第10号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 61
第 40 図　第11号住居跡実測図 …… 63
第 41 図　第11号住居跡出土遺物実測図(1) …… 64
第 42 図　第11号住居跡出土遺物実測図(2) …… 65
第 43 図　第11号住居跡出土遺物実測・
　拓影図(3) …… 66
第 44 図　第11号住居跡出土遺物実測図(4) …… 67
第 45 図　第12号住居跡実測図 …… 71
第 46 図　第12号住居跡出土遺物実測図(1) …… 72
第 47 図　第12号住居跡出土遺物実測・
　拓影図(2) …… 73
第 48 図　第 8 号住居跡・出土遺物実測図 …… 75
第 49 図　第 1 号方形竪穴遺構実測図 …… 76
第 50 図　第 2 号方形竪穴遺構実測図 …… 77
第 51 図　第 3・4 号方形竪穴遺構実測図 …… 79
第 52 図　第 3・4 号方形竪穴遺構出土遺物
　拓影図 …… 79
第 53 図　第 1・2 号地下式壙・出土遺物
　実測図 …… 82
第 54 図　第 1・2 号井戸実測図 …… 83
第 55 図　第 1 号井戸出土遺物実測図(1) …… 84
第 56 図　第 1 号井戸出土遺物実測図(2) …… 85

第57図　第1号井戸出土遺物実測図(3) …… 86
第58図　第1号井戸出土遺物実測図(4) …… 87
第59図　第1号井戸出土遺物実測図(5) …… 88
第60図　第1号井戸出土遺物実測図(6) …… 89
第61図　第1号井戸出土遺物実測図(7) …… 90
第62図　第1号井戸出土遺物実測図(8) …… 91
第63図　第1号井戸出土遺物実測図(9) …… 92
第64図　第9A・B号土坑実測拓影図 …… 94
第65図　第11・19・20A・B・23・24・25・26・27
28A・B・29・30・31号土坑実測図 …… 100
第66図　第43・44・65・66号土坑実測図 …… 103
第67図　第54・55・56・58号土坑実測図 …… 103
第68図　第63・64・68・69・70・71号土坑実測図 … 106
第69図　第94・95・96号土坑実測図 …… 108
第70図　第1・2・3・4号墓壙実測図 …… 114
第71図　第1・2・4号墓壙出土遺物実測・
拓影図 …… 115
第72図　第1・2・5・7・9・10・11号溝
出土遺物実測・拓影図 …… 116
第73図　第1・2・3・4・5・6・7・8・9・10
11・12号溝土層断面実測図 …… 117
第74図　第1号道路跡実測図(1) …… 121
第75図　第1号道路跡実測図(2) …… 122
第76図　第1号炭焼窯跡・出土遺物実測図 …… 125
第77図　第2号炭焼窯跡・出土遺物実測図 …… 127
第78図　第3号炭焼窯跡実測図 …… 128
第79図　第3号炭焼窯跡出土遺物実測図 …… 129
第80図　第4号炭焼窯跡実測図 …… 129
第81図　第1号ピット群実測図 …… 131
第82図　第2号ピット群実測図 …… 132
第83図　第1号不明遺構炉1・2実測図 …… 134
第84図　第1号不明遺構実測図 …… 135
第85図　第2号不明遺構実測図 …… 136
第86図　第12号不明遺構出土遺物実測図 …… 137
第87図　第1号石器集中地点出土遺物
実測図(1) …… 139
第88図　第1号石器集中地点出土遺物
実測図(2) …… 140
第89図　第1号石器集中地点出土遺物
実測図(3) …… 141
第90図　第1号石器集中地点出土遺物
実測図(4) …… 142
第91図　第1号石器集中地点出土遺物
実測図(5) …… 143
第92図　第1号石器集中地点出土遺物
実測図(6) …… 144
第93図　第1号石器集中地点平面図(1) … 145～146
第94図　第1号石器集中地点平面図(2) … 147～148
第95図　第1号石器集中地点出土遺物
実測図(7) …… 149
第96図　第1号遺物包含層出土遺物拓影図 …… 152
第97図　第2号遺物包含層出土遺物実測・
拓影図(1) …… 153
第98図　第2号遺物包含層出土遺物実測・
拓影図(2) …… 154
第99図　遺構外出土遺物実測・拓影図 …… 157
第100図　遺構外出土遺物実測・拓影図 …… 158
第101図　大畑遺跡出土弥生時代土器片分類・
実測図 …… 163
第102図　大畑遺跡住居跡内弥生時代住居跡
類型 …… 164
付図1　大作遺跡遺構全体図
付図2　大畑遺跡遺構全体図

表　目　次

表1　大作・大畑遺跡周辺遺跡一覧表 …… 7
表2　大作遺跡土坑一覧表 …… 16
表3　大畑遺跡住居跡一覧表 …… 76
表4　大畑遺跡土坑一覧表 …… 109
表5　大畑遺跡溝一覧表 …… 120

写真図版目次

PL1　大作遺跡調査終了風景，第1号土坑完掘，第9号土坑完掘，第1号集石遺構完掘，第1号住居跡完掘，第1号住居跡遺物出土状況(1)・(2)，第1号住居跡・第1号竪穴遺構完掘

PL2　大畑遺跡遠景，大畑遺跡調査終了風景，第9号住居跡完掘，第96号土坑完掘，第1号住居跡完掘，第1号住居跡遺物出土状況，第2号住居跡遺物出土状況(1)・(2)

PL3　第3号住居跡完掘，第3号住居跡遺物出土状況，第4号住居跡完掘，第4号住居跡遺物出土状況(1)・(2)・(3)，第5号住居跡完掘，第5号住居跡遺物出土状況

PL4　第5号住居跡遺物出土状況，第6号住居跡完掘，第6号住居跡遺物出土状況(1)・(2)・(3)，第7号住居跡完掘，第7号住居跡遺物出土状況(1)・(2)

PL5　第10号住居跡完掘，第10号住居跡遺物出土状況，第11号住居跡完掘，第11号住居跡遺物出土状況，第12号住居跡完掘，第8号住居跡完掘，第1号方形竪穴遺構完掘，第2号方形竪穴遺構完掘

PL6　第3・4号方形竪穴遺構完掘，第4号方形竪穴遺構完掘，第1号地下式壙完掘，第1号井戸完掘，第9A・B号土坑完掘，第1号井戸遺物出土状況，第9号土坑馬骨出土状況，第44号土坑完掘

PL7　第54・55号土坑完掘，第1・2・3号墓壙完掘，第1号石器集中地点遺物出土状況，第1号炭焼窯跡完掘，第2号炭焼窯跡完掘，第3号炭焼窯跡完掘，第4号炭焼窯跡完掘

PL8　大作遺跡　第1号住居跡・第1号竪穴遺構・第9号土坑・遺構外出土遺物

PL9　第1・2号住居跡出土遺物

PL10　第2・3号住居跡出土遺物

PL11　第3号住居跡出土遺物

PL12　第3・4号住居跡出土遺物

PL13　第4・5号住居跡出土遺物

PL14　第5号住居跡出土遺物

PL15　第5・6号住居跡出土遺物

PL16　第6号住居跡出土遺物

PL17　第6・7・8号住居跡出土遺物

PL18　第6・7・10号住居跡出土遺物

PL19　第11号住居跡出土遺物(1)

PL20　第11号住居跡出土遺物(2)

PL21　第11・12号住居跡出土遺物

PL22　第12号住居跡，第1号地下式壙，第1号井戸出土遺物

PL23　第1号井戸出土遺物

PL24　第1号井戸出土遺物

PL25　第1・7・9・10・11号溝，第1・2・3号炭焼窯跡，第1・2号不明遺構出土遺物

PL26　第2号遺物包含層，遺構外出土遺物

PL27　第1・3・5・6・7・8・11号住居跡，第9号土坑，遺構外出土遺物（土製品）

PL28　第1号石器集中地点出土遺物(1)

PL29　第1号石器集中地点出土遺物(2)

PL30　第1号石器集中地点出土遺物(3)

PL31　第1・3・4号住居跡出土遺物（石器）

PL32　第4・5・6・7・10・11号住居跡出土遺物（石器）

PL33　第11・12号住居跡，第7・10号溝出土遺物

PL34　第2号遺物包含層，遺構外出土遺物（石器）

PL35　第6・11号住居跡，第1・2・4号墓壙，第9号溝，遺構外出土遺物（金属製品）

PL36　第3・4号住居跡出土土器片

PL37　第6・9号住居跡出土土器片

PL38　第1・2号遺物包含層出土土器片

PL39　第2号遺物包含層出土土器片

PL40　第2号遺物包含層出土土器片

PL41　遺構外出土土器片

PL42　第1号井戸出土内耳鍋集合

第1章 調 査 経 緯

第1節 調査に至る経過

茨城県中央部と近隣都県を結ぶ主要幹線道路は，現在，国道6号線と常磐自動車である。建設省と日本道路公団は，近年の物流の増加や常陸那珂港開発に伴い，首都圏の均衡ある高速交通ネットワークを形成するため，北関東3県を結ぶ北関東自動車道の工事を進めている。茨城県は，県央地区において常陸那珂地区開発や高速交通体系の整備によって活性化する交流を活用し，北関東の発展を牽引する中核都市地域づくりを目指しており，その一翼を担う産業の高度化を図るため，高度化する物流ニーズに対応した流通拠点や研究開発生産拠点の形成を目指している。

工事に先立ち，平成6年2月10日，日本道路公団東京第一建設局は，茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。茨城県教育委員会は，平成7年5月23日より，野曽・大戸地区の試掘調査を実施し，工事予定地内に大作遺跡，大畑遺跡が所在する旨を日本道路公団東京第一建設局に回答した。日本道路公団東京第一建設局は，平成7年12月27日，茨城県教育委員会にその取り扱いについて協議を求めた。茨城県教育委員会は，日本道路公団東京第一建設局と遺跡の取り扱いについて協議を重ね，現状保存が困難であることから，平成8年1月25日，日本道路公団東京第一建設局に対し，大作遺跡，大畑遺跡を記録保存とする旨の回答を行い，調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

日本道路公団東京第一建設局と茨城県教育財団は，埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び，平成8年4月1日から同年12月28日にかけて，大作遺跡，大畑遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調 査 経 過

大作遺跡の発掘調査は，平成8年4月1日から5月30日までの2か月，大畑遺跡の発掘調査は，平成8年6月1日から平成8年12月31日までの9か月にわたって実施された。以下，大作遺跡，大畑遺跡の調査の経過について月ごとに略述する。

大作遺跡

4　月　発掘調査開始にあたっての諸準備を行った。5日に現地踏査を行った。15日から補助員を雇用し，調査機材の搬入，大作遺跡の試掘調査を開始した。その結果，調査区の南部は表土が20cm前後であったため，人力による表土除去を実施することとした。人力による表土除去範囲をA区，重機による表土除去範囲をB区とした。24日からA区の遺構確認作業を開始し，住居跡と思われる遺構が2軒，土坑が12基確認された。26日には，旧石器試掘調査を開始した。

5　月　7日から，重機による表土除去作業を開始した。8日には，B区の遺構確認作業を開始した。10日から遺構調査を開始した。14日に基準杭打ちを行い，実測作業を進めた。22日から事務所移転準備に取りかかり，23日に大畑遺跡調査に関して道路公団の担当者と打ち合わせを行った。27日，第1号住居跡の実測作業が終わり，遺構の埋め戻し作業を行って大作遺跡の調査を終了した。

大畑遺跡

6　月　1日から，大畑遺跡の調査準備に取りかかった。5日，調査区内の伐開作業を始める。7日から試

構調査を開始した。調査区を3区に分け河岸段丘の下段部を1区，上段部を2区，上段と下段の間の傾斜部を3区とした。トレンチ試掘により，2区から住居跡7軒及び土坑数基が確認された。

7　月　1日から，重機による表土除去作業を開始した。1区の遺構確認作業の結果，住居跡2軒，方形の土坑数基，井戸2基の他，遺物包含層2か所が確認された。18日には，1区の遺構確認状況の写真撮影を行った。1区の第1号遺物包含層の遺構調査を開始した。

8　月　2日から，1区の遺構調査を開始した。6日に，基準杭打ちを行った。8日には，第9号土坑から馬の頭骨が出土した。第2号遺物包含層のトレンチ調査を開始した。第1号井戸から大量の遺物が出土し，写真撮影及び遺物平面図の実測を行った。1区南部の第2号遺物包含層から弥生時代の住居跡1軒が検出された。

9　月　1区の調査を進める。11日，1号炭焼窯の確認状況の写真撮影を行い，調査にはいった。17日には，第8号溝の平面実測を行い，1区北東部分の調査を終了した。25日には，1区の航空写真撮影を実施し，26日に1区の遺構完掘状況の写真撮影を行った。

10　月　2日から，遺構確認により弥生時代の住居跡7軒，土坑数基，溝4条，炭焼き窯3基を確認し，2区の遺構調査を開始した。15日には，調査区北東隅の第2号住居跡の調査が終わり，完掘状況写真を撮影した。18日には，3区の斜面部のトレンチ試掘調査を開始した。28日には，第6号住居跡の実測が終わり，2区の遺構調査が終了した。

11　月　3区のトレンチ試掘により，住居跡1軒，土坑数基，道路跡2条が確認された。6日から，3区の斜面部にある平坦部分の調査を行った。11日には，第1号道路跡の土層セクション実測を行った。13日から，第1号道路跡の範囲を確認するため，さらにトレンチを設定し，掘り込みを開始した。トレンチより確認された第12号住居跡の人力表土除去を行い，26日から遺構調査を開始した。

12　月　9日から，第2～4号炭焼窯の調査を開始した。14日には，これまでの調査の成果をもとに現地説明会を実施し，多くの見学者が来跡した。16日から，旧石器試掘調査と補足調査を開始した。25日，航空写真撮影を行い，大畑遺跡の遺構調査を終了した。27日には，安全対策を含めた撤収作業を完了し，現場事務所を閉鎖して全ての現地調査を終了した。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

大作遺跡は，茨城県東茨城郡茨城町大字駒渡字大作818番地ほかに，大畑遺跡は，東茨城郡茨城町大字大戸字六戸道517番地ほかに，それぞれ所在している。

茨城町は，茨城県の中央部よりやや東に位置し，北部は水戸市に，東部は涸沼を隔てて東茨城郡大洗町，鹿島郡旭村に，南部は東茨城郡美野里町，小川町，鹿島郡鉾田町に，西部は東茨城郡内原町，西茨城郡友部町，同岩間町に隣接している。町域は，東西約17km，南北約14km，面積約121kmで，人口は36,021人，世帯数は10,088戸（平成9年3月現在）である。町の中央を南北に国道6号が通じ，それと並行するように常磐自動車道が西に隣接する友部町を通っている。町の北部では東西に通じる北関東自動車道の建設が進められている。

茨城町の地形は，町のほぼ中央部を東流する涸沼川と，その東に展開する涸沼（面積約9.35km²）によって，台地を南北に二分されている。北部の台地は，標高25～30mの東茨城北部台地の先端部を形成し，北西から涸沼前川を含む大小の支谷が涸沼に南面して開口している。南部に発達する台地は，東から大谷川，寛政川が涸沼に流入し，その間に大小無数の支谷が台地深くまで侵入し，北部台地に比べて起伏も多く，一層複雑な地勢を成している。これらの河川流域の沖積低地は水田として，台地は畑地・樹園地として利用されている。

町の基幹産業である農業は，稲作に施設園芸・果樹栽培・養豚・酪農などを取り入れた複合経営が行われている。県都水戸市に接する地の利から，県立の工業・食品等の各試験場や警察・消防などの各学校施設が設置され，県央の中核用途都市としての役割を果たしている。

地質をみると，台地を形成している最も古い地層は新生代，第三紀の地層で，岩質は泥岩で水戸層と呼ばれている。水戸層の上に第四紀の地層が不整合に堆積している。粘土・砂からなる見和層，礫からなる上市層，灰褐色の腐植粘土層，関東ローム層の順に堆積しており，これらの地層はいずれもほぼ水平層である。

大作遺跡は，北側を流れる涸沼前川と南側を流れる藤沼川とに挟まれた馬の背状の河岸段丘上（標高約27m）にあり，涸沼川左岸の小支谷西側に面した台地上に位置し，現況は畑地・山林である。大畑遺跡は，茨城町の北西部の大戸地区にあり，大作遺跡の西南西2.5kmほど離れた涸沼前川右岸の2段の河岸段丘上（標高22～29m）に位置し，現況は畑地・山林である。

参考文献

- 蜂須紀夫　『茨城県　地学ガイド』　1986年11月
- 角川書店　『日本地名大辞典　8　茨城県』　1983年3月
- 茨城町史編さん委員会　「茨城町権現峯遺跡」　1988年3月
- 茨城町教育委員会　「小幡北山埴輪製作遺跡」　1989年2月
- 茨城町史編さん委員会　「茨城町上ノ山古墳」　1994年3月
- 茨城町史編さん委員会　「茨城町史　通史編」　1995年2月
- 茨城町史編さん委員会　「茨城町史　地誌編」　1995年2月

第2節　歴史的環境

茨城町には，縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在している。当町周辺は，涸沼をはじめ，涸沼川，涸沼前川など水運に恵まれ，古代から人々が生活を営む場としては絶好の舞台となってきた。ここでは，大作・大畑遺跡周辺の主な遺跡について時代を追って述べることにする。

旧石器時代の遺跡は，東山遺跡〈7〉と向地等遺跡で，打製石斧や槍先形尖頭器が出土している。

縄文時代の遺跡は，町内全域に113か所がみられる。早期の遺跡は，沈線文土器（三戸式，田戸式）が出土している中落遺跡がある。前期になると遺跡数が増加する。涸沼前川流域には，大戸下郷遺跡〈5〉，宮後遺跡，シッペイ沢遺跡，東畑遺跡〈6〉，奥山遺跡が，神谷遺跡，神谷東遺跡，西台遺跡が，涸沼周辺は最も多く，権現峯遺跡，前野遺跡，金子立遺跡，金子立西遺跡，小川遺跡など10数遺跡が存在している。涸沼川流域には，今回調査した大作遺跡をはじめ，奥谷遺跡〈18〉，赤板南坪遺跡〈20〉，宮下山遺跡〈19〉，小山台遺跡〈26〉，台畑遺跡，権現堂遺跡，離山遺跡が存在している。南小割遺跡は大作遺跡から南西に約1kmほど離れたところに位置している。また，縄文海進にともなって権現峯遺跡，シッペイ沢遺跡，越安貝塚〈13〉など8か所に貝塚が形成されている。南小割遺跡の貝塚（縄文時代前期）は，涸沼川流域では最も奥部に位置している。中期になると，大古崎遺跡や大道西遺跡など前期よりさらに遺跡数が増し，町内全域にみられるようになる。後期に入ると遺跡数は減少しはじめる。この頃小道貝塚〈17〉が形成される。晩期になるとさらに遺跡数は減少し，下土師遺跡〈24〉，小道貝塚，神谷遺跡など10か所を数えるほどである。晩期の遺跡はほとんどが後期から続く遺跡である。

弥生時代の遺跡は，現在41か所確認されており，中期後半半ばのものと思われる土器片が神谷東遺跡，柴崎遺跡古墳（中石崎），西台遺跡などで採集されている。後期前半の遺物としては，東中根式非行の土器片が大畑遺跡から採集されている。後期後半には，標式土器となった長原式土器が，長岡遺跡〈9〉と昭和61年度に当教育財団が発掘調査した奥谷遺跡，小鶴遺跡〈11〉の3遺跡から出土している。今回調査した大畑遺跡からは，これらの時期に続く十王台期（後期後半）の集落が確認され，他に平成7年度に調査された矢倉遺跡〈3〉，大戸下郷遺跡，台畑遺跡などからも，十王台式土器片が出土している。

古墳時代になると遺跡数が増加する。奥谷遺跡からは，古墳時代前期の豪族居館跡の溝や住居跡が確認され，涸沼周辺の神谷遺跡，神谷東遺跡，大峯遺跡，西台遺跡，権現峯遺跡などからも，前期の土師器や住居跡が確認されている。昭和60年に周溝の調査を行い，茨城町地方では最も古い時期に位置づけられた前方後方墳（4世紀末から5世紀初頭）である宝塚古墳をはじめ，中期から後期にかけての古墳が61基ほど確認されている。神谷古墳群からは，2基の帆立貝式古墳が確認され，茨城町で唯一の前方後円墳である上ノ山古墳からは，南へ4kmほど離れた位置にある小幡北山埴輪製作遺跡で造られたものと思われる埴輪（6世紀後半頃）が出土している。

律令制下の奈良・平安時代の茨城町は，那賀郡八部郷，茨城郡島田・安保・白川郷，鹿島郡宮前郷に所属していた。この時期の遺跡は，町内全域に確認され，今回発掘調査を行った大作・大畑遺跡を含め98遺跡を数える。奥谷遺跡からは，百数十点の墨書土器のほか円面硯や刀子が出土している。特に，墨書の「曹司」は，宮中・官衙などの庁舎・宿直所・局・部屋などの意味があり，当時の奥谷遺跡が官衙的あるいは公共的な施設を含む集落であったことを示している。面白遺跡〈28〉からは，「土師神主」と書かれた墨書土器が，大畑遺跡からは，墨書土器や円面硯が，宮後遺跡からは，円面硯や蔵骨器がそれぞれ出土している。

中世の遺跡は，主に城館跡である。すでに消滅したものまで含めるならば，その数は12か所に及んでいる。

現存する町内の城館の中では小幡城跡が最大規模であるが，築城者については現時点では不明である。他に，宮ケ崎城跡，海老沢館跡，鳥羽田城跡，飯沼城跡などが所在している。奥谷遺跡からは，地下式壙，土坑，井戸，堀が確認され，土師質土器や陶器が出土している。前田地区の万東山からは，13世紀前半と思われる「青白磁蓮弁丸文梅瓶」が出土している。

近世になると，町の中心部を南北に走る水戸街道に沿って，長岡，小幡は宿駅として発展した。海老沢，鯉掛は水上交通の要所としても栄え，水戸藩をはじめ，仙台藩など奥州諸藩と江戸を結ぶ輸送経路の中継として極めて重要な役割を果たしていた。

※　文中の〈　〉内の番号は，表1，第2図の該当番号と同じである。

注

(1), (6), (10)　茨城町史編さん委員会　「茨城町史　通史編」　1995年2月

(2)　茨城町史編さん委員会　「茨城町権現峯遺跡」　1988年3月

(3)　茨城町教育委員会　「小堤貝塚」　1986年3月

(4)　茨城県教育財団　「一般国道6号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書　奥谷遺跡　小鶴遺跡」
『茨城県教育財団文化財調査報告　第50集』　1989年3月

(5)　茨城県教育委員会　『茨城県遺跡地図』　1990年3月

(7)　茨城町大峯遺跡発掘調査会　「茨城町大峯遺跡」　1990年3月

(8)　茨城町史編さん委員会　「茨城町上ノ山古墳」　1994年3月

(9)　茨城町教育委員会　「小幡北山埴輪製作遺跡」　1989年2月

参考文献

・茨城県　『茨城県史料　考古資料編　先土器・縄文時代』　1979年3月

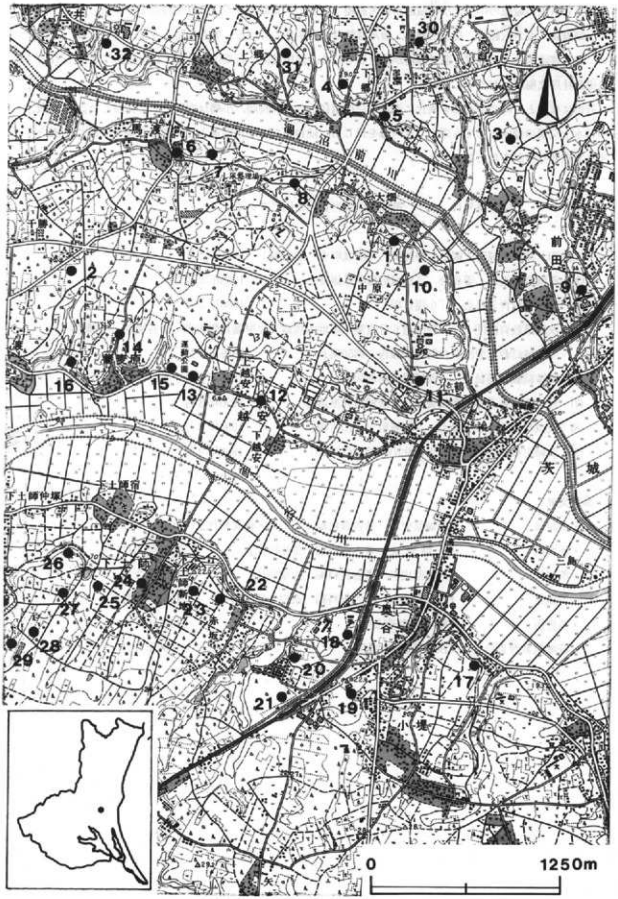
・茨城県　『茨城県史　考古資料編　弥生時代』　1991年3月

・茨城県　『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』　1991年3月

・茨城県　『茨城県史料　考古資料編　奈良・平安時代』　1995年3月

・崙書房　『新編常陸国誌』　1997年

・茨城県教育委員会　『茨城県遺跡地図』　1990年3月



第2図　大作・大畑遺跡周辺遺跡分布図

表1　大作・大畑遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡番号	時代 旧	縄文	弥生	古墳	奈平	中近	番号	遺跡名	県遺跡番号	時代 旧	縄文	弥生	古墳	奈平	中近
①	大畑遺跡	4295	○	○	○	○	○	○	17	小堤貝塚	4284		○	○	○		
②	大作遺跡			○		○			18	奥谷遺跡	4338		○		○	○	○
3	矢倉遺跡	4324		○	○	○			19	富士山遺跡	193		○		○	○	
4	羽黒山古墳群	4314				○			20	赤坂南坪遺跡	192		○		○		
5	大戸下郷遺跡	4294		○	○	○			21	坊前古墳	4348				○		
6	東畑遺跡	4306		○	○	○	○		22	高山古墳	4335				○		
7	栗山遺跡	4307		○		○	○		23	下上師東遺跡	4337		○		○		
8	上の前遺跡	4333		○	○	○	○		24	下上師遺跡	191		○		○	○	
9	長岡遺跡	227			○	○			25	富士山古墳	174				○		
10	大畑古墳	4343				○			26	小山台遺跡	4336		○		○	○	
11	小鶴遺跡	4349		○					27	小山台古墳群	175				○		
12	中畑遺跡	194		○		○			28	面山遺跡	201		○		○	○	
13	越安貝塚	4283		○					29	高山遺跡	4335		○		○	○	
14	宮上遺跡	4334		○	○	○			30	大戸神宮寺前遺跡	4323		○		○	○	
15	大塚古墳群	178				○			31	稲荷宮遺跡	4309			○	○	○	
16	西山古墳	4299				○			32	清峯古墳群	4345				○		

第3章　大 作 遺 跡

第1節　遺跡の概要

大作遺跡は，溜沼前川と溜沼川とに挟まれた馬の背状の河岸段丘上（標高約27m）にあり，溜沼川左岸の小支谷西側に面した台地上に立地する。旧石器・縄文時代には狩猟・採集活動が行われ，古墳時代には小集落が形成された，旧石器時代・縄文時代・古墳時代の複合遺跡である。今回の調査区は，南北約44m，東西約58m，面積 2,380㎡，現況は畑地・山林である。

今回の調査で確認された遺構は，縄文時代の炉穴7基，集石遺構1基，古墳時代の竪穴住居跡1軒，竪穴遺構1基である。

出土遺物は，縄文土器片1点，及び石鏃1点。古墳時代前期の土師器1点，球状土錘5点等が出土している。旧石器時代の遺物は遺構外遺物として尖頭器1点が出土している。

第2節　基本層序

大作遺跡の南西側平坦部（BLₑd区）にテストピットを設け，深さ約2mまで掘り下げて，土層の堆積状況を確認した。

第1層は，10～25cm程の厚さで，褐色をしたソフトローム層。

第2層は，20～40cm程の厚さで，褐色をしたソフトローム層。スコリア粒子を微量含む。

第3層は，30cm前後の厚さで，褐色をしたハードローム層。スコリア粒子を中量含む。

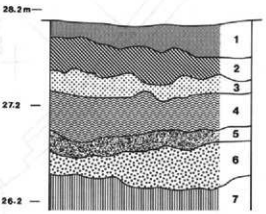
第4層は，40～60cm程の厚さで，褐色をしたハードローム層。スコリア粒子・鹿沼粒子を中量含む。

第5層は，15cm前後の厚さの鹿沼漸移層。スコリア粒子を少量，鹿沼粒子を多量に含む。

第6層は，20～50cm程の厚さで，明黄褐色をした鹿沼層。

第7層は，黄褐色をしたハードローム層。スコリア粒子を少量，鹿沼粒子を多量に含む。

竪穴住居跡等の遺構は，第3層上面で確認した。

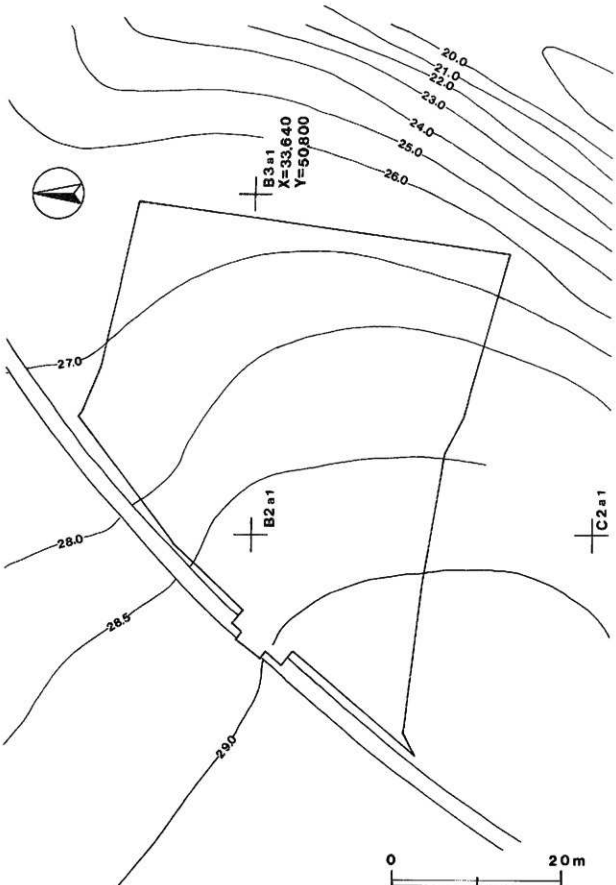


第3図　大作遺跡基本土層図

第3節　遺構と遺物

1　縄文時代の遺構と遺物

当遺跡からは，土坑が12基検出されている。ここでは縄文時代の炉穴と推定できるものや，特徴的なものについて記述し，他は一覧表に掲載する。



第4図　大作遺跡調査区設定図

第1号土坑（第6図）

位置　調査区西側，$A1_0$区。

規模と平面形　長軸約1.74m，短軸約1.66mの不定形である。

主軸方向　N－49°－E

壁面　壁高は約28cmで，外傾して立ち上がる。

底面　皿状を呈する。

覆土　3層からなり，自然堆積である。

土層解説

1　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量

2　褐　色　ローム小ブロック・粒子少量

3　褐　色　ローム粒子多量

所見　本跡は，出土遺物はないが，底面にロームが焼けて硬化した面が認められ，遺構の形状や覆土の状況が他の炉穴に類似していることや類例から，縄文時代の炉穴と思われる。

第7-A号土坑（第6図）

位置　調査区北東隅，$A2_0$区。

重複関係　本跡は，第7-B号土坑と重複している。第7-B号土坑が本跡を掘り込んでおり，本跡が古い。

規模と平面形　内部に撹乱された部分があり，東部を第7-B号土坑が掘り込んでいるため，正確な規模と平面形は不明であるが，長径約〔1.8〕m，短径約〔1.53〕mの楕円形であると思われる。

主軸方向　N－74°－W

壁面　壁高は約29cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　皿状を呈する。

覆土　3層からなり，自然堆積である。

土層解説

1　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量

2　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック少量，炭化粒子微量，焼を受けたローム粒を含む

3　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック少量，炭化粒子・焼土粒子微量

所見　本跡は，出土遺物はないが，底面から焼けて硬化したロームブロックが検出され，遺構の形状や覆土の状況が他の炉穴に類似していることや類例から，縄文時代の炉穴と思われる。

第7-B号土坑（第6図）

位置　調査区北東隅，$A2_0$区。

重複関係　本跡は，第7-A号土坑と重複している。本跡が第7-A号土坑を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形　北部と南部が撹乱されているため，正確な規模と平面形は不明であるが，長径約〔2.68〕m，短径約〔1.62〕mの楕円形と思われる。

主軸方向　N－74°－W

壁面　壁高は約28cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　皿状を呈する。

覆土　6層からなり，自然堆積である。

上層解説

4　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物少量
5　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子少量
6　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
7　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
8　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
9　明　褐　色　ローム大・ローム中ブロック・ローム小ブロック・粒子多量，焼土粒子微量

所見　本跡は，出土遺物はないが，底面から焼けて硬化したローム ブロックが検出され，遺構の形状や覆土の状況が他の炉穴に類似していることや類例から，縄文時代の炉穴と思われる。焼土や火を受けた痕跡が少ないため，短期間の使用と考えられる。

第8号土坑（第6図）

位置　調査区東側，B2g区。

規模と平面形　長径約2.25m，短径約1.59mの楕円形である。

主軸方向　N－65°－E

壁面　壁高は約25cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　平坦で，中央部に2か所の木の根痕と思われるピット状のくぼみがある。

覆土　3層からなり，自然堆積である。

土層解説

1　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
3　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量

所見　本跡は，出土遺物はないが，底面にロームが焼けて硬化した面が認められ，遺構の形状や覆土の状況が他の炉穴に類似していることや類例から，縄文時代の炉穴と思われる。

第9号土坑（第5図）

位置　調査区東側，B2aa区。

規模と平面形　長径約2.06m，短径約1.66mの楕円形である。

主軸方向　N－19°－W

壁面　壁高は約23cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　平坦で，北部に赤色硬化面があり，その周囲に焼けて硬化したロームが認められた。

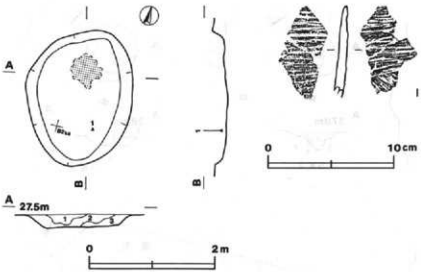
覆土　3層からなり，自然堆積である。

土層解説

1　褐　色　ローム粒子少量，ローム中ブロック・焼土粒子微量
2　褐　色　ローム粒子中量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック微量

出土遺物　南東部の覆土中層から，第5図1の縄文時代早期末葉の条痕文系土器片1点が出土している。

所見　本跡は，覆土の状況，遺構の形状，類例等から縄文時代早期の炉穴と思われる。



第5図　第9号土坑実測・出土遺物拓影図

第10号土坑（第6図）

位置　調査区北東側，A2$_{20}$区。

規模と平面形　北部が調査区外であるため，正確な規模と平面形は不明であるが，長径約［2.04］m，短径約1.73mの楕円形であると思われる。

主軸方向　N－4°－W

壁面　壁高は約23cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　平坦で，南北部に皿状のくぼみがある。

覆土　6層からなり，自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，焼土小ブロック微量
2　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化材微量
3　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
4　褐　　色　ローム粒子中量
5　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
6　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量

所見　本跡は，形状や覆土の状況が第7号土坑と近似する。出土遺物はないが，覆土中に焼土，炭化物を含むことや類例などから，縄文時代の炉穴と思われる。

第11号土坑（第6図）

位置　調査区東側，A2$_{20}$区。

規模と平面形　長径約2.25m，短径約1.15mの楕円形であると思われる。

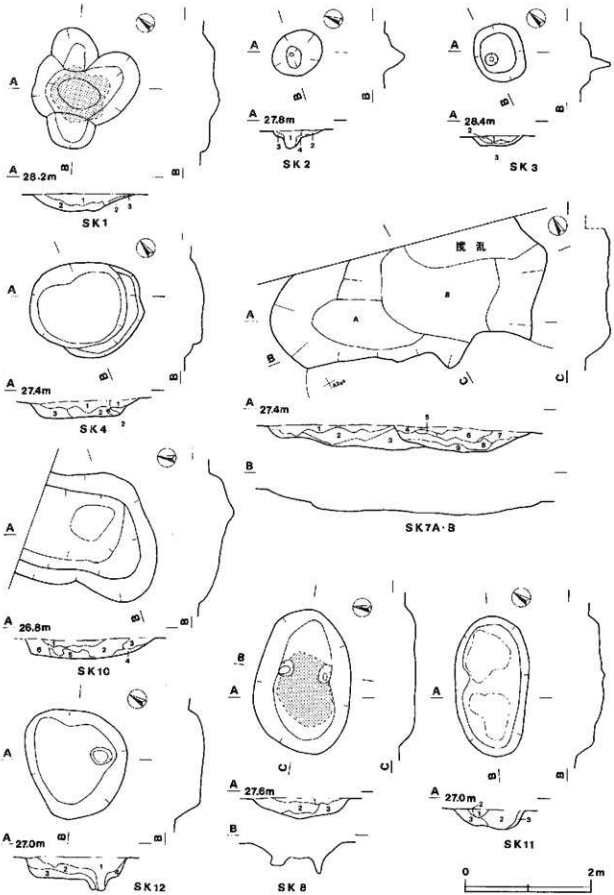
主軸方向　N－4°－W

壁面　壁高は約36cmで，外傾して立ち上がる。

底面　凹凸があり，北東部と南西部に硬化面がある。

覆土　3層からなり，自然堆積である。

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・腐沼パミス粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子中量
3　褐　　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック少量



第6図　第1・2・3・4・7A・B・8・10・11・12号土坑実測図

所見　本跡は，出土遺物はないが，底面からロームが焼けて硬化した面が認められ，遺構の形状や覆土の状況が他の炉穴に類似していることや類例などから，縄文時代の炉穴と思われる。

第2号土坑土層解説（第6図）
1　褐　　色　ローム粒子少量，暗褐色土粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子少量
3　褐　　色　ローム粒子中量
4　褐　　色　ローム小ブロック・粒子少量

第3号土坑土層解説（第6図）
1　褐　　色　ローム小ブロック・粒子微量
2　褐　　色　ローム中ブロック微量，ローム粒子中量
3　褐　　色　ローム中ブロック少量，ローム粒子多量

第4号土坑土層解説（第6図）
1　褐　　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子中量
2　褐　　色　ローム中ブロック少量，ローム粒子多量
3　褐　　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子中量

第1号集石遺構（第7図）

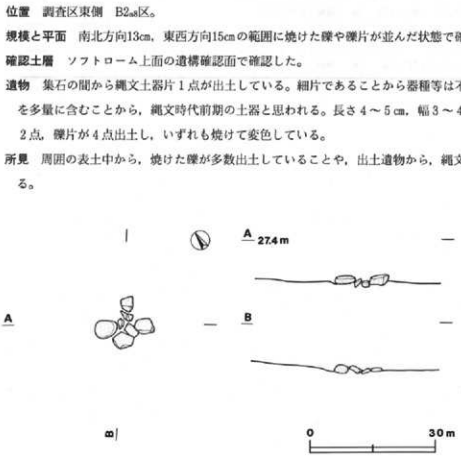
位置　調査区東側　B2$_{ab}$区。

規模と平面　南北方向13cm，東西方向15cmの範囲に焼けた礫や礫片が並んだ状態で確認された。

確認土層　ソフトローム上面の遺構確認面で確認した。

遺物　集石の間から縄文土器片1点が出土している。細片であることから器種等は不明であるが，胎土に繊維を多量に含むことから，縄文時代前期の土器と思われる。長さ4～5cm，幅3～4cm，厚さ約2cm程の礫が2点，礫片が4点出土し，いずれも焼けて変色している。

所見　周囲の表土中から，焼けた礫が多数出土していることや，出土遺物から，縄文時代前期の遺構と思われる。



第7図　第1号集石遺構実測図

表2　大作遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	規模 平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
1	A1s	N-49°-E	不整形	1.74×1.66	28	外傾	皿状	自然		炉穴
2	A2s	N-37°-E	楕円形	0.83×0.69	32	外傾	皿状	人為		
3	B1s	N-32°-E	楕円形	0.91×0.79	48	外傾	皿状	自然		
4	A2s	N-45°-W	不整円形	1.85×1.52	26	緩傾	皿状	人為		
5	A2s	—	円形	0.86×0.8	24	外傾	凹凸	自然		
6	A2s	—	円形	0.74×0.66	43	外傾	凹凸	自然		
7-A	A2s	N-74°-W	不整形	(1.80)×(1.53)	29	緩傾	皿状	自然		炉穴
7-B	A2s	N-74°-W	不整形	(2.68)×(1.62)	28	緩傾	皿状	自然		炉穴
8	B2s	N-66°-E	楕円形	2.25×1.59	25	緩傾	平坦	自然		炉穴
9	B2s	N-9°-W	楕円形	2.06×1.66	23	緩傾	平坦	自然	縄文土器片（早期条痕文）	炉穴
10	A2s	N-4°-W	楕円形	[2.04]×1.73	46	緩傾	平坦	自然		炉穴
11	A2s	N-35°-W	楕円形	2.25×1.15	36	外傾	凹凸	自然		炉穴
12	A2s	N-42°-E	楕円形	1.79×1.56	36	外傾	平坦	自然		

2　古墳時代の遺構と遺物

当遺跡からは，住居跡1軒，竪穴遺構1基が検出された。いずれも調査区の西側に位置している。以下，検出した遺構について記載する。

第1号住居跡（第8図）

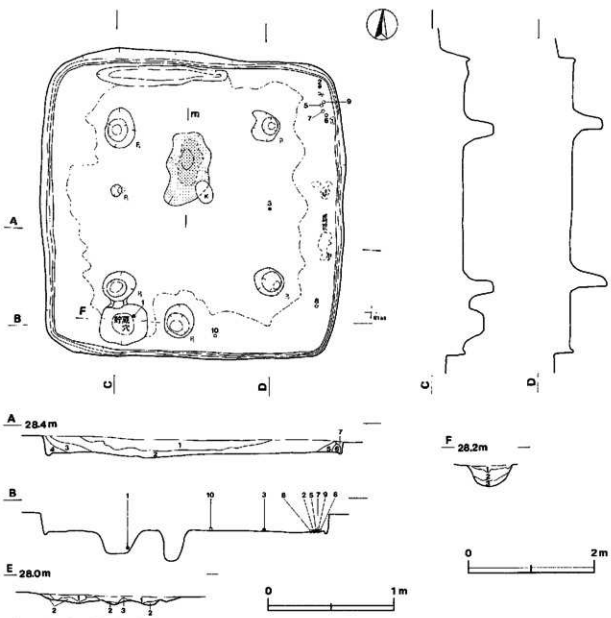
位置　調査区西部，B1₆₆区。

規模と平面形　長軸4.85m，短軸7.82mの隅丸方形である。

主軸方向　N－0°

壁　壁高は22～42cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，小さな凹凸があり，中央部分は軟弱なロームで周囲は貼床で硬い。出入り口ピットの周囲がやや高い。



第8図　第1号住居跡実測図

ピット　6か所（P_1～P_6）。P_1は長径55cm，短径45cmの不整楕円形，P_2は長径50cm，短径45cmの楕円形，P_3は長径55cm，短径47cmの楕円形，P_4は長径62cm，短径47cmの楕円形である。P_1～P_4は，深さが50cm前後の主柱穴と思われる。P_5は径50cm程の円形で，深さ50cmの出入り口施設に伴うピットと思われる。P_6は，貼床の下で確認され性格は不明である。

貯蔵穴　1か所。長軸75cm，短軸65cmの隅丸長方形で，深さ50cm。P_3の南側に設置され，底面は皿状である。

貯蔵穴土層解説
1　黒　褐　色　焼土・炭化粒子中量，ローム粒子少量，炭化物微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土・炭化粒子少量，ローム大ブロック微量
3　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量

炉　中央部から北寄りにあり，長径118cm，短径60cmの不整楕円形で，床面を5～10cm程掘り窪めている。炉床は，火熱を受け赤変硬化している。

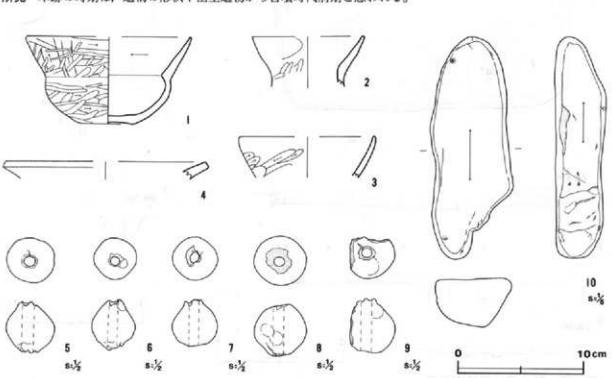
炉土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
2　褐　　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
3　赤　褐　色　焼土中・小ブロック・焼土粒子多量

覆土　7層からなる自然堆積である。

土層解説
1　黒　　色　ローム粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量
4　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子微量
5　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
6　黒　褐　色　ローム粒子少量
7　暗　褐　色　ローム粒子微量

遺物　図版に掲げた遺物の他に土師器甕片を中心に数片出土しているが，いずれも細片である。第9図1土師器坩は，貯蔵穴の覆土下層から4辺に分かれて，つぶれた状態で出土している。また，第9図5～7・9の球状土錘が北東隅の床面直上から，8が南東の壁際の床面直上から出土している。

所見　本跡の時期は，遺構の形状や出土遺物から古墳時代前期と思われる。



第9図　第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	壺 土師器	A 13.8 B 5.6 C 3.8	体部及び口縁部一部欠損。平底。体部は内弯して立ち上がり，口縁部は外傾して立ち上がる。	体部・口縁部外面ヘラ磨き。口縁部内面横ナデ。	長石・砂粒 にぶい橙 普通	P1 PL8 70% 貯蔵穴底面
2	坩 土師器	A [9.0] B (4.1)	略形から口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面ヘラ磨き。	長石・石英・雲母 にぶい黄橙 普通	P2 PL8 5% 北東隅床面直上
3	甕 土師器	A 10.6 B (5.3)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がり，口縁部は内弯ざみに立ち上がる。	口縁部外面ヘラ磨き。	長石・石英・雲母 にぶい橙 普通	P3 PL8 5% 東部床面直上
4	甕 土師器	A [16.4] B (1.4)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面ヘラ磨き。	長石・石英・スコリア・雲母 橙 普通	P5 PL8 3% 覆土中

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	孔径	重量(g)	残存率(%)	出土地点	備考
第9図 5	球状土錘	2.7	2.3	0.6	12.6	100	北東隅壁際床面直上	DP1 PL8
6	球状土錘	2.7	2.3	0.5	9.4	100	北東部壁際床面直上	DP2 PL8
7	球状土錘	2.5	2.4	0.5	11.8	100	北東部壁際床面直上	DP3 PL8
8	球状土錘	2.8	2.3	0.6	19.2	100	西東部壁際床面直上	DP4 PL8
9	球状土錘	2.9	(2.4)	0.6	(13.4)	60	北東部壁際床面直上	DP5 PL8

図版番号	種別	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	残存率(%)	石質	出土地点	備考
第9図 10	磨石	29.8	10.9	6.5	2,928.8	100	凝灰岩	南部壁際床面直上	Q1 PL8

第1号竪穴遺構（第10図）

位置　調査区西部，B2g区。

規模と平面形　長軸3.98m，短軸3.80mの方形である。

主軸方向　N－87°－W

壁　壁高は6～15cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，軟弱なローム層である。

覆土　3層からなる自然堆積である。

土層解説

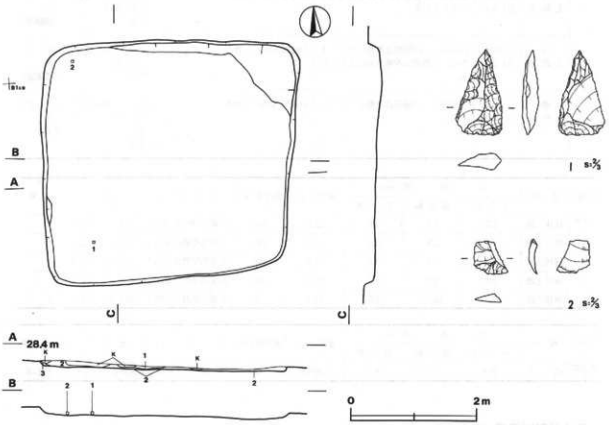
1　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
2　褐　色　ローム小ブロック中量，ローム粒子多量
3　暗褐色　ローム中ブロック少量，ローム小ブロック・ローム粒子多量

遺物　土師器甕片を中心に数片出土しているが，いずれも細片である。南西部の覆土上層から第10図1の石錘，2の剥片が出土しているが，流れ込みと考えられる。

所見　本跡は，遺構の形状や主軸方向が第1号住居跡と同じことから，第1号住居跡に伴う施設であると考えられるが，時期・性格は不明である。

第１号竪穴遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
第10図 1	石鏃	3.4	1.9	0.7	3.4	100	チャート	南西部覆土中	Q２ PL８
2	剥片	1.3	1.4	0.3	0.4	100	チャート	北西部覆土中	Q３ PL８



第10図　第１号竪穴遺構・出土遺物実測図

3　遺構外出土遺物

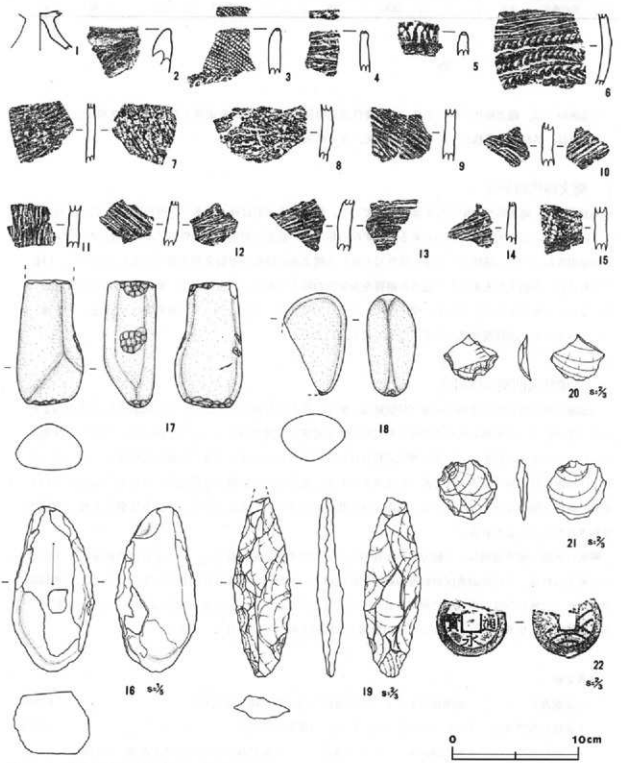
当遺跡の遺構外からは，おもに縄文時代の遺物が出土している。ここでは主な遺物を記載する。(第11図)

第11図２～15は，当遺跡から出土した遺構外出土遺物の拓影図で，いずれも縄文土器片である。２～５は口縁部片で，３には単節縄文ＲＬが施されている。６～15は胴部片で，７・９～14は平行沈線が施されている。６には横方向の平行沈線の下に，半截竹管による刻みが施されている。15には単節縄文ＬＲが施されている。

大作遺跡遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第11図 1	器台 土師器	B(3.2)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。	脚部外面ヘラ磨き。	長石・パミス・雲母 にぶい橙 普通	P９ 10% 覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
第11図 16	砥石	22.0	10.8	8.4	(2,782.2)	80	凝灰岩	A2$_{e6}$区	Q 4
17	敲石	10.0	5.5	4.2	(317.3)	−	凝灰岩	表採	Q 5
18	敲石	8.0	5.0	4.0	(176.2)	−	凝灰岩	A2$_{e7}$区	Q 6
19	尖頭器	(7.2)	2.3	1.0	(14.1)	90	安山岩	表採	Q 7



第11図　遺構外出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
第11図22	剥片	1.8	2.2	0.5	1.1	100	チャート	表採	Q8 F L8
21	剥片	2.4	2.4	0.5	2.6	100	チャート	132a区	Q9 F L8

図版番号	器種	計測値 径(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	現存率(%)	製作年 時代	実際	出土地点	備考
第11図32	寛永通宝	2.8	1	(2.9)	60	江戸	1867年	表採	M1 F L8

第4節 まとめ

当遺跡からは，縄文時代の炉穴7基，古墳時代前期の住居跡1軒，竪穴遺構1基等の遺構が検出されている。ここでは，各時代の遺構について説明を加え，まとめとしたい。

1 縄文時代の炉穴

当遺跡では，縄文時代の炉穴を7基検出している。炉穴の平面形は様々であり，楕円形が主で，そのほかに花びらの形のような不定形のものもある。いずれの炉穴も，底面の赤色硬化面や熱により硬化したローム ブロックが確認されている。遺物としては，第9号土坑から縄文前期後葉の条痕文系土器片が出土している。口縁部片であるが，条痕文が表裏ともに施され繊維を少量含む胎土である。炉穴の他に，焼石遺構が1か所確認されているが，上面が削平されている。礫・礫片が7点と少量であったが，周辺から熱を受けたと思われる礫が出土しているため，調理場遺構になる可能性も考えられる。

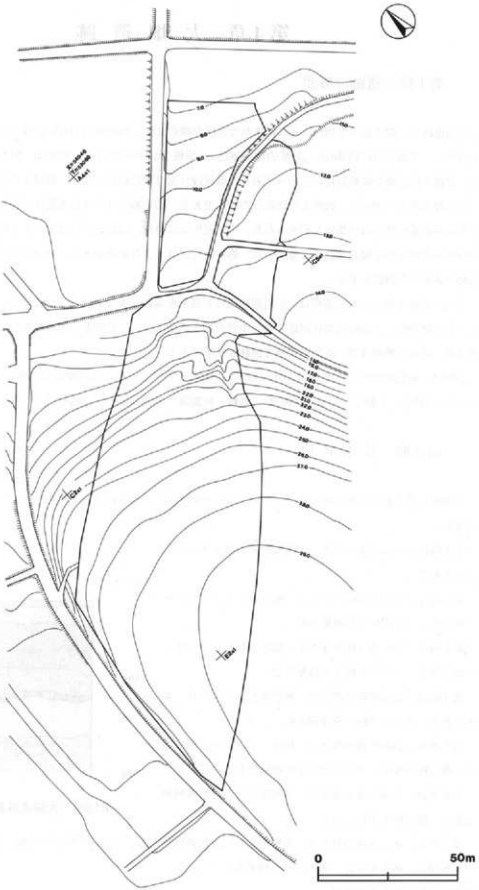
2 古墳時代前期の住居跡

当遺跡で検出された古墳時代の竪穴住居跡は1軒で，それに付随すると思われる壁穴遺構が1基検出されている。住居跡は，中央部よりやや北西よりに炉を持ち壁溝がほぼ全周している。貯蔵穴は，主柱穴の外側，出入り口ピットよりに位置している。竪穴遺構は柱穴・炉が検出できず，床面でも硬化面が認められなかったため，住居跡に伴う何らかの施設であったと考えられる。遺物は，住居跡の貯蔵穴から甕が1点出土している。また，紡錘土錘が5点出土している。床面より炭化材が出土していることから，住居を放棄した後に意図的に焼却されたものと思われる。

竪穴住居跡と竪穴遺構は，主軸方向や規模の点から見ても同時期に存在し，それぞれの機能を持っていたものと考えられる。今回の調査区が台地の縁辺部に位置し，潮沼川の小支谷に面していることから，自然環境に恵まれたこの地が居住空間として利用されたものと考えられる。また，南西に約1km離れたところに同時期の南小割遺跡の大集落があることから，その集落との関連も検討材料となるであろう。

参考文献

- 慶應義塾　「神奈川県藤沢キャンパス内遺跡」第3巻　縄文時代Ⅱ部　1992年
- 茨城県教育財団　『研究ノート』3号「貯蔵穴の移動について」　1994年
- 茨城県教育財団　「寄居遺跡・うぐいす平遺跡」　『茨城県教育財団文化財調査報告第84集』　1994年



第12図　大畑遺跡調査区設定図

第4章　大 畑 遺 跡

第1節　遺跡の概要

大畑遺跡は，溜沼前川と溜沼川とに挟まれた舌状台地の北側，溜沼前川の右岸の段丘状に立地する。今回の調査区は，北東方向に約250m，北西方向に約60m，面積 10,879㎡である。現況は，畑地・山林である。遺跡は，2段の段丘面の緩傾斜地に広がっており，低位段丘面は標高約10～15m，低地との比高は約5m，高位段丘面は標高約22～29mで，低地との比高は約20mである。旧石器時代には石器製作の場として利用され，縄文時代から古墳時代には小集落が形成された。中・近世には墓域，道路，近代は炭の生産場所となっていた旧石器時代～近代までの複合遺跡である。特に，弥生時代には大きな集落があり，溜沼前川の対岸にも同時期の集落跡である矢倉遺跡がある。

今回の調査で検出された遺構は，旧石器時代の石器製作場跡，縄文時代の住居跡1軒，陥し穴3基，弥生時代の住居跡10軒，古墳時代の住居跡1軒，中世の地下式壙2基，土坑97基，道路跡1条，溝12条，方形竪穴遺構4基，近世の墓壙4基，近代の炭焼き窯跡4基等である。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に48箱出土している。旧石器時代の剥片，縄文土器片，弥生土器（壺，高坏），土製品（勾玉，紡錘車），鉄鏃，鉄製鎌，不明鉄製品，古墳時代の土師器片等が出土している。

第2節　基 本 層 序

当遺跡の南東側平坦部（E2aa区）にテストピットを設定し，深さ約2mまで掘り下げて，土層の堆積状況を確認した。

第1層は，10cm前後の厚さで，暗褐色をしたソフトローム層である。

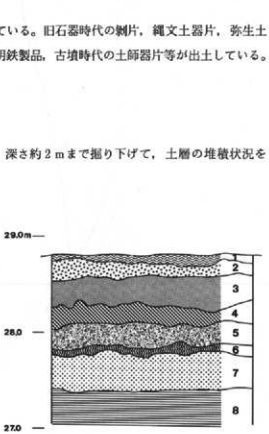
第2層は，10～20cm程の厚さで，褐色をしたソフトローム層である。白色粒子を微量含む。

第3層は，25～35cm程の厚さで，褐色をしたハードローム層である。スコリア粒子を微量含む。

第4層は，20cm前後の厚さで，褐色をしたハードローム層である。スコリア粒子を少量含む。

第5層は，25cm前後の厚さで，褐色ハードローム層である。鹿沼粒子少量，スコリア粒子を微量含む。

第6層は，10cm前後の厚さで，黄褐色をした鹿沼漸移層である。鹿沼粒子中量を含む。



第13図　大畑遺跡基本土層図

第7層は，40cm前後の厚さで，黄橙色をした鹿沼純層である。スコリア粒子を少量，鹿沼粒子を多量に含む。

第8層は，褐色をしたハードローム層ある。

遺構は，第3層上面で確認した。

第3節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

本跡からは，縄文時代の竪穴住居跡1軒（ＳＩ９），弥生時代の竪穴住居跡10軒（ＳＩ１～７・10～12），古墳時代の竪穴住居跡1軒（ＳＩ８）が確認されている。以下，時代順に記載する。

第9号住居跡（第15図）

位置　調査区北東部，B4m区。

重複関係　第37・38・46土坑が本跡の床面を掘り込んでいて本跡より新しい。本跡のほぼ中央部を東西方向に第2号溝が掘り込んでいて，第33号土坑が壁溝を掘り込んでおり本跡より新しい。

規模と平面形　壁面はすでに削平され，壁溝のみ確認されたため，全容は不明であるが，長径 8.18m，短径（7.65）mの楕円形であると思われる。

主軸方向　N－15°－W

壁溝　重複する溝に掘り込まれ，ほぼ半周のみ確認されたが，全周していたものと思われる。上幅30cm前後，下幅15cm前後で，断面は緩やかな「U」字状である。

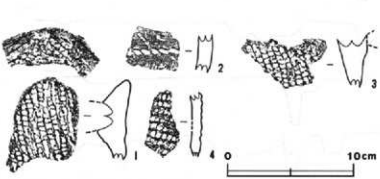
床　ほぼ平坦であり，南部の一部に黒色土の硬化面が認められた。

ピット　18か所（P_1～P_{18}）。P_1・P_5・P_7・P_9・P_{13}・P_{14}の6か所は，長径35～70cm，短径33～65cmの円形及び楕円形で，配置，規模等から柱穴と思われる。P_2・P_3・P_4は，長径40cm前後，短径43cm前後の楕円形で，壁際に沿うように配置されているが，その他のピットを含めて性格は不明である。

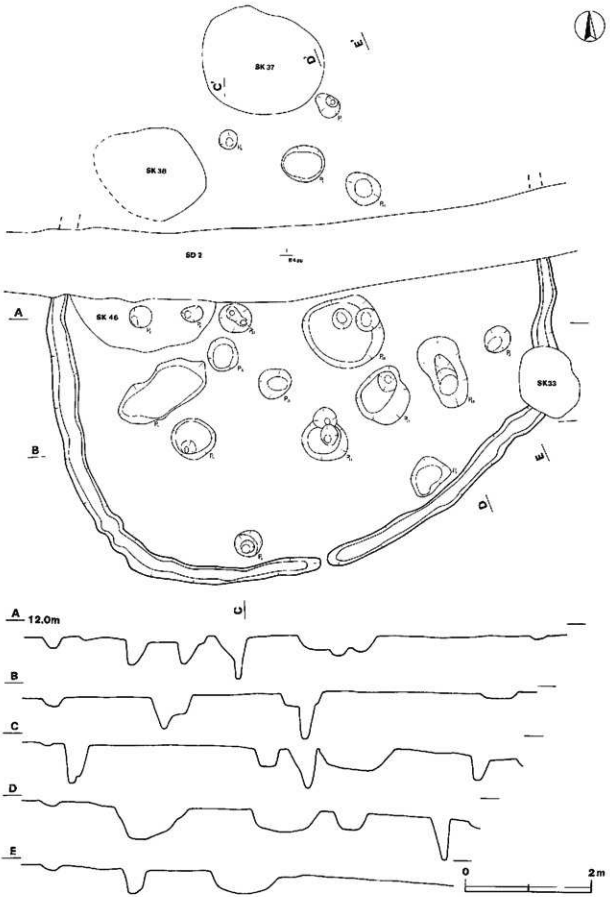
炉　確認されなかったが，隣接する溝から多量の焼土が検出されたことから溝によって破壊されたものと思われる。

遺物　図版に掲げた遺物の他に弥生土器片，土師器片数点が出土しているが，いずれも細片であり，確認面及び表土中からの出土であるため，本遺構に伴うものとは考えられない。第14図1～4は本跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は縄文時代後期から晩期の把手部で，壁溝覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は，遺構の形状や出土遺物から縄文時代後期から晩期と思われる。



第14図　第9号住居跡出土遺物拓影図



第15図　第９号住居跡実測図

第１号住居跡（第16図）

位置　調査区南西部の緩斜面部，C2g7区。

重複関係　本跡の北部は第１号溝に掘り込まれており，北部は第10号溝に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸4.48m，短軸4.0mの隅丸長方形である。

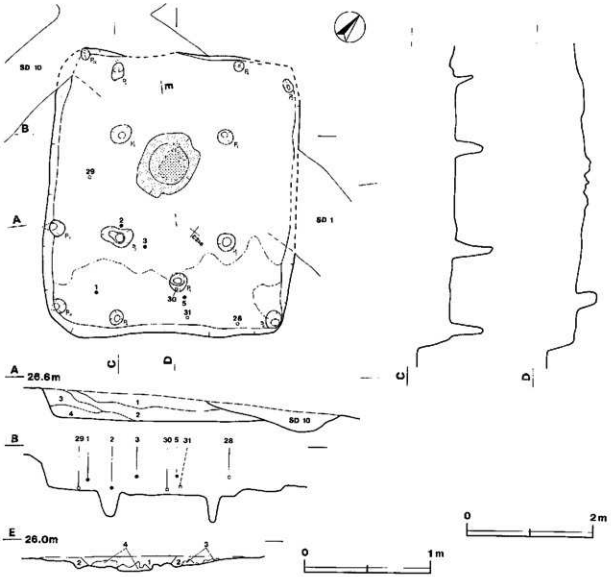
主軸方向　N－37°－W

壁　壁高は６～54cmで，垂直に立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，小さな凹凸があり，両東部の出入口部付近が踏み固められ硬化している。

ピット　13か所（P_1～P_{13}）。P_1～P_4は長径27～49cm，短径26～29cmの楕円形で，深さが55cm前後である。P_1～P_4は主柱穴と思われる。主柱穴を結んだ線は方形となる。P_5は直径25cmの円形で，深さ30cmの出入り口施設に伴うピットと思われる。P_6～P_{13}は壁際のコーナー部に配置され，直径10～25cmの円形および楕円形で，壁柱穴と思われる。

炉　１か所。中央部からやや北寄りにあり，平面形は長径110cm，短径67cmの楕円形で，床面を５cm程掘り込んでいる。炉床は，中央部が特に火熱を受け赤変硬化し，長期間使用したと思われる。



第16図　第１号住居跡実測図

炉土層解説
1 黒 褐 色 焼土粒子多量，ローム粒子・焼土小ブロック中量，コーム小ブロック・炭化材・炭化物・炭化粒子微量
2 黒 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量，炭化材・炭化物微量
3 褐 色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，ローム大ブロック微量
4 暗赤褐色 ローム焼土ブロック多量

覆土 上層に黒色土が堆積し，ローム・焼土を含む暗褐色土がレンズ状に堆積する4層からなる自然堆積である。

土層解説
1 黒 色 焼土粒子多量，ローム粒子・焼土小ブロック中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量，ローム中ブロック・スコリア粒子微量
2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック・焼土粒子中量，ローム大ブロック・焼土中・小ブロック・炭化粒子少量，焼土大ブロック・炭化物微量
3 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック少量，ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒 褐 色 ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量，ローム大ブロック少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量

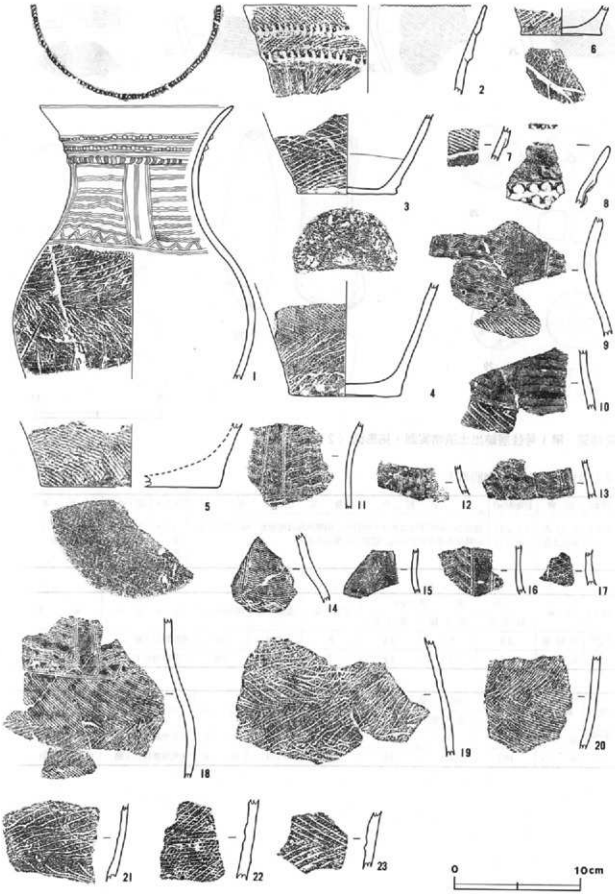
遺物 北部は溝に掘り込まれているため，南部を中心に弥生土器片約350点出土しているが，ほとんどが胴部片で，口縁部，底部は微量である。第17図1～6は弥生土器の壺で，1は広口壺の口縁部から胴部片で，南隅から横位の状態で出土している。2は，広口壺の口縁部から頸部片で，南部の覆土下層から出土している。3～6は底部から胴部にかけての破片で，5は，南東壁際覆土中層からつぶれた状態で出土している。第18図28・29は紡錘車で，29は西部の床面直上から出土している。

第17図7～23・第18図24～27は本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。7は口縁部片で，複合口縁部には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。9～17は頸部片である。9～14には櫛歯状工具による縦区画内に波状文が施されている。15・16は縦区画内に重山形文が施されている。18は頸部から胴部片で，胴部外面には附加条二種（附加1条）の縄文が施され，羽状構成をとっている。19～26は胴部片で，19には附加条二種（附加1条）の縄文が施され，外皮には炭化物が付着している。27は底部片で，底部には布目痕がある。

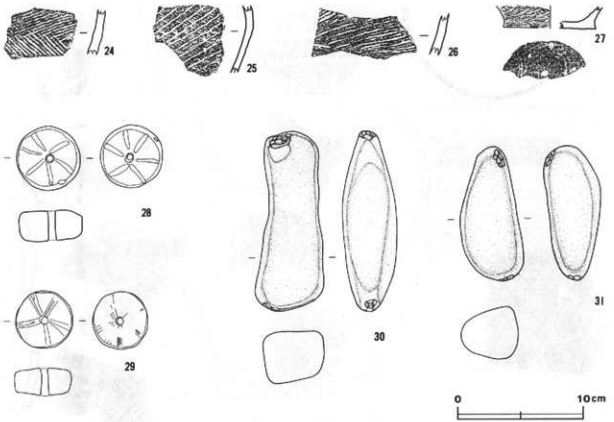
所見 本跡の時期は，出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

第1号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第17図 1	広口壺 弥生土器	A 15.5 H (21.8) H 10.3 I 19.3	胴部下半欠損。口唇部には棒状工具による刻みがある。口縁部は無文で，頸部との間に3条の隆帯が施されている。頸部は櫛歯状工具により3条を単位に4分割され，区画内には波状文が施されている。胴部外面は附加条二種（附加1条）の縄文が施され，羽状構成をとる。	長石・石英 にぶい黄橙 普通	P 1，60% PL.9 南隅覆土下層 外面スス付着 外面一部摩滅
2	広口壺 弥生土器	A [19.5] H (7.0)	頸部から口縁部片。口唇部には，縄文が施されている。口縁部は2段の複合口縁で，附加条一種（附加2条）の縄文が施され，段の下端には擬文原体による押圧がある。頸部外面には放射状文が施されている。	長石・石英・パミス にぶい橙 普通	P 2，5% PL.9 南部覆土下層
3	広口壺 弥生土器	B (6.4) C 8.0	底部から胴部下位にかけての破片。胴部外面は附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。底部には布目痕がある。	長石・石英・雲母 にぶい橙 普通	P 3，10% PL.9 南部覆土中層 外面スス付着
4	広口壺 弥生土器	B (9.2) C [8.9]	底部から胴部下位にかけての破片。胴部外面は附加条一種（附加2条）と附加条二種（附加1条）の縄文が施され，羽状構成をとる。底部には布目痕がある。	長石・雲母・スコリア 橙 普通	P 4，15% PL.9 西部覆土中 外面スス付着
5	広口壺 弥生土器	H (5.0) C [14.4]	底部から胴部下位にかけての破片。胴部外面は附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。底部には布目痕がある。	長石・石英・雲母 スコリア にぶい橙 普通	P 5，5% PL.9 南東壁際覆土中層 内面剥離



第17図　第１号住居跡出土遺物実測・拓影図（１）



第18図　第１号住居跡出土遺物実測・拓影図（２）

第１号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第17図 6	広口壺 弥生土器	B〔2.4〕 C〔6.4〕	底部から胴部下端にかけての破片。胴部外面は附加条一種（附加２条）の縄文が施されている。底部に木葉痕がある。	長石・石英・雲母 橙 普通	P6，5%　PL9 南部覆土中

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第18図 28	紡錘車	5.0	5.1	2.4	8	68.4	100	東部覆土上層	DP1　PL27
29	紡錘車	4.6	4.6	2.2	7	52.6	100	西部床面直上	DP2　PL27

図版番号	器種	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第18図 30	敲石	14.2	5.5	4.4	466.9	100	砂岩	南東壁際覆土下層	Q1　PL31
31	敲石	10.7	5.1	4.6	299.1	100	砂岩	南東壁際覆土下層	Q2　PL31

第２号住居跡（第19図）

位置　調査区南西部，D3aiK。

規模と平面形　長軸5.60m，短軸（1.94）mであるが，南東部が調査区外であるため，正確な平面形は不明である。

主軸方向　N－33°－E

壁　壁高は34～54cmで，外傾して立ち上がる。

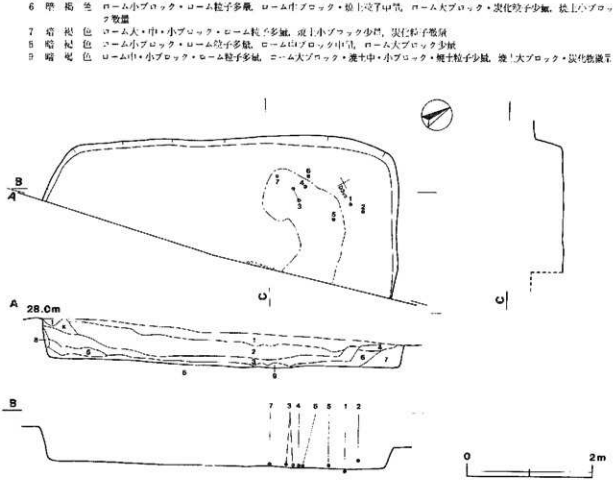
床　平坦で軟弱なローム上。北部にやや変化した面がある。

炉　調査した範囲では炉が確認されなかったが，住居跡中央部から焼土が検出され，この付近に炉があったものと思われる。

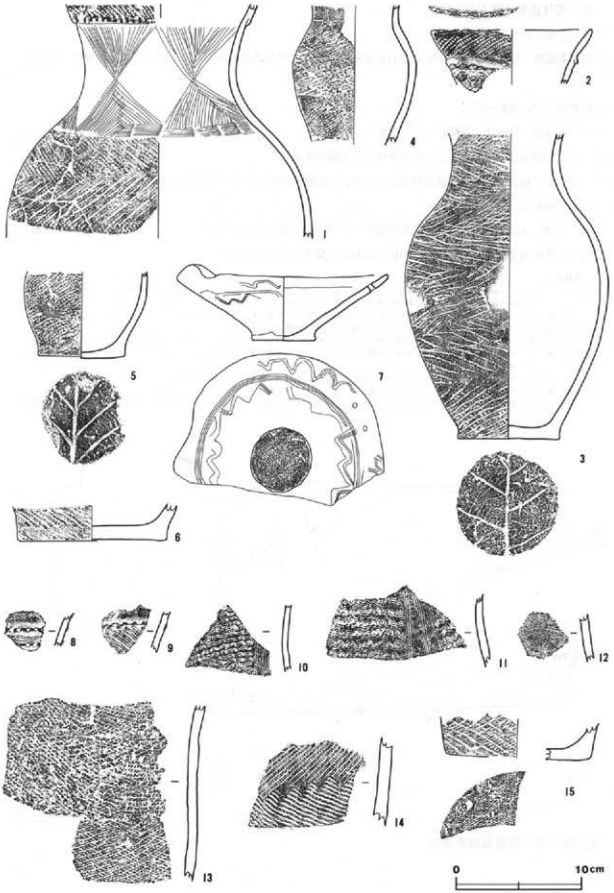
覆土　上層にはロームを含む黒色土が堆積し，中層から下層にかけて黒褐色土がレンズ状に堆積する９層からなる自然堆積である。第９層は，炉跡と思われる焼土を含んでいる。

土層解説

1	黒　色	ローム中ブロック・ローム粒子少量，ローム大・小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子微量
2	黒　色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子中量，ローム中ブロック・焼土小ブロック少量，ローム大ブロック・炭化粒子微量
3	黒 褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック・焼土粒子中量，焼土中・小ブロック少量，炭化物微量
4	黒 褐 色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化粒子微量
5	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，焼土小ブロック・炭化物微量
6	暗 褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック・焼土粒子中量，ローム大ブロック・炭化粒子少量，焼土小ブロック微量
7	暗 褐 色	ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量，焼土小ブロック少量，炭化粒子微量
8	暗 褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック少量
9	暗 褐 色	ローム中・小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子少量，焼土大ブロック・炭化微量



第19図　第２号住居跡実測図



第20図　第２号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物　北部を中心に弥生土器片が約90点出土している。ほとんどが胴部片で，口縁部，底部は少量である。第20図1～6は弥生上器壺で，2の広口壺の口縁部片は，北部覆土下層から出土している。1の広口壺の口縁部片は，北部床面から横位の状態で出土している。4の頸部から胴部にかけての破片は，北部の床面直上からつぶれた状態で出土している。7の鉢形土器は，北部床面直上から逆位でつぶれた状態で出土している。

第20図8～15は第2号住居跡から出土した弥生土器片の拓影図である。8・9は隆帯のある口縁部片で，8は隆帯が2条巡りその間に櫛歯状工具による横走文が施されている。10・11・12は頸部片で，10と11には縦区画内に櫛歯状工具による波状文が施されている。11は北東部，床面直上から出土している。12には連弧文が施されている。13・14は脚部片で，13には附加条二種（附加1条）の縄文が施され羽状構成をとっている。14には附加条一種（附加2条）の縄文が施され，羽状構成をとる。15は底部片で，外面には附加条二種（附加1条）の縄文が施され，底部には布目痕があり，籾と思われる圧痕が残っている。

所見　本跡の時期は，出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第20図 1	広口壺 弥生上器	B［18.6］	口縁部，胴部下半欠損。複合口縁で附加条一種（附加2条）の縄文が施され，下端に縄文原体による押圧が施されている。頸部はヘラ状工具により6分割されている。胴部との境に櫛状文が巡らされている。胴部外面には，附加条一種（附加2条）の縄文が施され，羽状構成をとる。	長石・石英・砂粒・パミス　小礫 にぶい黄橙 普通	P8，30%　PL9 北部床面直上
2	広口壺 弥生上器	A［13.0］ B（4.3）	口縁部片。口唇部には縄文原体が押圧されている。口縁部には，附加条一種（附加2条）の縄文が巡され，頸部との境には隆帯が巡り，隆帯上に指頭による押圧がある。	長石・石英 にぶい黄橙 普通	P7，5%　PL10 北部覆土下部
3	壺 弥生上器	B（24.2） C 8.1	底部から頸部片。頸部から胴部外面には，附加条二種（附加1条）の縄文が施され，羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石・石英 にぶい褐色 普通	P9，40%　PL10 北部床面直上 胴部外面酸化物が著しく黒褐色のシミ有り
4	小形壺 弥生上器	B［11.2］	胴部から頸部片。頸部は，櫛歯状工具により施文されている。胴部外面は，附加条一種（附加2条）と附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。	長石・石英・雲母・パミス にぶい橙 普通	P20，20%　PL9 北部床面直上
5	小形壺 弥生上器	B（6.9） C 7.0	底部から胴部下半部片。胴部外面には，附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。底部には木葉痕がある。	長石・石英 灰褐色 普通	P11，20%　PL10 北部床面直上
6	壺 弥生土器	B（4.6） C 7.2	底部から胴部下半片。胴部外面には，附加条一種（附加1条）の縄文が施されている。	長石・石英・雲母・砂粒 にぶい橙 普通	P13，15%　PL10 北部床面直上
7	鉢形土器 弥生上器	A 16.8 B 5.3 C 4.9	胴部欠損。底部から胴部は大きく外傾して立ち上がり，口縁は片口が付く。口縁部に2か所の穿孔がある。外面には櫛状工具による波状文が施されている。底部には布目痕がある。	長石・石英・砂粒 にぶい黄橙 普通	P14，70%　PL10 北部床面直上

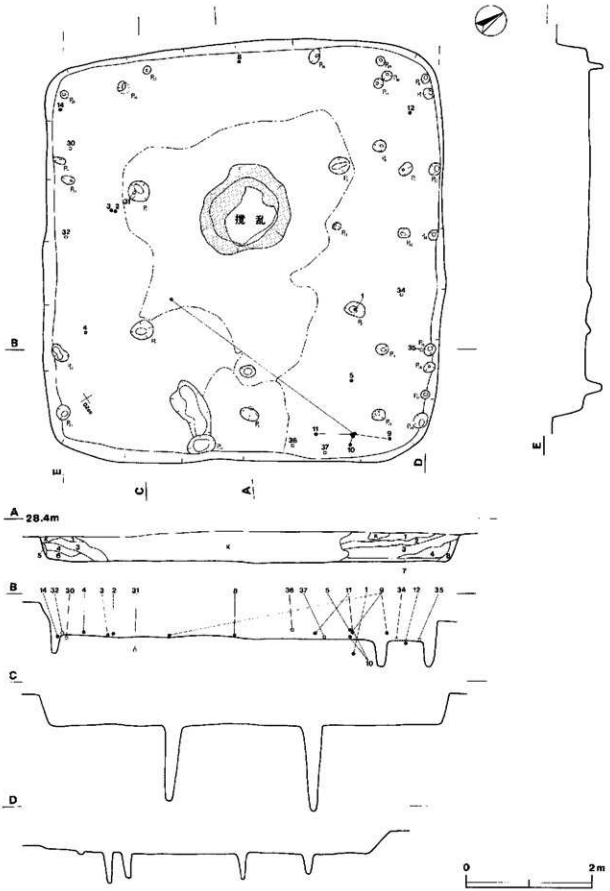
第3号住居跡（第21図）

位置　調査区南西部，D2$_{48}$区。

規模と平面形　長軸6.68m，短軸6.38mの隅丸方形である。

主軸方向　N－55°－E

壁　壁高は18～58cmで，わずかに外傾して立ち上がる。



第21図　第３号住居跡実測図

床　出入り口付近は硬化面が確認されている。中央部分は撹乱のためか軟弱なローム で、壁際のほうが硬い。

ピット　31か所（P_1～P_{31}）。P_1～P_4は長径32～36cm、短径24～31cmの楕円形で、深さが120～145cmの深い掘り込みをもつ主柱穴と思われる。主柱穴を結ぶ直線は長方形となる。P_5は長径31cm、短径20cmの楕円形で、深さ45cmの出入り口施設に伴うピットと思われる。P_6～P_{31}の小ピットが壁際に検出された。特に、北東壁際には、集中して配置されている。

炉　中央部から北西寄りにあり、平面形は直径140cmの円形で、床面を8cm程掘り込んでいる。炉床の赤変硬化面及び、覆土は撹乱のため確認できなかった。

覆土　8層からなる。壁際には焼土・炭化物を含む暗褐色土がレンズ状に堆積しているが、中央部から南西部にかけて大きな撹乱があり、炉床まで削り取られているため全体的な層の様相は正確には把握できない。

上層解説
1 黒　色　ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 黒 褐 色　ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・炭化粒子少量、ローム大ブロック微量
3 暗 褐 色　ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4 極暗褐色　ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量、ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子微量
5 暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック微量
6 黒 褐 色　ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化物・炭化粒子微量
7 極暗褐色　ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
8 黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック・炭化粒微量

遺物　中央部が撹乱されているため、周辺部から遺物が出土している。弥生土器片が約640点出土し、ほとんどが胴部破片である。第22図1～10・第23図11～15は弥生土器壺で、1の広口壺はP_2の覆土中から逆位で出土し、2・3の広口壺の頸部及び胴部から口縁部片は、西部床面直上からつぶれた状態で出土している。4～7は広口壺の口縁部片で、4は南部、5は東部の床面近くから出土している。9の広口壺の胴部から頸部片は、東部壁際の覆土下層から分かれて出土していることから、投棄されたものと思われる。8の小形壺は、北東壁際の床面直上から出土している。14の小形片口壺は、西隅の床面直上から逆位で出土している。第23図30～32は紡錘車で、31はP_4の覆土中から出土している。第24図33～35は上製勾玉で、34は北東部、35は北東壁際の床面直上から出土している。

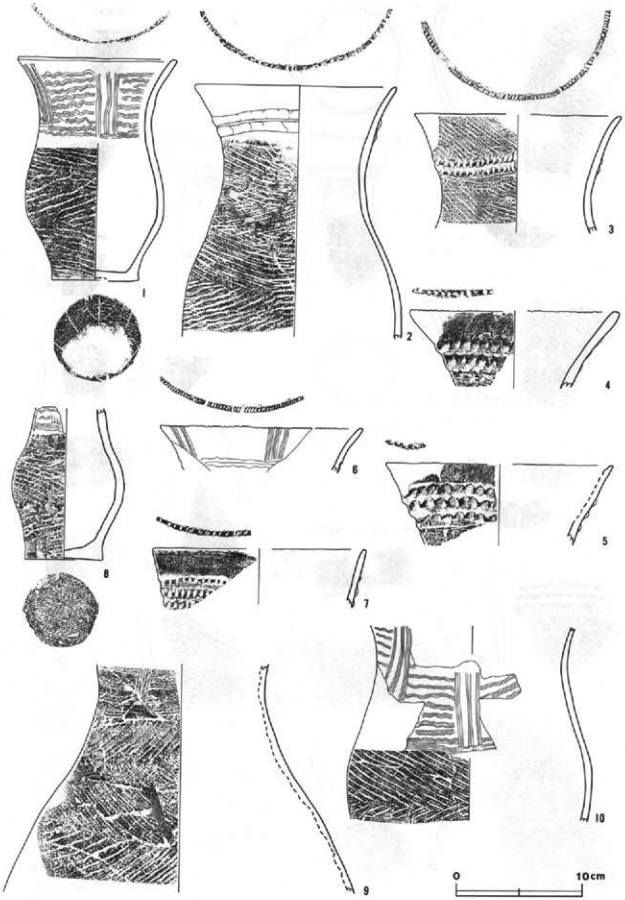
第23図16～29は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。16～18は広口壺の口縁部片で、口唇部に刻みが施され、口縁部は無文で、18には櫛歯状工具による縦区画が施されている。21～24は頸部片で、21・22には降帯が巡り降帯上に押圧がある。23・24には櫛歯状工具による縦区画内に波状文が施されている。25～28は胴部片で、25～27には附加条一種（附加1条）の縄文が施され、28には附加条一種（附加2条）の縄文が施され羽状構成をとっている。29は底部片で、外面には附加条二種（附加1条）の縄文が施され、底部には右目痕があり、籾と黒われる圧痕が残っている。

所見　本跡の時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

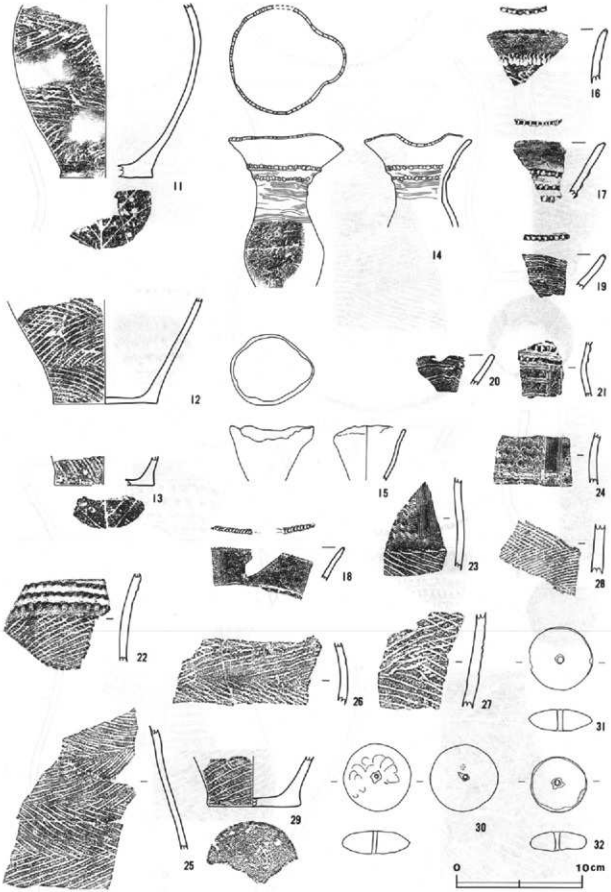
第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第22図 1	小形広口壺 弥生土器	A 12.7 B 17.8 C 7.0 H 8.9 ↑ 10.9	胴部上半部から口縁欠損。口唇部には、縄文が施されている。口縁部から頸部の縦区画は、3条を単位に6分割されていると思われる。縦区画の内、1か所は2条である。区画内には櫛歯状工具による波状文が施されている。胴部外面は附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石、石英、雲母、スコリア、小礫 にぶい黄橙 普通	P34、76%　PL10 外面炭スス付着、内面炭化物付着 P_2覆土中

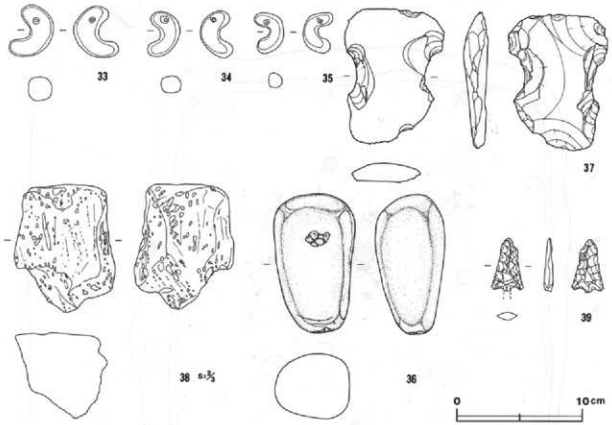
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第22図 2	広口壺 弥生土器	A 16.0 B (20.0) I 17.4	口縁部から胴部片。口縁部には縄文施文後体が押圧されている。口縁部は無文で、下端に隆帯が2条巡る。頸部から胴部にかけての外面には円形突二種（附加1条）の縄文が施され、形状構成をとる。	長石、石英、砂粒、小礫 にぶい黄橙 普通	P15, 60% PL11 南西部床直西上 外面スス付着 土器に黒斑色のシミ
3	広口壺 弥生土器	A[16.1] B(9.4) H 11.8	胴部から口縁部片。口縁部には縄文が施されている。口縁部には附加突二種（附加1条）の縄文が施され、一端には2条の隆帯が巡り、隆帯上に縄文原体による強い押圧がある。頸部には、附加突二種（附加1条）の縄文が施され、形状構成をとるものと思われる。	長石、石英、スコリア、砂粒 にぶい橙 普通	P16, 10% PL10 南西部床直上
4	広口壺 弥生土器	A[16.8] B(6.2)	口縁部片。口縁部には縄文が施されている。二端部は無文で、頸部との境に低い突帯が2条巡り、隆帯状に赤彩による押止がある。頸部には、附加突二種（附加12条）の縄文が施されている。	長石、石英、スコリア 明赤褐色 普通	P17, 5% PL11 南部溝上層
5	広口壺 弥生土器	A[18.1] B(6.4)	口縁部片。口縁部には縄文が施されている。二端部は無文で、頸部との境には隆帯が3条巡り、隆帯上には赤彩による押止がある。頸部上端に附加突二種（附加1条）の縄文とヘラ状工具による施文がある。	長石、石英、砂粒、小礫、パミス にぶい橙 普通	P18, 5% PL11 東部溝上層
6	広口壺 弥生土器	A[16.2] B(3.5)	口縁部片。口縁部には、ヘラ状工具による刻みがある。口縁部には、縦位の櫛描文が施され、下端には隆帯が2条巡る。	長石、石英、パミス 赤い褐色 普通	P19, 5% PL11 覆土中 外面スス付着
7	広口壺 弥生土器	A[17.0] B(4.6)	口縁部片。口縁部には棒状工具による沈圧がある。口縁部は無文で、下端には隆帯が3条巡り、押圧工具による強い押圧がある。隆帯の間に、櫛歯状工具による横走文が施されている。	長石、石英、赤褐、砂粒 にぶい橙色 普通	P20, 5% PL11 覆土中
8	小形壺 弥生土器	B (12.0) C 6.2	頸部上半部から口縁部欠損。頸部には櫛歯状工具による横走文が施され、頸区画をもつと思われる。胴部には縄文施文（附加1条）の縄文が施され、斜状構成をとる。底部には右底痕がある。	長石、石英、スコリア、砂粒 橙 普通	P28, 60% PL11 外面スス付着 北西部床下直西上
9	広口壺 弥生土器	B (18.2) H [13.3]	頸部上半部から頸部片。頸部には、櫛歯状工具による横走文と横走文が施されている。胴部には、2条巡の縄文が施され、斜状構成をとる。	長石、石英、小礫、砂粒 赤褐色、パミス にぶい黄橙 普通	P32, 15% PL11 内面剥離 東部溝上層
10	広口壺 弥生土器	B (15.4) H [15.2]	頸部上半部から胴部下半部片。頸部には、櫛歯状工具により3条を単位として頸区画され、区画内には波状文が施される。胴部外面には、附加突二種（附加1条）の縄文が施され、斜状構成をとる。	長石、石英、小礫、砂粒、スコリア にぶい黄橙 普通	P21, 15% PL12 東部溝埋土下層
11	壺 弥生土器	B (13.8) C [7.4] I 15.0	胴部から頸部下半部片。胴部には、附加突二種（附加1条）の縄文が施され、斜状構成をとる。底部には本葉痕がある。	長石、石英、雲母、スコリア にぶい橙 普通	P25, 20% PL12 東部溝埋土下層
12	壺 弥生土器	B (9.3) C 8.2	頸部下半部から底部片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部外面には、附加突二種（附加1条）の縄文が施され、斜状構成をとる。	長石、石英、砂粒、パミス にぶい橙 普通	P23, 5% PL12 北側床面直上
13	壺 弥生土器	B (2.3) C [8.2]	底部片。外面には附加突一種（附加2条）の縄文が施されている。底部には本葉痕がある。	長石、石英、雲母、赤褐色物 橙 普通	P24, 5% PL11 覆土中
14	小形片口鉢 弥生土器	A 8.8 B 9.3 B (12.1) H 4.0 I 6.3	頸部下半から底部欠損。口唇部には、ヘラ状工具による刻みがある。口縁部は無文で、頸部との境には2条の隆帯が巡り、隆帯上には棒状工具による押圧がある。頸部には、櫛歯状工具による横走文が施され、胴部外面には、附加突二種（附加1条）の縄文が施されている。	長石、石英 橙 普通	P30, 60% PL11 西南床面直上
15	小形片口鉢 弥生土器	A 6.6 B (4.3)	口縁部片。外面は無文で、櫛歯状痕がある。	長石、雲母、スコリア にぶい橙 普通	P31 PL12 覆土中



第22図　第３号住居跡出土遺物実測図（１）



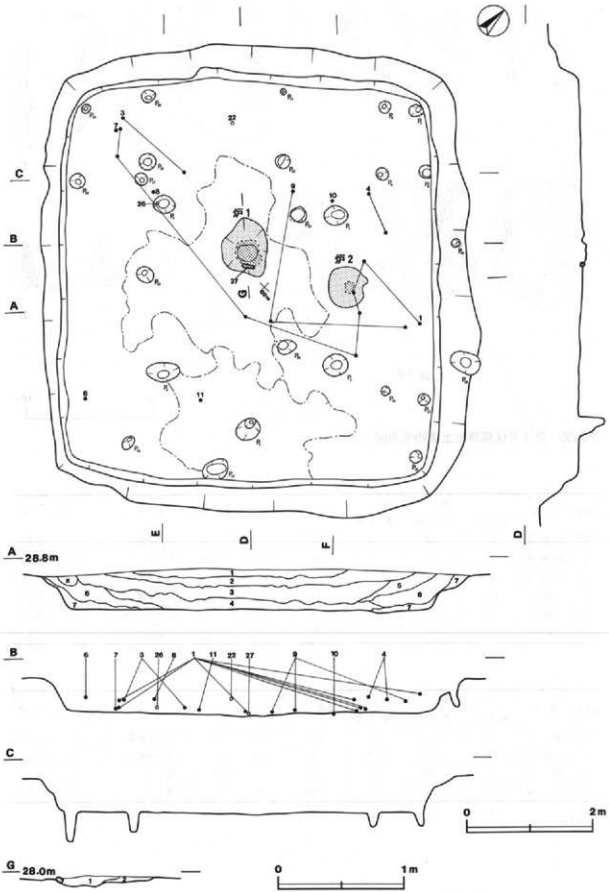
第23図　第３号住居跡出土遺物実測・拓影図（２）



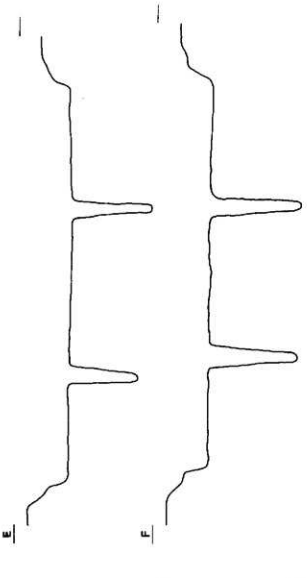
第24図　第３号住居跡出土遺物実測図（３）

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
第23図 30	紡錘車	5.4	5.4	1.8	3.0	51.7	100	西部壁際床面	DP3　PL27
31	紡錘車	5.1	4.9	1.7	5.0	41.9	100	P_4覆土中	DP4　PL27
32	紡錘車	4.5	4.4	1.6	6.0	31.3	100	南西壁際床面	DP5　PL27
33	土製勾玉	2.8	1.7	1.3	1.8	6.4	100	北東部覆土中	DP6　PL27
34	土製勾玉	2.4	1.1	0.9	2.0	3.3	100	北東部床面直上	DP7　PL27
35	土製勾玉	2.2	1.5	0.8	1.6	2.3	100	北東壁際床面直上	DP8　PL27

図版番号	種別	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
第24図 36	敲石	11.1	6.5	5.6	566.7	100	砂岩	東部壁際覆土中層	Q4　PL31
37	打製石斧	10.8	7.9	1.9	158.6	100	砂岩	東部壁際床面直上	Q5　PL31
38	砥石	5.1	4.0	3.9	15.0	－	軽石	覆土中	Q6　PL31
39	石鏃	(2.1)	1.3	0.4	(0.8)	(90)	頁岩	覆土中	Q7　PL31



第25図　第４号住居跡実測図（１）



第26図　第４号住居跡実測図（２）

第４号住居跡（第25・26図）

位置　調査区南西部，D2a区。

規模と平面形　長軸6.72ｍ，短軸6.12ｍの隅丸方形である。

主軸方向　N－43°－W

壁　壁高は48～64cmで，床面からは緩やかに外傾し，中段から大きく外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，小さな凹凸があり，中央部分は軟弱なロームでその周囲は硬化している。特に，南東部の出入口の周囲がよく踏み固められて硬い。

ピット　26か所（P_1～P_{26}）。P_1～P_4は長径25～53cm，短径30～36cmの楕円形で，深さが130cm前後である。P_1～P_4は主柱穴と思われ，主柱穴を結んだ線は方形となる。P_5は長径40cm，短径30cmの楕円形で，深さ45cmの出入り口施設に伴うピットと思われる。P_6～P_{22}は壁際に配置され，直径10～25cmの円形および楕円形で，壁柱穴と思われる。P_{23}・P_{24}は，P_1・P_2に伴う補助柱穴と思われる。P_{25}・P_{26}は，大きく外傾した壁から検出されたが，性格は不明である。

炉　２か所。第１号炉は，中央部からやや北西寄りにあり，平面形は長径95cm，短径75cmの楕円形で，床面を７cm程掘り込んでいる。炉床は，中央部が火熱を受け赤変硬化している。南東寄りの炉床上には，棒状の硬質砂岩が長径に直行するように据えられており，炉石として使われていたものと思われる。第２号炉は，北東部のP_1・P_2のほぼ中間に位置し，平面形は長径65cm，短径55cmの楕円形で，掘り込みはなく，焼土が検出されただけである。

第１号炉土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子多量，焼土中ブロック中量，ローム中・小ブロック・焼土大ブロック・炭化物少量

2　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子多量，ローム中ブロック・焼土小ブロック中量，ローム大ブロック・焼土大・中ブロック・炭化物・炭化粒子少量

覆土　上層中央部に黒色土が堆積し，中層から下層にかけてローム・焼土・炭化物を含む黒褐色土と暗褐色土がレンズ状に堆積する７層からなる自然堆積である。

土層解説

1 黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック少量，ローム大ブロック少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
4 黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
5 暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム大・中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
6 極暗褐色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
7 暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

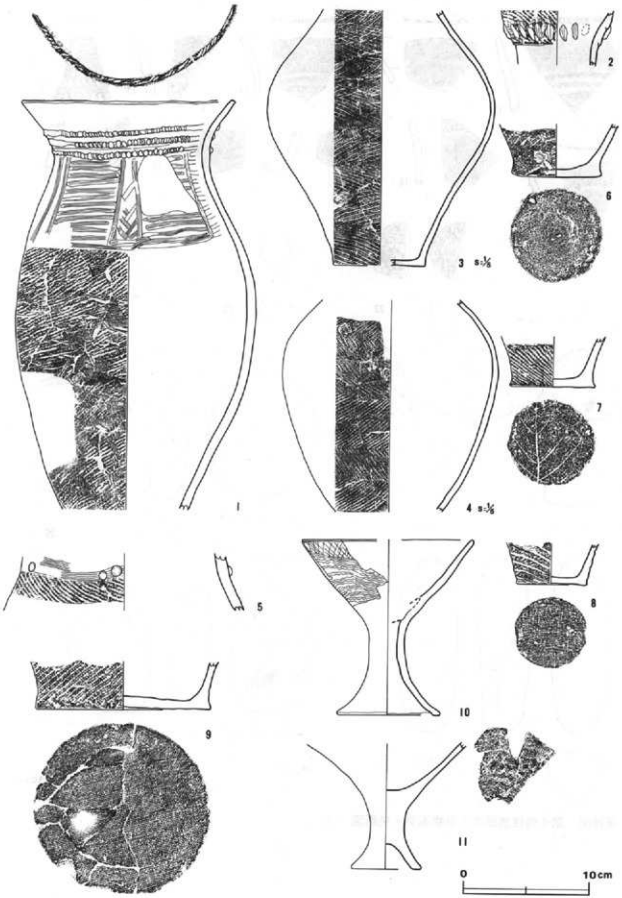
遺物　弥生土器片が約1500点出土しているが，ほとんどが細片である。ほぼ全域から出土しているが，南部は密度が薄い。第27図1～9は弥生土器壺で，1の広口壺は東部から西部にかけての覆土下層から広範囲に出土した破片が接合したものである。2・5の頸部から胴部片は，覆土中から出土している。3・4・6～9の胴部から底部片は，3が西部覆土下層から，4が北部覆土下層からつぶれた状態で出土し，6は南部，7は西隅の覆土下層から出土している。8の胴部から底部片は，西部覆土中層から出土し，9は中央部から東部にかけての覆土下層から出土している。第27図10・11は弥生土器高坏で，10は北部床面直上，11の脚部は南部覆土下層から出土している。第28図22・23は紡錘車で，22は北西部覆土中層から出土している。

第28図12～21は，本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。12～17は口縁部片で，12・15は無文の下に降帯が巡る。13・14には櫛歯状工具による波状文が施されている。16・17は複合口縁で，16は附加条二種（附加1条），17には附加条一種（附加2条）の縄文が施される。18～21は頸部片で，18・19には重山形文が施され，20・21の胴部との境には簾状文が施され，胴部には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。

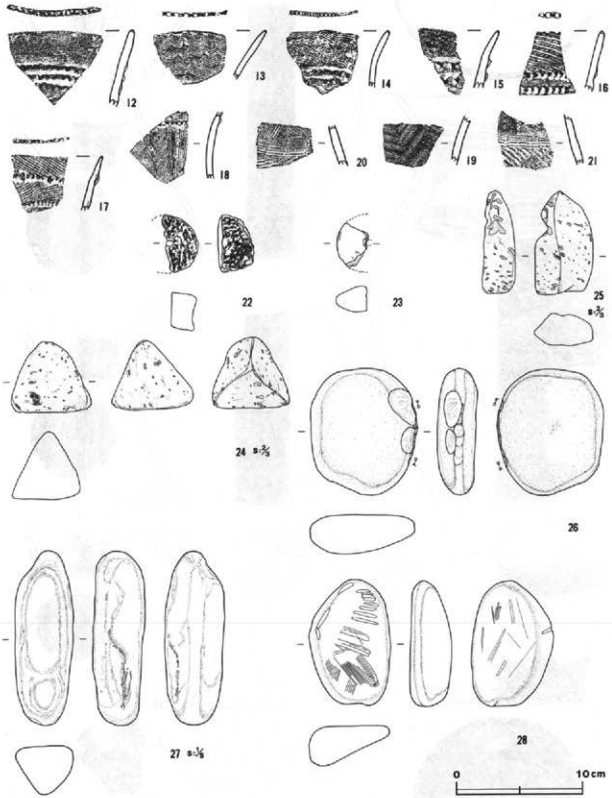
所見　本跡の時期は，出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第27図 1	広口壺 弥生土器	A 17.2 B (32.5) H 12.4 I 19.2	底部及び胴部一部欠損。口縁部には縄文が施されている。口縁部外面は無文で，頸部との境には，隆帯が3条巡り，隆帯上にヘラ状工具による刻みがある。頸部外面は，櫛歯状工具による波状文が施され，区画内には，横走文が施されている。スリット部の1か所には，櫛歯状工具による「V」字状の装文がある。胴部には，附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。	長石，石英，砂粒 灰黄褐色 普通	P32，75% 外面スス付着 北部覆土下層
2	小型広口壺 弥生土器	B (4.5)	頸部から，縁部片。口縁部は，2段の複合口縁で，附加条一種（附加2条）の縄文が施され，1段目の下端には，磨長の貼り帯が付く。頸部は無文である。	長石，石英 にぶい赤褐色 普通	P42，10%　PL12 覆土中
3	壺 弥生土器	B (34.1) C 12.2 I 30.2	胴部から底部片。半球で，底部から胴部は外傾して立ちあがる。胴部には，附加条二種（附加1条）の縄文が施され，羽状構成をとる。	長石，石英，砂粒 パミス にぶい橙 普通	P35，60%　PL13 土層覆土下層
4	壺 弥生土器	B (28.4) I 28.6	胴部片。胴部は内彎して立ち上がる。胴部には，附加条一種（附加2条）の縄文が施され，羽状構成をとる。	長石，石英，雲母 砂粒，パミス にぶい赤褐色 普通	P38，75%　PL13 上部覆土下層 内面胴部
5	壺 弥生土器	B (4.3)	胴部上端から頸部片。頸部外位には，櫛歯状工具により，波状文が施されている。胴部と頸部の境には櫛歯状工具による横走文が施され，その上に，竹管の刺り付けがある。胴部外面には，附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。	長石，石英，雲母 砂粒 にぶい橙 普通	P38，5%　PL12 覆土中
6	壺 弥生土器	B (4.3) C 7.8	底部から胴部一部片。胴部には，附加条二種（附加1条）の縄文が施される。底部に網目痕が残る。	長石，石英，砂粒 スコリア にぶい黄褐色 普通	P40，10%　PL12 南部覆土下層



第27図　第４号住居跡出土遺物実測図（１）



第28図　第４号住居跡出土遺物実測・拓影図（２）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第29図 7	壺 弥生土器	B(4.0) C 6.9	底部から胴部下端片。胴部には、刷毛条一種（単位19条）の縦文が施されている。底部には、木葉痕がある。	長石、石英、小礫 にぶい黄色 普通	P41、10%、PL12 西隔壁土下層
8	壺 弥生土器	B(3.3) C 5.6	底部から胴部下端片。胴部には、刷毛条一種（単位11条）の縦文が施されている。底部には台目痕がある。	長石、石英、砂粒 にぶい黄橙 普通	P43、10%、PL13 北部覆土中層
9	壺 弥生土器	B(3.8) C 14.0	底部から胴部下端片。平底で胴部は外傾して立ち上がる。胴部には、刷毛条一種（単位32条）の縦文が施されている。底部には、台目痕がある。	長石、石英、砂粒 明黄褐色 普通	P37、10%、PL12 中央部・東部覆土下層
10	高杯 弥生土器	A [13.6] B 14.0 D 8.1 E 6.5	脚部及び杯部片。脚部は「ハ」の字状にひらき、杯部は、大彎気味に外傾してのち上がる。杯部外面の上端には整飾状工具による刻格子状文が施され、器面状工具による横走文で区切り、その下に波状文が施される。	長石、石英、砂粒 灰白色 普通	P44、50%、PL13 中央部東西面上
11	高杯 弥生土器	B(9.9) D 5.5	杯部上半部欠損。脚部は「ハ」の字状にひらき、杯部は、外傾して立ち上がる。杯部外面には、櫛状工具による波状文が施される。	長石、石英、雲母、砂粒 にぶい黄橙 普通	P45、50%、PL13 南部東西面上

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
第30図 22	砥面石	4.6	(2.9)	5.0	5.0	(26.3)	20	北西部覆土中層	DP 9 PL27
23	砥石類車	2.5	3.5	2.1	5.0	(14.2)	20	覆土	DP 10 PL27

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
第30図 24	磨石	2.8	3.2	2.7	(2.3)		頁岩	覆土中	Q 8 PL31
25	磨石	4.1	2.3	1.3	(1.9)	—	輕石	覆土中	Q 9 PL31
26	敲石	10.1	8.5	3.2	400.7	100	砂岩	西部覆土下層	Q11 PL32
27	磨石	25.3	7.9	7.1	1753.9	100	硬質砂岩	北側内壁直下面	Q12 PL31
28	敲石	10.1	6.5	3.2	265.5	100	砂岩	覆土中	Q13 PL32

第5号住居跡（第29図）

位置 調査区南西部，D1m区。

規模と平面形 長軸5.19m，短軸4.96mの隅丸方形である。

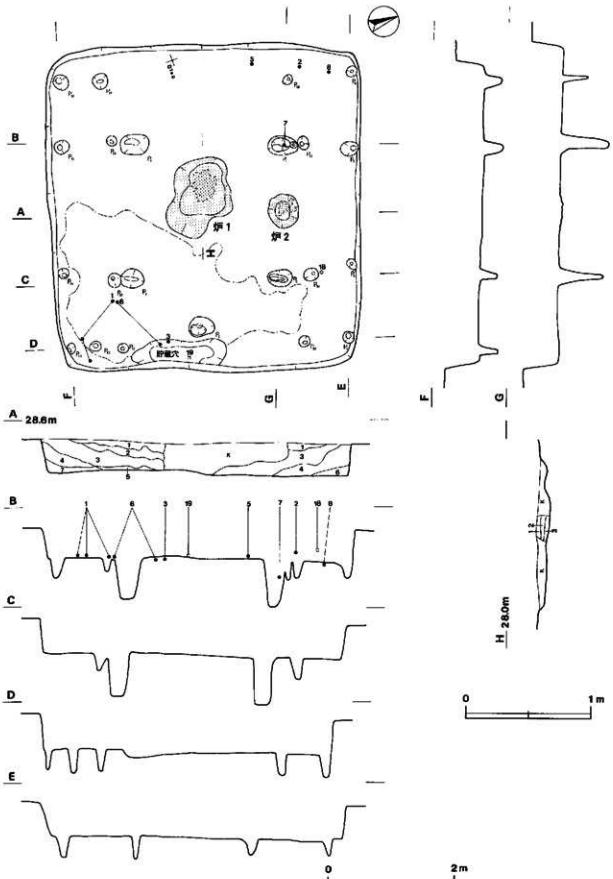
主軸方向 N－19°－E

壁 壁高は45～53cmで，外傾して立ち上がる。

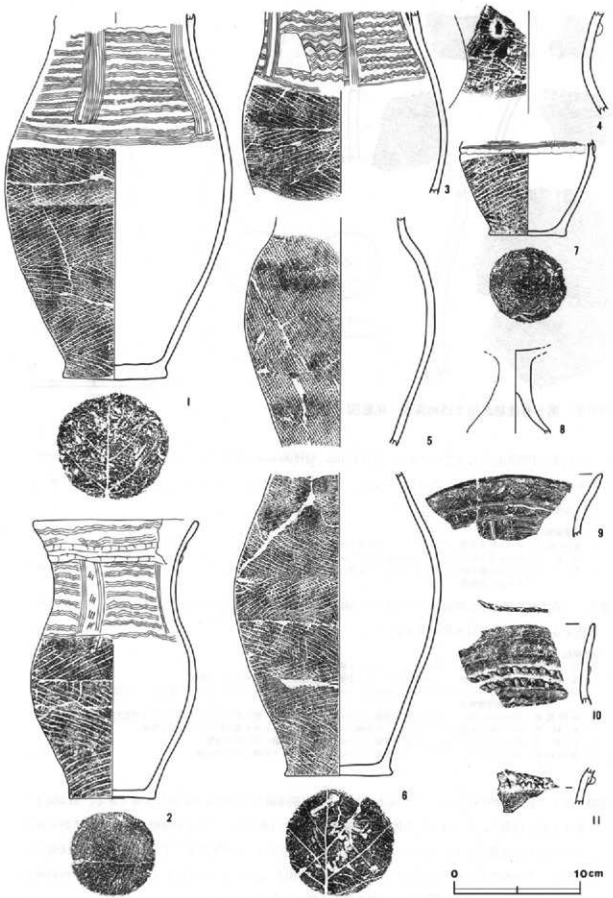
床 ほぼ平坦である。南東部及び出入口部の周囲が踏み固められ硬化している。

ピット 22かゞ（P_1～P_{22}）。P_1～P_4は長径37～45cm，短径28～34cmの楕円形で，深さが65～77cmの主柱穴と思われる。P_5は長径41cm，短径35cmの楕円形で，深さ37cmの出入り口施設に伴うピットと思われる。P_6～P_{18}は直径15～30cmの円形で，深さ28～40cmの壁柱穴と思われる。P_{19}～P_{22}は，主柱穴の外側にあり，直径18～23cmの円形で，深さ20～32cmの補助柱穴と思われる。

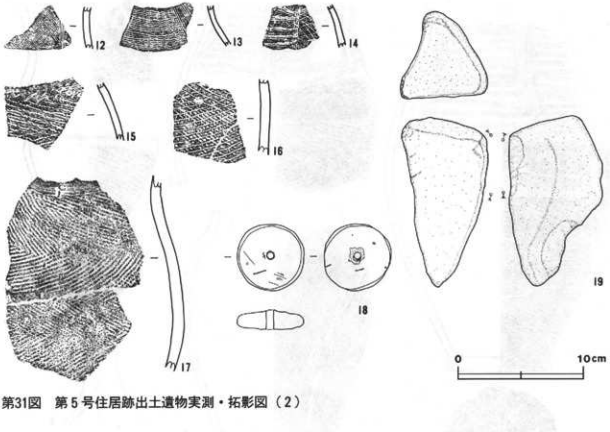
貯蔵穴 1か所。南東壁中央に付設されており，平面形は長径150cm，短径40cmの長楕円形で床面を16cm程掘り込んでいる。底面は凹状で，壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。



第29図　第５号住居跡実測図



第30図　第５号住居跡出土遺物実測・拓影図（１）



第31図　第５号住居跡出土遺物実測・拓影図（２）

炉　炉１は，中央部から北西寄りにあり，長径135cm，短径90cmの不整楕円形で，床面を10cm程掘り窪めている。炉床は火熱を受け赤変硬化している。炉２は，P_1とP_2の間にあり，長径53cm，短径48cmの楕円形で，掘り込みは浅く，焼土のみを確認した。

炉１土層解説

1　極暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土・炭化粒子少量
3　黒　　色　ローム・焼土粒子・焼土小ブロック・多量，焼土中ブロック中量，ローム小ブロック・焼土大ブロック少量，ローム中ブロック・炭化物微量

覆土　上層中央に黒色土が堆積し，中層から下層にかけてローム・焼土・炭化物を含む黒褐色土がレンズ状に堆積する７層からなる自然堆積である。

土層解説

1　黒　　色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック・焼土粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック・炭化物微量
4　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5　黒　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム大・中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
6　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック少量，炭化粒子微量
7　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム大・中ブロック中量，炭化物微量

遺物　弥生土器片が約800点出土しているが，ほとんどが胴部細片で口縁部・頸部は少量である。第30図１～７は弥生土器広口壺で，１・３・５の頸部から胴部片は，１は南東隅，３は南東壁際，５は北西壁際の床面直上からつぶれた状態で出土している。２の口縁部から底部片は，北西壁際覆土下層からつぶれた状態で出土している。７の胴部から底部片は，P_1の覆土中層から出土している。８は弥生土器高坏で，北西隅床面直上から出土している。18は紡錘車で，北東部覆土下層から出土している。

第30図９～11・第31図12～17は，本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。９・10は口縁部片で，９

は頸部との境に櫛歯状工具による横走文が施され，頸部は縦区画内に波状文が施されている。10には輪積痕があり，頸部との境に2条の隆帯が巡り，頸部は櫛歯状工具により縦区画され，区画内には波状文が施されている。11～14は頸部片で，11には複合口縁の下端に貼瘤が付く。12には平山形文が施され，13・14には櫛歯状工具による波状文が施されている。15～17は胴部片で，15・16には附加条二種（附加1条），17には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。

所見　本跡の時期は，出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

第5号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	広口壺 弥生土器	H(29.1) C 8.3	口縁部欠損。頸部外面は，4条を単位に5分割され，縦区画内には，櫛歯状工具による波状文が施されている。胴部には，附加条二種（附加1条）の縄文が施され，羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石，石英，砂粒 パミス にぶい橙 普通	P47，80% PL14 南東隅床面直上 外面スス付着 内面に黒褐色のシミ
2	広口壺 弥生土器	A 13.2 B 22.1 C 6.7 H 9.7 I 13.1	口縁部，胴部下半部欠損。口縁部にはヘラ状工具による刻みがある。口縁部には，2条の櫛歯状工具による波状文が巡り，頸部との境には，2条の隆帯が巡る。隆帯上には，指頭によると思われる押圧がある。頸部は，櫛歯状工具により4分割され，区画内には波状文が施されている。スリット内には，櫛歯状工具による施文がある。胴部は附加条二種（附加1条）の縄文が施され，羽状構成をとる。底部には，布目痕がある。	長石，石英，パミス にぶい黄褐色 普通	P52，90% PL14 北西隅覆土下層 外面スス付着 外明一部摩滅 内面上部に黒褐色のシミ
3	広口壺 弥生土器	B(14.5) I 16.3	口縁部，胴部下半欠，底部欠損。頸部は，縦区画により5分割され，区画内には櫛歯状工具による波状文が施されている。胴部には，附加条一種（附加1条）の縄文が施され，羽状構成をとる。	長石，石英，砂粒 小礫 にぶい黄褐色 普通	P48，30% PL15 外面スス付着 南東隅床面直上
4	甕 弥生土器	B(7.5)	胴部片。外面には，附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。胴部との境に張り瘤が付く。	長石，石英 黒い黄褐 普通	P49，5% PL16 4区覆土十
5	広口壺 弥生土器	H(18.4) I 15.0	頸部から頸部片。頸部は無文で，胴部外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施される。	長石，石英，雲母，砂粒 にぶい褐色 普通	P51，30% PL14 北西隅床面直上 外面スス付着 外面一部摩滅 内面に黒褐色のシミ
6	広口壺 弥生土器	B(42.2) C 8.5 I 24.2	頸部，口縁部欠損。胴部には附加条一種（附加1条）の縄文が施され，羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石，石英，雲母，砂粒 スコリア にぶい橙 普通	P53，80% PL14 南東隅床面直上 外面スス付着
7	壺 弥生土器	B(7.5) C 6.2	底部から胴部下半片。胴部下部には，櫛歯状工具による横走文が施され，胴部との境は最大径となり，強い稜がある。胴部には，附加条二種（附加1条）の縄文が施され，羽状構成をとる。底部には，布目痕がある。	長石，石英，雲母 にぶい黄橙 普通	P53，40% PL13 外面スス付着 P，覆土中層
8	高杯 弥生土器	B(6.8)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。本部は，大きく外傾して立ち上がると思われる。	長石，石英，雲母，砂粒 スコリア にぶい黄橙 普通	P54，40% PL13 北西隅床面直上

遺物番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
第31図 18	紡錘車	5.3	5.3	1.6	6.0	42.2	100	北東部掘形覆土下層	D P11 PL27

図版番号	種別	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	残存率(%)	石質	出土地点	備考
第31図19	磨石	(22.6)	(12.5)	11.6	(2685.0)	－	砂岩	東部壁際床面直上	Q14 PL32

第6号住居跡（第32図）

位置　調査区中央部，D1$_{60}$$_{60}$区。

規模と平面形　長軸6.10m，短軸5.32mの隅丸長方形である。

主軸方向　N－66°－W

壁　壁高は44～55cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，小さな凹凸があり，出入り口施設の周囲及びP$_1$・P$_4$の周囲が踏み固められ硬化している。

ピット　19か所（P$_1$～P$_{19}$）。P$_1$～P$_4$は長径50～55cm，短径35～45cmの楕円形で，長径方向は住居跡の主軸方向に対して直角である。深さが70～80cmの主柱穴と思われる。P$_5$は直径30cmの円形で，深さ40cmの出入り口施設に伴うピットと思われる。P$_6$～P$_{10}$は直径15～30cmの円形で，深さ20～40cmの壁柱穴と思われる。P$_{11}$・P$_{14}$は，P$_1$・P$_2$の外寄に位置し，長径26～32cm，短径19～20cmの楕円形で，深さ30cm前後の補助柱穴と思われる。

貯蔵穴　1か所。南東壁南部に設置され，平面形は長径43cm，短径38cmの楕円形で床面を19cm程掘り込んでいる。底面は皿状で，壁は外傾して立ち上がっている。

炉　中央部から北寄りにあり，長径120cm，短径95cmの楕円形で，床面を10cm程掘り窪めている。炉床は，火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

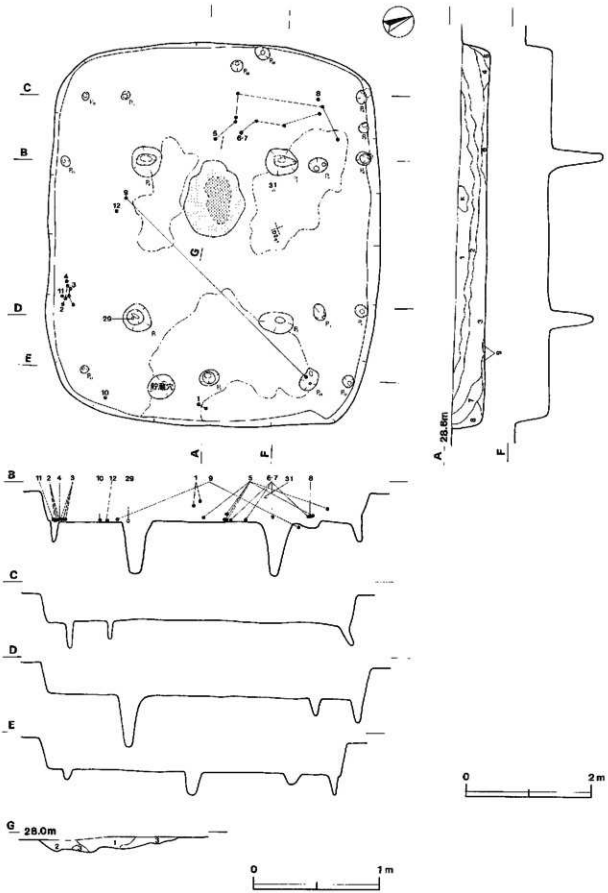
1　黒　褐　色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック少量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　焼土粒子多量，ローム粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量

覆土　壁際にロームを多量に含む褐色土が堆積し，下層から中層にかけて，暗褐色と黒褐色がレンズ状に堆積し，上層中央部に黒色土が堆積する9層からなる自然堆積である。

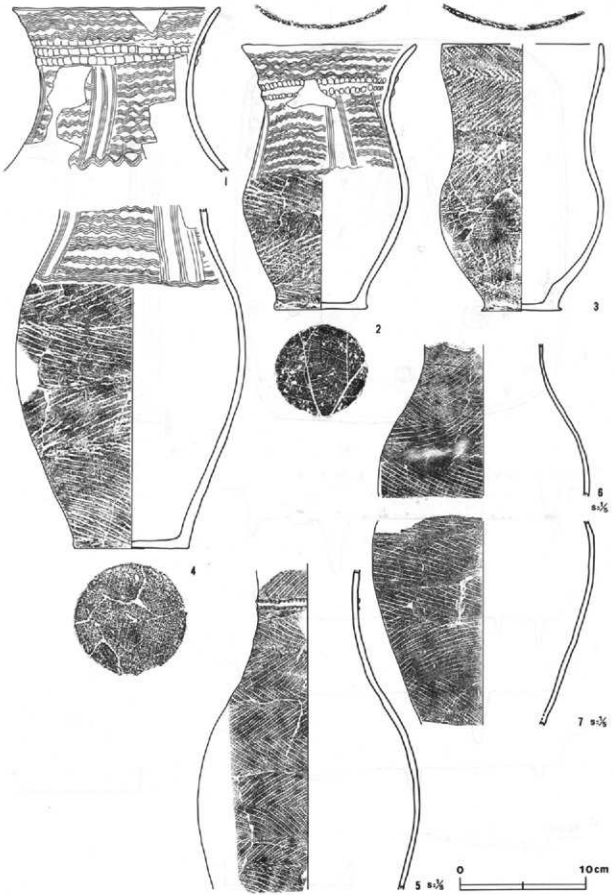
土層解説

1　黒　色　ローム粒子・焼土粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・白色粒子少量，炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子・炭化物微量
3　暗　褐　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量，炭化物微量
4　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
5　褐　色　ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量，炭化粒子微量
6　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量，ローム中ブロック・焼土中ブロック微量
7　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック・炭化物少量，焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
8　暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，ローム中・小ブロック・焼土小ブロック少量，ローム大ブロック・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子微量
9　黒　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム大ブロック・焼土中ブロック・炭化物微量

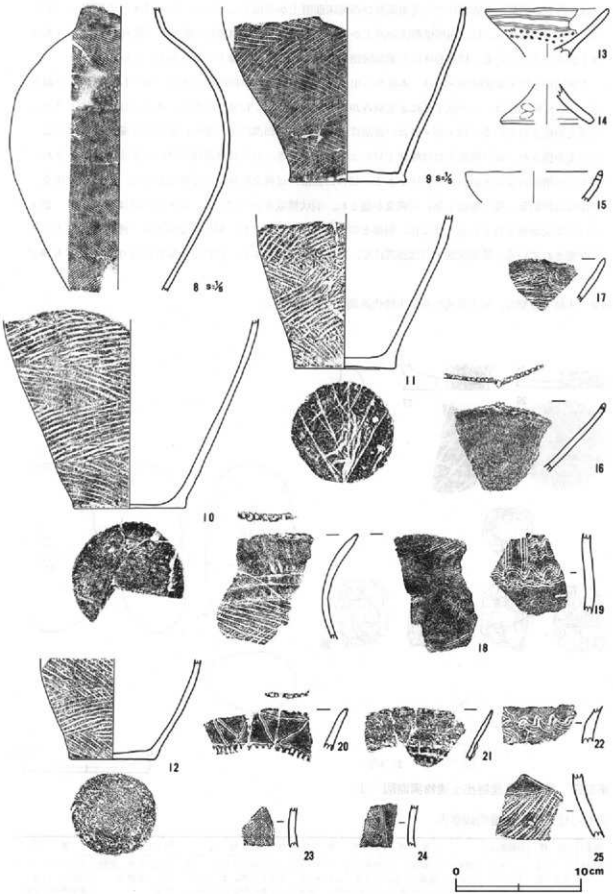
遺物　弥生土器片が約850点出土している。中央部は密度が低く，西部から多く出土している。第33図1～7・第34図8～12は弥生土器壺で，1・4は広口壺の口縁から底部片で，1は東部壁際覆土中層から，4は南部壁際床面直上から出土している。2・3の中形広口壺は，西部壁際床面直上から出土している。2～4は押しつぶされた状態で出土している。5～9は大形壺である。5～8は北部覆土下層から出土している。



第32図　第６号住居跡実測図



第33図　第６号住居跡出土遺物実測図（１）

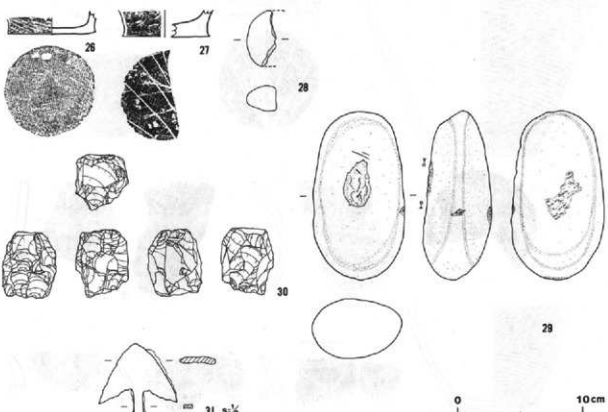


第34図　第６号住居跡出土遺物実測・拓影図（２）

9は大形壺の胴部から底部片で，北東隅及び西部床面直上から出土している。10・11は壺の胴部から底部片で，10は南東隅から，11は南部壁際床面直上から出土している。第34図12の胴部から底部片は，南西部床面直上から出土している。13の高坏片と第35図28の紡錘車は，貯蔵穴覆土中から出土している。

第34図16～25・第35図26・27は，本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。16・17は高坏の口縁部片で，16の口唇部には，ヘラ状工具による刻みがあり突起をもつ。17は片口部で，外面には櫛歯状工具による波状文が施されている。18・20・21は口縁部片と口縁部から頸部片で，20の口縁部には櫛歯状工具による重山形文が施され，低い隆帯上には棒状工具による押圧がある。21には櫛歯状工具による波状文が施され，隆帯上には指頭によると思われる押圧がある。18の口唇部には縄文原体による押圧があり，口縁部は無文で，頸部には附加条二種（附加１条）の縄文が施され，羽状構成をとっている。19・22～25は頸部片で，23・24には山形文が施されている。25には，胴部との境に簾状文が施され，胴部には附加条二種（附加１条）の縄文が施されている。第35図26・27は底部片で，26には布目痕があり，27には木葉痕があり，籾圧痕も確認されている。

所見　本跡の時期は，出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。



第35図　第６号住居跡出土遺物実測図（３）

第６号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第33図 1	広口壺 弥生土器	A 16.6 B (13.1) H 12.2	頸部から口縁部片。口唇部には，ヘラ状工具による刻みがある。口縁部には，櫛歯状工具による波状文が施され，頸部との境には，３条の隆帯が巡り，指頭による押圧がある。頸部は，３条を単位に分割され，区画内には，波状文が施される。	長石，石英，雲母にぶい黄褐色 普通	P59，10%　PL15 外面スス付着 東壁際覆土中層

図版番号	器種	法量値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第33図 2	広口壺 弥生土器	A 13.8 B 21.8 C 7.3 H 9.9 I 17.1	頸部から口縁部一部欠損。口唇部には、縄文が施される。口縁部外面には、櫛歯状工具による波状文が施され、頸部との境には、2条の隆帯が巡り、棒状工具による押圧がある。頸部は、4分割され、区画内には櫛歯状工具による波状文が施される。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、雲母、砂粒 灰黄褐色 普通	P63、90%　PL15 赤褐部底面上 外面スス付着 頸部最小径右 端・胴部最大径の下約2糎。内面赤部十位から口縁部に黒褐色のシミ
3	広口壺 弥生土器	A 12.8 B 21.3 C 6.4 H 11.9 I 17.0	頸部から口縁部一部欠損。口唇部には、縄文が施される。口縁部は複合口縁で、附加条二種（附加1条）の縄文が施され心帯る。段の下には、棒状工具による刺突がある。頸部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施される。頸部下半の胴部との境には粘文帯があり、胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施される。	長石、石英、雲母、砂粒、 にぶい黄橙 普通	P64、70%　PL15 赤褐部底面上 外面スス付着。頸部・胴部最大径の下部に擦痕。内面胴部から口縁部に黒褐色のシミあり。
4	広口壺 弥生土器	B 27.0 C 9.3 I 28.2	頸部から口縁部欠損。頸部は、3条を単位に4分割され、縦区画入には、櫛歯状工具による波状文が施される。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。底部には石目痕がある。	長石、石英、雲母、砂粒、 にぶい橙 普通	P60、80%　PL16 赤褐部底面上 外面スス付着
5	壺 弥生土器	B (42.3) E 17.2 I [29.4]	胴部から頸部下、頸部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、隆帯が2条巡る。隆帯上には、指頭による押圧がある。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、砂粒、 パミス にぶい黄橙 普通	P55、40%　PL16 西部覆土下層
6	広口壺 弥生土器	B (20.0) I [28.2]	頸部から胴部下半部片。頸部から胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、砂粒、 小礫、 パミス にぶい黄橙 普通	P57A、20%　PL16 北部覆土下層 内面剥離
7	壺 弥生土器	B (27.0) I [28.2]	胴部下半部片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、雲母、砂粒、小礫、スコリア にぶい黄橙 普通	P57B、35%　PL16 内面剥離
第34図 8	大形壺 弥生土器	B (37.7) I [29.2]	胴部から頸部片。胴部から頸部は「く」の字状に立ち上がる。頸部には、櫛歯状工具による波状文が施される。胴部には、附加条二種（附加12条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、砂粒、 小礫、パミス 橙 普通	P56、60%　PL17 北西隅覆土下層 内面下半に黒色のシミ
9	壺 弥生土器	B (23.1) C 5.8	底部から胴部下半部片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。底部には石目痕がある。	長石、石英、雲母、砂粒、スコリア にぶい橙 普通	P58、40%　PL17 北東～南西隅覆面上 外面スス付着
10	壺 弥生土器	B (15.0) C 8.9	底部から胴部下半部片。胴部には附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。底部には石目痕がある。	長石、石英、雲母、砂粒、パミス にぶい黄橙 普通	P61、30%　PL18 南東隅覆面上 外面スス付着
11	壺 弥生土器	B (12.3) C 8.0	底部から胴部下半部片。胴部には附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石、石英、雲母、砂粒、小礫 にぶい黄橙 普通	P62、20%　PL16 南東隅覆面上 外面スス付着
12	壺 弥生土器	B (8.0) C 6.8	底部から胴部下半部片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。底部には、布目痕がある。	長石、石英、雲母、砂粒 橙 普通	P55、20%　PL16 外面スス付着 南部覆面上 東部一部焼成
13	高坏 弥生土器	A [10.3] D (3.9)	坏部片。坏部は外傾して立ち上がる。外面には櫛歯状工具による横押文が施され、その下に、竹管による刺突文が施される。	長石、石英、雲母、砂粒 針状 黒味 にぶい黄橙 普通	P180、30%　PL17 覆土中
14	高坏 弥生土器	D [7.5] E (3.2)	脚部。脚部は「ハ」の字状に広がる。外面に指頭痕がある。	長石、石英 にぶい黄橙 普通	P181、10%　PL17 南部覆土中

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第24図 15	ミニチュア土器 弥生土器	A[11.0] B(2.5)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。内面ナデ。	長石、石英、雲母にぶい橙 普通	P182、5層 PL17 南部腐土中

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
第35図 29	紡錘車	4.4	(2.3)	2.0	—	(17.6)	40	貯蔵穴覆土中	DP12 PL27

図版番号	種別	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
第35図 29	砥石	13.4	7.2	6.5	744.4	100	砂岩	西東部床面	Q15 PL32
30	石核	5.3	4.3	4.2	107.2	100	黒曜石	覆土中	Q16 PL32

図版番号	種別	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
第36図 31	鉄鏃	(3.8)	4.1	0.4	(5.7)	95	東部覆土上層	M27 PL35

第7号住居跡（第36図）

位置　調査区中央部，D1$_{59}$区。

規模と平面形　長軸4.81m，短軸4.38mの隅丸長方形である。

主軸方向　N－52°－W

壁　壁高は41cm～50cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，炉の周囲から北東壁際にかけてと，出入り口ピットの周囲が踏み固められ硬化している。

ピット　13か所（P_1～P_{13}）。P_1～P_4は長径33～52cm，短径27～46cmの楕円形で，深さが47～85cmの主柱穴と思われる。P_1・P_2の長径方向は住居跡の主軸方向に対して直角である。P_5は長径35cm，短径25cmの楕円形で，深さ45cmの出入り口施設に伴うピットと思われる。P_6～P_{13}は長径19～33cm，短径18～24cmの円形及び楕円形で，深さ28～46cmの壁柱穴と思われる。P_{13}はP_3の北東壁側にあり，直径23cmの円形で，深さ36cmの補助柱穴と思われる。

貯蔵穴　1か所。P_8の南側，南東壁際に設置され，平面形は長径57cm，短径46cmの楕円形で，床面を18cm程掘り込んでいる。底面は皿状で，壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

炉　中央部から北西寄りに位置し，長径130cm，短径93cmの不整楕円形で，床面を15cm程掘り窪めている。上面は撹乱されているため，覆土は，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量，炭化物微量を含む黒褐色土の1層しか確認されなかった。炉床は，火熱を受け赤変硬化している。

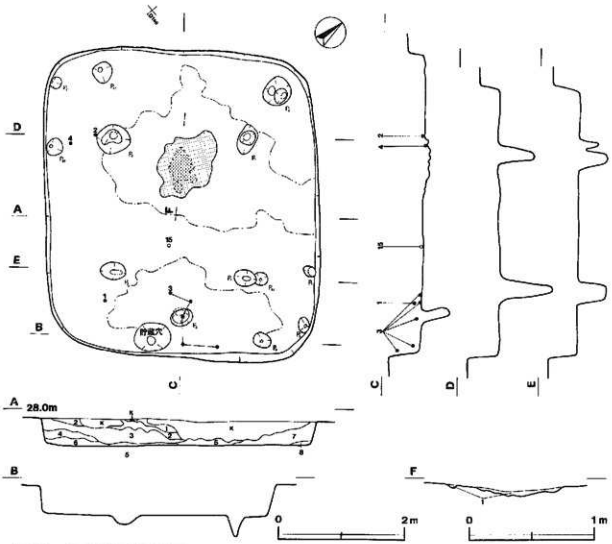
覆土　8層からなる。中央部から北部にかけて，床面直上まで達する大きな撹乱があり，正確には層位の線框はつかめない。壁際の覆土には，ロームブロックを含む黒褐色土がレンズ状に堆積していることから自然堆積であると思われる。

土層解説

1 黒　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化物・炭化粒子微量
2 黒 褐 色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子少量，ローム中ブロック・炭化粒子多量
3 暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック・炭化物少量，焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック少量，ローム大ブロック・炭化物微量
5 黒 褐 色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム大・中ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
6 黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
7 褐　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック中量，焼土中・小ブロック・焼土粒子少量，炭化物・炭化粒子微量
8 暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック少量，炭化物微量

遺物　弥生土器片が約380点出土している。ほとんどが胴部の細片で，口縁部・底部は微量である。第37図1～4は弥生土器壺で，1の口縁部片は南側から，3の胴部から底部片は西東部の覆土下層から出土している。2の胴部から底部片は，西部床面直上から押しつぶされた状態で出土している。4の台付壺は，西西壁際床面直上から横位で出土している。15は紡錘車で，中央部床面直上から出土している。

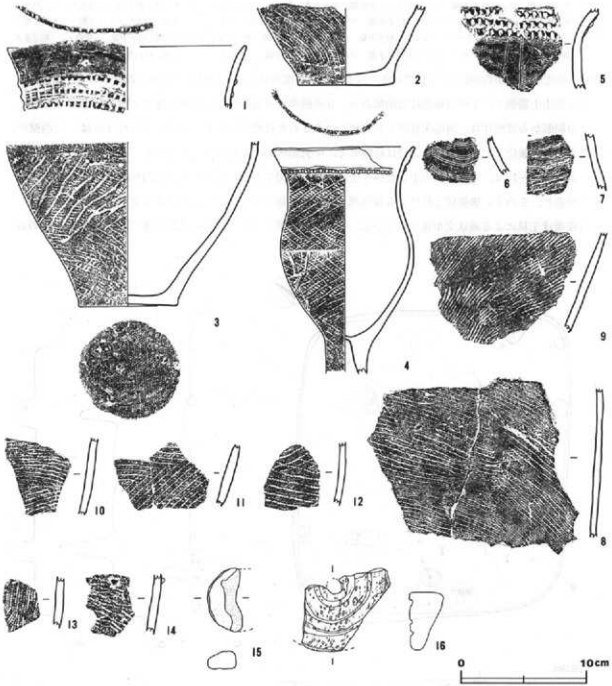
第37図5～14は，本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。5・6・7は頸部片で，5には3条の隆帯が巡り，その下に櫛描状工具による縦区画・波状文が施されている。6には連弧文が施されている。7には櫛描状工具による波状文が施されている。8～14は胴部片で，8～12には刺加条二種（附加1条）の縄文



第36図　第7号住居跡実測図

が施されている。13には附加条一種（附加２条）の縄文が施されている。14には附加条二種（附加１条）の縄文が施され，粒状の貼瘤が付く。

所見　本跡の時期は，出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。



第37図　第７号住居跡出土遺物実測・拓影図

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第37図 1	広口壺 弥生土器	A (19.0) B (5.0)	口縁部片。口頸部には、ヘラ状工具による刻みがある。口縁部は無文で、頸部との境には、3条の隆帯が巡り、櫛状工具による押圧がある。	長石、石英、砂粒、小礫 にぶい黄橙 普通	P66, 5% PL17 南37層土下層
2	甕 弥生土器	B (6.4) C 7.7	底部から胴部下半部片。調整には、附加条一種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、砂粒、パミス にぶい黄橙 普通	P68, 15% PL17 西部床面直上 外面スス付着
3	壺 弥生土器	B (13.0) C 7.9	底部から胴部下半部片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。底部には布目痕がある。	長石、石英、砂粒、小礫、スコリア にぶい橙 普通	P67, 20% PL18 東東部堆土下層
4	台付壺 弥生土器	A 11.4 B (18.0) E (2.5) H 9.0 I 10.6	台部、口縁部—頸次指。口頸部には、縄文が施される。口縁部は無文で、短脚との境には、隆帯が1条巡り、縄文原体を施し脚部としている。脚部から胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、砂粒 にぶい黄橙 普通	P69, 70% PL18 南西壁際床面上 外位スス付着

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(cm)	重量(g)	残存率(%)	出土地点	備考
第37図 15	砥石	5.0	(2.7)	1.4		(18.7)	40	中央部床面直上	⑤P13 PL27

図版番号	種別	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	残存率(%)	石質	出土地点	備考
第37図 16	不明石製品	(3.5)	(3.3)	1.3	(2.2)	—	軽石	覆土中	Q17 PL32

第10号住居跡（第38図）

位置　調査区北東部，B4go区。

規模と平面形　長軸（2.58）m，短軸5.02mで，住居跡の南部は調査区外のため，平面形は不明である。

主軸方向　N－24°－W

壁　壁高は48～54cmで，わずかに外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，軟弱なロームで炉の周辺にやや硬化した面がある。

ピット　13か所（P　～P_{13}）。P_1とP_2は長径43～48cm，短径約39cmの楕円形で，深さが77cmの土柱穴と思われる。P_4～P_{10}は直径16～33cm，短径13～22cmの円形及び楕円形で，深さ28～46cmの壁柱穴と思われる。P_3は長径82cm，短径55cmの不整楕円形で，深さ25～27cmであるが，性格は不明である。

炉　P_1とP_2の間より南に位置し，長軸87cm，短軸（43）cmで南部は調査区外のため，平面形は不明である。

床　面を15cm程掘り窪めている。炉床は，火熱を受け赤変硬化している。覆土は2層で，焼土粒子・小ブロックを含んだ極暗褐色土である。

覆土　上層にはローム・焼土を含む黒褐色土が堆積し，下層にはロームを多量に含む暗褐色土がレンズ状に堆積する7層からなる自然堆積である。

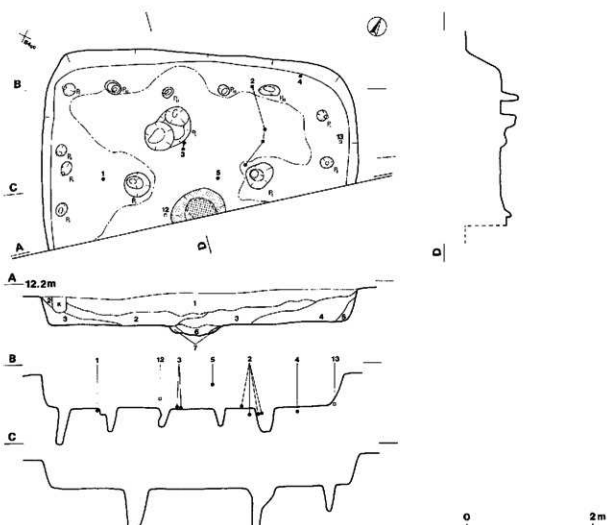
土層解説
1　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・白色粒子少量
2　黒紫色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，白色粒子微量

3　暗 褐 色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼沼パミス粒子少量，ローム中ブロック少量，ローム大ブロック・粘土粒子・炭化物・焼化粒子微量
4　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック少量，粘土粒子・炭化物・炭化粒子微量
5　褐　　色　ローム大・中・小ブロック・粒子多量，炭化物微量
6　極暗褐色　ローム粒子・粘土粒子中量，ローム中・小ブロック・焼土小ブロック・炭化物・焼沼パミス小ブロック少量
7　極暗褐色　ローム粒子中量，ローム大・中・小ブロック少量，焼土粒子微量　※6・7層は炉の覆土

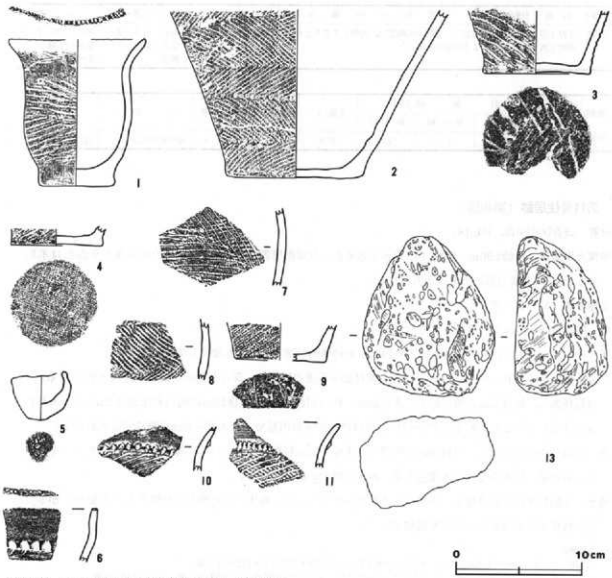
遺物　弥生土器片約250点が出土している。胴部の細片が多量で口縁部は少量である。第39図1～4は弥生上器壺で，1の小形壺は，南西部床面直上から横位で出土している。2～4の胴部から底部片は，2が北部，3が中央部，4が北隅の床面直上から出土している。5の手捏土器は，中央部覆土中層から正位で出土している。

第39図6～11は，本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。6・10・11は口縁部から頸部片で，6は複合口縁で，段の下には指頭による押圧がある。10の口縁部は無文で，頸部との境に隆帯が巡り，縄文原体による押圧がある。7・8は胴部片で，7には附加条二種（附加1条），8には附加条一種（附加2条）の縄文が施され，羽状構成をとっている。9は底部片で，外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施され，底部には木葉痕がある。

所見　本跡の時期は，出土遺物から弥生時代後半と思われる。



第38図　第10号住居跡実測図



第39図　第10号住居跡出土遺物実測・拓影図

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第39図 1	小形壺 弥生土器	A[10.9] B 11.8 C 5.9	口縁部一部欠損。口唇部にはヘラ状工具による刻みがある。口縁部は無文で，胴部には，附加条二種（附加1条）の縄文が施され，羽状構成をとる。	長石，石英，砂粒 明赤褐色 普通	P7，90% PL18 外面スス付着 南西部床面直上
2	壺 弥生土器	B (13.5) C 10.9	底部から胴部下半部片。平底で，底部から胴部は外傾して立ち上がる。胴部には，附加条一種（附加2条）の縄文が施され，羽状構成をとる。	長石，石英，砂粒，小礫，パミス 橙 普通	P74，30% PL18 内面剥離 北東部床面直上
3	壺 弥生土器	B (13.5) C 10.9	底部から胴部下半部片。平底で，底部から胴部は外傾して立ち上がる。胴部には，附加条二種（附加1条）の縄文が施される。底部には木葉痕がある。	長石，石英，砂粒 褐色 普通	P75，10% PL18 中央部床面直上 外面スス付着
4	壺 弥生土器	B (1.6) C 7.3	底部片。平底で，胴部は外傾して立ち上がるものと思われる。胴部には附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。底部には布目痕がある。	長石，石英，砂粒，パミス，にぶい黄褐色 普通	P76，5% PL18 北東隅床面直上

隅丸番号	器種	出土層位(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第30図 5	手捏土器 粘土土器	A 4.3 B 3.8	丸底で，底部から胴部は，内弯して立ち上がる。口縁部内面に指頭による圧痕がある。	長石，石英，雲母，にぶい黄橙 普通	P78，100%　PL18 底部胴圧痕 中央部覆土中層

隅番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	残存率(%)	石質	出土地点	備考
第30図 12	水明石器	6.4	5.4	3.7	(27.9)		頁岩	東部壁際内面	Q20　P1.32

第11号住居跡（第40図）

位置　調査区中央部，B4$_{7}$区。

規模と平面形　長軸4.96m，短軸（4.17）mであるが，北東部壁際が調査区外であるため正確な平面形は不明であるが，「隅丸長方形」であると思われる。

主軸方向　N－44°－W

壁　壁高は48～61cmで，垂直に立ち上がる。

床　平坦なローム で，炉の周囲と出入り口ピットの周囲が踏み固められ硬化している。

ピット　19か所（P$_{1}$～P$_{19}$）。P$_{1}$～P$_{4}$は直径20cm前後の円形で，深さが40cm前後の主柱穴と思われる。P$_{5}$は長径20cm，短径15cmの楕円形で，深さ30cm，P$_{6}$は長径15cm，短径10cmの楕円形で深さ25cmの出入り口施設に伴うピットと思われる。P$_{7}$～P$_{19}$は直径15～30cmの円形で，深さ25～30cmの壁柱穴と思われる。

炉　ほぼ中央部に位置し，直径90cmの円形で，床面を15cm程掘り窪めている。覆土は1層で，焼土，炭化物，ロームの他，灰を少量含む黒褐色土で，炉床は焼土の遺存が少ない。

覆土　上層に黒色土が堆積し，中層から下層にかけてローム，焼土，炭化物を含む黒色土と黒褐色土がレンズ状に堆積する6層からなる自然堆積である。

土層解説

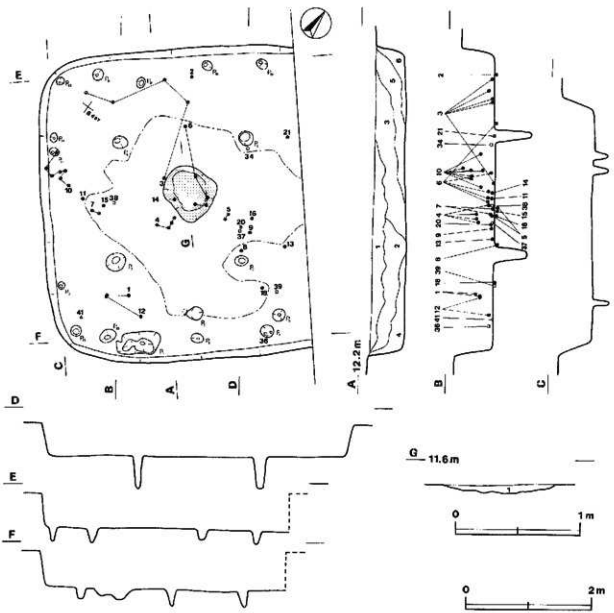
1　黒　　色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・白色粒子少量
2　黒 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・白色粒子少量，スコリア粒子微量
3　暗褐褐色　白色粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子・スコリア粒子微量
4　黒　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・炭化物少量，ローム中ブロック・焼土粒子・スコリア粒子・白色粒子微量
5　黒 褐 色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子・白色粒子中量，ローム中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量，ローム大ブロック・焼土中ブロック・スコリア粒子微量
6　暗褐褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・スコリア粒子・白色粒子少量，ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子微量

遺物　弥生土器片が約1300点出土しているが，胴部細片が多量で，他の部位は少量である。第41図1～4・第42図5～17・第43図18～21は弥生土器壺で，1・10の口縁部から胴部片は，1が南部覆土中層から押しつぶされた状態で，10が南西壁際覆土中層から出土している。18の胴部下半部から底部は，東部床面直上から逆位で出土している。2の中形広口壺は完形で，北西壁際床面直上から横位で出土している。3・4の口縁部から胴部片は，3が西部覆土下層から出土している。4は中央部覆土中層から出土している。5～7の広口壺口縁部から頸部片は，5・6が中央部覆土下層から，7が南西部床面直上から出土している。8の小形壺は東部床面直上から出土し，10の壺は西部壁際中層からつぶれた状態で出土している。18の底部は東部床面から逆位で出土している。

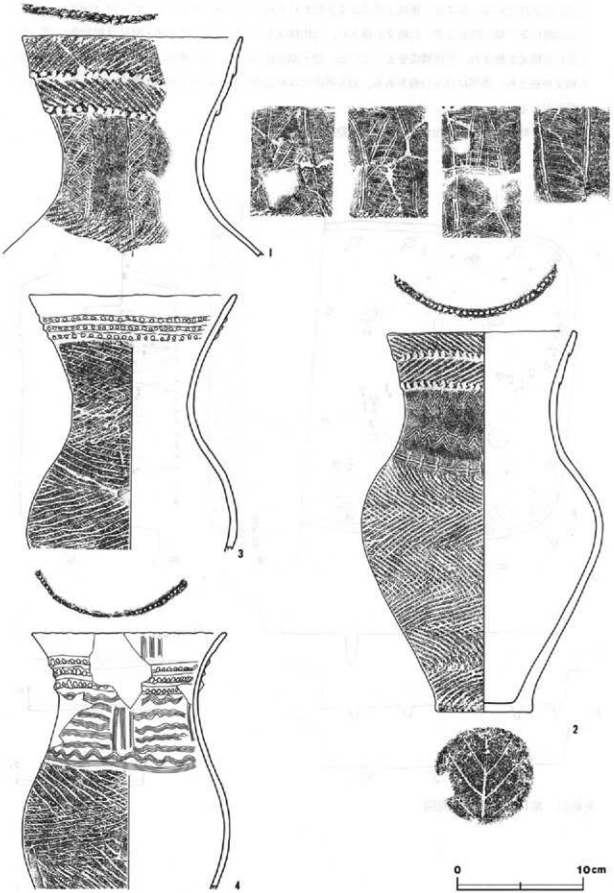
第43図22～33は，本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。22・23・24は口縁部片で，22は口縁部の無文帯を櫛歯状工具により縦区画している。23・24は口唇部に縄文が施され，口縁部が無文で その下に隆帯が巡る。24の頸部には，粗い附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。25・26は頸部片で，25には連

弧文が施されている。26には，棒状工具によると思われる刺突文が施されている。27～31は底部片で，27・29には附加条一種（附加２条）の縄文が施され，羽状構成をとっている。28・30・31には附加条二種（附加１条）の縄文が施され，羽状構成をとっている。32・33は底部片で，33の外面には附加条二種（附加１条）の縄文が施され，底部には布目痕がある。32の外面には附加条一種（附加２条）の縄文が施され，底部には木葉痕がある。

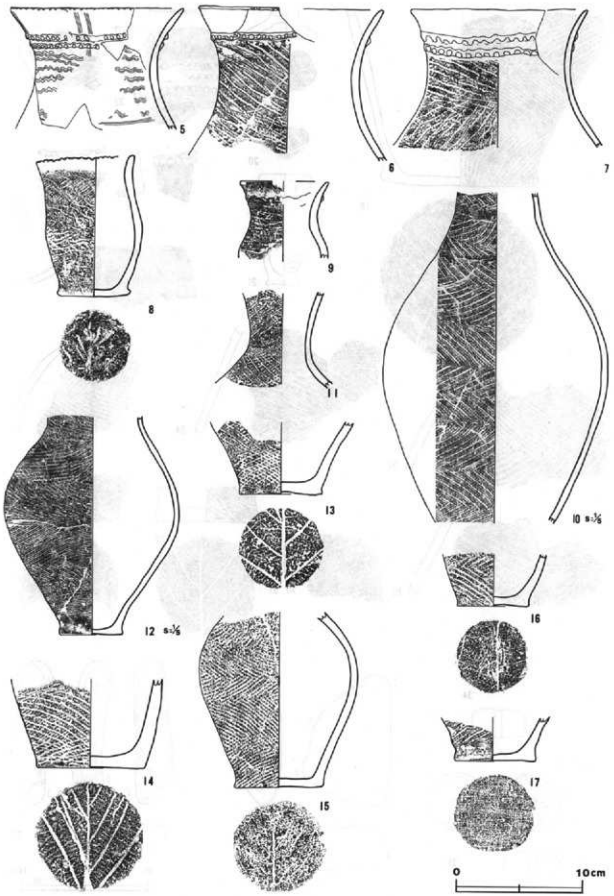
所見　本跡の時期は，出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。



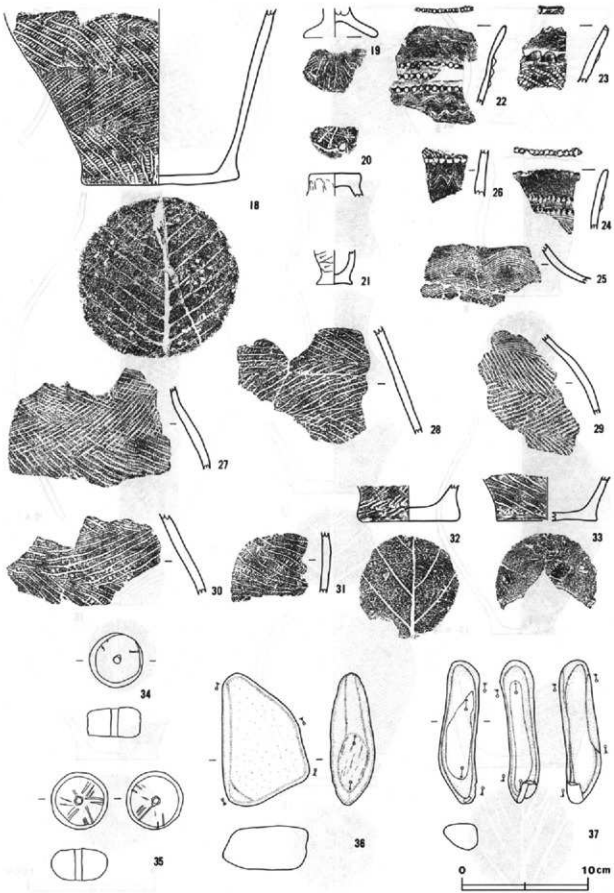
第40図　第11号住居跡実測図



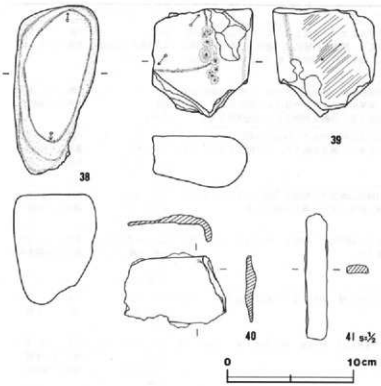
第41図　第11号住居跡出土遺物実測図（1）



第42図　第11号住居跡出土遺物実測図（2）



第43図　第11号住居跡出土遺物実測・拓影図図（3）



第44図　第11号住居跡出土遺物実測図（4）

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第41図 1	広口壺 弥生土器	A 17.5 B (17.5) H 11.3	胴部上端から口縁部。口唇部には，縄文原体による押圧がある。口縁部は2段の複合口縁で，附加条一種（附加2条）の縄文が施され，段の下端には縄文原体による刻突がある。頸部は，ヘラ状工具により6区画され，幅の狭い区画内には，格子状文と横走文が不規則に並んでいる。胴部には，附加条一種（附加2条）の縄文が施される。	長石，石英，雲母，砂粒 赤褐色 普通	P79，20%　PL19 南部覆土中層
2	中形広口壺 弥生土器	A 15.2 B 30.4 C 7.8 H 12.2 I 19.3	口唇部には，棒状工具による押圧がある。2段の複合口縁で，附加条一種（附加2条）の縄文が施され，段の下端には，縄文原体による押圧がある。頸部には，櫛歯状工具による波状文が2条施され，胴部との境には，簾状文が施される。胴部には，附加条一種（附加2条）の縄文が施され，羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石，石英，砂粒，小礫 にぶい褐色 普通	P82，95%　PL19 外面スス付着 北西壁際床面直上 外面胴部最大径の直下一部摩滅 内面に黒褐色のシミ
3	広口壺 弥生土器	A 16.5 B (20.2)	胴部上半から口縁部片。口唇部には縄文が施される。口縁部は無文で，頸部との境に，隆帯が3条巡り，指頭と思われる押圧がある。頸部から胴部には，附加条二種（附加1条）の縄文が施され，羽状構成をとる。	長石，石英，雲母，砂粒 にぶい褐色 普通	P83，30%　PL20 外面スス付着 西部覆土下層
4	広口壺 弥生土器	A [15.5] B (20.5)	胴部上半から口縁部片。口唇部には，棒状工具による押圧がある。口縁部は，櫛歯状工具により，3条を単位に区画される。頸部との境には，3条の隆帯が巡り，棒状工具による押圧がある。頸部の上下端には波状文が1条巡り，縦区画は3条を単位に5分割され，区画内には，櫛歯状工具による波状文が施される。胴部との境には，横走文が施され，胴部には，附加条二種（附加1条）の縄文が施され，羽状構成をとる。	長石，石英，砂粒 にぶい橙 普通	P84，30%　PL20 中央部覆土中層 外面スス付着 内面に黒褐色のシミ
5	広口壺 弥生土器	A [13.9] B (9.6)	頸部から口縁部片。口唇部には，棒状工具による押圧がある。口縁部から頸部は3条を単位に分割される。頸部との境には，2条の隆帯が巡り，棒状工具による押圧がある。頸部の区画内には，櫛歯状工具による波状文が施されている。	長石，石英，雲母，砂粒 にぶい褐色 普通	P86，15%　PL19 外面剥離 中央部床面直上

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第42図 6	広口壺 弥生土器	A [12.0] B (11.5)	頸部から口縁部片。口縁部には、ヘラ状工具による貝殻刺みがある。口縁部外面は無文で、頸部との境には、隆帯が1条巡り、縄文原体による押圧がある。頸部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、パミス 赤褐黒褐色 新鮮 普通	P87, 15% PL.19 中央部表面 下層
7	広口壺 弥生土器	A [14.0] B (10.2)	頸部から口縁部片。口唇部には、縄文が施される。口縁部外面は無文で、頸部との境には、隆帯が2条巡り、指頭による押圧がある。頸部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、雲母、砂粒 にぶい黄褐色 普通	P88, 15% PL.19 南西部表面直上
8	小形壺 弥生土器	A 7.9 B 11.5 C 5.8	口縁部には、棒状工具による押圧がある。口縁から胴部にかけては、粗い附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石、石英、雲母、小礫、砂粒 にぶい黄褐色 普通	P100, 70% PL.19 東南部表面直上 外面スス付着
9	小型壺 弥生土器	A (7.1) B (6.1)	頸部から口縁部片。口縁部は無文で、頸部との境に隆帯が1条巡る。頸部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施される。	長石、石英 にぶい黄橙 普通	P96, 5% PL.21 東端覆土 下層
10	大形壺 弥生土器	B (44.0) I 80.0	胴部から頸部片。頸部から胴部に、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、雲母、砂粒、小礫、パミス 橙 普通	P80, 40% PL.20 南西部表面 覆土中層
11	広口壺 弥生土器	B (7.6)	頸部片。頸部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英 にぶい黄橙 普通	P97, 30% PL.19 南西部表面直上
12	広口壺 弥生土器	H (29.0) C 8.3 I 23.2	頸部から口縁部欠損。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、雲母、砂粒 にぶい褐色 普通	P92, 75% PL.20 南部覆土下層 外面に黒褐色のシミ
13	壺 弥生土器	B (5.7) C 6.7	底部から胴部片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石、石英、パミス 褐色 普通	P98, 10% PL.20 東端表面直上
14	壺 弥生土器	B (7.1) C 8.1	底部から胴部下半部片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石、石英、砂粒 にぶい赤褐色 普通	P98, 15% PL.20 中央部表面直上 外面スス付着
15	広口壺 弥生土器	D (14.0) C 7.1	頸部から口縁部欠損。胴部には、羽状条一種（附加12条）の縄文が施され、羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石、石英、雲母、小礫、砂粒 にぶい黄褐色 普通	P98, 60% PL.20 南西部表面直上 外面スス付着
16	壺 弥生土器	B (4.1) C 3.7	底部から胴部片。胴部には、附加条一種（附加2条）の縄文が施され る。底部には木葉痕がある。	長石、石英、砂粒 にぶい黄褐色 普通	P100, 10% PL.21 東南部表面直上
17	壺 弥生土器	B (3.5) C 6.4	底部片。外面には、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。底部には布目痕がある。	長石、石英、雲母 褐色 普通	P101, 15% PL.21 覆土中
第43図 18	大形壺 弥生土器	B (24.0) C 12.5	底部から胴部下半部。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石、石英、雲母、小礫 にぶい黄橙 普通上	P81, 20% PL.21 南西スス付着 東部環状遺
19	鳥形 弥生土器	D [6.0] E (2.5)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に広がる。脚部には、縄文が施される。	長石、石英、砂粒 にぶい橙 普通	P104, 20% PL.21 覆土中
20	蓋 弥生土器	F [4.7] G (1.9)	つまみ部片。上面には木葉痕がある。つまみ部には、指頭圧痕があり、彫刻状工具により、描文される。	長石、石英、雲母、砂粒 にぶい黄橙 普通	P105, 10% PL.21 東部覆土 下層 底部の中央部生存
21	ミニチュア土器 弥生土器	B (2.8) C 2.8	底部から胴部片。胴部外面は、ヘラ削り。	長石、石英、雲母 にぶい黄褐色 普通	P105, 40% PL.21 上部東南部上

遺物番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
第43図 34	紡錘車	4.5	4.3	1.4	6.0	49.7	100	北側床面直上	D P15 P.27
35	紡錘車	4.5	4.7	2.6	6.0	57.5	100	覆土上層	D P16 P.27

遺物番号	種別	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
第44図36	磨石	10.6	6.9	3.5	340.3	100	砂岩	南東半部床面上	Q23 PL.33
37	磨石	11.4	3.3	2.1	127.0	100	砂岩	炉跡東部床面直上	Q24
第44図38	磨石	(13.0)	6.6	8.8	(1093.5)	−	砂岩	南西部床面直上	Q22 PL.32
39	凹石	(14.5)	(13.9)	6.8	(1923.1)		砂岩	東部床面直上	Q25 PL.33

遺物番号	種別	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
第45図40	針状	(5.4)	4.0	0.5	(22.0)	10	覆土中	M28 PL.35
41	不明鉄製品	6.6	1.2	0.5	(14.6)	−	南西壁際床面	M29 PL.35

第12号住居跡（第45図）

位置　調査区南西部斜面，C3$_{50}$区。

重複関係　第76号土坑が本跡の南部壁を掘り込み，第77号土坑が炉跡の東部床面を，第78号土坑が南西部の壁から床面を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸5.80m，短軸4.53mの隅丸長方形である。

主軸方向　N－22°E

壁　本跡は，傾斜地で確認されており，壁高は北部で20cm，南部で85cmであり，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが，小さな凹凸があり，南東部の出入り口ピットの付近が踏み固められ硬化している。

ピット　34か所（P_1～P_{34}）。P_1～P_4は長径40～47cm，短径32～34cmの楕円形で，深さが52～65cmの主柱穴と思われる。P_5は長径41cm，短径32cmの楕円形で，深さ48cmの出入り口施設に伴うピットと思われるが，壁に近いこと，壁高が高いところにあることから梯子状の構造物があったものと思われる。P_6～P_9は直径19～24cmの円形及び不整楕円形で，深さ35～40cmの補助柱穴と思われる。P_{10}～P_{34}は，P_{11}以外は壁際に不規則に配置され，直径13～25cmの円形で，深さ10～46cmの壁柱穴と思われる。P_{11}は直径20cmの円形で，深さ15cmであるが性格は不明である。

炉　中央部から北西寄りにあり，長径100cm，短径90cmの楕円形で，床面を20cm程掘り窪めている。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

1 黒褐色　ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子多量，焼土中ブロック中量，ローム小ブロック・焼土大ブロック少量，ローム中ブロック微量
2 黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，ローム中ブロック少量，焼土中ブロック微量
3 黒褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子中量，ローム中ブロック・焼土小ブロック少量
4 暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

覆土　上層に黒色土が堆積し，中層から下層にかけてローム・焼土を含む暗褐色土がレンズ状に堆積する13層からなる自然堆積である。

土層解説

1 黒　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
2 黒　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
3 黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・焼土粒子微量
4 褐黒褐色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック少量，炭化粒子微量
5 暗褐色　ローム粒子多量，ローム大・中・小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6 暗褐色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量，焼土粒子微量
7 黒褐色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック・焼土粒子少量

8　極暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック十量，ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
9　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量
10　暗褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量
11　褐　色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量，ローム大ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
12　黒褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック十量，ローム中ブロック少量
13　黒褐色　焼土粒子多量，ローム粒子中量，炭化粒子少量

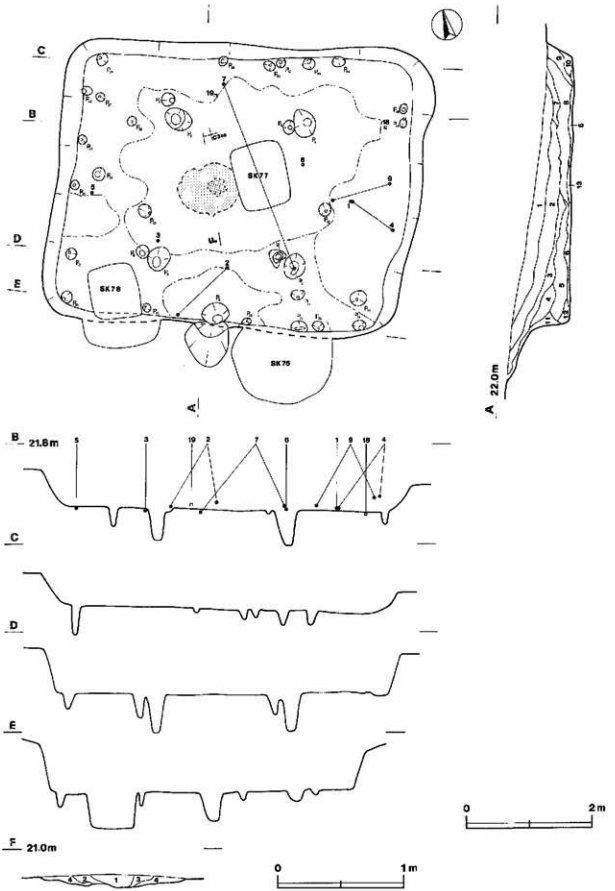
遺物　弥生土器片が約150点出土している。第46図1～9は弥生土器壺で，1～3は広口壺で，1の口縁部から胴部片は東部床面直上から出土している。2・3の口縁部から頸部片は，2が南部壁際，3が西部の床面直上から出土している。4の胴部片は南東壁際覆土下層から出土している。5～9は胴部から底部片で，5は南壁際床面直上からつぶれた状態で出土し，7は北部から南東部にかけての広範囲に散在して出土している。8は覆土中から，6は東部床面直上，9は東部覆土下層から出土している。

第47図の13～17は，本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。13は頸部片で，縦区画内に櫛歯状工具による波状文が施されている。14・15は頸部から胴部片で，14の頸部と胴部の境には簾状文が施され，胴部には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。16・17は胴部片で，16には附加条二種（附加1条），17には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。

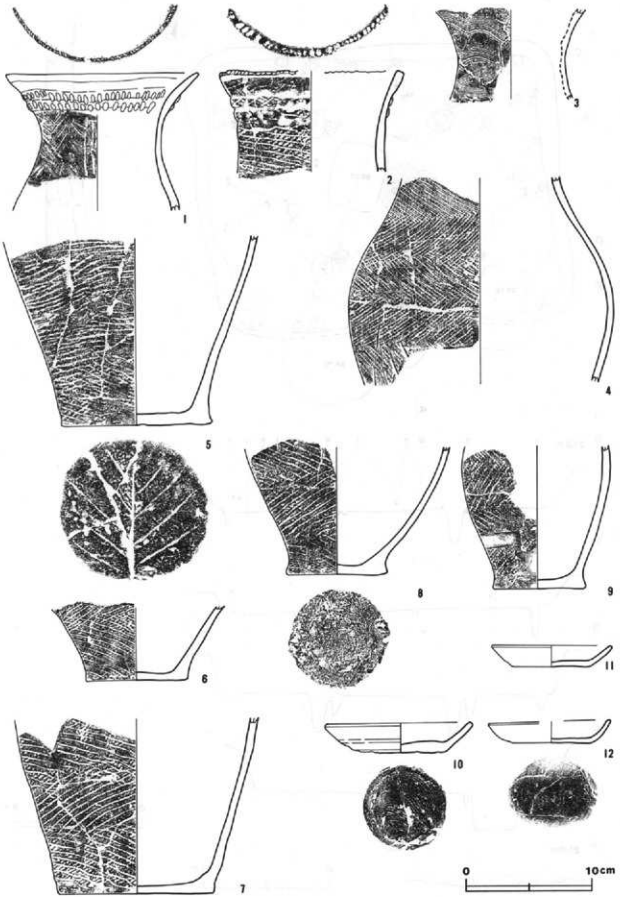
所見　本跡の時期は，出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

第12号住居跡出土遺物観察表

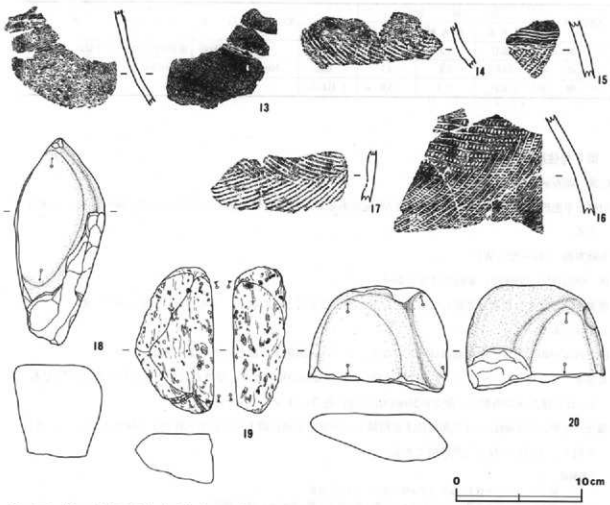
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第46図 1	広口壺 弥生土器	A 15.4 B (11.5) H 9.6	胴部上半から口縁部片。口唇部には，縄文が施される。口縁部は無文で，輪積痕がある。頸部との境には，2条の隆帯が巡り，隆帯上には，櫛状工具による押圧がある。頸部は，4条を単位に分割され，区画内には，櫛歯状工具による山形文が，狭い区画には1列，広い区画には2列，施されている。胴部との境には，櫛歯状工具による扶走文が施され，胴部には，附加条一種（所加2条）の縄文が施されている。	長石，石英，雲母，砂粒，炭化色 普通	P107，20%　PL.21 東部床面直上 内面に黒色のシミ
2	広口壺 弥生土器	A (14.7) C 8.0	頸部から口縁部片。二段の折り返しがある。縄文原体による押圧がある。口縁部は無文で，下端には隆帯が2条巡る。隆帯上には，櫛状による押圧があり，一緒に縄文が施される。頸部には，附加条二種（所加1条）の縄文が施されている。	長石，石英，雲母，砂粒 にぶい褐色 普通	P108，10%　PL.21 南東壁際覆土上層 外面スス付着
3	広口壺 弥生土器	H (7.0)	頸部片。頸部には，櫛歯状工具による連弧文が施される。	長石，石英，小礫 橙 普通	P109，5% 内面剥離 西部覆土下層
4	広口壺 弥生土器	H (16.4) I 21.2	胴部片。胴部には，附加条一種（附加2条）の縄文が施され，羽状構成をとる。	長石，石英，小礫，砂粒 にぶい黄橙 普通	P110，15%　PL.22 外面スス付着 南東壁際覆土下層
5	壺 弥生土器	B (14.9) C 12.0	底部から胴下半部片。胴部には，附加条一種（附加1条）の縄文が施され，羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石，石英，砂粒 にぶい黄橙 普通	P111，20%　PL.22 底部に木葉痕 西壁際覆土下層 外面スス付着
6	壺 弥生土器	H (6.8) C 8.2	底部から胴部片。胴部には，附加条二種（附加1条）の縄文が施され，羽状構成をとる。	長石，石英，雲母 にぶい黄橙 普通	P114，20%　PL.21 東部床面直上
7	壺 弥生土器	H (14.0) C 12.2	底部から胴下半部片。底部には，附加条二種（附加1条）の縄文が施され，羽状構成をとる。	長石，石英，雲母，砂粒 バイス，小礫 浅黄橙 普通	P113，20%　PL.22 北部から南東部
8	壺 弥生土器	H (10.0) C 8.0	底部から胴下半部片。胴部には，附加条二種（所加1条）の縄文が施され，羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石，石英，砂粒 にぶい黄橙色 普通	P112，20%　PL.21 覆土中



第45図　第12号住居跡実測図



第46図　第12号住居跡出土遺物実測図（1）



第47図　第12号住居跡出土遺物実測・拓影図（2）

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・色調・焼成	備　考
第46図 9	壺 弥生土器	B(11.4) C 7.4	底部から胴下半部片。胴部には，附加条一種（附加２条）の縄文が施され，羽状構成をとる。	長石，石英，砂粒 にぶい橙 普通	P115，20% P L22 東部覆土下層

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第46図 10	Ⅲ 土師質土器	A 11.8 B 2.4 C 6.6	口縁部一部欠損。平底で，底部から外傾して立ち上がる。	体部内外面横ナデ。底部回転糸切り。	長石，石英，雲母，パミス にぶい橙 普通	P116，80% P L22 覆土中
11	Ⅲ 土師質土器	A 9.1 B 1.7 C 6.2	口縁部，底部一部欠損。平底で，底部から外傾して立ち上がる。	体部内外面横ナデ。底部回転糸切り，ナデ整形。	長石，石英 にぶい橙 普通	P117，70% P L22 覆土中
12	Ⅲ 土師質土器	A[9.8] B 1.9 C 6.0	底部から口縁部片。平底で，底部から，内彎ぎみに立ち上がる。	体部内外面横ナデ。底部回転糸切り。	長石，石英，雲母 にぶい橙 普通	P118，40% P L22 覆土中

図版番号	種別	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	残存率(%)	石質	出土地点	備考
第47図 19	磨石	(16.4)	(7.2)	(7.4)	(1128.8)	－	硬質砂岩	東部整地層直上	Q26
19	敲石	11.6	6.2	4.1	63.2	100	軽石	北部灰白直上	Q27 PL.33
20	磨石	(8.3)	11.1	3.9	(413.5)	－	砂岩	覆土中	Q28 PL.33

第8号住居跡（第48図）

位置 調査区北東部，B4e区。

規模と平面形 長軸（3.98）m，短軸（2.53）mであるが，南西部が調査区外であるため正確な平面形は不明である。

主軸方向 ［N 22° W］

壁 壁高は5cm前後で，垂直に立ち上がる。

壁溝 確認された壁溝は連続しており，全周しているものと思われる。上幅15cm，下幅5cmで，断面は，「U」字状である。

床 ほぼ平坦である。硬化面はほとんどなく，ロームと黒色土の混じった貼床である。

ピット 2か所（P_1～P_2）。P_1は長径47cm，短径38cmの楕円形で，深さが12cmであるが性格は不明である。P_2は直径26cmの円形で，深さが25cmの出入り口施設に伴うピットと思われる。

覆土 上層から中層にかけて黒褐色土が堆積し，中央部下層に焼土を含む暗赤褐色土の層がある。レンズ状に堆積する8層からなる自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム・焼土・炭化粒子少量，鹿沼パミス粒子微量
2 黒褐色 焼土粒子中量，ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量，鹿沼パミス粒子微量
3 黒褐色 焼土・炭化粒子中量，ローム粒子・炭化物少量
4 黒色 炭化粒子中量，焼土粒子・炭化物少量，ローム粒子微量
5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼一粒子・鹿沼パミス粒子少量，焼土小ブロック・炭化物微量
6 暗赤褐色 焼土粒子多量，ローム粒子・焼土小ブロック中量，ローム中・小ブロック・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子・鹿沼パミス粒子少量，鹿沼パミス小ブロック微量
7 極暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・鹿沼パミス粒子少量，炭化粒子微量
8 黒褐色 ローム粒子・鹿沼パミス粒子多量，ローム小ブロック・鹿沼パミス小ブロック中量，ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス中ブロック少量

遺物 土師器片が8点，遺物包含層からの流れ込みと思われる弥生土器片，縄文土器片が約120点出土している。第48図1～3は土師器坏で，1は坏の口縁部から底部の破片で，2・3は坏の口縁部片で，いずれも中央部覆土下層から出土している。4の支脚は，中央部覆土下層から出土している。

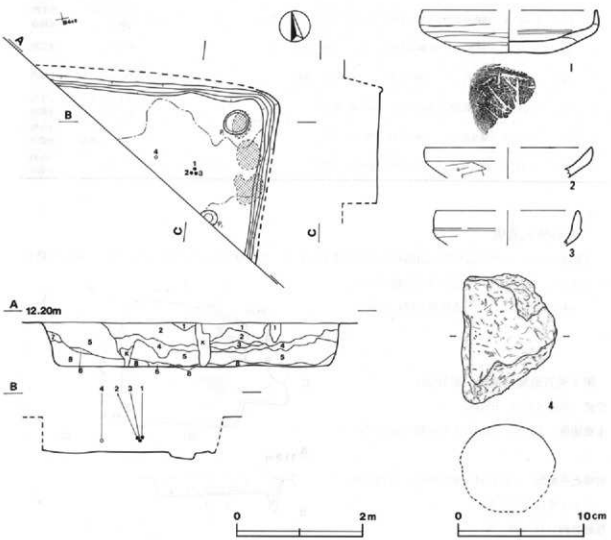
所見 本跡の時期は，出土遺物から古墳時代後期と思われる。

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48図 1	坏 土師器	A［15.8］ B 3.3 C［6.0］	底部から口縁部片。平底。底部から外反ぎみに立ち上がり，口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	体部外面，内面，ヘラ磨き。口縁部外面，内面，横ナデ。底部未調整。	長石，石英，雲母 にぶい黄色 普通	P70，25% P.1.17 三区覆土下層
2	坏 土師器	A［13.4］ B（2.2）	体部から口縁部片。体部から口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。	体部外面，ヘラ削り。口縁部内面横ナデ。内面黒色処理。	長石，雲母 灰褐色 普通	P71，5% P.1.17 中央部覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 3	坏 土師器	A[11.4] B(2.8)	体部から口縁部片。体部との境に稜をもち、口縁部は、ほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石、石英、雲母にぶい褐色 普通	P72、5% PL17 中央部覆土下層

図版番号	種別	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
第48図 4	支脚	(10.4)	(7.6)	(7.0)	(482.9)	—	覆土中	DP14、中央部覆土下層



第48図　第8号住居跡出土遺物実測図

表3　大畑遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模（m）（長軸×短軸）	壁高（cm）	床面	内部施設 壁溝	内部施設 主柱穴	内部施設 貯蔵穴	内部施設 ピット	出入口	炉 竈	覆土	出土遺物	備考
1	$C2_{g7}$	N-37°-W	隅丸長方形	4.48×4.0	6～54	平坦	－	4	－	8	1	炉	自然	弥生土器・紡錘車・敲石	弥生時代後期後半
2	$D3_{i3}$	[N-33°-E]	[隅丸方形]	5.60×(1.94)	34～54	平坦	－	－	－	－	－	－	自然	弥生土器	弥生時代後期後半
3	$D2_{i5}$	N-55°-E	隅丸方形	6.68×6.38	18～58	平坦	－	4	－	26	1	炉	自然	弥生土器・紡錘車・土製勾	弥生時代後期後半
4	$D2_{i3}$	N-43°-W	隅丸方形	6.72×6.12	48～64	平坦	－	4	－	21	1	炉	自然	弥生土器・紡錘車・炉石	弥生時代後期後半
5	$D1_{e0}$	N-19°-E	隅丸長方形	5.19×4.96	45～53	平坦	－	4	1	17	1	炉	自然	弥生土器・紡錘車	弥生時代後期後半
6	$D1_{e0}$	N-66°-W	隅丸長方形	6.10×5.32	44～55	平坦	－	4	－	15	1	炉	自然	弥生土器・鉄族・紡錘車	弥生時代後期後半
7	$D1_{b9}$	N-52°-W	隅丸長方形	4.81×4.38	41～50	平坦	－	4	－	9	1	炉	自然	弥生土器・紡錘車	弥生時代後期後半
8	$B4_{a8}$	N-22°-E	[隅丸方形]	(3.98)×(2.53)	55	平坦	[全周]	2	－	－	－	－	－	縄文土器	縄文時代
9	$B4_{a0}$	N-15°-W	楕円形	8.18×(7.65)	－	平坦	[全周]	－	－	18	－	－	自然	土師器	古墳時代
10	$B4_{a0}$	N-24°-W	[隅丸長方形]	(2.58)×5.02	48～54	平坦	－	2	－	11	－	炉	自然	弥生土器・手捏土器	弥生時代後期後半
11	$B4_{a7}$	N-44°-W	隅丸長方形	4.96×4.17	48～61	平坦	－	4	－	14	1	炉	自然	弥生土器・鉄鏃・紡錘車	弥生時代後期後半
12	$C3_{b5}$	N-22°-E	隅丸長方形	4.53×5.80	20～70	平坦	－	4	－	29	1	炉	自然	弥生土器	弥生時代後期後半

2　方形竪穴遺構

当遺跡からは，中世の方形竪穴遺構が4基検出されている。当初は土坑として扱っていたが，調査の結果，柱穴や出入り口施設等から方形竪穴遺構であることが確認された。以下，遺構番号順に記載する。

第1号方形竪穴遺構（第49図）

位置　調査区北部，$B3_{h}$区。

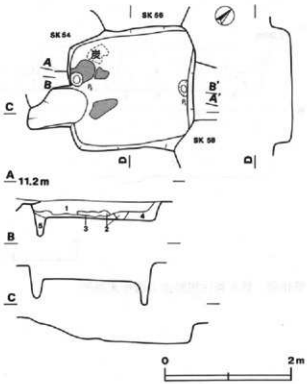
重複関係　本跡を，第54号土坑が掘り込んでいる。

規模と平面形　平面形は長軸2.68m，短軸1.99mの不整長方形である。

長軸方向　N－59°－W

出入り口施設　南壁中央部から南に向かって壁外に約65cm突出し，底面から確認面に至る長さ約80cm，幅65cmの緩傾斜面を持った出入り口を有している。斜面上は平坦で硬くしまっている。

壁　壁高30cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。



第49図　第1号方形竪穴遺構実測図

底面　平坦で硬くしまっている。西部から炭化材が散乱して出土している。

ピット　2か所（P_1～P_2）。P_1は長径23cm，短径19cmの楕円形で，深さが30cm，P_2は長径24cm，短径16cmの楕円形で，深さが35cmである。いずれも杜穴であると思われる。

覆土　5層からなる人為堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・焼土パミス少量，ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物微量
3　褐　色　ローム大・中ブロック・ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・粘土大ブロック少量
5　褐　色　ローム大ブロック・ローム粒子中量，ローム中・小ブロック・焼土粒子少量

所見　本跡は，出土遺物がなく不明な点があるが，形状から中世の方形竪穴遺構であると思われる。

第2号方形竪穴遺構（第50図）

位置　調査区北部，B3$_4$区。

重複関係　本跡は，第1号方形竪穴遺構に掘り込まれている。

規模と平面形　北西部が調査区外であるため正確な平面形は不明であるが，長軸2.09m，短軸（1.62）mの［長方形］と思われる。

長軸方向　N－45°－E

壁　壁高16cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　平坦で硬くしまっている。南東部の床面から炭化材が散乱して出土している。

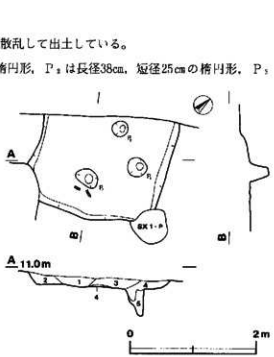
ピット　3か所（P_1～P_3）。P_1は長径32cm，短径30cmの楕円形，P_2は長径38cm，短径25cmの楕円形，P_3は長径22cm，短径19cmの楕円形である。いずれも深さが30cm前後の柱穴であると思われる。

覆土　5層からなる人為堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量
2　黒　褐　色　ローム大・中・小ブロック・ローム粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大・中ブロック・焼土粒子・炭化物微量
4　暗　褐　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化物少量，焼土粒子微量
5　明　褐　色　ローム大・中・小ブロック・ローム粒子少量

所見　本跡は，出土遺物がなく不明な点があるが，形状から中世の方形竪穴遺構であると思われる。



第50図　第2号方形竪穴遺構実測図

第3号方形竪穴遺構（第51図）

位置　調査区北部，A4$_4$区。

重複関係　本跡が，第63号土坑を掘り込んでいる。第4号方形竪穴遺構との重複関係は，第1号不明遺構に伴うピットにより攪乱され不明である。

規模と平面形　重複により正確な平面形は不明であるが，長軸2.83m，短軸（1.80）mの［長方形］と思われる。

長軸方向　N－44°－E

壁　壁高25cmで，外傾して立ち上がる。

底面　平坦で硬くしまっている。

ピット　2か所（P_1・P_2）。P_1は長径23cm，短径14cmの楕円形で，P_2は長径22cm，短径17cmの楕円形で，それぞれ深さが30cm程である。いずれも柱穴であると思われる

覆土　4層からなる人為堆積である。（第51図A土層図）

土層解説

1　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム大・中ブロック・炭化物・黒色土ブロック少量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック・黒色土ブロック・粘土ブロック・鹿沼パミス粒子少量，粘土粒子・黒色土大ブロック微量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，黒色土ブロック少量，粘土粒子・炭化物・鹿沼パミス粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム大・中・小ブロック中量，黒色土ブロック少量

遺物　覆土中から流れ込みと思われる弥生土器片が1点出土している。第52図1は，弥生土器片の拓影図である。壺の頸部で，縦区画内に波状文が施され，胴部との境に下向きの連弧文が施されている。

所見　本跡は，時期を特定できる出土遺物がなく不明な点があるが，形状から中世の方形竪穴遺構であると思われる。

第4号方形竪穴遺構（第51図）

位置　調査区北部，B4ee区。

重複関係　本跡が，第61号土坑を掘り込んでいる。第3号方形竪穴遺構との新旧関係は第1号不明遺構に伴うピットによる撹乱のため不明である。

規模と平面形　平面形は長軸2.50m，短軸1.87mの長方形である。

長軸方向　N　46°－E

壁　壁高20cmで，外傾して立ち上がる。

底面　平坦で硬くしまっている。

ピット　2か所（P_1・P_2）。P_1は長径43cm，短径36cmの楕円形で，深さが30cm，P_2は長径45cm，短径33cmの楕円形で，深さが33cmである。いずれも柱穴であると思われる。

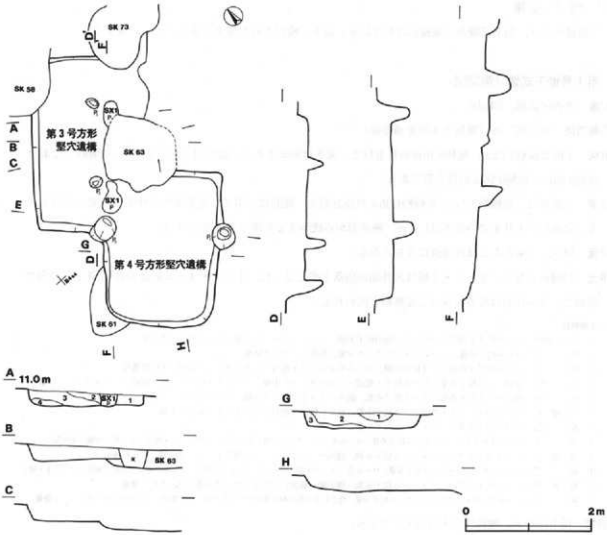
覆土　3層からなる人為堆積である。（第51図G土層図）

土層解説

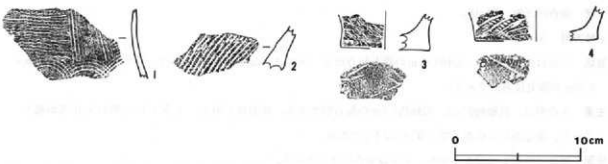
1　褐　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック・鹿沼パミス粒子中量，鹿沼パミス中ブロック少量，粘土粒子・炭化物・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム大・中ブロック中量，粘土粒子・炭化物・炭化粒子・鹿沼パミス粒子・スコリア微量
3　褐　色　ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量，粘土粒子・炭化物・鹿沼パミス粒子微量

遺物　覆土中から流れ込みと思われる弥生土器片が3点出土している。第52図2～4は弥生土器片の拓影図である。2は壺の胴部片で，附加条1種（附加2条）の縄文が施される。3・4は底部片で，附加条2種（附加1条）の状文が施され，底部には木葉痕がある。

所見　本跡は，時期を特定できる出土遺物がなく不明な点があるが，形状から中世の方形竪穴遺構であると思われる。



第51図　第3・4号方形竪穴遺構実測図



第52図　第3・4号方形竪穴遺構出土遺物拓影図

3　地下式壙

当遺跡からは，地下式壙が2基検出されている。以下，検出された地下式壙について記載する。

第1号地下式壙（第53図）

位置　調査区北部，B4$_{43}$区。

主軸方向　N－45°－W（竪坑と主室を通る線）

竪坑　上面は長軸1.02m，短軸0.76mの長方形で，深さは98cmである。底面は主室に向かって傾斜しており，長軸0.85m，短軸0.56mの長方形である。

主室　平面形は，長軸約3.2m，短軸約1.95mの長方形で，底面は平坦で，北東部の天井部の一部が残存している。底面から天井までの高さは1.12m，確認面から底面までの深さは1.3mである。

壁面　竪坑，主室ともにほぼ垂直に立ち上がる。

覆土　12層からなり，2・6・7層は天井部の崩落土層と見られ，1・3・4・5層は天井部崩落後の自然堆積層で，8～12層は埋め戻しによる堆積と思われる。

土層解説

1	にぶい褐	色	ローム粒子・鹿沼小ブロック・鹿沼粒子多量，ローム小ブロック・鹿沼大・中ブロック少量
2	褐	色	ローム粒子中量，ローム大・小ブロック少量，黒色土ブロック微量
3	褐	色	ローム粒子・鹿沼パミス粒子中量，ローム小ブロック・鹿沼パミス小ブロック少量，炭化物微量
4	褐	色	鹿沼パミス粒子多量，ローム粒子・鹿沼パミス小ブロック中量，ローム中・小ブロック・鹿沼パミス大ブロック少量
5	明 褐	色	鹿沼パミス粒子多量，ローム粒子中量，鹿沼パミス小ブロック少量，ローム小ブロック微量
6	明 褐	色	ローム小ブロック・鹿沼パミス粒子中量，ローム粒子・鹿沼パミス中・小ブロック少量
7	褐	色	ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
8	褐	色	ローム中・小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック・炭化物・鹿沼パミス小ブロック・鹿沼パミス粒子少量，微量
9	暗 褐	色	ローム中・小ブロック・ローム粒子多量，鹿沼パミス小ブロック・黒色土ブロック少量，炭化物微量
10	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック・鹿沼パミス中ブロック少量，鹿沼パミス粒子・微量
11	明 褐	色	ローム中・小ブロック・ローム粒子多量，礫少量，鹿沼パミス小ブロック・鹿沼パミス粒子微量
12	褐	色	ローム大・中・小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物・鹿沼パミス小ブロック・鹿沼パミス粒子・粘土小ブロック微量

遺物　覆土中から，陶器片が1点出土している。

所見　本跡は，時期を特定できる出土遺物がなく不明な点があるが，形状から中世の地下式壙と思われる。

第2号地下式壙（第53図）

位置　調査区北部，B3$_{56}$区。

主軸方向　N－27°－E

竪坑　上面は長軸1.33m，短軸0.87mの隅丸長方形で，深さは78cmである。底面は平坦で，長軸0.92m，短軸0.73mの隅丸長方形である。

主室　平面形は，長軸約2.5m，短軸約1.7mの長方形である。底面は平坦で，主室入り口部の天井部が残存している。確認面から底面までの深さは2.1mである。

壁面　竪坑は外傾して立ち上がり，主室は垂直に立ち上がる。

覆土　13層からなる人為堆積である。8・9層のロームブロックはハードロームである。10層は粘土層である。

土層解説

1	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック・炭化粒子少量，鹿沼パミス大・中ブロック微量
2	暗 褐	色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子・炭化物・黒色土ブロック・礫微量

3　黒　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子・炭化物微量
4　黒　褐　色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック少量，炭化粒子・白色粒子微量
5　黒　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・炭化粒子少量，ローム大・中ブロック・焼土粒子・礫微量
6　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム大・中ブロック・炭化粒子・礫少量，焼土粒子微量
7　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子・鹿沼パミス粒子・礫微量
8　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム大・中ブロック・炭化粒子・鹿沼パミス小ブロック微量
9　褐　色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量，ローム大ブロック・小礫少量，炭化物・炭化粒子・粘土大ブロック微量
10　橙　色　鹿沼パミス粒子多量，白色粒子少量
11　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム大・中ブロック中量，鹿沼パミス大・小ブロック・白色粒子少量，炭化物・粘土大ブロック微量
12　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・炭化粒子・鹿沼パミス粒子少量，ローム大ブロック・鹿沼パミス大ブロック微量
13　褐　色　ローム大・中・小ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス大ブロック・鹿沼パミス粒子多量，鹿沼パミス小ブロック中量，鹿沼パミス中ブロック・礫微量

所見　本跡は，出土遺物がなく不明な点があるが，形状から中世の地下式壙であると思われる。

第1号地下式壙出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第55図 1	鍋	B(7.6)	体部片。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。	炭内色 普通	P139，5% P L.22 覆土中

4　井　　戸

当遺跡からは，中・近世に構築された井戸が2基検出されている。以下，遺構番号順に記載する。

第1号井戸（第54図）

位置　調査区北部，A4$_{58}$区。

規模と形状　掘り方は，上面が径約4mの円形をしており，確認面から約2mの深さまでは擂鉢状に傾斜し，そこから下は円筒形をしている。

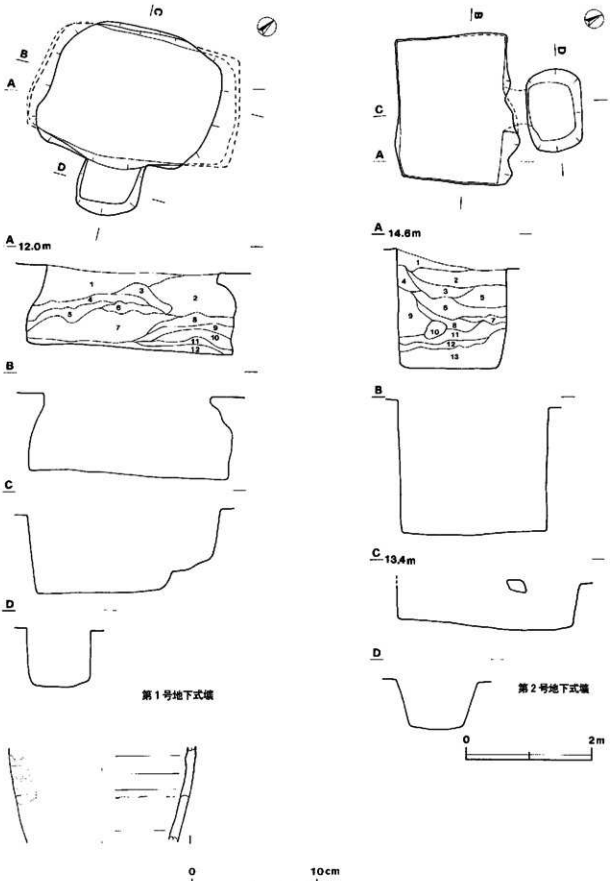
覆土　18層からなり，1～3層は自然堆積である。4～18層は，埋め戻しによると思われる人為堆積である。

土層解説

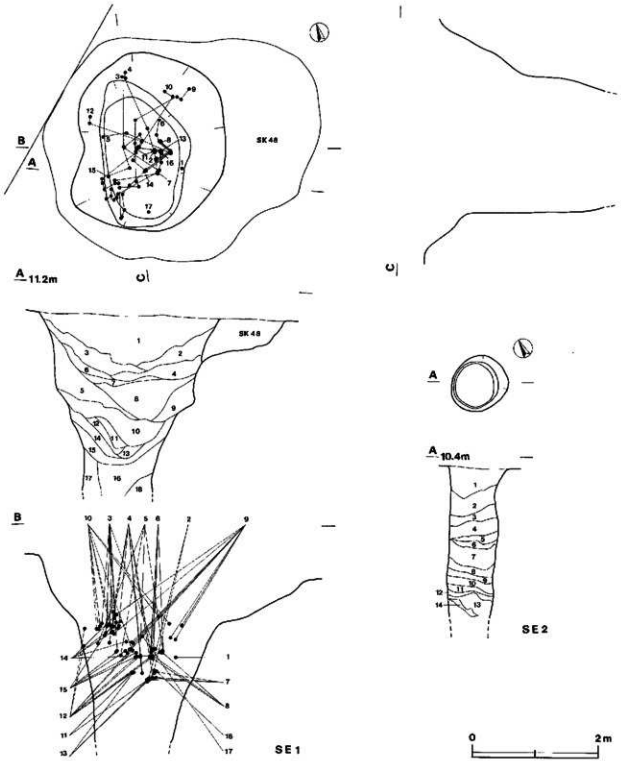
1　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・礫少量，ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子・炭・鹿沼パミス微量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス粒子少量，焼土粒子・炭化物・小礫微量
3　褐　灰　色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量，ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・礫・鹿沼パミス粒子微量
4　黒　褐　色　ローム粒子・礫少量，炭化物微量
5　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック・礫少量，炭化物微量
6　茶　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・小礫少量，焼土粒子・炭化粒子微量
7　黒　褐　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子中量，ローム大ブロック・小礫少量，炭化物微量
8　黒　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化物少量，焼土粒子・炭化粒子微量
9　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック中量
10　黒　褐　色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子・炭化物・礫微量
11　極　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，炭化物・小礫微量
12　褐　　色　ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量
13　黒　褐　色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック・鹿沼パミスブロック少量，焼土小ブロック・小礫微量
14　褐　　色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック・砂粒中量，ローム大ブロック・小礫少量
15　明　黄　褐　色　砂粒多量，小礫中量，炭化物微量
16　黒　褐　色　砂粒・小礫多量，ローム大ブロック中量
17　褐　　色　砂粒多量，礫少量
18　褐　　色　砂粒多量，ローム大ブロック中量，礫少量

遺物　第4・5層から，内耳鍋（第55～62図1～16）が16点出土している。いずれも外面に多量のススが付着し，投棄されたようにつぶれた状態で出土している。

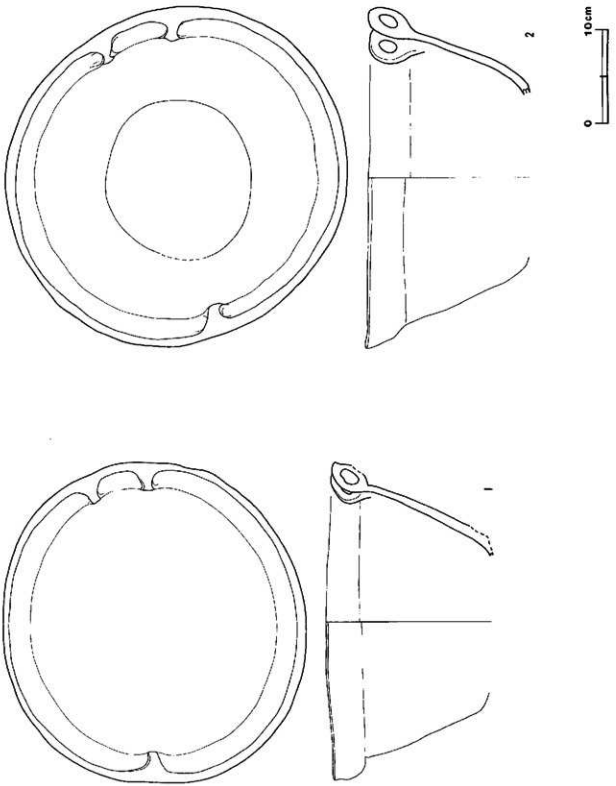
所見　本跡は，出土遺物から15世紀後半の井戸と思われる。埋め戻し土層の上層から，ほぼ完形にもどる内耳鍋が，一括して数多く出土している点が特徴的である。



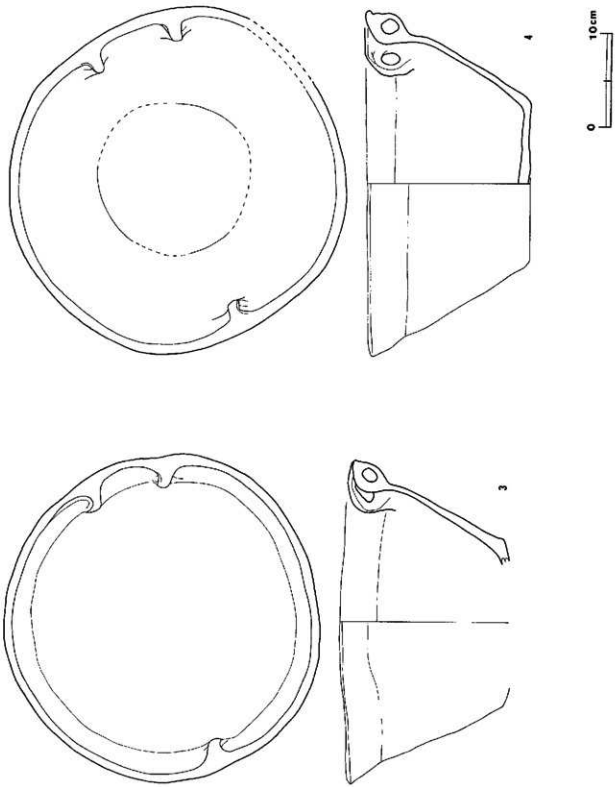
第53図　第1・2号地下式壙・出土遺物実測図



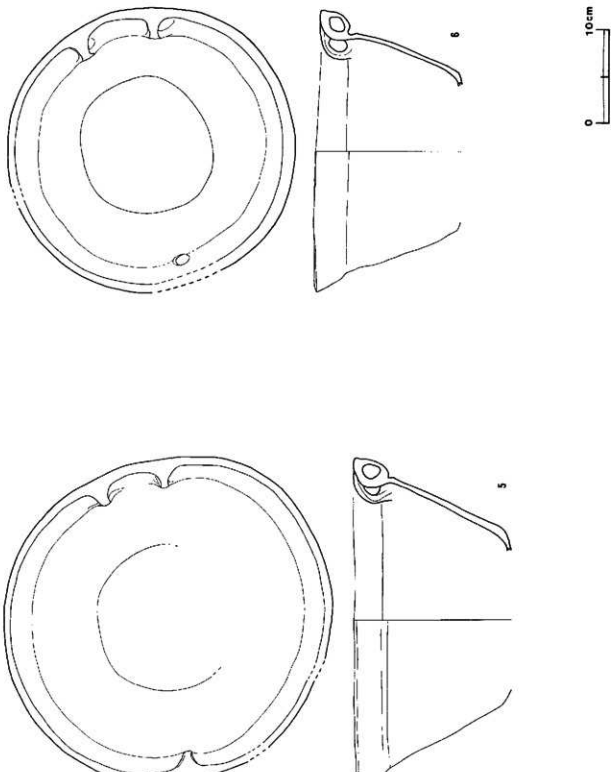
第54図　第1・2号井戸実測図



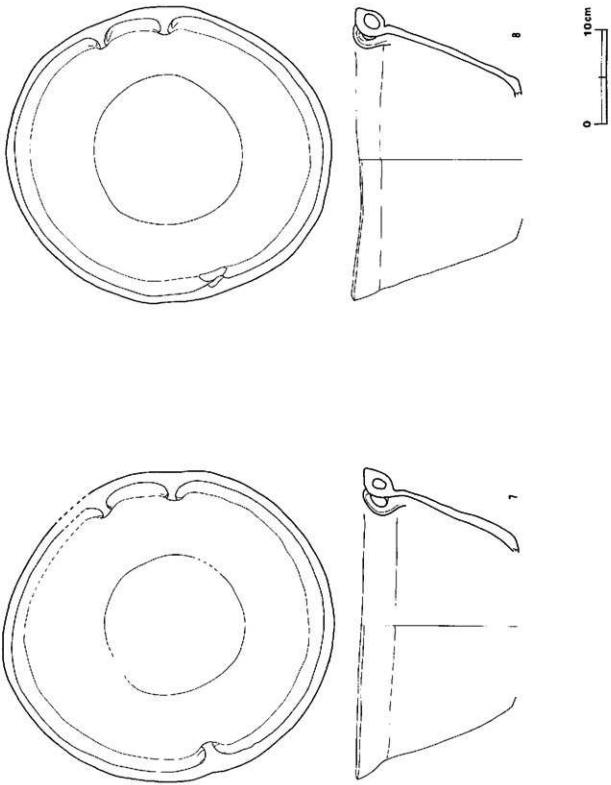
第55図　第１号井戸出土遺物実測図（１）



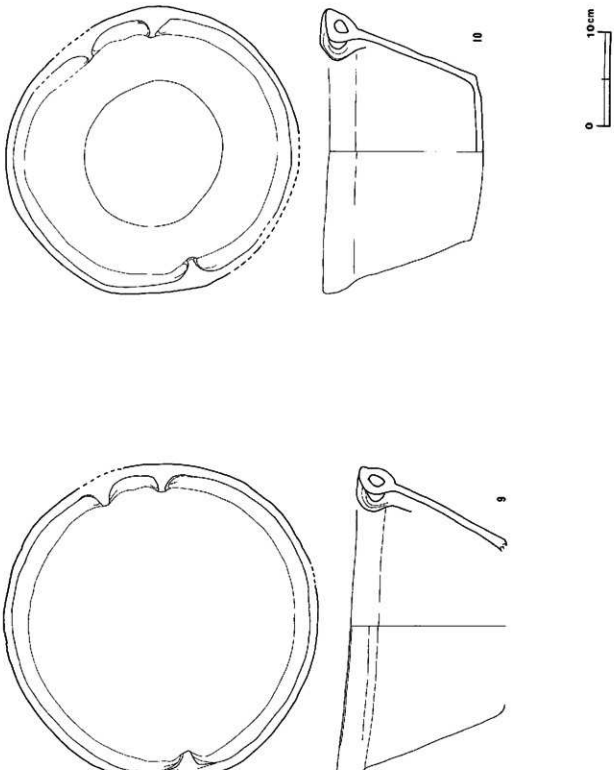
第56図　第１号井戸出土遺物実測図（２）



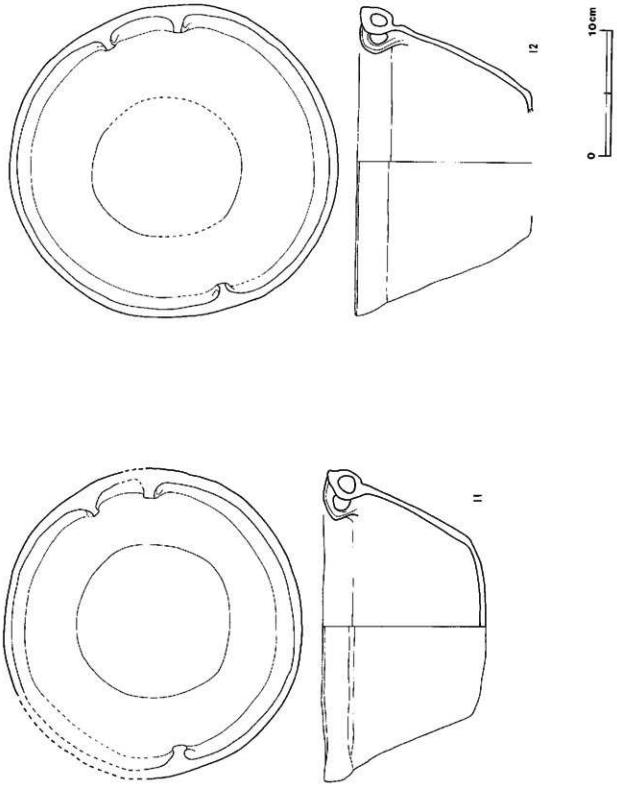
第57図　第１号井戸出土遺物実測図（３）



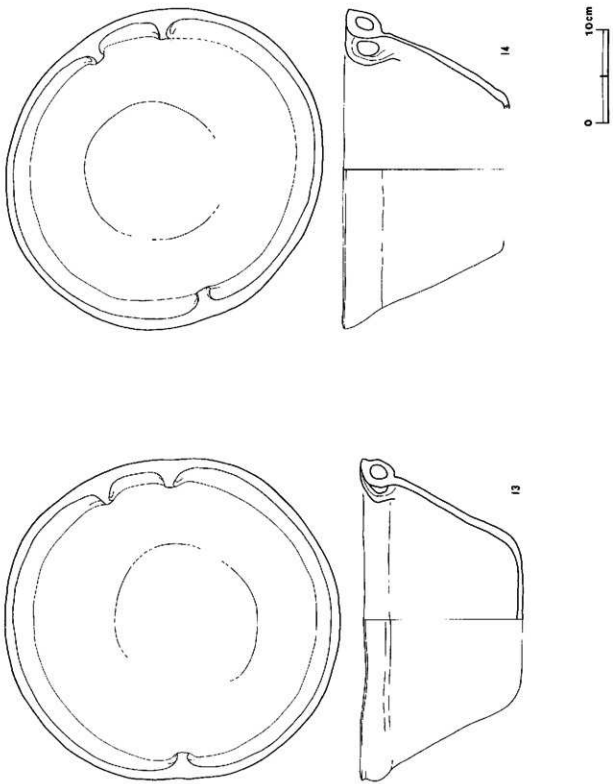
第58図　第１号井戸出土遺物実測図（４）



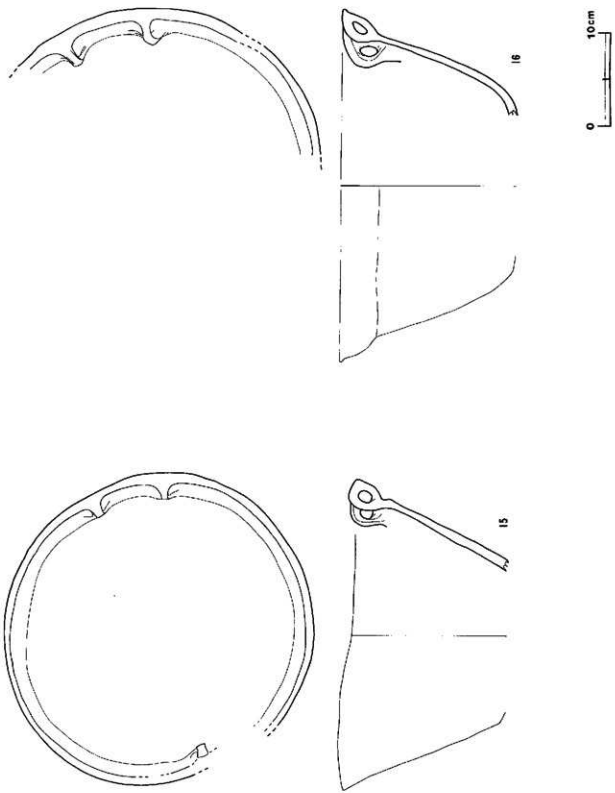
第59図　第１号井戸出土遺物実測図（５）



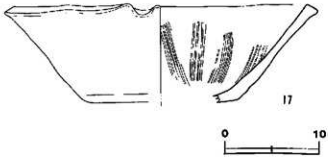
第60図　第１号井戸出土遺物実測図（６）



第61図　第１号井戸出土遺物実測図（７）



第62図　第１号井戸出土遺物実測図（８）



第63図　第１号井戸出土遺物実測図（９）

第１号井戸出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	内耳鍋 土師質土器	A 34.0 B (17.8) C [18.8]	底部欠損。体部はわずかに内彎しながら外傾して立ち上がる。三方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石，石英，にぶい褐色，普通	P122，90%　P L 23 外面スス付着 内面下端黒褐色のシミ 覆土中層
2	内耳鍋 土師質土器	A 36.0 B (17.2) C [19.1]	口縁部片。体部は直線的に外傾し，口縁部は「く」の字状に外反する。三方に耳が付く。	体部・口縁内・外面ナデ。	石英，砂粒，スコリア，にぶい褐色，普通	P123，80%　P L 23 外面スス付着 内面下端黒褐色のシミ 覆土中層
第56図 3	内耳鍋 土師質土器	A 34.3 B 17.8 C 17.7	底部欠損。体部はわずかに内彎しながら外傾して立ち上がり，口縁部は外反する。三方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石，石英，雲母，にぶい褐色，普通	P124，85%　P L 23 外面スス付着 内面下端黒褐色のシミ 覆土中層
4	内耳鍋 土師質土器	A 36.8 B 19.0 C 16.8	平底で，体部は内彎しながら外傾して立ち上がり，口縁部は外反する。三方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石，雲母，スコリア，にぶい褐色，普通	P125，80%　P L 23 外面スス付着 底部内面黒褐色のシミ 覆土中層
第57図 5	内耳鍋 土師質土器	A 34.5 B 16.7 C 18.7	底部欠損。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。口縁部は大きく「く」の字状に外反する。二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石，石英，雲母，にぶい橙色，普通	P126，85%　P L 23 外面スス付着 内面下端黒褐色のシミ 覆土中層
6	内耳鍋 土師質土器	A 30.0 B 15.1 C 16.4	底部・耳１か所欠損。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり，口縁部は外反する。	体部内・外面ナデ。	長石，石英，にぶい橙色，普通	P127，80%　P L 23 外面スス付着 内面下半黒褐色のシミ 覆土中層
第58図 7	内耳鍋 土師質土器	A 33.0 B (16.7) C 17.7	底部欠損。体部は直線的に外傾して立ち上がり，口縁部は大きく外反する。二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石，石英，雲母，にぶい褐色，普通	P128，80%　P L 23 外面スス付着 内面下端黒褐色のシミ 覆土中層
8	内耳鍋 土師質土器	A 31.0 B 18.0 C 16.9	丸底気味で，体部は直線的に立ち上がり，口縁部は外反する。三方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石，石英，雲母，橙色，普通	P129，90%　P L 23 外面スス付着 底部内面黒褐色のシミ 覆土中層
第59図 9	内耳鍋 土師質土器	A 33.1 B (18.1) C 18.4	底部欠損。体部は直線的に外傾して立ち上がり，口縁部は「く」の字状に外反する。二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石，石英，にぶい橙色，普通	P130，80%　P L 24 外面スス付着・一部剥離 内面下端黒褐色のシミ 覆土中層
10	内耳鍋 土師質土器	A 30.4 B 16.5 C 17.5	平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がり，口縁部は外反する。二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石，石英，雲母，にぶい橙色，普通	P131，85%　P L 24 外面スス付着・一部剥離 内面下端黒褐色のシミ 覆土中層

遺構番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第6図 11	内耳鍋 土師質土器	A 33.0 B 17.5 C 19.0	丸底気味で、体部は直線的に外傾してやや上がり、口縁部は大きく外反する。 二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、石英、雲母を含む赤褐色 普通	P132、70%　PL24 外面スス付着 覆土中層
12	内耳鍋 土師質土器	A 33.0 B (18.5) C 16.31	底部欠損。体部は丸底気味に外傾してやや上がる。二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、石英を含む黄褐色 普通	P133、60%　PL24 外面スス付着 覆土中層
第6図 13	内耳鍋 土師質土器	A 34.2 B 17.3 C [18.2]	丸底気味で、体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は大きく外反する。 二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、雲母を含む橙色 普通	P134、65%　PL24 外面スス付着 覆土中層
14	内耳鍋 土師質土器	A 34.0 B (17.5) C [17.3]	底部欠損。体部は直線的に外傾して立ち上がる。二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、石英、雲母を含む明褐色 普通	P135、65%　PL24 外面スス付着 内面下端黑褐色のシミ 覆土中層
第6図 15	内耳鍋 土師質土器	A 33.0 B (17.6) C 17.3	底部欠損。体部は直線的に外傾して立ち上がる。口縁部に張り出しを持つ。 二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、石英を含む橙色 普通	P136、75%　PL24 外面スス付着 内面下端黑褐色のシミ 覆土中層
16	内耳鍋 土師質土器	A 37.6 B (8.7) C [18.0]	体部から口縁部片。体部は内傾気味に外傾して立ち上がる。口縁部に張り出しを持つ。二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、石英を含む赤褐色 普通	P137、40%　PL24 外面スス付着 内面下半黑褐色のシミ 覆土中層
第6図 17	擂鉢 土師質土器	A 33.3 B 10.2 C (16.1)	体部から口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に張り出しを持つ。	体部外面ナデ。内面に5本単位の擂目が施される。	長石、石英、雲母、スコリアを含む橙色 普通	P138、30%　PL22 覆土中層

第2号井戸（第54図）

位置　調査区北部、A4区。

規模と形状　掘り方は、径93cmの円筒形で、深さは、地盤が軟弱なため底面まで掘り下げることができなかったが、確認面から2.5mまで掘り下げ、そのままボーリングステッキで調べたところ約85cmで底面になるものと思われる。

覆土　14層からなる人為堆積である。

土層解説

1　黒褐色　ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量、ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物・骨・粘土ロブロック・鹿沼パミス少量、粘土大ブロック微量
2　赤褐褐色　ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・褐・鹿沼パミス中量、ローム大ブロック・鹿沼パミス小ブロック少量
3　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム大・中ブロック・鹿沼パミス小ブロック少量、焼土粒子・粘土小ブロック微量
4　暗褐色　ローム中ブロック・ローム粒子多量、ローム小ブロック・褐中量、ローム大ブロック・鹿沼パミス小ブロック・鹿沼パミス粒子少量
5　暗黄褐色　ローム粒子少量、ローム中・小ブロック・褐・鹿沼パミス粒子少量、鹿沼パミス小ブロック微量
6　明褐色　ローム小ブロック・褐少量、ローム中ロブロック・黒褐色土大ブロック微量
7　黒褐色　ローム中・小ブロック・ローム粒子・褐少量
8　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、褐微量
9　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
10　明褐色　褐多量、ローム粒子少量
11　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・褐中量
12　明褐色　褐中量、ローム・鹿沼パミス粒子少量
13　黒褐色　ローム粒子・褐中量、ローム中・小ブロック少量
14　褐色　褐多量、ローム粒子中量、鹿沼パミス粒子少量

遺物　覆土中から、流れ込みと思われる土師質皿の底部片と動物骨片1点が出土している。

所見　本跡の時期は、底面まで掘り下げていないことや、時期を特定できる遺物が出土していないことから不明である。

5 土　　坑

当遺跡からは，土坑が91基検出されている。ここでは，時期・性格が推定できる主なものを記述し，他は一覧表に記載する。

第9-A号土坑（第64図）

位置　調査区北部，A4jl区。

重複関係　本跡を第8号溝が掘り込んでいる。第9-B号土坑とも重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　平面形は長軸（2.74）m，短軸2.50mの［長方形］と思われ，深さは18cmである。

長軸方向　［N－51°－W］

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　3層からなる自然堆積である。

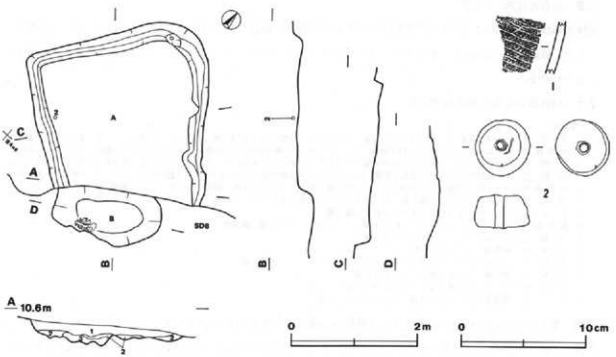
土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子多量，ローム大ブロック少量，鹿沼パミス・桃土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム大・中・小ブロック少量
3　明　褐　色　ローム大ブロック多量，ローム中ブロック・ローム粒子中量，桃土粒子微量

遺物　覆土中から流れ込みと思われる弥生土器片1点・紡錘車1点が出土しているほか，馬骨が覆土中から出土している。

第64図1は本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。壺の胴部片で，附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。

所見　本跡の時期は，時期を特定できる出土遺物がないため不明である。また，性格も不明であるが，隣接する第9-B号土坑からも馬の骨が出土していることから，本跡と何らかの関連があると思われる。



第64図　第9-A・B号土坑実測・拓影図

第9-B号土坑（第64図）

位置　調査区北部，B4a8区。

重複関係　本跡が第8号溝を掘り込んでいる。第9-A号土坑とも重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　平面形は長径1.70m，短径0.88mの楕円形で，深さは18cmである。

長径方向　N　59°－E

壁面　緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　凹状でやわらかい。

遺物　底面から馬の頭骨が横に寝かせたような状態で出土している。

所見　本跡の時期は，時期を特定できる出土遺物がないため不明である。また，性格も不明であるが，隣接する第9-A号土坑からも馬の骨が出土していることから，本跡と何らかの関連があると思われる。

第11号土坑（第65図）

位置　調査区北部，B4a8区。

規模と平面形　平面形は長径1.08m，短径0.68mの楕円形で，深さは60cmである。

長径方向　N－69°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦で，硬くしまっている。

覆土　4層からなる人為堆積である。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・白色粒子少量，ローム小ブロック・炭化物微量
2　暗褐色　ローム粒子少量，黒色土ブロック微量
3　暗褐色　灰少量，ローム粒子微量
4　褐灰色　焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量（灰層）

遺物　覆土中から馬の歯が1点出土している。

所見　本跡の時期や性格は不明である。

第19号土坑（第65図）

位置　調査区北部，B4e1区。

規模と平面形　平面形は長軸0.94m，短軸0.68mの長方形で，深さは60cmである。

長軸方向　N－50°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦でやわらかい。

覆土　3層からなる人為堆積である。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・焼沼パミス少量
2　褐色　焼沼パミス中量，黒色土ブロック微量
3　黒色　焼沼パミス少量，ローム粒子微量

所見　本跡からは出土遺物がないが，第1号地下式壙及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第20-A号土坑（第65図）

位置　調査区北部，B44区。

重複関係　本跡を第20-B号土坑が掘り込んでいる。

規模と平面形　長径0.92m，短径（0.29）mで，南東部が調査区外のため正確な平面形は不明である。深さは72cmである。

長径方向　N－55°－W

壁面　垂直に立ち上がる。

底面　皿状でしまりのある鹿沼土である。

覆土　3層からなる人為堆積である。

土層解説
1　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック・鹿沼パミス中・小ブロック中量，ローム大ブロック・炭化物少量，焼土小ブロック・焼土粒子・褐粒量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス粒子多量，ローム大・中ブロック中量，鹿沼パミス中ブロック少量，炭化物微量
3　暗　褐　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子・鹿沼パミスブロック・鹿沼パミス粒子多量，ローム大ブロック少量

所見　本跡からは出土遺物がないが，第1号地下式壙及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第20-B号土坑（第65図）

位置　調査区北部，B44区。

重複関係　本跡が第20-A号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形　平面形は長軸1.02m，短軸0.78mの長方形で，深さは78cmである。

長軸方向　N－45°－W

壁面　垂直に立ち上がる。

底面　平坦でしまりのある鹿沼土である。

覆土　1層からなる人為堆積である。

土層解説
1　褐　色　鹿沼パミス少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式壙及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第23号土坑（第65図）

位置　調査区北部，第1号地下式壙の北東，B44区。

規模と平面形　平面形は長軸2.00m，短軸1.14mの隅丸長方形で，深さは41cmである。

長軸方向　N－46°－E

壁面　外傾して立ち上がり，北西部は垂直に立ち上がる。

底面　平坦でしまりのある鹿沼土である。

覆土　1層からなる人為堆積である。

土層解説
1　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス中量，ローム中ブロック少量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式壙に隣接している配置からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第24号土坑（第65図）

位置　調査区北部，第1号地下式壙の北西，B4d区。

規模と平面形　平面形は長軸1.00m，短軸0.68mの不整長方形で，深さは19cmである。

長軸方向　N－64°－E

壁面　緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　皿状でしまりのある鹿沼土である。

覆土　1層からなる人為堆積である。

土層解説
1　褐　　色　ローム大ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス少量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式壙に隣接している配置からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第25号土坑（第65図）

位置　調査区北部，第1号地下式壙の北部，B4a区。

規模と平面形　平面形は，上面では長軸0.99m，短軸0.70mの不定形であるが，確認面から20cm程下からは長軸0.70m，短軸0.45mの長方形である。深さは45cmである。

長軸方向　N－71°－W

壁面　底面から垂直に立ち上がり，上面では外傾して立ち上がる。

底面　平坦でしまりのある鹿沼土である。

覆土　2層からなる人為堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・鹿沼パミス少量，黒色土ブロック微量
2　褐　　色　ローム粒子・暗褐色土ブロック中量，鹿沼パミス少量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式壙に隣接している配置からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第26号土坑（第65図）

位置　調査区北部，第1号地下式壙の北西部，B4a区。

規模と平面形　平面形は長軸0.81m，短軸0.59mの長方形で，深さは44cmである。

長軸方向　N－47°－W

壁面　垂直に立ち上がる。

底面　平坦でしまりのある鹿沼土である。

覆土　1層からなる人為堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・鹿沼パミス少量，ローム小ブロック微量

遺物　覆土中から内耳鍋片が1点出土している。

所見　本跡からは時期を特定できる出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第１号地下式壙に隣接している配置からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第27号土坑（第65図）

位置　調査区北部，第１号地下式壙の西側，B4$_{62}$区。

規模と平面形　平面形は長軸2.09m，短軸1.03mの不定形で，深さは32～37cmである。

長軸方向　N－39°W

壁面　緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　皿状でしまりのある泥沼土である。

覆土　２層からなる人為堆積である。

土層解説
1　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・泥沼パミス中量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・黒色土ブロック微量
2　褐　色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック・泥沼パミス少量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第１号地下式壙に隣接している配置からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第28-A号土坑（第65図）

位置　調査区北部，B4$_{62}$区。

規模と平面形　平面形は長軸1.01m，短軸0.69mの不整長方形で，深さは20cmである。

長軸方向　N－34°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦でやわらかい。

覆土　１層からなる人為堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第１号地下式壙及び第１号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第28-B号土坑（第65図）

位置　調査区北部，B4$_{52}$区。

規模と平面形　平面形は長軸0.86m，短軸0.63mの不整長方形で，深さは37cmである。

長軸方向　N－34°－E

壁面　垂直に立ち上がる。

底面　平坦でやわらかい。

覆土　１層からなる人為堆積である。

土層解説
1　褐　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第１号地下式壙及び第１号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第29号土坑（第65図）

位置　調査区北部，B4$_{92}$k。

規模と平面形　平面形は長軸0.97m，短軸0.70mの不整長方形で，深さは81cmである。

長軸方向　N－62°－W

壁面　垂直に立ち上がる。

底面　平坦でやわらかい。

覆土　3層からなる人為堆積である。

土層解説

1　褐　　色　ローム粒子少量，腐植パミス微量
2　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土ブロック少量
3　黒 褐 色　ローム粒子少量，腐植パミス微量

遺物　覆土中から陶器・内耳鍋・土師器坏片が出土している。

所見　本跡は，第1号地下式壙及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第43号土坑（第66図）

位置　調査区北部，B4$_{74}$k。

規模と平面形　平面形は長軸2.36m，短軸1.08mの隅丸長方形で，深さは21cmである。

長軸方向　N－47°－E

壁面　底面から外傾して立ち上がり，上面は耕作により削平されている。

底面　平坦でやわらかい。

覆土　2層からなる人為堆積である。

土層解説

1　褐　　色　ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量，腐植パミスブロック中量，炭化物微量
2　明 褐 色　ローム大・中・小ブロック・ローム粒子中量，腐植パミスブロック・腐植パミス粒子少量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式壙及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第44号土坑（第66図）

位置　調査区北部，B4$_{83}$k。

規模と平面形　平面形は長径1.47m，短径1.13mの不整楕円形で，深さは53～58cmである。

長径方向　N－42°－W

壁面　垂直に立ち上がる。

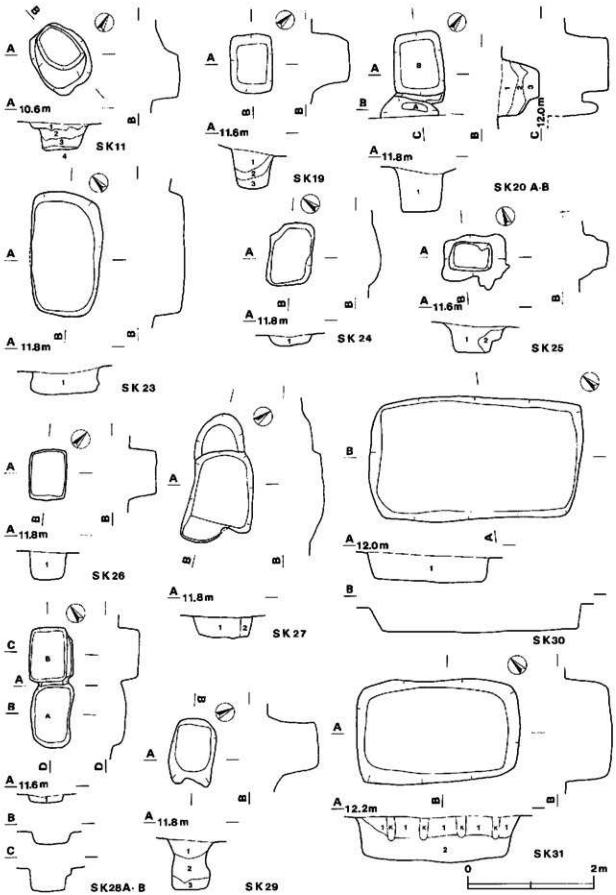
底面　平坦である。

覆土　2層からなる人為堆積である。

土層解説

1　褐　　色　ローム大・中・小ブロック・ローム粒子・腐植パミス多量，炭化物微量
2　暗　　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子多量，腐植パミス中量，ローム大ブロック少量，青灰白色粘土ブロック少量，炭化物微量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式壙及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。



第65図　第11・19・20A・B・23・24・25・26・27・28A・B・29・30・31号土坑実測図

第54号土坑（第67図）

位置　調査区北部，B3d区。

重複関係　本跡が第56号土坑を掘り込み，本跡を第１号方形竪穴遺構が掘り込んでいる。

規模と平面形　平面形は長軸3.31ｍ，短軸1.00ｍの長方形で，深さは14cmである。

長軸方向　Ｎ－41°－Ｅ

壁面　垂直に立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　５層からなる自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム大・中ブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック・黒色土ブロック少量，ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物・礫微量
3　黒　褐　色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック少量，焼土粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量
5　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明である。

第55号土坑（第67図）

位置　調査区北部，B3d区。

重複関係　本跡を第54号土坑が掘り込んでいる。

規模と平面形　平面形は長軸2.17ｍ，短軸（2.03）ｍの［長方形］と思われる。深さは16cmである。

長軸方向　Ｎ－44°－Ｅ

壁面　緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　平坦でやわらかい。

覆土　２層からなる人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子中量，黒色土ブロック少量，ローム大・中・小ブロック微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック微量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第１号地下式壙及び第１号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第56号土坑（第67図）

位置　調査区北部，B3d区。

重複関係　本跡は第54号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　重複のため正確な平面形は不明であるが，長軸（2.07）ｍ，短軸（2.06）ｍの［長方形］と思われ，深さは６～15cmである。

長軸方向　［Ｎ－０°－Ｅ］

壁面　緩やかに外傾して立ち上がる。

底面　平坦でやわらかい。

覆土　１層からなる人為堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・炭化物少量，焼土粒子微量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式壙及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙である可能性がある。

第58号土坑（第67図）

位置　調査区北部，A_4区。

規模と平面形　長径1.61m，短径1.05mの楕円形で，深さは32cmである。

長径方向　N　45°－E

壁面　垂直に立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　3層からなる人為堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量，黒色土ブロック中量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック・黒色土ブロック少量，炭化物微量
3　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム大・中ブロック・黒色土ブロック少量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式壙及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第63号土坑（第68図）

位置　調査区北部，B_4区。

重複関係　本跡は第1号方形竪穴遺構と第68号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　重複のため正確な平面形は不明であるが，長軸（1.15）m，短軸（1.05）mの［長方形］であると思われ，深さは40cmである。

長軸方向　［N　36°－E］

壁面　底面から外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　2層からなる人為堆積である。（第68図C土層図の第5・7層）

土層解説

5　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム大・中ブロック・炭化物・黒色土ブロック少量
7　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，黒色土ブロック少量，焼土粒子・炭化物・浅間パミス粒子微量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式壙及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第64号土坑（第68図）

位置　調査区北部，$B_{4\cdot3}$区。

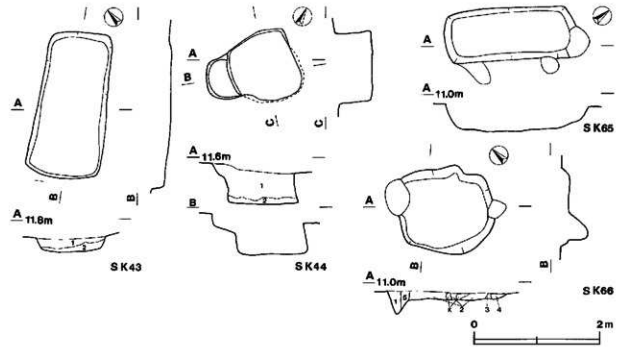
重複関係　本跡と第69号土坑が重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　重複のため正確な平面形は不明であるが，長軸（1.50）m，短軸0.9mの［長方形］であると思われ，深さは35cmである。

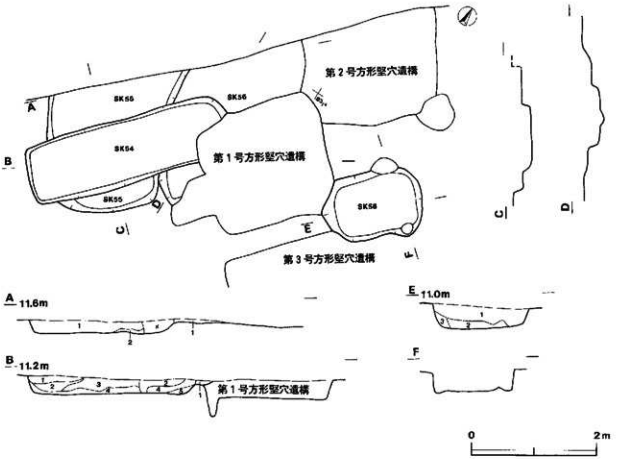
長軸方向　［N　52°　E］

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。



第66図　第43・44・65・66号土坑実測図



第67図　第54・55・56・58号土坑実測図

覆土　1層からなる人為堆積で，ロームブロック，鹿沼パミスブロックを含む黒褐色土である。

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式壙及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第65号土坑（第66図）

位置　調査区北部，B4$_{a}$区。

規模と平面形　平面形は長軸2.15m，短軸0.85mの長方形で，深さは44cmである。

長軸方向　N－36°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　1層からなる人為堆積で，ロームブロック，鹿沼パミスブロックを含む黒褐色土である。

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式壙及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第66号土坑（第66図）

位置　調査区北部，B4$_{e5}$区。

規模と平面形　平面形は長軸1.55m，短軸1.40mの不整長方形で，深さは12cmである。

長軸方向　N－50°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　5層からなる人為堆積である。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・鹿沼パミス粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミスブロック少量，砂粒微量

2　明褐色　ローム粒子・鹿沼パミス多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子・砂少量，炭化物微量

3　にぶい黄褐色　小礫多量，鹿沼パミス粒子・粘土中量

4　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・鹿沼パミス粒子・小礫少量，炭化物・炭化粒子微量

5　明赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・鹿沼パミス粒子多量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・鹿沼パミス小ブロック・粘土粒子中量，ローム大・中ブロック・焼土大・中ブロック・鹿沼パミス中ブロック・礫少量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式壙及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第68号土坑（第68図）

位置　調査区北部，A4$_{g5}$区。

重複関係　本跡は，第63・69号土坑を掘り込んでおり，第3号方形竪穴遺構に掘り込まれている。

規模と平面形　重複のため正確な平面形は不明であるが，長軸（2.37）m，短軸（1.05）mの「長方形」と思われ，深さは40cmである。

長軸方向　「N－41°－E」

壁面　南西部の壁は外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　2層からなる人為堆積である。（第68図C土層図の第1，2層）

上層解説
1　極暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・鹿沼パミス赤色土ブロック少量，焼土粒子微量
2　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子多色，ローム中ブロック・鹿沼パミス・黒色土ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式壙及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第69号土坑（第68図）

位置　調査区北部，A4$_{9}$区。

規模と平面形　重複のため正確な平面形は不明であるが，長軸（1.90）m，短軸（1.15）mの「長方形」と思われ，深さは38cmである。

長軸方向　［N－40°－E］

壁面　重複のため不明である。

底面　平坦である。

覆土　1層からなる人為堆積である。（第68図C土層図の第3層）

土層解説
3　褐　　色　ローム中ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック・鹿沼パミス少量，焼土粒子・粘土中ブロック微量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式壙及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第70号土坑（第68図）

位置　調査区北部，A4$_{9}$区。

重複関係　本跡は，第71号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形　重複のため正確な平面形は不明であるが，長軸2.25m，短軸（1.05）mの「長方形」と思われ，深さは30cmである。

長軸方向　N－49°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　1層からなる人為堆積である。（第68図G土層図の第5層）

上層解説
5　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，鹿沼パミス中・小ブロック・鹿沼パミス粒子少量，焼土粒子・炭化物微量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式壙及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。

第71号土坑（第68図）

位置　調査区北部，A4$_{9}$区。

規模と平面形　平面形は長軸1.90m，短軸0.85mの不整長方形で，深さは12cmである。

長軸方向　N－41°－W

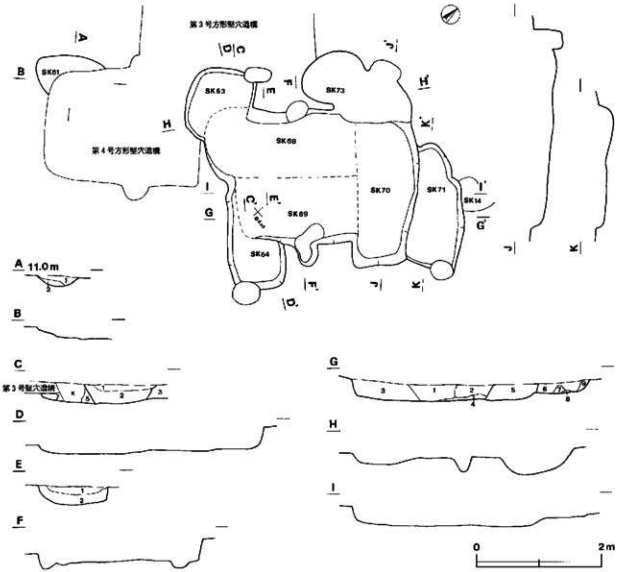
壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

覆土　4層からなる人為堆積である。(第68図G土層図の第6～9層)

土層解説
6　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，炭化物・霧沼パミス小ブロック・鹿沼パミス粒子少量
7　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・鹿沼パミス小ブロック・鹿沼パミス粒子少量，焼土粒子・炭化物微量
8　明　褐　色　ローム小ブロック多量，霧沼パミス小ブロック少量
9　明　褐　色　ローム大ブロック多量，ローム粒子中量

所見　本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式壙及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の墓壙の可能性がある。



第68図　第63・64・68・69・70・71号土坑実測図

第94号土坑（第69図）

位置　調査区２区北東部，D2$_{48}$区。

重複関係　第81号土坑の底面を掘り込んでいるため，本跡の方が新しい。

規模と平面形　上面では長径約2.54m，短径約1.20mの楕円形で，底面では長径約2.80m，短径約0.25mの長楕円形である。深さは約230cmである。

長径方向　N－49°－E

壁面　長径方向の壁は内彎しながら立ち上がり，上面では垂直に立ち上がる。短径方向の壁は，外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

所見　本跡は，遺構の形状，類例から縄文時代の陥し穴と思われる。

第95号土坑（第69図）

位置　調査区中央部，D2$_{88}$区。

重複関係　第10号溝が，本跡の壁面を掘り込んでいる。

規模と平面形　長径約3.64m，短径約1.73mの長楕円形である。深さは約190cmある。

長径方向　N－56°－E

壁面　外傾して立ち上がるが，南西部の壁は底面から約50cmのところで大きくオーバーハングし，上面では垂直に立ち上がる。

底面　底面はほぼ平坦で，北東部に皿状のくぼみがある。

所見　本跡は，出土遺物はないが，遺構の形状，類例から縄文時代の陥し穴と思われる。

第96号土坑（第69図）

位置　調査区中央部，C1$_{58}$区。

重複関係　第11号溝が，本跡の壁面を掘り込んでいる。

規模と平面形　平面形は長径約3.43m，短径約1.49mの長楕円形である。

長径方向　N－20°－E

壁面　壁高は約230cmで，底面からは垂直に立ち上がり，上面では外傾して立ち上がる。長径方向の壁は，底面から約50cmのところまで大きくオーバーハングし，上面では垂直に立ち上がる。

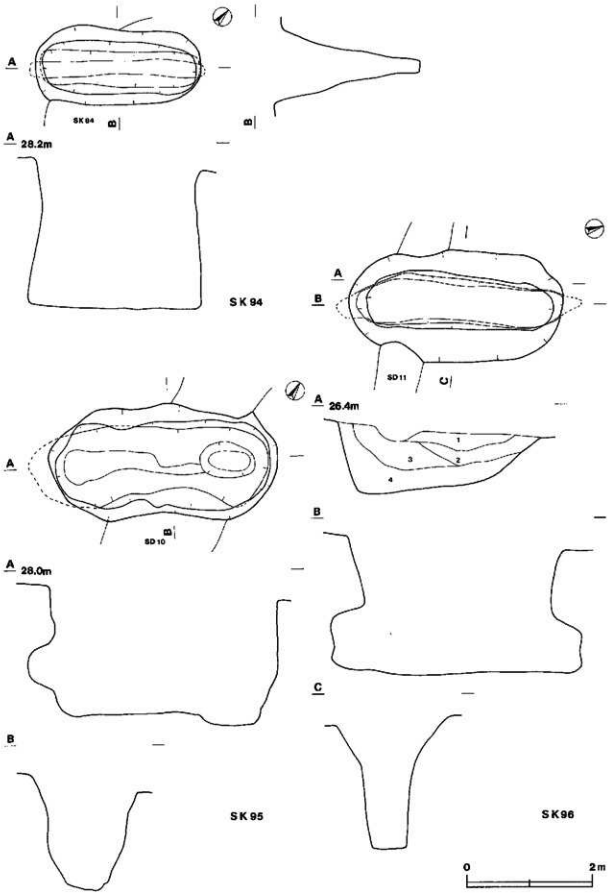
底面　平坦である。

覆土　４層からなり，レンズ状堆積を示し自然堆積である。

土層解説

1　明　　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム大・中ブロック中量，黒色土小ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量。
2　暗 褐 色　ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量，ローム大ブロック・黒色土小ブロック少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
3　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック・黒色土小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　褐　　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック中量，黒色土小ブロック少量，腐植パミス中ブロック微量

所見　本跡は，出土遺物はないが，遺構の形状，類例から縄文時代の陥し穴と思われる。



第69図　第94・95・96号土坑実測図

表4　大畑遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	坑底 長径×短径（m）	坑底 深さ（cm）	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考（重複関係　H→新）
1	A4a9	N-28°-E	楕円形	0.58×0.47	36	垂直	皿状	自然	弥生土器片	
2	A4a9	N-66°-E	楕円形	1.04×0.48	20～40	緩傾	皿状	人為	弥生土器片	
3	A4a9	－	円形	径 0.82	25～36	垂直	平坦	人為		
4	A4a9	N-21°-W	楕円形	0.49×0.42	43	垂直	平坦	人為		
5	A5a8	N-33°-W	楕円形	1.12×1.08	22	緩傾	平坦	自然		
6	A5a8	N-40°-E	楕円形	0.92×0.66	38	外傾	皿状	自然	縄文土器片	
7	A5a6	N-45°-W	不定形	1.43×1.15	24	外傾	平坦	自然	弥生土器片	
8	A5a6	N-53°-W	（楕円形）	0.73×（0.37）	30	外傾	凹凸	自然	弥生土器片	
9-A	A4a8	N-51°-W	不明	（2.74）×2.50	15～25	外傾	平坦	自然	弥生土器片・打製石斧・馬骨	
9-B	B4a8	N-59°-E	楕円形	1.70×0.88	18	緩傾	平坦	自然		
10	A4a9	N-52°-W	楕円形	2.00×0.80	27	外傾	凹凸	自然	弥生土器片	
11	B4a8	N-69°-W	楕円形	1.08×0.91	43	垂直	平坦	自然	馬歯、炭を埋めている	SD8・SK11
12	A4a8	N-63°-E	楕円形	0.77×0.62	30	緩傾	皿状	自然		
13	A4a8	N-0°	楕円形	0.82×0.72	18	外傾	平坦	自然		
14	A4a8	N-38°-W	楕円形	0.73×0.47	40～47	垂直	平坦	人為		
15	B3a8	N-32°-E	長方形	2.33×1.41	30～62	垂直	平坦	人為	弥生土器片	
16	A4a8	N-36°-E	楕円形	1.08×0.77	11～27	外傾	凹凸	人為		
17	A4a8	N-90°-E	不定形	1.05×0.93	13～29	外傾	凹凸	人為		
18	B4a8	N-50°-E	楕円形	1.13×0.95	32	外傾	皿状	人為		
19	B4a8	N-50°-W	長方形	0.94×0.68	60	外傾	平坦	人為		
20-A	B4a8	N-55°-E	不明	0.92×（0.29）	72	垂直	皿状	人為		
20-A	B4a8	N-45°-W	長方形	1.02×0.78	78	垂直	平坦	人為		
21	B4a8	N-65°-E	（楕円形）	1.39×（0.62）	21	外傾	皿状	人為		
22	B4a8	－	円形	0.64×0.64	12	外傾	皿状	人為		
23	B4a8	N-46°-E	隅丸長方形	2.00×1.14	41	垂直	平坦	人為		
24	B4a8	N-64°-E	不整長方形	1.00×0.68	19	緩傾	皿状	人為		
25	B4a8	N-71°-W	不定形	0.99×0.70	45	外傾	平坦	人為		
26	B4a8	N-47°-W	長方形	0.81×0.59	44	垂直	平坦	人為	弥生土器片	
27	B4a8	N-39°-W	不定形	2.09×1.03	32～37	緩傾	皿状	人為		
28-A	B4a8	N-35°-E	不整長方形	1.02×0.69	20	外傾	平坦	人為		
28-B	B4a8	N-34°-E	不整長方形	0.86×0.63	37	垂直	平坦	人為		

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径（m）	深さ（cm）	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考（重複関係 旧→新）
29	$B_{4\,2}$	N-62°-W	不整長方形	0.97×0.7	81	垂直	平坦	人為	土師器杯・鬼瓦片・内耳鍋片	
30	$B_{5\,3}$	N-40°-W	長方形	3.37×1.99	35～41	緩傾	平坦	人為	剥片	
31	$B_{5\,1}$	N-43°-W	隅丸長方形	2.60×1.62	74	垂直	平坦	人為		
32	$B_{5\,1}$	N-61°-W	楕円形	0.90×0.52	34	外傾	凹状	人為		
33	$B_{5\,1}$	N-35°-W	楕円形	1.15×0.93	15	外傾	皿状	人為		
34	$B_{4\,5}$	N-76°-E	不定形	2.27×1.60	18	外傾	凹凸	自然	縄文土器片	
35	$B_{5\,2}$	N-43°-W	不整楕円形	1.64×1.04	75	外傾	皿状	自然		
36	$B_{4\,6}$	N-53°-E	楕円形	1.10×0.55	55	外傾	皿状	人為		
37	$B_{4\,6}$	N-54°-W	楕円形	2.00×1.72	23～30	緩傾	凹凸	人為	縄文・弥生土器片	
38	$B_{4\,6}$	N-63°-W	（楕円形）	（1.83）×（1.47）	27	外傾	凹凸	自然	縄文・弥生土器片	
39	$B_{4\,6}$	N-73°-E	隅丸長方形	0.77×0.56	30	垂直	平坦	人為	縄文土器片	
40	$B_{5\,3}$	N-73°-W	楕円形	1.86×0.80	18	外傾	平坦	人為		
41	$B_{5\,4}$	N-46°-W	隅丸長方形	1.95×1.42	50	外傾	皿状	人為	縄文土器片	
42	$B_{4\,4}$	N-47°-E	隅丸長方形	2.36×1.06	21	垂直	平坦	人為		
44	$B_{4\,3}$	N-42°-W	不整楕円形	1.47×1.13	53～58	垂直	平坦	人為		
45	$B_{4\,7}$	N-76°-E	不整長方形	2.30×1.64	46	外傾	皿状	人為		
47	$B_{3\,5}$	N-58°-E	楕円形	1.93×1.40	15	外傾	平坦	人為	弥生土器片	
48	$B_{3\,5}$	N-29°-W	不整長方形	（2.90）×2.30	67	外傾	凹状	人為		
49	$B_{4\,5}$	N-10°-W	不整楕円形	1.58×1.12	48～99	外傾	凹凸	人為	縄文・弥生土器片	
50	$B_{4\,6}$	N-34°-W	楕円形	1.12×0.94	54	外傾	平坦	人為		
51	$B_{4\,6}$	N-23°-E	楕円形	0.90×0.83	23	外傾	凹凸	自然	縄文・弥生土器片	
52	$C_{3\,5}$	N-56°-E	隅丸長方形	1.60×1.18	16	外傾	皿状	自然		
53	$B_{4\,3}$	N-52°-W	楕円形	1.15×0.88	50～60	外傾	平坦	人為		
54	$B_{3\,4}$	N-41°-E	長方形	3.31×1.00	14	垂直	平坦	自然		SK57→SK56→SK54
55	$B_{3\,4}$	N-44°-E	長方形	2.17×（2.03）	16	緩傾	平坦	人為		SK55・SK54
56	$B_{3\,4}$	不明	（長方形）	（2.37）×（2.06）	6～16	緩傾	平坦	人為		SK57・SK56・SK54
57	$B_{3\,4}$	N-41°-W	不整長方形	2.68×1.99	30	垂直	平坦	人為	炭化物	第1号方形墓穴遺構
58	$B_{3\,4}$	N-45°-E	楕円形	1.61×1.05	32	垂直	平坦	人為		
59	$B_{3\,4}$	N-45°-E	（長方形）	2.09×（1.62）	16	緩傾	平坦	人為	炭化物	第2号方形墓穴遺構
60	$A_{4\,1}$	N-44°-E	（長方形）	2.83×（1.80）	25	不明	平坦	人為	弥生土器片	第3号方形墓穴遺構
61	$B_{4\,4}$	N-46°-E	（楕円形）	（1.08）×（0.83）	14	外傾	平坦	人為		
62	$B_{4\,4}$	N-46°-E	長方形	2.50×1.87	20	外傾	平坦	人為	弥生土器片	第4号方形墓穴遺構

土坑番号	位置	長軸方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径(m)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考（重複関係 旧→新）
63	A4j₁	N-36°-W	(不整長方形)	(1.15)×1.06	40	不明	平坦	人為		SK63→SK68-A・SK68-B・SK60
64	B4j₁₀	N-52°-W	(長方形)	(1.50)×0.9	35	外傾	平坦	不明		
65	B4j₁₀	N-36°-E	長方形	2.15×0.85	44	外傾	平坦	不明		
66	B4j₁₀	N-50°-W	不整長方形	1.55×1.4	12	外傾	平坦	人為		
68	A4j₁	N-41°-E	(長方形)	(2.37)×(1.05)	40	不明	平坦	人為		SK-63・SK68-A→SK68-B・SK60
69	A4j₅	N-40°-E	(長方形)	(1.80)×(1.15)	38	不明	平坦	人為		SK71→SK70・SK69-A・SK69-B・SK68
70	A4j₅	N-49°-W	(長方形)	2.28×(1.05)	30	外傾	平坦	人為		SK71→SK70→SK69-A→SK69-B・SK68
71	A4j₅	N-41°-W	不整長方形	1.90×0.88	12	外傾	平坦	人為		SK-71→SK 70→SK-69 A→SK-69 B・SK-68
72	B4j₁₀	N-5°-E	楕円形	0.60×0.49	28	垂直	平坦	不明		
73	A4j₅	N-56°-E	不整楕円形	1.83×0.88	20	垂直	平坦	不明		
74	C3j₅	N-9°-E	隅丸長方形	1.53×1.17	29	外傾	平坦	人為	獣骨	
75	C3j₅	N-42°-W	楕円形	1.14×1.05	22	外傾	凹凸	人為		
76	C3j₅	—	円形	1.66×1.55	86	外傾	平坦	人為	キセル，古銭，人骨	近世墓壙
77	C3j₅	N-54°-E	楕円形	1.71×1.54	84	外傾	平坦	人為	キセル，古銭，人骨	近世墓壙
78	C3j₄	N-6°-E	不整長方形	1.79×1.46	146	垂直	平坦	人為		近世墓壙
79	C3j₅	N-0°	隅丸長方形	1.05×1.00	29	外傾	凹凸	人為	鉄釘十器片	
80	C3j₅	N-75°-W	楕円形	0.89×0.71	25	緩傾	皿状	人為	古銭，人骨	近世墓壙
81	D2j₀	N-31°-E	楕円形	3.95×3.27	12	外傾	平坦	人為		
82	C2j₉	N-83°-W	長楕円形	3.24×1.24	18～38	外傾	凹凸	人為		
83	C2j₄	N-41°-E	楕円形	1.54×1.00	36	外傾	皿状	不明		
84	D3j₁₀	N-61°-E	楕円形	2.46×1.85	110	外傾	皿状	人為		
85	D3j₁	N-0°	楕円形	0.47×0.36	19	外傾	皿状	不明		
86	D3j₁	N-35°-E	楕円形	0.65×0.61	20	外傾	皿状	不明		
87	D3j₁	N-17°-W	楕円形	0.75×0.47	22	外傾	皿状	不明		
88	D3j₁	N-90°-E	楕円形	0.74×0.64	26	外傾	皿状	不明		
89	D3j₁	N-46°-E	楕円形	1.26×0.96	37	外傾	皿状	不明		
90	D2j₀	N-65°-W	楕円形	1.12×0.83	20～40	外傾	凹凸	不明		
91	C1j₀	N-27°-W	楕円形	1.82×1.60	60～86	緩傾	凹凸	人為		
92	C1j₀	N-68°-E	楕円形	0.96×0.73	55	外傾	皿状	人為		
93	C1j₀	N-22°-E	楕円形	1.13×0.84	50	外傾	皿状	人為		
94	D2j₀	N-49°-E	楕円形	2.54×1.20	231	垂直	平坦	不明		貯し穴
95	D2j₀	N-56°-E	不定形	3.64×1.73	190	垂直	平坦	不明		貯し穴

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径(m)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考（重複関係 ID・新）
96	C1₇₀	N-20°-E	楕円形	3.43×1.49	190~210	袋状	平坦	人為		貼L次
103	E1₄₀	N-20°-E	楕円形	0.98×0.87	11	外傾	平坦	人為		

6 墓　　壙

当遺跡からは，墓壙と思われる土坑が，25基検出されているが，人骨が確認された4基について墓壙として取り上げた。以下，遺構番号順に記載する。

第1号墓壙（第70図）

位置　調査区中央部，C3₅₀区。

重複関係　本跡が第12号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　底面は長軸0.79m，短軸0.69mの長方形で，上面は直径1.60mの円形で，深さは86cmである。

長軸方向　N-12°-E

壁面　底面から垂直に立ち上がり，上面では外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

遺物　覆土下層～底面から，第71図3～8の古銭・1のキセルが人骨に伴って出土している。

所見　本跡は，出土遺物から近世の墓壙である。

第1号墓壙出土遺物観察表

遺物番号	種別	計測値 径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	現存率(%)	初鋳年 時代	西暦	出土地点	備考
第71図3	寛永通宝	2.5	1	3.2	100	江戸	1668年	覆土中	M2 PL35
4	寛永通宝	2.4	1	3.3	100	江戸	1767年	覆土中	M3 PL35
5	寛永通宝	2.3	1	2.5	100	江戸	1708年	覆土中	M4 PL35
6	寛永通宝	2.3	1	2.7	100	江戸	1708年	覆土中	M5 PL35
7	寛永通宝	2.3	1	2.2	100	江戸	1708年	覆土中	M6 PL35
8	寛永通宝	2.3	1	2.9	100	江戸	1708年	覆土中	M7 PL35

遺物番号	種別	計測値(cm) 全長	火口径	雁首小口径	雁首長	吸口径	吸口小口径	吸口長	現存率(%)	出土地点	備考
第71図1	キセル	16.4	1.6	0.9	7	0.4	0.9	6.4	95	覆土中	M30 PL35

第2号墓壙（第70図）

位置　調査区中央部，C3₅₀区。

重複関係　本跡が第12号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　底面は長軸0.93m，短軸0.73mの長方形で，上面は長径1.71m，短径1.54mの楕円形で，深さは84cmである。

長径方向　N－57°－E

壁面　底面から垂直に立ち上がり，上面では外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

遺物　覆土下層～底面から，第71図9～14の寛永通宝・2のキセルが人骨に伴って出土している。

所見　本跡は，出土遺物から近世の墓壙である。

第2号墓壙出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値 径(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	現存率(%)	初鋳年 時代	西暦	出土地点	備考
第71図9	寛永通宝	2.5	1	3.8	100	江戸	1765年	覆土中	M9
10	寛永通宝	2.5	1	3.5	100	江戸	1668年	覆土中	M10
11	寛永通宝	2.5	1	3.9	100	江戸	1668年	覆土中	M11
12	寛永通宝	2.5	1	3.5	100	江戸	1668年	覆土中	M12
13	寛永通宝	2.3	1	3.1	100	江戸	1708年	覆土中	M13
14	寛永通宝	2.3	1	3.4	100	江戸	1708年	覆土中	M14

図版番号	種別	計測値(cm) 全長	火口径	胴部小口径	胴部長	吸口径	吸口小口径	吸口長	現存率(%)	出土地点	備考
第71図2	キセル	－	1.6	0.9	5.7	0.4	0.8	5.1	40	覆土中	M8　P1.35

第3号墓壙（第70図）

位置　調査区中央部，C3$_0$区。

重複関係　本跡が第12号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　底面は長軸0.72m，短軸0.63mの長方形で，上面は長軸1.79m，短軸1.46mの不整長方形で，深さは146cmである。

長径方向　N－6°－E

壁面　底面から垂直に立ち上がり，上面では外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

遺物　人の歯の他，腐食した釘が底面近くから出土している。

所見　本跡は，出土遺物及び，第76・77土坑との位置関係から見て近世の墓壙である。

第4号墓壙（第70図）

位置　調査区中央部，C3$_0$区。

重複関係　本跡が第12号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　平面形は長径0.89m，短径0.71mの楕円形で，深さは25cmである。

長径方向　N－75°－E

壁面　緩やかに外傾して立ち上がる。

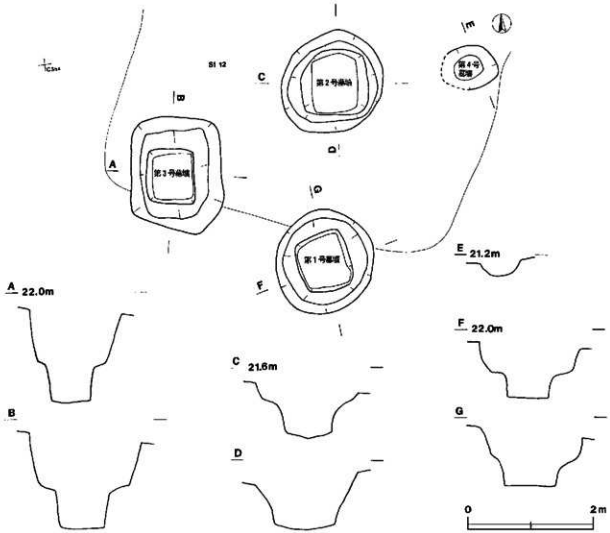
底面　皿状である。

遺物　底面から，第71図15～20の古銭が人骨に伴って出土している。

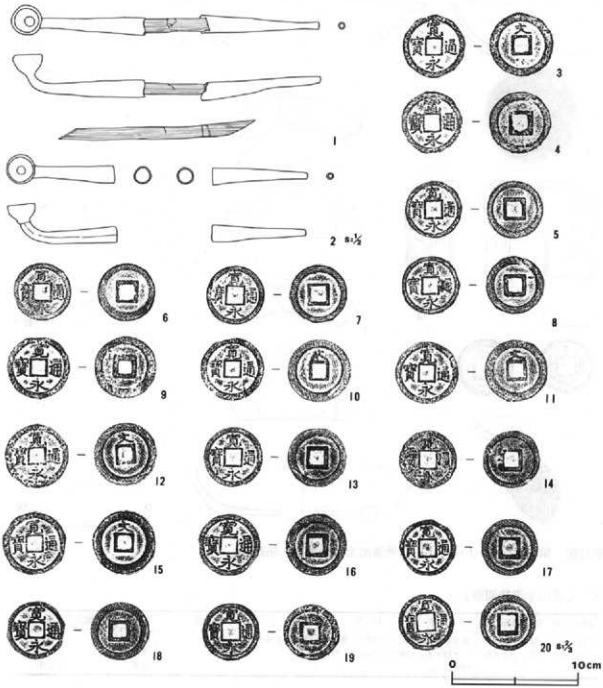
所見　本跡は，出土遺物から近世の墓壙である。

第４号墓壙出土遺物観察表

遺物番号	種別	計測値 径（cm）	厚さ（mm）	重量（g）	現存率(%)	初鋳年 時代	西暦	出土地点	備考
第71図15	寛永通宝	2.5	1	3.2	100	江戸	1668年	覆土中	M15 PL35
16	寛永通宝	2.5	1	3.4	100	江戸	1765年	覆土中	M16 PL35
17	寛永通宝	2.3	1	3.1	100	江戸	1708年	覆土中	M17 PL35
18	寛永通宝	2.3	1	2.7	100	江戸	1767年	覆土中	M18 PL35
19	寛永通宝	2.3	1	2.7	100	江戸	1737年	覆土中	M19 PL35
20	寛永通宝	2.2	[illegible]	3.5	100	江戸	1708年	覆土中	M20 PL35



第70図　第１・２・３・４号墓壙実測図



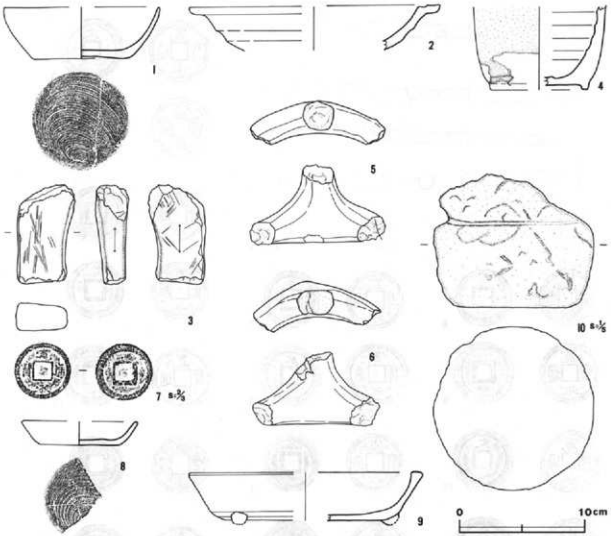
第71図　第1・2・4号墓壙出土遺物実測・拓影図

7　溝

当遺跡からは12条の溝が検出されている。時期決定の資料に恵まれず，構築時期や性格については不明な点が多い。以下，検出された溝の特徴や遺物について記載する。

第1号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 1	坏 土師器	A [12.3] B 4.1 C 7.6	底部からロ縁部片。平底で，体部は内彎気味に外傾する。	体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。	長石，雲母， 針状鉱物 にぶい橙 普通	P140，60% P L 25 覆土中



第72図　第1・2・5・7・9・10・11号溝出土遺物実測・拓影図

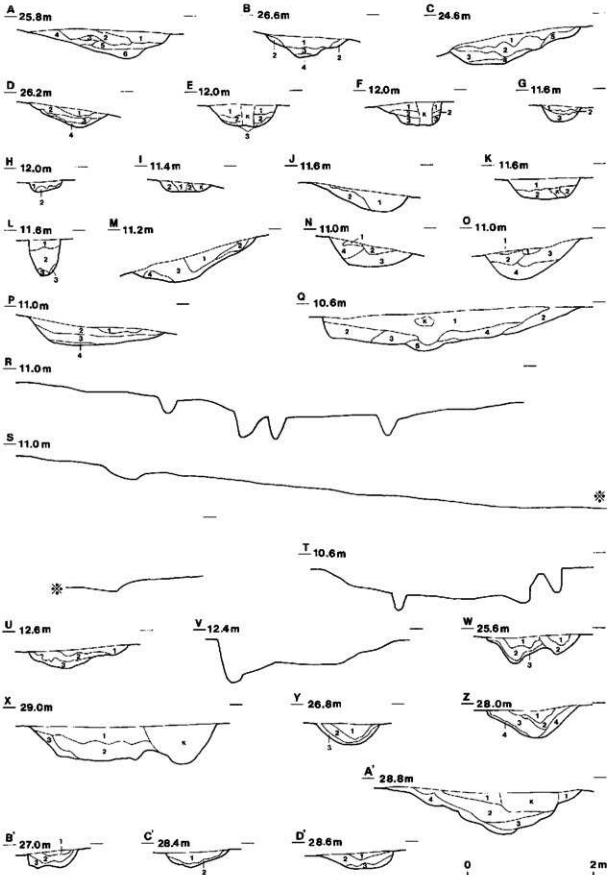
第7号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 2	浅鉢 陶器	A [20.0] B (3.5)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に外傾する。口縁部は外反し上位に稜を持つ。	体部外面横ナデ。	砂粒 浅黄色 普通	P141, 5% P L.25 覆土中

図版番号	器種	計測値(cm)			重量(kg)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第72図 3	砥石	(7.9)	(4.5)	(2.1)	(124.8)	—	砂岩	覆土中	Q30 P L.33

第9号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 4	高台付小皿 陶器	B (6.7) D [7.8] E 0.5	底部から体部片。平底で，体部は内彎気味に外傾する。高台は直立する。	体部内・外面横ナデ。	砂粒 黄褐色 普通	P142, 20% P L.25 覆土中



第73図　第1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12号溝土層・断面実測図

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大高	孔径(m)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
第72図 6	不明土製品	(10.7)	(3.4)	(6.3)		(117.9)		表土中	P143 PL25
6	不明土製品	(10.1)	(4.0)	(5.9)	—	(115.1)	—	表土中	P144 PL25

図版番号	種別	計測値 区(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	残存率(%)	初鋳年	出土地点	備考
第72図 7	寛永通宝	2.3	1	2.2	100	西暦 1708年	表土中	M21 PL35

第10号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 8	皿 土師質土器	A(9.2) B 9.2 C(6.3)	底部から口縁部内。平底。	口縁部・体部内・外面横ナデ。 底部糸切り。	砂粒 にぶい橙 普通	P147,209 PL25 表土中

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(kg)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
第72図 10	五輪塔	(17.9)	21.5	21.7	(0.32)	—	花崗岩	表土下層	G37, 墓地 P133

第11号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 9	火鉢 瓦質土器	A(18.5) B(4.2) C 0.5	胴部から体部へ。胴部は逆台形で、体部は外側に立ち上がる。口縁部は肥厚する。	体部内・外面横ナデ。	砂粒、スコリア 明灰黄色 普通	P148,109 PL25 表土中

大経遺跡溝中層解説

第1号溝(A)

1 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
2 暗褐褐色 ローム粒子多量
3 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子微量(硬化層)
4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック少量、炭化物微量
5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量、スコリア粒子微量 (硬化層)
6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック・炭化粒子少量 (硬化層)

第1号溝(B)

1 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック中量
3 褐褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、炭化粒子微量 (硬化層)
4 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

第1号溝(D)

1 極暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大・中ブロック少量、炭化物微量 (硬化層)
4 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

第1号溝(C)

1 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
2 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量(硬化層)
3 赤褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量
4 極暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量、ローム大ブロック少量
5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック少量

第2号溝(E)

1 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、焼土中ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土大ブロック・炭化物・炭化粒子少量
2 極暗褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子微量
3 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック少量、焼土粒子微量

第2号溝(F)

1 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、焼土中ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土大ブロック・炭化物・炭化粒子少量
2 赤褐褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子微量
3 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック少量、焼土粒子微量

第3号溝（G）
1 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス粒子少量，炭化物少量
2 暗 褐 色 鹿沼粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物少量
3 黒 褐 色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・鹿沼粒子中量，炭化物・鹿沼大・中・小ブロック少量

第3号溝（H）
1 暗 褐 色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・黒色土ブロック中量，ローム大ブロック少量
2 褐 色 ローム大・中ブロック中量，ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土ブロック少量

第4号溝（I）
1 明 褐 色 ローム中ブロック・鹿沼粒子中量，ローム大・小ブロック・ローム粒子・鹿沼小ブロック少量，炭化物微量
2 橙 色 ローム大・中ブロック・鹿沼小ブロック・鹿沼粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量

第5号溝（K） 1層は中世遺構，2層は中近世土坑の覆土
1 にぶい黄褐色 ローム粒子多量，ローム中・小ブロック・鹿沼パミス小ブロック中量，焼土粒子・炭化物少量
2 黄 褐 色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス粒子・鹿沼パミス大ブロック多量

第5号溝（J）
1 にぶい黄褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス粒子多量，鹿沼パミス小ブロック中量，焼土粒子・炭化物微量
2 にぶい黄褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス粒子・鹿沼パミス小ブロック多量，砂粒子量，ローム中ブロック・鹿沼パミス大ブロック少量，炭化粒子微量

第6号溝（L）
1 褐 色 砂性土
2 褐 色 鹿沼パミス中量，ローム粒子少量
3 明 褐 色 鹿沼パミス層

第7号溝（M）
1 暗 褐 色 ローム粒子少量，鹿沼パミス微量
2 褐 色 鹿沼パミス少量，ローム粒子・炭化物微量
3 暗 褐 色 ローム粒子・鹿沼パミス微量
4 暗 褐 色 褐色砂粒少量

第7号溝（N）
1 暗 褐 色 ローム粒子少量，鹿沼パミス微量
2 褐 色 褐色砂粒中量，鹿沼パミス少量，ローム粒子微量
3 暗 褐 色 ローム粒子少量，ローム粒子微量
4 暗 褐 色 鹿沼パミス少量，ローム粒子・鹿沼パミス微量

第7号溝（P）
1 暗 褐 色 ローム粒子・鹿沼パミス少量
2 暗 褐 色 鹿沼パミス少量，ローム粒子微量
3 暗 褐 色 鹿沼パミス・褐色砂粒少量，ローム粒子微量
4 暗 褐 色 ローム粒子・鹿沼パミス微量

第7号溝（O）
1 暗 褐 色 鹿沼パミス少量
2 暗 褐 色 ローム粒子・鹿沼パミス微量
3 褐 色 鹿沼パミス・褐色砂粒少量
4 暗 褐 色 ローム粒子・鹿沼パミス微量

第8号溝（Q）
1 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス多量，ローム中ブロック・鹿沼パミス小ブロック中量，炭化物・鹿沼パミス・褐少量，焼土・スコリア粒子微量
2 暗 褐 色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量，鹿沼パミス少量，炭化・スコリア粒子微量
3 極暗褐色 ローム大・中・小ブロック中量，炭化物・鹿沼パミス・褐少量，焼土・スコリア粒子微量
4 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック・鹿沼パミス少量，焼土・炭化粒子微量
5 暗 褐 色 ローム粒子中量，ローム大・中・小ブロック・鹿沼パミス・スコリア粒子少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量

第9号溝（U）
1 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック・鹿沼パミス中量，ローム大ブロック少量，炭化物微量
2 褐 色 ローム小ブロック・粒子多量，ローム中ブロック・鹿沼パミス・鹿沼パミス小ブロック・中量，鹿沼パミス中ブロック少量，炭化物微量
3 黒 褐 色 ローム粒子・鹿沼パミス小ブロック・粒子多量，ローム大・中・小ブロック・鹿沼パミス中ブロック少量

第10号溝（W）
1 暗 褐 色 ザラメ状粒子多量，ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化物微量
2 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック・ザラメ状粒子中量，ローム大ブロック少量，炭化物微量
3 褐 色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量，ザラメ状粒子少量

第10号溝（Y）
1 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，炭化物微量
2 暗 褐 色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック少量，炭化物微量
3 褐 色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

第10号溝（Z）
1 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック・炭化物少量
2 暗 褐 色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，炭化物微量
3 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック少量，炭化物微量
4 褐 色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化粒子多量，ローム大ブロック中量，炭化物微量

第10号溝（X）
1 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム大・中ブロック中量
2 黒 褐 色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック少量，炭化物微量
3 暗 褐 色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

第11号溝（W'）
1 暗 褐 色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
2 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，炭化物微量
3 褐 色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

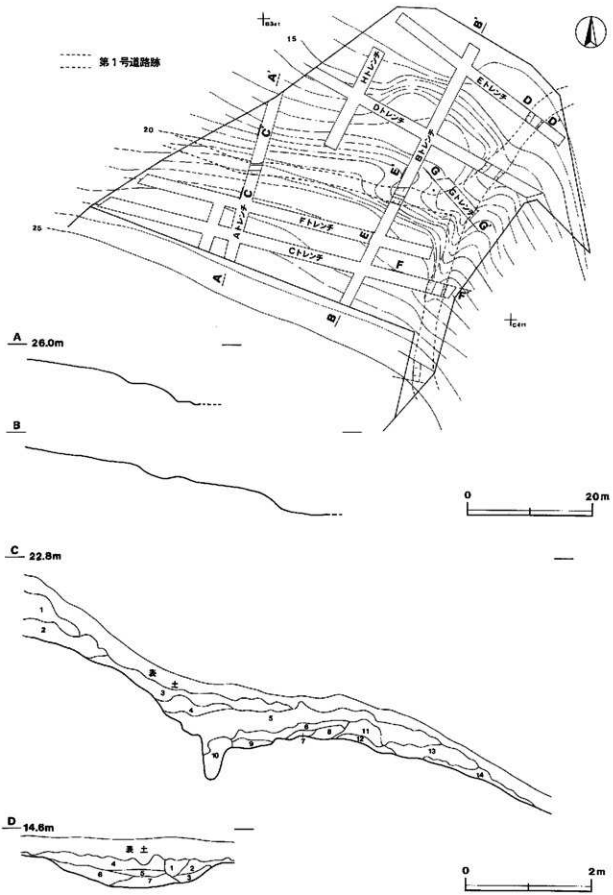
第12号溝（C'）
1 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック中量，炭化物微量
2 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック少量，炭化物・スコリア粒子多量

第12号溝（D'）
1 暗 褐 色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，炭化物微量
2 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム大・中ブロック中量，炭化物・スコリア粒子微量
3 褐 色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

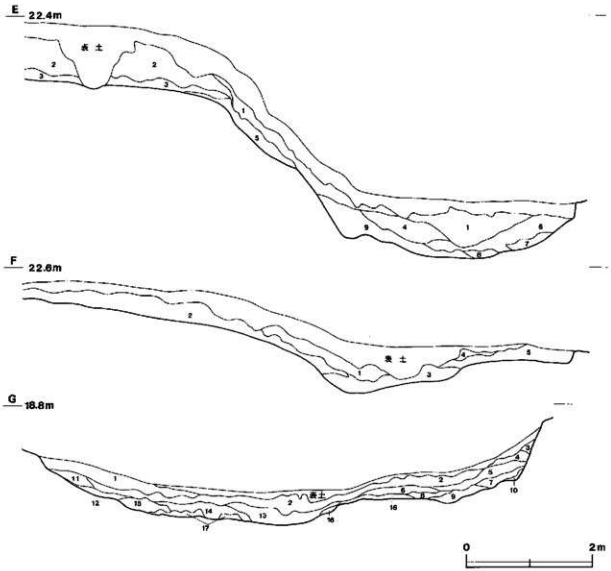
第12号溝（A'）
1 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，焼土粒子・炭化物微量
2 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック少量，炭化物微量
3 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック微量
4 褐 色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

表５大畑遺跡溝一覧表

遺構番号	位置	方向	形状	規模 長さ(m)	規模 上幅(m)	規模 下幅(m)	規模 深さ(m)	断面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
1	C１区	西 → 東	直進状	72.0	1.03	0.40	32	外傾	緩やかな「U」字状	自然	土師器片	SI1→SD10・11→本跡
2	B４区	西 → 東	直進状	17.5	1.20	0.62	37	外傾	緩やかな「U」字状	人為		
3	B５区	北西→南東	直進状	19.7	0.62	0.38	26	外傾	緩やかな「U」字状	人為		SD７→本跡
4	D５区	北西→南東	直進状	16.0	0.76	0.52	16	外傾	平坦	人為		SD７→本跡
5	B５区	北西→南東	直進状	7.2	1.50	0.37	33	外傾	緩やかな「U」字状	人為		SD７→本跡
6	B５区	北 → 南	くの字状	3.3	0.79	0.50	20	外傾	緩やかな「U」字状	人為		SD７・本跡
7	B５区	東 → 西	直進状	19.5	1.61	0.53	47	外傾	緩やかな「U」字状	人為		本跡→SD3・4・5・6
8	H４区	北東→南西	直進状	15.0	3.43	2.50	59	緩傾	緩やかな「U」字状	自然		SK9A→本跡→SK9B
9	C３区	北東→南西	直進状	12.0	1.65	0.72	29	外傾	平坦	人為		本跡→第１号炭焼窯
10	D２区	北 → 南	直進状	69.5	1.60	0.65	32	外傾	緩やかな「U」字状	自然	古墳時代(須恵器)	SK95・SD１→本跡
11	D２区	北東→ 西	くの字状	50.0	0.85	0.50	43	外傾	緩やかな「U」字状	自然		SK96・SD１→本跡
12	E１区	西 → 東	直進状	42.0	2.30	0.70	65	外傾	緩やかな「U」字状	自然	陶器片	本跡→SD1



第74図　第１号道路跡実測図



第75図　第１号道路跡実測図

8　道路跡

当遺跡からは，道路跡が１条検出されている。以下，検出された道路跡について記載する。

第１号道路跡（第74・75図）

位置　調査区北東部の傾斜地，C3$_{ae}$区からB2$_{ef}$区。

規模と形状　全長（115m），調査できた範囲で上幅2.4～3.5m，下幅0.5～1.3m，深さ0.45～1.0mである。断面は緩やかな「U」字状である。

方向　調査区北東部から南東方向に延び，斜面部C3$_{ae}$区で南と西方向に分岐する。南方向へは斜面に直行し（C3$_{ef}$区で調査区外へ延びていく。西方向へは斜面と平行しB2$_{ef}$区で調査区外へ延びていく。

覆土

Aトレンチ土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・小礫微量
2 黒色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
3 黒褐色 ローム粒子中量，ローム中・小ブロック・小礫微量
4 黒色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・焼土粒子微量
5 黒褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，ローム大ブロック・焼土粒子微量
6 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量
7 暗黒褐色 ローム粒子多量
8 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック中量
9 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
10 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量，鹿沼パミス粒子・鹿沼パミス小ブロック中量
11 黒褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
12 黒褐色 ローム粒子多量，炭化物微量
13 黒褐色 ローム粒子少量，焼土中ブロック微量
14 暗褐色 ローム粒子多量

Bトレンチ土層解説

1 黒褐色 ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量，炭化粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子中量，ローム大・中・小ブロック・焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化粒子微量
3 黒色 ローム粒子少量，ローム中・小ブロック・焼土粒子微量
4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
5 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量，ローム大・小ブロック少量，炭化粒子微量
6 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック少量，焼土・炭化粒子微量
7 暗褐黒色 ローム粒子中量，ローム大・小ブロック少量，焼土・炭化粒子微量
8 暗褐黒色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土・炭化粒子微量
9 黒褐色 ローム粒子中量，ローム中・小ブロック・焼土・炭化粒子微量

Cトレンチ土層解説

1 暗褐黒色 ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量，焼土・炭化粒子微量
2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
4 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，ローム大ブロック・焼土粒子微量
5 黒褐色 ローム粒子多量，ローム大・中ブロック・炭化粒子少量

Eトレンチ土層解説

1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック・鹿沼パミス粒子少量
2 極暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，ローム大ブロック・炭化物・鹿沼パミス粒子微量
3 暗褐色 鹿沼パミス粒子多量，ローム粒子・鹿沼パミス小ブロック中量，ローム小ブロック・鹿沼パミス大ブロック少量
4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス粒子多量，鹿沼パミス大ブロック中量，ローム大・中ブロック少量
5 黒褐色 ローム土・小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック・鹿沼パミス粒子・鹿沼パミス中ブロック少量，炭化物微量
6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，鹿沼パミス粒子微量
7 極暗褐色 ローム粒子多量，粘土中ブロック中量，鹿沼パミス粒子・炭化物少量

Gトレンチ土層解説

1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム大・中ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量
2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック・流土粒子・炭化物・炭化粒子・砂少量
3 極暗褐色 ローム粒子多量，ローム中・小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量
4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック・炭化粒子少量，粘土中ブロック・白色粒子微量
5 黒褐色 ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量，ローム大ブロック・炭化・白色粒子少量
6 黒褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，炭化粒子微量
7 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック・白色粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック微量
8 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土・炭化粒子微量
9 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土・炭化粒子少量
10 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，粘土中ブロック少量，炭化粒子・粘土小ブロック微量
11 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム大ブロック・砂少量
12 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，白色粒子少量
13 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック・焼土粒子・白色粒子少量，炭化粒子・粘土中ブロック微量
14 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・粘土中・小ブロック少量，炭化粒子微量
15 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・粘土大・小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
16 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量（砂微量）
17 にぶい黄褐色 粘土大・中ブロック多量，粘土小ブロック中量，ローム粒子少量（変化面）

所見　本跡は，底面に硬化面があり，道路として利用されたものと思われる。遺物はなく，正確な時期は不明である。

9　炭焼窯跡

当遺跡からは，炭焼窯跡が4基検出されている。以下，遺構番号順に記載する。

第1号炭焼窯跡（第76図）

位置　調査区北部，C_{3_0}区。

規模と平面形　長軸（3.98）m，短軸（2.53）mであるが，南西部が調査区外であるため正確な平面形は不明である。

主軸方向　N－138°－E

壁　壁高は32cm前後で，垂直に立ち上がり，一部外傾して立ち上がる。壁面は厚さ10cm前後の煉瓦により補強され熱を受け赤変している。

炭化室　平面形は長径2.95m，短径1.80mの楕円形で，天井部は崩落している。底面は平坦で，径10cm程の礫が敷き詰められ，焚口部付近は熱を受け赤変している。

焚口部　幅75cm，長さ62cmで，底面は粘土で熱を受け赤色硬化している。閉塞部は幅20cm，長さ20cmで，煉瓦により構築されている。

煙道部　奥壁中央に位置し，外傾して立ち上がる。

前庭部　北西部が調査区外のため正確な平面形は不明であるが，長径（2.25）m，短径（1.46）mの楕円形であると思われ，炭化材が散在している。

覆土　炭化室は，焼土を多量に含む明赤褐色土と炭化物を多量に含む黒色土の2層で，煙道部は焼土・炭化物を多量に含む赤褐色土からなる人為堆積である。

土層解説

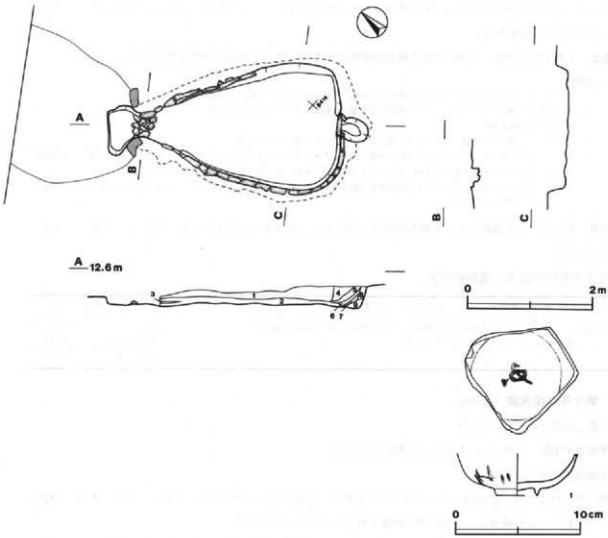
1　明赤褐色　焼土大・中・小ブロック・焼土粒子・粘土大ブロック多量，炭化物中量
2　黒　　色　炭化材・炭化物・炭化粒子多量
3　灰 褐 色　灰多量，焼土大ブロック・炭化物少量
4　暗赤褐色　焼土大・中・小ブロック・焼土粒子多量，ローム粒子中量，炭化物少量
5　黒 褐 色　ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子多量，焼土中ブロック中量，焼土大ブロック少量
6　黒　　色　炭化物多量，ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量
7　暗赤褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
8　黒 褐 色　炭化物・炭化粒子多量，ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼土粒子少量
9　暗赤褐色　ローム粒子・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子多量，ローム中・小ブロック中量，炭化物少量

遺物　覆土中から，第76図1の陶器の皿片のほか，鉄片，碗片が出土している。

所見　本跡は，開き込み調査及び形状から，戦前の構築で，戦後まで使用されていたものである。

第1号炭焼窯跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第76図 1	皿	B（3.3） D 3.3 H 0.6	底部から口縁部片。平底で高台は直立する。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部大・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P155，30% P L 25 須恵器



第76図　第1号炭焼窯跡・出土遺物実測図

第2号炭焼窯跡（第77図）

位置　調査区中央部，C2g区。

規模と平面形　長軸8.38m，短軸4.97mの不定形である。

主軸方向　N－75°－W

壁　壁は削平され，全容は不明であるが，壁高が10cm前後で外傾して立ち上がる。壁面は，山砂と粘土により構築されていたものと思われ，熱により赤色硬化している。

炭化室　平面形は長径1.65m，短径1.33mの楕円形で，天井部は崩落している。底面は皿状で，熱を受け赤変している。焚口部付近は特に熱を受け赤色硬化している。

焚口部　平面形は長径1.13m，短径0.80mの楕円形で，長径方向はN－18°－Wである。閉塞部は幅20cm，長さ30cmの溝状である。

煙道部　奥壁中央部に位置し，外傾して立ち上がる。

前庭部　平面形は長軸3.5m，短軸2.4mの長方形で，底面は平坦である。北東壁は削平されている。焚口部から南西方向に長軸1.7m，短軸1.4mの長方形の張り出しを持つ。焚口部北東部に，窪みがあり，閉塞部に使用した粘土を捏ねるためのものと考えられる。

ピット　ほぼ全周するように，16か所のピットが確認されている。直径15～30cmの円形で，深さは20～40cmの穴穴と思われる。

覆土　上面が明平され，全体の層位の様相は不明であるが，焼土を多量に含む赤褐色土からなる。

上層解説

1　赤　褐　色　焼土大・中・小ブロック・焼土粒子多量，山砂粘土ブロック少量，炭化物微量
2　暗赤褐色　焼土大・中・小ブロック・焼土粒子多量，山砂粘土ブロック・炭化物少量
3　赤　褐　色　焼土層
4　暗　褐　色　焼土粒子多量，ローム粒子，焼土中・小ブロック中量，炭化物少量
5　褐　　色　ローム小ブロック・コーム粒子多量，ローム大・中ブロック・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子少量，炭化物微量
6　赤　褐　色　ローム粒子・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子多量，炭化物中量，ローム人ブロック少量
7　黒　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子多量，コーム小ブロック・焼土小ブロック中量，ローム中ブロック・焼土人・中ブロック少量

所見　本跡は，出土遺物がなく正確な時期は不明である。全周すると思われるピットから，上屋を持つものと思われる。

第2号炭焼窯跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第77図 1	鉢	A(11.2) B(2.1)	底部から口縁部片。平底で体部は外傾して立ち上がる。	体部外面横ナデ。	良不 明赤褐色 普通	P132, 25% PL25 粗土口

第3号炭焼窯跡（第78図）

位置　調査区南西部，D1s区。

規模と平面形　長軸7m，短軸2mの楕円形である。

主軸方向　N－97°－W

壁　壁高は炭化室では約76cm で，垂直に立ち上がり，前庭部では，約75cm で，外傾して立ち上がる。壁面は山砂と粘土により構築され，瓦片等で補強されていたものと思われる。

炭化室　平面形は長径2.47m，短径1.48mの楕円形で，天井部は崩落している。底面は平坦で硬くしまっている。

焚口部　長軸約80cm，短軸約70cmの方形で，底面は皿状である。閉塞部は幅42cm，長さ34cm で，両袖を粘土で構築し瓦等で補強している。

煙道部　奥壁中央部に位置し，ほぼ垂直に立ち上がる。

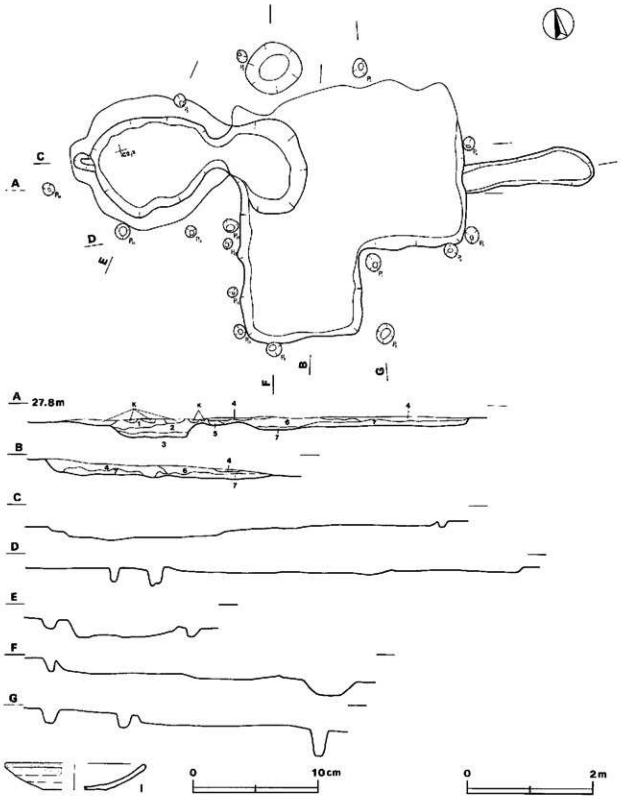
前庭部　平面形は長径2.65m，短径2.15mの楕円形で，底面は皿状で，東部はスロープ状に立ち上がる。北壁には，閉塞部に使用する粘土を捏ねるための場所と思われる窪みがある。

覆土　8層からなる人為堆積で，1・5層は崩落後の堆積，2層は壁及び天井部の崩落土，3層は炭の堆積である。6・7層は使用中の堆積及び踏み固めで，特に7層はよく硬化している。

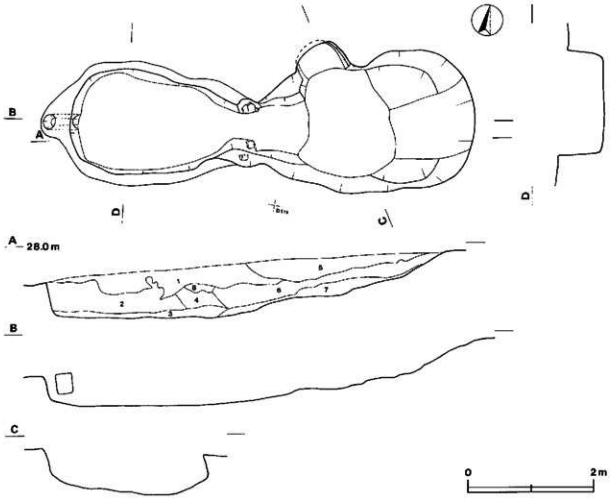
上層解説

1　褐　　色　ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量，焼土大・中ブロック・炭化物・鹿沼パミスブロック・山砂粘土ブロック中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量
2　明黄褐色　山砂粘土ブロック多量，焼土層（明赤褐色）多量，土砂層多量
3　黒　　色　炭化物多量
4　赤　褐　色　焼土大・中・小ブロック・焼土粒子・山砂粘土ブロック多量
5　灰　　色　ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量，炭化物中量，鹿沼パミスブロック少量，焼土人・中ブロック微量
6　黒　褐　色　ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土人・中・小ブロック・焼土粒子・炭化物多量，ローム大ブロック・鹿沼パミスブロック・灰土ブロック少量
7　褐　　色　ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量，焼土小ブロック・鹿沼パミスブロック中量，焼土人・中ブロック少量
8　明赤褐色　壁構築材崩落ブロック

所見　本跡は，出土遺物がなく正確な時期は不明である。



第77図　第２号炭焼窯跡・出土遺物実測図



第78図　第３号炭焼窯跡実測図

第３号炭焼窯跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第四図 1	坏 須恵器	A [32.0] B 15.3 D [13.8] X 1.7	底部から口縁部へ。平底で，立台は直立する。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は大きく外反する。	体部内・外面横ナデ。	長石 暗灰黄色・灰白色 普通	P149. 25% P1.26 覆土中
2	鉢 須恵器	A [33.6] B (5.5)	口縁部片。平底で体部は内傾し，口縁部は外反する。	体部内・外面横ナデ。	灰褐色 普通	P153. 5% P1.25 覆土中

第４号炭焼窯跡（第80図）

位置　調査区南西部，El$_{g8}$区。

規模と平面形　長径5.62m，短径２mの楕円形であるが，前庭部は削平され不明である。

長径方向　N－11°－W

壁　壁高は60cm前後で，垂直に立ち上がる。山砂と粘土により構築され，瓦等で補強していたと思われる。

炭化室　平面形は長径3.45m，短径1.72mの楕円形で，底面は平坦である。

焚口部　長径1.67m，短径1.30mの楕円形で，底面は皿状で，北部はスロープ状の傾斜を持つ。西部には，閉塞に使われる粘土を捏ねる場所と思われる窪みがある。閉塞部の掘り方は幅60cm，長さ45cmである。

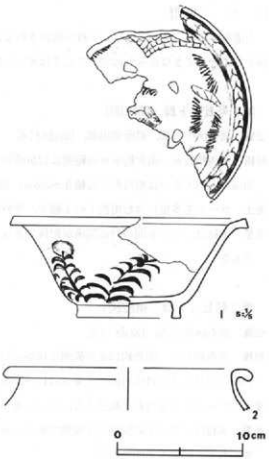
煙道部　奥壁中央部に位置し，垂直に立ち上がる。

覆土　6層からなる人為堆積で，1層は崩落後の堆積土，2層は天井部及び壁面の崩落層，3層は炭の残りと思われる。

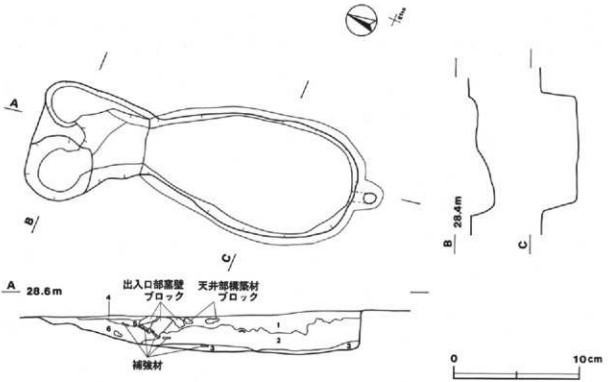
土層解説

1　褐　　色　ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量，焼土大ブロック・炭化物・鹿沼パミスブロック少量
2　明黄褐色　山砂・粘土多量，炭化物少量
3　赤　褐　色　山砂・粘土多量，炭化物少量
4　黒　　色　炭化物多量
5　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物炭化粒子少量，焼土中ブロック微量
6　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック焼土粒子・炭化粒子多量，ローム中ブロック・焼土中ブロック・炭化物中量，ローム大ブロック・焼土大ブロック少量

所見　本跡は，遺物がなく正確な時期は不明である。



第79図　第3号炭焼窯跡出土遺物実測図



第80図　第4号炭焼窯跡実測図

10　ピット群

当遺跡からは，2か所のピット群が検出されている。建物あるいは柵列等の可能性があるが，対応関係を把握することができなかったので，ここではピット群として扱う。以下，その特徴について記載する。

第1号ピット群（第81図）

位置　調査区中央部，斜面突出部，B3$_{18}$区付近

規模　東西約12m，南北約8mの範囲に12か所のピット（P_1～P_{12}）を確認した。ピットの平面形は，径30～50cmの円形あるいは楕円形と長軸3～3.5m，短軸40cm程の溝状で，深さは15～35cmである。

覆土　ロームを多量に含む褐色土の1層で，埋め戻しと思われる。

所見　本跡は，ピット間の対応関係が把握できない。また，出土遺物がないため，正確な時期及び性格は不明である。

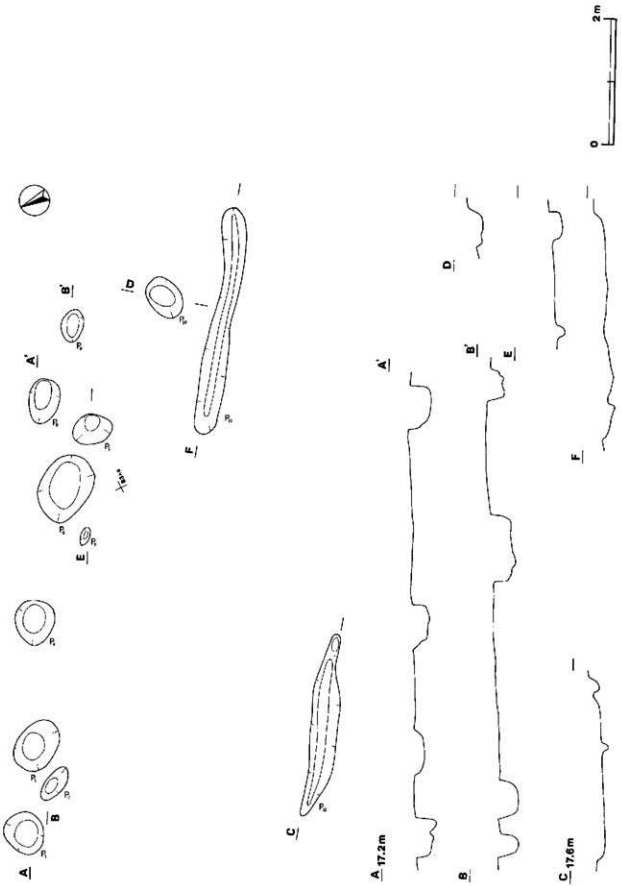
第2号ピット群（第82図）

位置　調査区南東部，D2$_{14}$区付近

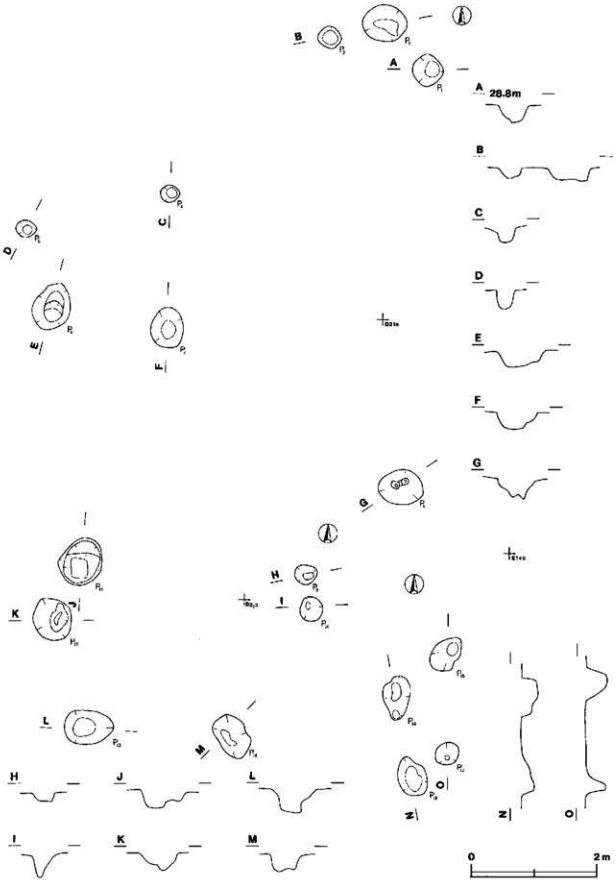
規模　東西約17m，南北約12mの範囲に18か所のピット（P_1～P_{18}）を確認した。ピットの平面形は，径25～70cmの円形あるいは楕円形で，深さは17～35cmである。

覆土　ローム粒子を含む黒褐色土と，ロームを多量に含む暗褐色土の2層からなる自然堆積である。

所見　本跡は，ピットの間隔が不規則であり，対応関係も把握できないため性格は不明である。また，出土遺物がなく，時期も不明である。



第81図　第１号ピット群実測図



第82図　第２号ピット群実測図

11　不明遺構

当遺跡からは，不明遺構が2基確認されている。以下，遺構番号順に記載する。

第1号不明遺構（第84図）

位置　調査区北部，A4$_{9}$区～B4$_{0}$区。

重複関係　本跡が第1号井戸及び第1～4号方形竪穴遺構の上面を削平している。

規模と平面形　北西部及び南東部が調査区外のため正確な平面形は不明であるが，長軸（8.50）m，短軸（6.00）mの「長方形」の範囲に硬化面が確認され，その中にピットが集中している。

長軸方向　N－43°－W

ピット　89か所（P　～P$_{89}$）。径20～50cmの円形及び楕円形で，深さは15～40cmである。長方形の範囲に配置されているが，対応関係及び性格は不明である。

炉　炉跡と思われる焼土と灰の範囲が2か所で確認されている。第1号炉はほぼ中央部に位置し，長軸1.75m，短軸1.06mの不定形で，鹿沼パミス土を貼り付けて構築している。掘り方は，確認面から約30cm皿状に掘り窪められている。第2号炉は第1号炉の北東部に位置し，長軸1.20m，短軸0.93mの不定形で，底面は熱を受けて赤色硬化し，その周囲には灰による高まりがある。

炉覆土土層解説
第1号炉

1	暗褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック・鹿沼パミス粒子中量，ローム中ブロック・鹿沼パミス小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス大・中ブロック微量
2	暗褐色	ローム粒子・焼土粒・小ブロック・焼土粒子・鹿沼パミス粒子中量，ローム中・小ブロック・焼土大ブロック・鹿沼パミス大・中・小ブロック少量，炭化粒子微量
3	褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス粒子多量，鹿沼パミス小ブロック中量，ローム大ブロック・鹿沼パミス大・中ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4	にぶい赤褐色	灰多量，焼土小ブロック・焼土粒子多量，ローム粒子・焼土大・中ブロック・鹿沼パミス粒子少量
5	暗赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子多量，焼土中ブロック中量，焼土大ブロック・鹿沼パミス大・中・小ブロック・鹿沼パミス粒子・小礫少量
6	暗褐色	鹿沼パミス粒子・砂粒多量，焼土小ブロック・焼土粒子・鹿沼パミス大・中・小ブロック・小礫少量

覆土　硬化面の上層の様相は，ロームを多量に含む暗褐色土で，人為堆積である。

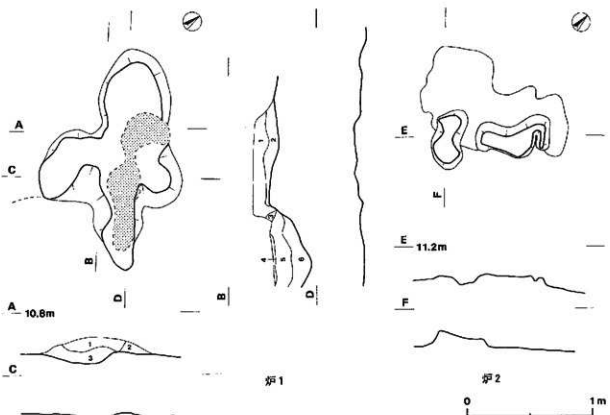
上層解説

1	黒褐色	ローム粒子・鹿沼パミス粒子中量，ローム土・小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子多量，鹿沼パミス粒子中量，ローム中・小ブロック・鹿沼パミス中・小ブロック少量，ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・鹿沼パミス大ブロック微量
3	暗褐色	ローム粒子中量，ローム大・中・小ブロック・鹿沼パミス粒子少量，炭化粒子微量
4	褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック少量，スコリア粒子微量
5	褐色	ローム粒子多量，鹿沼パミス粒子中量，ローム中・小ブロック少量
6	暗褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・鹿沼パミス粒子・小礫少量
7	褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック・鹿沼パミス粒子中量，ローム中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・鹿沼パミス小ブロック・礫少量
8	黒褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・炭化物・鹿沼パミス中・小ブロック・鹿沼パミス粒子少量，炭化粒子微量
9	褐色	ローム粒子・鹿沼パミス粒子多量，ローム中・小ブロック・鹿沼パミス中・小ブロック・小礫少量，鹿沼パミス大ブロック微量
10	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・赤沼パミス粒子多量，スコリア粒子中量，ローム中ブロック・鹿沼パミス中・小ブロック・小礫少量
11	極暗褐色	ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム中ブロック・スコリア粒子・小礫少量，ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物微量
12	黒褐色	ローム粒子多量，ローム中・小ブロック・鹿沼パミス粒子少量，炭化粒子・砂粒微量
13	褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック・鹿沼パミス粒子中量，ローム中ブロック・鹿沼パミス中・小ブロック・灰少量，焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス大ブロック微量
14	明褐色	鹿沼パミス小ブロック・鹿沼パミス粒子多量，赤沼パミス中ブロック中量，ローム粒子・鹿沼パミス大ブロック少量，炭化物微量
15	褐色	ローム粒子・鹿沼パミス大・中・小ブロック・鹿沼パミス粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土小ブロック・炭化粒子微量
16		灰層

17 褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子・軽石パミス大・中・小ブロック・スコリア粒子微量
18 暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム大ブロック微量
19 黒 褐 色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量，炭化粒子微量
20 極暗褐色　ローム粒子中量，ローム中・小ブロック・軽石パミス粒子少量
21 黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，炭化粒子・軽石パミス粒子少量，炭化物・スコリア粒子微量
22 暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック・軽石パミス粒子少量，ローム大ブロック・炭化物微量
23 黒 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物　擂鉢片1点，土師質土器片1点が覆土中から出土している。

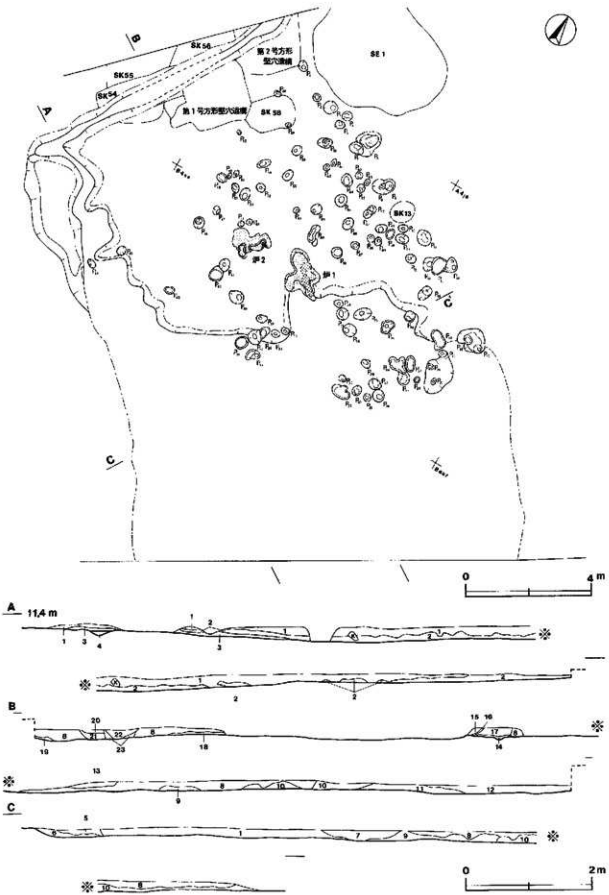
所見　本跡は，硬化面とピットからなるが，ピットの対応関係が不明瞭であるため性格は不明である。近世の住居跡である可能性も考えられる。



第83図　第1号不明遺構炉1・炉2実測図

第1号不明遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 1	擂鉢 土師質一括	口25.0 底(5.3)	口縁部片。口縁部は外側して立ち上がる。	体部内・外立櫛ナデ。内面に4本1単位の櫛目。	長石，外状雲母 灰黄褐色 普通	P119，5% P125 覆土中



第84図　第1号不明遺構実測図

第２号不明遺構（第85図）

位置　調査区北部，B4d区。

規模と平面形　平面形は長径5.77m，短径3.00mの不整楕円形で，深さは30～50cmで，底面には凹凸がある。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

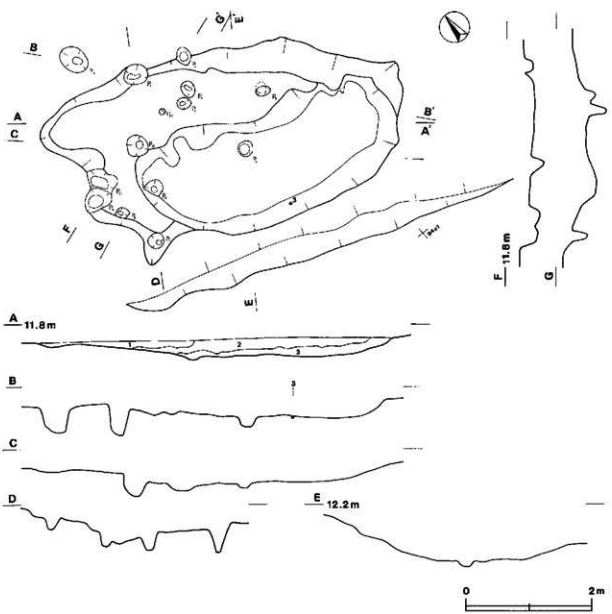
長径方向　N－53°－W

ピット　14か所（P_1～P_{14}）。長径25～50cm，短径17～37cmの円形及び楕円形で，深さは15～50cmである。柱穴とは考えにくく，性格は不明である。

覆土　ローム，鹿沼パミスを含む暗褐色土の３層からなる人為堆積である。

土層解説

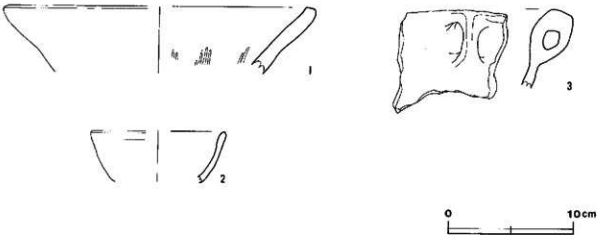
1　暗　褐　色　ローム粒子・鹿沼パミス・黒色土粒少量
2　暗　褐　色　ローム粒子・鹿沼パミス・黒色土ブロック少量
3　褐　　色　褐色砂粒少量



第85図　第２号不明遺構実測図

遺物　流れ込みと思われる弥生土器片，土師質土器片が覆土中から出土している。第85図３は，内耳鍋の口縁部片で，南部床面直上から出土している。

所見　木跡からは時期を特定できる出土遺物がなく，形状からみても時期や性格は不明である。



第86図　第１・２号不明遺構出土遺物実測図

第２号不明遺構出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 2	坏 土師器	A(10.8) B(4.1)	体部・口縁部片。体部はわずかに内彎しながら外傾する。	体部内・外面横ナデ。	長石・石英・スコリア・雲・普通	P120 20% 覆土中 PL35
3	内耳鍋 土師質土器	B(8.1)	口縁部片。体部から口縁部くの字状に外傾して立ち上がる。	体部・口縁内外面横ナデ。	石英・砂粒・スコリア・灰褐色 普通	P121 10% 覆土中 PL35

12　旧石器時代の遺物

当遺跡における旧石器時代の調査は，$D2_{e2}$を基点とし，南に16m，東に４ｍ×４ｍの４つのグリットを設定し調査した。その後，遺物が出土した地点を中心に拡張し第５層まで調査を進めた。

調査の結果，石器等の遺物が129点出土している。これらの遺物は，ほとんどが１か所から集中して出土しており，調査区中央部の標高約28ｍの平坦な台地上に位置する。以下，接合資料及び主な石器について記述し，他は一覧表に記載する。

第１号石器集中地点

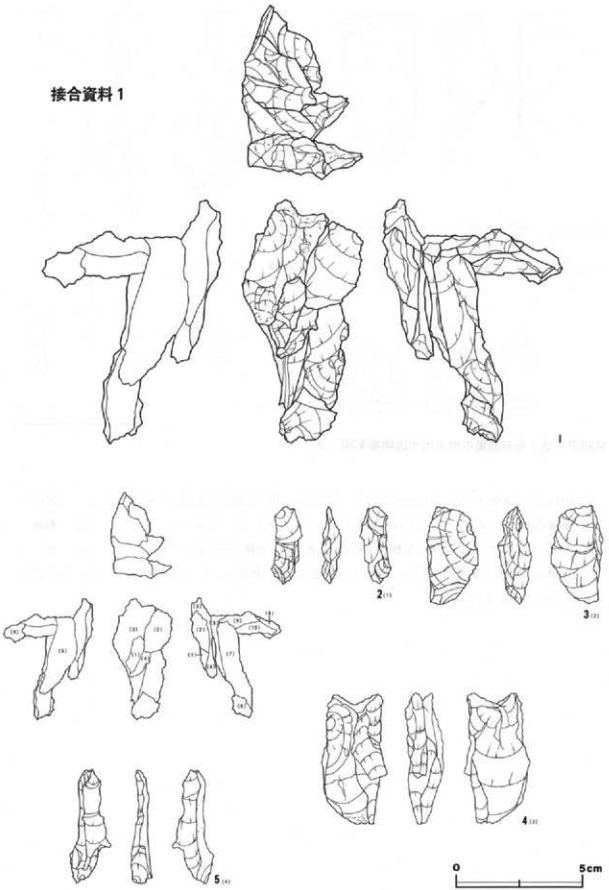
位置　調査区の中央部，$D2_{d2}$区を中心に出土している。出土遺物の平面分布及び垂直分布については第94・95図に示したとおりである。

規模　石器集中地点は，$D2_{d2}$区を中心に北東方向に 5.5m，北西方向に４ｍの楕円形の範囲である。北東部の礫石が出土している地点周辺が，特に密である。

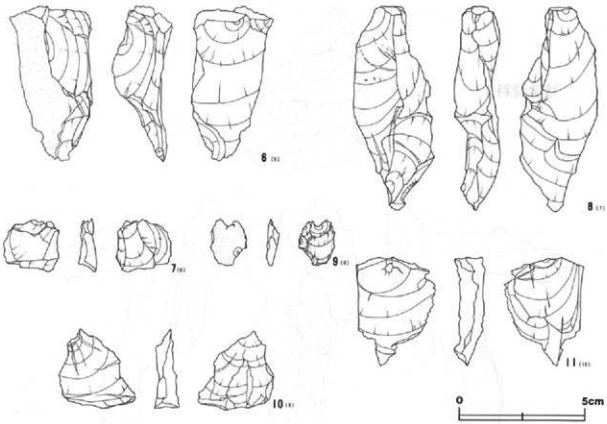
確認土層　確認面から深さ50cm，認沼パミス上層のハードローム層（第５層）で確認された。

遺物　本石器集中地点からの出土遺物総数は 132点である。内訳はナイフ形石器９点，鋸歯縁石器２点，台形様石器・剥器１点，剥片87点，敲石４点で，石質はメノウ 101点，安山岩29点，凝灰岩３点である。接合資料は３点で，第87図１・第89図12・第90図18はメノウの剥片の接合資料である。第91図24～32はナイフ形石器，33～36は微細剥離のある剥片で，第92図38・39は鋸歯縁石器，第91図37は台形様石器，第92図41は剥器である。いずれも確認上層中から出土している。

所見　本石器集中地点は，剥片が主体で，ハンマーが出土していることから，石器の製作跡的な性格を持つものと考えられる。

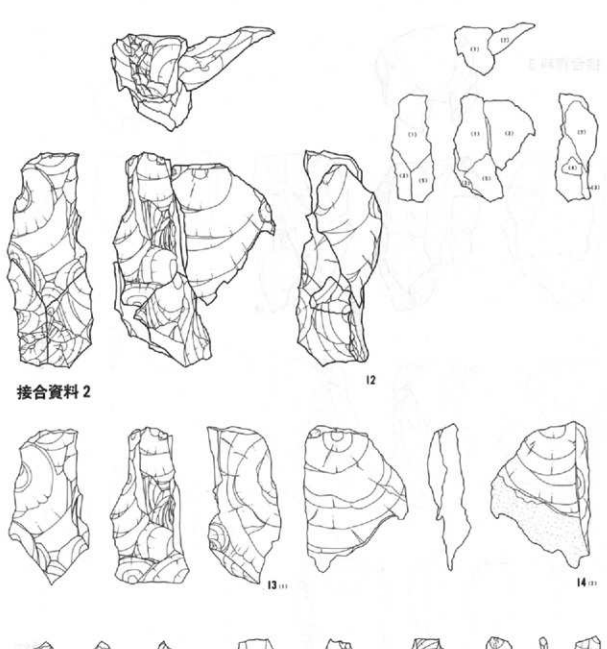


第87図　第1号石器集中地点出土遺物実測図（1）



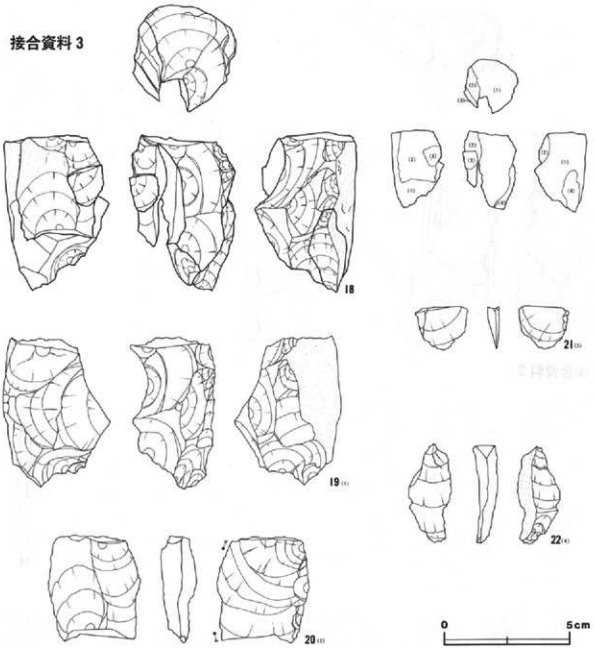
第88図　第１号石器集中地点出土遺物実測図（２）

接合資料１（第87図１）は，A2ⅲ区から出土したもので，10点の剥片が接合し自然面が残る。自然面を打面として剥離作業を行った後，上方へ打面を移動し，２（１）→３（２）→４（３）→５（４）の順に剥離している。次に，打面を左に90°移動し剥離作業を行った後，その剥離面を打面として，６（５）→７（６）→８（７）の他数枚の剥片の剥離作業を行い，さらに打面を右に90°移動し，９（８）→10（９）→11（10）の剥離作業を行ったものと考えられる。



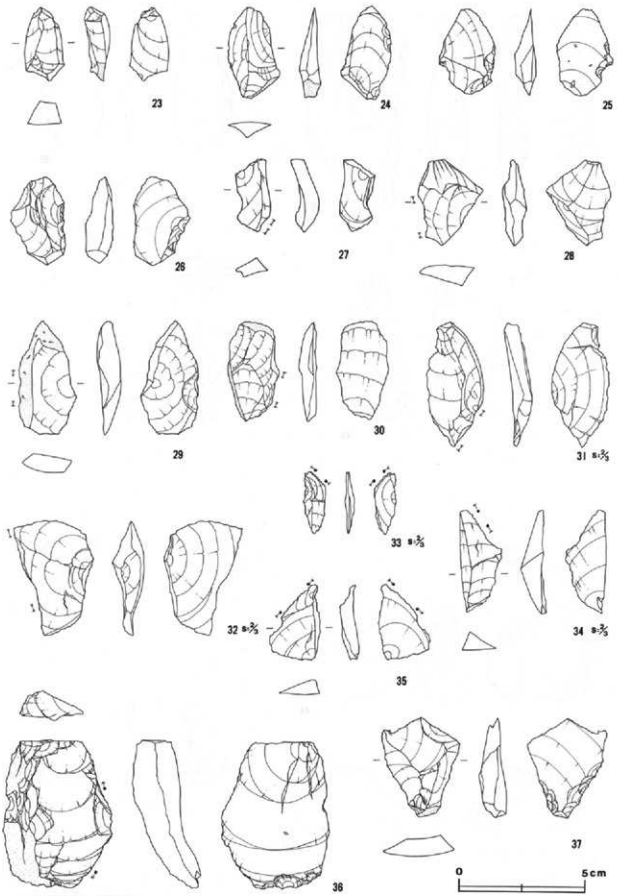
第89図　第１号石器集中地点出土遺物実測図（３）

接合資料２（第89図12）は，A2$_{61}$区から出土したもので，６点の剥片が接合し，13（１）・17（５）は，厚さ２cm前後の板状の石核の末端部であると考えられる。14（２）の剥片は，自然面を打面として剥離された後，母岩から剥離されたものと考えられる。15（３）の剥離作業面から90°打面移動して，16（４）の剥離を行い，その際に13（１）と17（５）が剥離されたものと思われる。

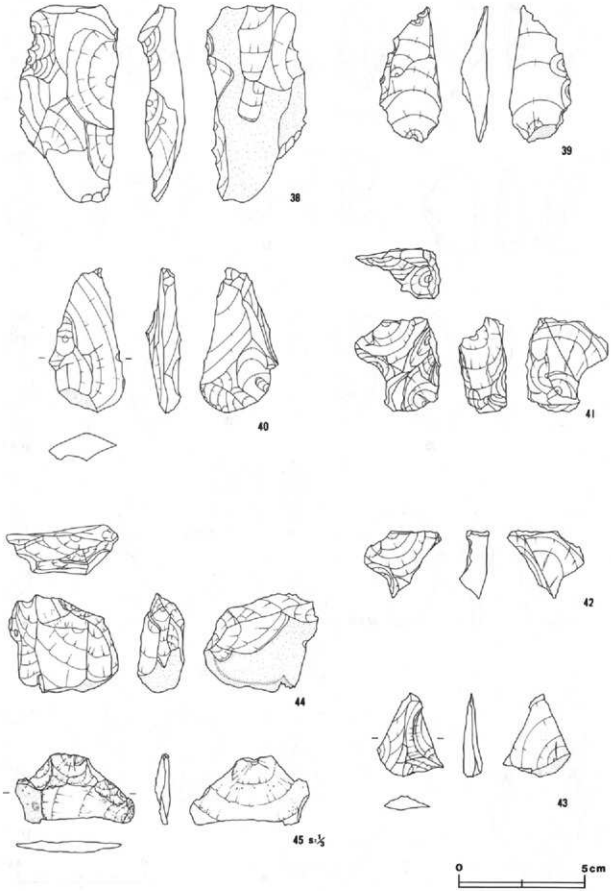


第90図　第1号石器集中地点出土遺物実測図（4）

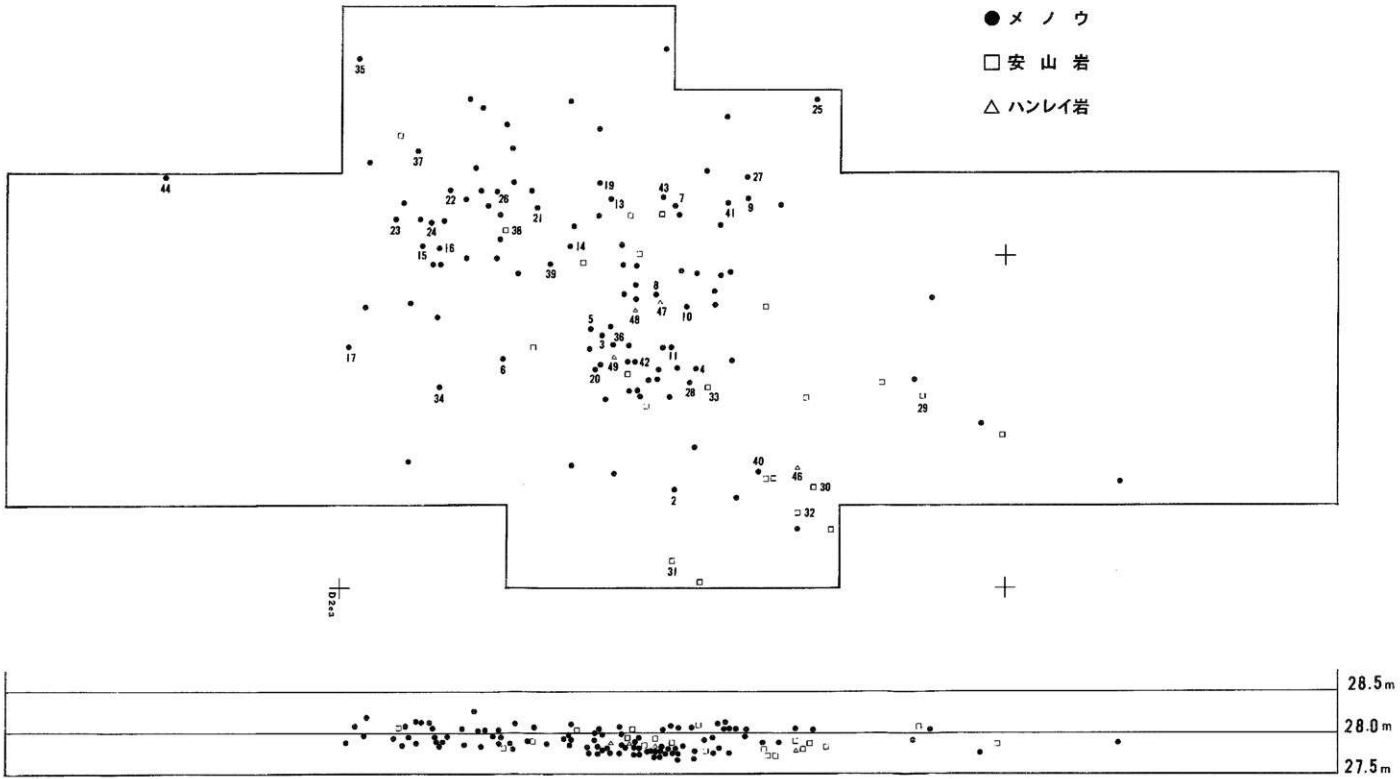
接合資料3（第90図18）は，A2$_{III}$区から出土したもので，残核と剥片の4点の接合資料で，自然面に対して直角に打面を調整し，20・21を剥離した後，打面を90°移動し剥片を数枚剥離した後，打面を90°下に移動させて，22の他数枚の剥片を剥離したものと考えられる。



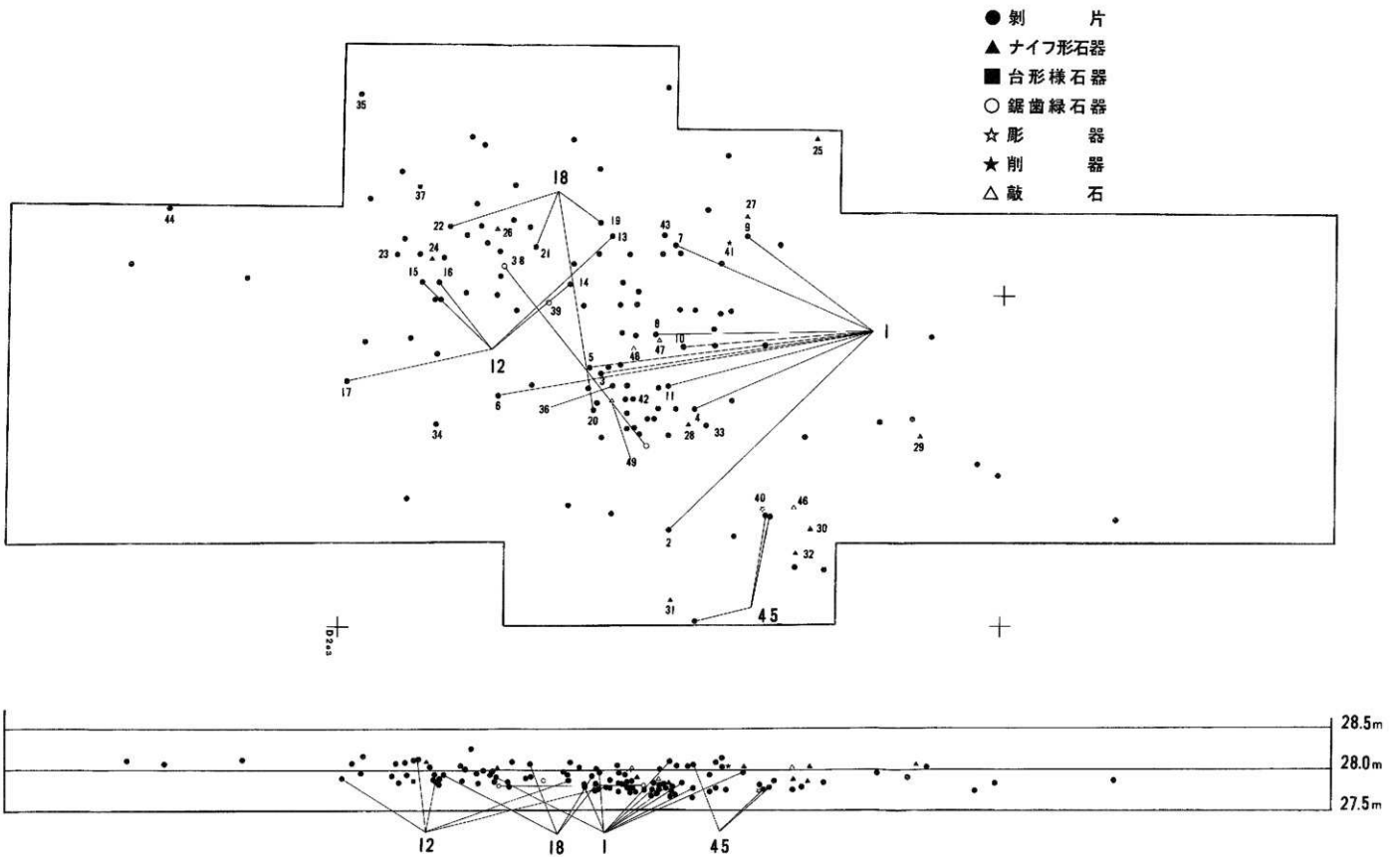
第91図　第１号石器集中地点出土遺物実測図（５）



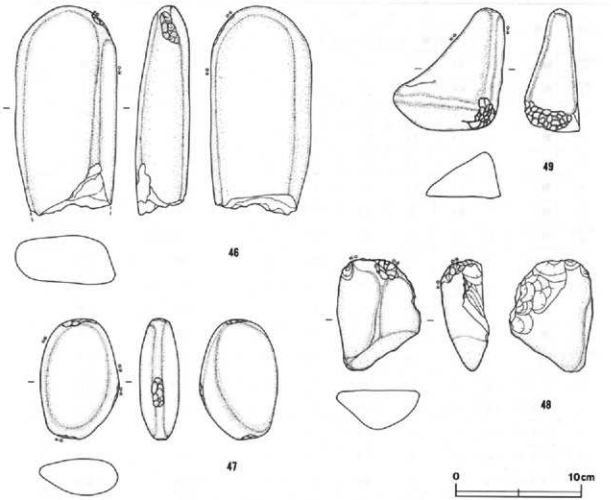
第92図　第１号石器集中地点出土遺物実測図（６）



第93図　第1号石器集中地点平面図



第94図　第１号石器集中地点平面図



第95図　第１号石器集中地点出土遺物実測図（７）

第１号石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第87図 1	接合資料	9.7	7.2	4.9	114.5	メノウ	Q38 接合資料１ PL28
2	剥片	2.1	2.1	0.7	1.8	メノウ	Q38 (1) PL28
3	剥片	3.1	1.2	0.8	1.8	メノウ	Q38 (2) PL28
4	剥片	3.8	2.1	1.4	8.1	メノウ	Q38 (3) PL28
5	剥片	5.2	2.7	1.6	21.9	メノウ	Q38 (4) PL28
第88図 6	剥片	4.5	1.6	0.8	2.7	メノウ	Q38 (5) PL28
7	剥片	6.2	3.2	2.4	27.3	メノウ	Q38 (6) PL28
8	剥片	8.1	3.1	1.9	31.2	メノウ	Q38 (7) PL28
9	剥片	1.5	1.8	0.5	1.0	メノウ	Q38 (8) PL28
10	剥片	3.2	3.0	1.0	7.2	メノウ	Q38 (9) PL28

図版番号	種別	計測値				石質	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第88図 11	剥片	3.2	4.3	1.2	11.4	メノウ	Q38 (10)	PL28
第89図 12	接合資料	8.5	5.4	3.4	113.3	メノウ	Q39 接合資料2	PL28
13	剥片	6.7	3.2	3.2	60.5	メノウ	Q39 (1)	PL28
14	剥片	5.8	4.2	2.2	24.7	メノウ	Q39 (2)	PL28
15	剥片	5.2	2.5	1.7	11.3	メノウ	Q39 (3)	PL28
16	剥片	1.7	1.3	0.4	0.5	メノウ	Q39 (4)	PL28
17	剥片	3.8	2.3	2.8	16.3	メノウ	Q39 (5)	PL28
第90図 18	接合資料	6.2	4.2	4.2	94.2	メノウ	Q40 接合資料3	PL29
19	剥片	6.0	4.2	3.3	70.5	メノウ	Q40 (1)	PL29
20	剥片	3.9	1.7	1.0	3.6	メノウ	Q40 (2)	PL29
21	剥片	1.7	2.0	0.5	1.3	メノウ	Q40 (3)	PL29
22	剥片	4.2	3.7	1.5	18.8	メノウ	Q40 (4)	PL29
第91図 23	剥片	2.9	1.6	1.0	4.1	メノウ	Q41	PL30
24	ナイフ形石器	3.7	3.0	0.9	4.3	メノウ	Q42	PL30
25	ナイフ形石器	3.5	2.3	0.9	4.3	メノウ	Q44	PL30
26	ナイフ形石器	3.5	2.2	1.1	5.9	メノウ	Q55	PL30
27	ナイフ形石器	2.9	1.3	1.1	2.2	メノウ	Q56	PL30
28	ナイフ形石器	3.4	2.5	0.9	5.6	メノウ	Q57	PL30
29	ナイフ形石器	4.5	2.2	0.9	8.1	ガラス質黒色安山岩	Q58	PL30
30	ナイフ形石器	4.0	2.0	0.8	5.14	ガラス質黒色安山岩	Q59	PL30
31	ナイフ形石器	4.9	2.3	1.2	9.1	ガラス質黒色安山岩	Q60	PL30
32	ナイフ形石器	4.6	3.1	1.3	13.1	ガラス質黒色安山岩	Q61	PL30
33	剥片	2.5	0.8	0.4	0.6	ガラス質黒色安山岩	Q62 微細剥離有	PL30
34	剥片	4.1	1.6	1.0	2.9	メノウ	Q63 微細剥離有	PL30
35	剥片	3.0	2.0	0.7	2.6	メノウ	Q64 微細剥離有	PL30
36	剥片	5.8	4.3	2.7	43.9	メノウ	Q43 微細剥離有	PL30
37	合形様石器	4.0	3.1	1.1	7.7	メノウ	Q45	PL30
第92図 38	縦型縁石器	7.9	3.9	1.9	49.7	ガラス質黒色安山岩	Q48	PL30
39	横型縁石器	5.4	2.4	1.3	9.3	メノウ	Q65	PL30
40	彫器	5.8	3.0	1.4	14.7	メノウ	Q47	PL30
41	削器	3.7	3.3	1.9	16.5	メノウ	Q66	PL30
42	剥片	2.7	3.1	1.1	4.2	メノウ	Q66 (1)	PL30

図版番号	種別		計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考	
第92図 43	剥	片	3.3	2.6	0.8	3.7	メノウ	Q46	P L.30
44	石	核	4.0	4.6	1.9	35.2	ガラス質黒色安山岩	Q49	P L.30
45	剥	片	5.5	9.5	1.2	43.5	ガラス質黒色安山岩	Q50	P L.30
第95図 46	磨	石	16.6	8.1	4.3	966.6	ハンレイ岩	Q51	P L.29
47	敲	石	9.6	6.4	3.2	301.5	ハンレイ岩	Q52	P L.29
48	敲	石	9.0	6.7	4.0	217.7	ハンレイ岩	Q53	P L.29
49	敲	石	9.8	8.9	4.4	316.2	ハンレイ岩	Q54	P L.29

13 遺物包含層

第1号遺物包含層は，調査区北部の低位段丘の傾斜部A 4区付近に位置し，幅2 m，長さ約60 mのトレンチを調査区沿いに「コ」の字型に設定し，掘り込んだ結果確認された。

堆積する層は，基本的に4層に分かれるが，第1層及び第3層は含有するロームの量の差異によりさらに2層に分けられる。

遺物は，第1・第2層から出土しており，第3層以下からは出土していない。縄文時代前期の土器片，弥生時代後期後半の土器片，土師器，土師質土器，陶器片で年代幅があり，量的には非常に少ない。そのため，第1号遺物包含層の調査は，トレンチ調査で終了した。

第2号遺物包含層は，調査区北部の中位段丘上B 4区付近に位置し，幅2 m，長さ約40 mのトレンチを調査区沿いに設定し，掘り込んだ結果確認された。

堆積する層は，4層からなり，第2層は含有物の差異によりさらに2層に分けられる。

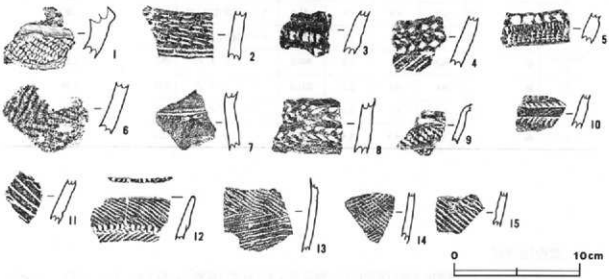
遺物は，第1層から弥生時代後期後半の土器片が主体をなし，第2層からは縄文土器片を主体に遺物が出土している。第3層以下は遺物がなく，第1号遺物包含層同様にトレンチ調査で終了した。

第2号遺物包含層の堆積状況は，谷状を呈しており，谷部に土砂が流入して形成されたものと考えられる。また，層序が第1包含層と近似していることから，両包含層は，ほぼ同時期に形成されたものと考えられ，その時期は，第2層から縄文土器片が出土していることから，それ以前の時期と思われる。

出土遺物

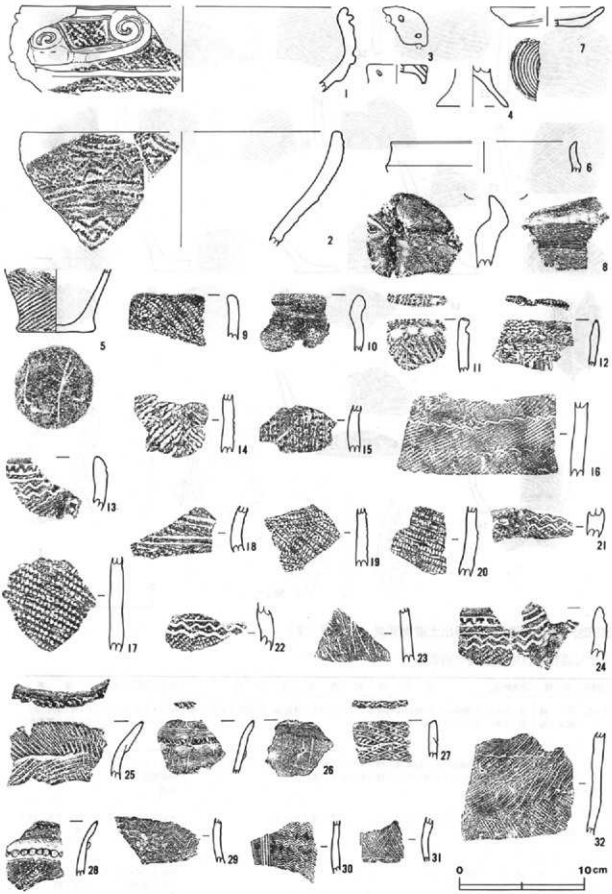
第96図1～15は第1号遺物包含層から出土した縄文土器片・弥生土器片の拓影図である。1～11は，縄文土器片である。1は胴部片で，単節縄文LR地文に横方向の太い沈線が施されている。2は胴部片で，半截竹管による短い平行沈線による文様が施されている。3は胴部片で，棒状工具による押圧がなされている。4・5は胴部片で，半截竹管により文様が構成されている。6は胴部片で，単節縄文LRにより羽状構成がなされている。7は口縁部直下で，横方向の半截竹管による文様が構成されている。9は胴部片で，単節縄文RLが施されている。10は胴部片で，磨消帯の上下に刻みが施されている。11は胴部片で，斜め方向の沈線が施されている。12～15は弥生土器片である。12は口縁部片で，複合口縁に附加条一種（附加2条）の縄文が施され，段

の下端には縄文原体による押圧がある。13は胴部片で，附加条二種（附加１条）の縄文が施され，羽状構成をとる。14は胴部片で，附加条二種（附加１条）の縄文が施されている。15は胴部片で，附加条一種（附加２条）の縄文が施されている。

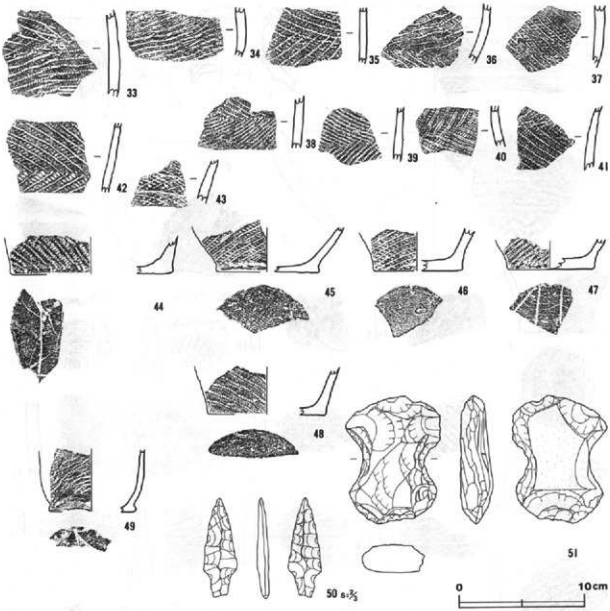


第96図　第１号遺物包含層出土遺物拓影図

第97図８～32は，第２号遺物包含層から出土した縄文土器片，弥生土器片の拓影図である。８～24は縄文土器片である。８～12は口縁部片で，８には扁状になると思われる突起が付く。９には無節の縄文が施されている。10・11には棒状工具による押圧がある。12には貝殻腹縁による文様が構成されている。13・24の文様帯は交互刺突文と鋸歯状文により構成されている。14～23は胴部片で，14には無節の状文が施されている。15には半截竹管による押圧がある。16には単節縄文ＬＲの地文に縄文原体による押圧がある。17には単節縄文ＲＬが施されている。18には半截竹管により横方向の文様が施されている。19には単節縄文ＲＬが施されている。20には単節縄文ＲＬが施されている。21・22には単節縄文ＬＲの地文に鋸歯状文が施されている。23には荒い条線が施されている。25～49は弥生土器片で，25～28は口縁部片で，25は複合口縁で，附加条一種（附加２条）の縄文が施されている。28は口縁部が無文で，下端に隆帯が１条巡り，隆帯上には棒状工具による押圧がある。26の外面には隆帯が１条巡り，内面には櫛歯状工具による波状文が施されている。27には附加条二種(附加１条)の縄文が施され，羽状構成をとる。29～31は頸部片で，30は綾区画に波状文が施されている。29には連弧文が施され，31には山形文が施されている。32・第98図33～43は胴部片で，32～37・42・43には附加条二種（附加１条）の縄文が施されている。38～41には附加条一種（附加２条）の縄文が施され，羽状構成をとる。44～49は底部片で，44～46・48には附加条二種（附加１条）の縄文が施され，44には木葉痕が，45には布目痕がある。47には附加条一種（附加２条）の縄文が施され，底部には木葉痕がある。49には附加条二種（附加１条）の縄文が施され，底部には木葉痕がある。



第97図　第２号遺物包含層出土遺物実測・拓影図（１）



第98図　第２号遺物包含層出土遺物実測・拓影図（２）

第２号遺物包含層出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第97図 1	深鉢 縄文土器	A［26.1］ B（ 6.8）	口縁部片。口縁部は内弯して立ち上がる。外面は、単節縄文LRと隆帯により文様が施されている。	長石・石英・雲母 にぶい橙 普通	P158、5％ PL26 B4,6区上部黒色土層
2	深鉢 縄文土器	A［25.4］ B（ 9.2）	口縁部片。口縁部は内弯して立ち上がる。胴部外面には半截竹管により刻め及び横方向の文様が施されている。	長石・石英・砂粒 明赤褐色 普通	P159、5％ PL26 褐色土層
3	壷 弥生土器	F［ 4.6］ G（ 1.5）	つまみ部片。上面は平坦で、４か所の穿孔がある。	長石・石英・砂粒 浅黄色 普通	P160、5％ PL26 上層
4	高坏 弥生土器	D［ 5.8］ B（ 3.0）	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。	長石・石英・雲母・砂粒 灰黄褐色 普通	P161、20％ PL26 2区上層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第37図 5	壺 弥生土器	B(5.0) C 5.8	底部から直ぐ開き、可成で、胴部は外頸して立ち上がる。胴部外面には附加条 縄（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	良石・乳英 褐色 普通	P163, 10% 上37黒色土層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 6	壺 土師器	A[14.8] B(2.5)	U縁部上。体部とU縁部の境に稜がある。口縁部はやや外反する。	体部内・外面横ナデ。	良石・スコリア・にぶい赤褐色 普通	P164, 10% 上層 PL26
7	壺 土師器土器	A[8.4] B 1.5 C[5.8]	底部からU縁部、半球で、体部は外頸して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。	良石・石英・雲母 にぶい黄橙 普通	P163, 20% 褐色上層 PL26

図版番号	種別	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	残存率(%)	石質	出土地点	備考
第46図 50	石器未成品	3.9	1.4	0.5	(1.9)	95	安山岩	C4a区	G31, 褐色上層 PL34
51	打製石斧	10.2	7.6	2.6	232.9	100	砂岩	南側トレンチ	G32, 上層 PL34

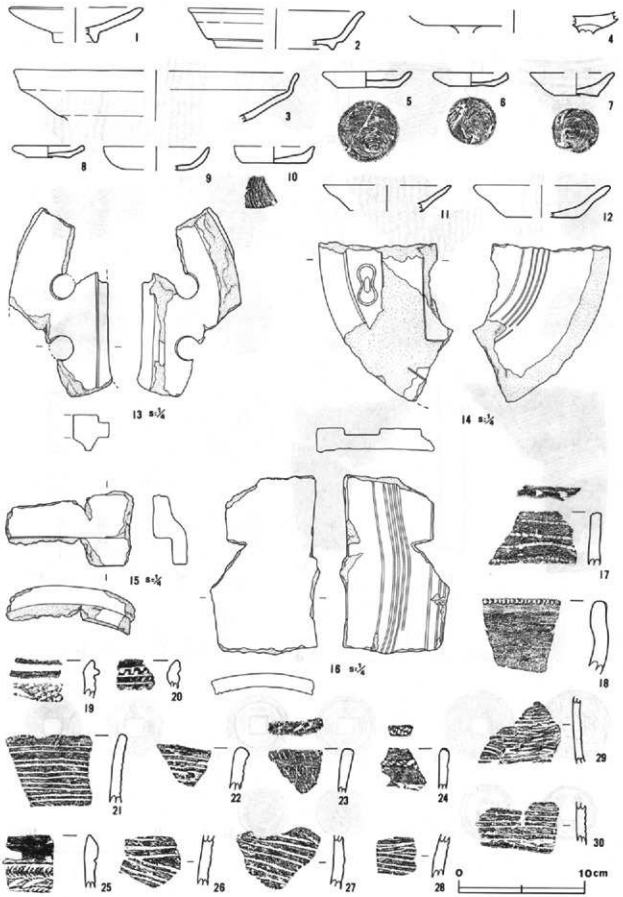
14　遺構外出土遺物

当遺跡の遺構外からは，縄文時代から近世にかけての遺物が出土している。ここでは主な遺物を記載する。（第99・100図）

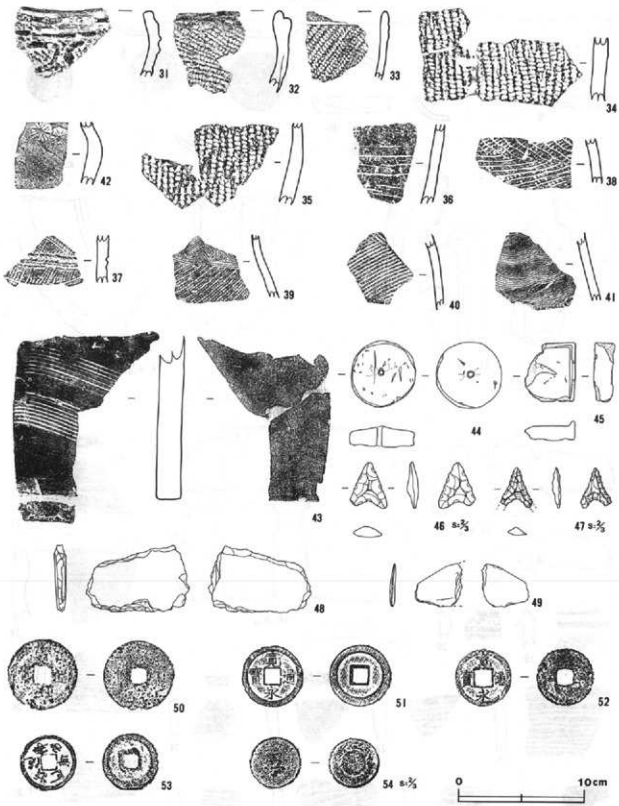
第99図17～30・第100図31～43は遺構外出土遺物の拓影図である。17～37は縄文土器片である。17～25・31～33は口縁部片で，17には無節の縄文が押圧され，18の口唇部には刻みがある。19は単節縄文ＬＲと隆帯による文様が施され，20には刺突文と沈線による文様が施されている。21・22は平行沈線が施され，25には半截竹管による刻みが施されている。31には単節縄文ＬＲと隆帯による文様が施され，32・33には単節縄文ＬＲが施されている。26～30・34～36は胴部片で，26～30には平行沈線が施され，34・35には単節縄文ＬＲが施されている。36には平行沈線が施され，37には半截竹管による刻みが施されている。38～41は弥生土器片で，38には附加条二種（附加１条）の縄文が施され，39には櫛歯状工具による綾杉文と附加条二種（附加１条）の縄文が施されている。40には附加条一種（附加２条）の縄文が施され，41には連弧文が施されている。

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図 1	高台付坏 土師器	A [10.6] B 2.8 C [3.4]	底部から口縁部片。平底で，高台は真下に伸びる。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラナデ。	長石・石英 明褐橙色 普通	P166，70% 表採 P L26
2	高台付坏 土師器	A [14.0] B (3.1) E 0.6	底部から口縁部片。平底で，高台の断面形は三角形で，真下に伸びる。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は外反する。	体部外面横ナデ。底部外周調整後高台張り付け	長石 浅黄橙色 普通	P167，20% A 4 区表採 P L26
3	壺 須恵器	A [22.8] B (4.0)	体部から口縁部片。体部は大きく外傾し，口縁部はいく の字状に立ち上がる。	体部内・外面ナデ。	長石，石英，針状鉱物，黄灰色 灰黄色 普通	P168，20% A 4 区表採 P L26
4	壺 須恵器	B (1.3)	底部片。平底で，底部は逆台形で，真下に伸びる。	体部内・外面ヘラナデ。	長石，石英 灰黄色 普通	P169，10% 表採 P L26
5	皿 土師質土器	A 7.1 B 1.3 C 4.8	平底で，体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底部回転糸切り。	長石，石英，スコリア，にぶい橙色 普通	P170，100% B 4 区表採 P L26
6	皿 土師質土器	A 6.6 B 1.1 C 3.5	平底で，体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底部回転糸切り。	長石 橙色 普通	P171，95% B 4 区表採 P L26
7	皿 土師質土器	A [6.3] B 1.8 C 3.6	平底で，体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底部回転糸切り。	長石，石英，雲母 にぶい橙色 普通	P172，80% A 4 区表採 P L26
8	皿 土師質土器	A 5.8 B 0.9 C 3.4	平底で，体部は大きく外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底部回転糸切り。	長石 橙色 普通	P173，50% B 4 区表採 P L26
9	皿 土師質土器	A [8.6] B (1.8)	底部から口縁部片。平底で，体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。	砂粒，スコリア 橙色 普通	P174，20% 表採 P L26
10	皿 土師質土器	A [6.4] B 1.3 C [5.1]	底部から口縁部片。平底で，体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底部回転糸切り。	長石，スコリア 橙色 普通	P175，20% D 2 区表採 P L26



第99図　遺構外出土遺物実測・拓影図（1）



第100図　遺構外出土遺物実測・拓影図（2）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図 11	皿 土師質土器	A [10.2] B (2.0)	体部から口縁部片。体部は外反して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P176, 5% C 3区表採 PL36
12	二 土師質土器	A [11.0] B (2.6) C [5.9]	底部から一部破片。平底で、体部は外反して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部内・外面ナデ。底部回転糸切り。	石英、スコリア 橙色 普通	P177, 15% C 3区表採 PL36

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
第99図 13	不明土器	(20.2)	—	3.8	—	(465.2)	—	B 4区表採	P184 表面赤彩
14	不明土器	(16.7)	—	2.2	—	(477.7)	—	B 4区表採	P185 鍔タール付着
15	不明土器	(7.5)	(13.7)	3.5	—	(229.6)	—	B 4区表採	P186
16	不明土器	(19.[illegible])	(10.7)	1.5	—	(436.3)	—	B 4区表採	P187

図版番号	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
第100図 44	粉砕車	5.2	5.2	1.8	4.0	42.6	100	表採	D P19 PL27
45	砥	(4.7)	(4.0)	(1.6)	—	27.9	5	表採	D P20 PL27

図版番号	種別	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
第100図 46	石鏃	1.8	1.5	0.4	(0.6)	100	安山岩	表採	Q33, 四基跡基線 PL34
47	石鏃	(1.6)	(1.3)	0.3	(0.4)	95	チャート	表採	Q34, 四基跡基線 PL34
48	磨製具	(8.2)	5.3	0.9	(51.3)	45	粘板岩	Mトレンチ, 2区	Q35 PL34
49	磨製具	(3.5)	2.9	0.4	(6.1)	30	粘板岩	Aトレンチ	Q36 PL34

図版番号	種別	計測値 径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	現存率(%)	初鋳年 時代	西暦	出土地点	備考
第100図 50	寛永通宝	2.8	1.5	4.6	100	江戸	不明	覆土中	M22 P1.35
51	寛永通宝	2.4	1	2.6	100	江戸	1726年	覆土中	M23 P1.35
52	寛永通宝	2.3	1	2.2	100	江戸	不明	覆土中	M24 P1.35
53	絵銭	2.2	1	2.5	100	不明	不明	覆土中	M25 「南無阿弥陀仏」 PL35
54	5銭白銅貨	2.0	2	4.2	100	明治	1890年	覆土中	M22 P1.35

第4節　まとめ

大畑遺跡は，旧石器時代，縄文時代，弥生時代，古墳時代，中・近世にわたる複合遺跡である。ここでは，特徴的な調査成果について時代ごとに整理してまとめとしたい。

1　旧石器時代

当遺跡からは，旧石器時代の石器集中地点を1か所確認している。径約5ｍの楕円形の範囲に，剥片・敲石が散在して出土している。剥片からは接合資料を得ることができ，石器製作の場であったことが考えられ，石器製作の行程の一端をかいま見ることができる。接合資料の剥片の分布をみると，3つのユニットが推察される。材質は，ほとんどがメノウで，一部大洗産と思われるガラス質黒色安山岩が含まれている。

剥離過程は，打面を頻繁に90°転移して剥離を行っている。また，剥離作業に使われたと思われる敲石の使用痕をみると平坦にならずに曲面である。また，打面の厚みが厚く，厚さにばらつきがあり，打面の傷が大きく縦割れをおこしている剥片があることから，パンチを使わない直接打法で剥離を行っていたと思われる。ナイフ形石器が不定形であることや，基本土層や確認土層などからみても，第Ⅸ～Ⅶ文化層段階に相当すると考えられる。

2　縄文時代

遺構は，縄文時代後期の竪穴住居跡1軒及び，陥し穴3基が検出されている。竪穴住居跡は，低位段丘上に位置し，耕作により壁が削平されており，壁溝がかろうじて検出されたのみであった。柱穴と思われるピットも確認されたが，対応関係は不明である。ピット内や確認面より土器片が出土している。また，炉跡は確認されていないが，重複している溝の覆土中から大量の焼土が検出されていることから，この焼土は住居跡の炉にあった可能性が推測される。

3　弥生時代

当遺跡の中心になる時期であり，竪穴住居跡10軒が検出されている。いずれも，弥生時代後期後半に比定される住居跡である。住居跡からは，十王台式土器を中心に多量の遺物が出土した。出土した土器は，広口の壺形土器が主である。また，第2号住居跡からは，浅い鉢形土器が出土している。この鉢形土器は，片口で，2か所の穿孔をもち，蓋と器の兼用であった可能性も考えられる。他に，蓋のつまみとみられる破片も出土している。当遺跡から出土した十王台式土器の特徴は次の6点である。

（1）　口唇部には縄文による施文，又は，ヘラ状工具による刻みがある。

（2）　口縁部は無文，又は，櫛歯状工具により波状文が施される。

（3）　頸部文様帯は縦区画され，波状文が施される。櫛歯状工具の歯の数は3～4本のものが多い。

（4）　口縁部と頸部の境には隆帯が巡り，隆帯上に指頭による押圧がある。

（5）　胴部には附加条二種（附加1条）の縄文が施され，羽状構成をとる。

（6）　底部には布目痕がある。

他の遺跡の出土例と比較すると，大宮町「宮上II遺跡」第1・2・3・4号住居跡や大洗町「団子内遺跡」第8号住居跡出土の土器と同型式と思われる。また，涸沼前川を挟んだ対岸に位置する矢倉遺跡からは，当遺跡よりも新しい段階の土器が出土している。このほかに，口縁部が無文で，隆帯を境に頸部から胴部には附加

条二種（附加１条）の縄文が施され羽状構成をとるもの，波台口縁に附加条一種（附加２条）の縄文が施され，胴部には附加条一種（附加２条）の縄文が施され，羽状構成をとるものが出土している。このような異型式の附加条一種（附加２条）の出土土器片（胴部片の重量）の割合をみると，住居跡ごとに10％～20％の割合で含まれている様子が認められる。（第101図）

土器以外の出土遺物としては，紡錘車・土製勾玉・鉄製品がある。紡錘車は第１・３・４・５・６・７・10・11号住居跡から合計10点が出土している。頻繁に製糸作業が行われていたことが窺われる。また，鉄鎌・鉄鎌・不明鉄製品の出土は，鉄器の普及を考える上で貴重な資料となることと思われ，さらに今後の類例の蓄積が待たれる。

住居跡の特徴の１つとして，各住居ともに壁柱穴を持つことが挙げられる。壁柱穴の配置を大きく類型化してみると，およそ以下のように分類できる。（第102図）

Ⅰ　奥壁を中心に並ぶ　　（第10・11・12号住居跡）

Ⅱ　コーナー部の一部に並ぶ　（第１・６・７号住居跡）

Ⅲ　各コーナー部に並ぶ　（第３・４・５号住居跡）

位置関係からみて，Ⅰ類については，壁補強の機能が考えられる。Ⅱ，Ⅲ類については，上屋構造の一部，壁補強，内部施設等の機能を持つことが推測される。また，Ⅱ，Ⅲ類の住居跡の炉跡については，中央部より奥壁寄りに設置され，炉の範囲が柱穴を結んだ線に達する位置にあり，Ⅰ類の住居跡については，炉の範囲が柱穴を結んだ線に達しておらず，中心部に近い位置にある。

4　古墳時代

当該期の遺構は，竪穴住居跡１軒である。住居跡の大部分が調査区外になるため，住居跡の４分の１ほどの調査であった。出土遺物も少なく不明な点が多いが，古墳時代後期の住居跡と考えられ，この時期の集落の存在が認められた。

5　中・近世

当該期の遺構は，方形竪穴遺構４基，地下式壙２基，井戸１基，道路跡１条，近世の墓壙４基である。その他，時期や性格を特定できる遺物がなく骨片等の出土がなかったために，土坑として取り扱ったものの中に，中世の墓壙と思われるものが25基あることから，中・近世の墓域であったと考えられる。

第１号井戸からは，ほぼ完形に接合できる内耳鍋が16点という数で多数出土している。外面には大量のススが付着していること，内面に黒褐色のシミがあることなどから，ある程度使い込んだものと思われるが，内耳部分を観察すると，摩滅が少ないものが多いことが疑問点である。投棄された時期は，覆土の状況から短期間であると思われ，何らかの儀礼的行為が行われた跡であると考えられる。しかし，他の類例が少ない現在，これ以上の究明は難しく，今後の興味ある課題の一つである。

道路跡は現在の道路から南東に約50m離れており，旧道があったと思われる場所に位置している。当遺跡の字名が「穴戸道」であり，穴戸氏の勢力範囲が当地まで広がっていたことや，那珂湊が海運の拠点として繁栄していたことを考えると，那珂湊→酒沼→涙沼前川とつながる海上交通による物資が内陸へと伝わる流通経路が，当遺跡の付近あったのではないかと思われる。本跡も台地上から涙沼前川に向かって伸びていることから，中・近世には物資運搬のために使われていた可能性もあり，生活道路としても機能していた時期があったものと考えられる。

6 近　代

該期の遺構としては，炭焼窯跡が4基検出されている。第1号炭焼窯には，敷石があるのに対し，他の3基にはなく，構築材も規格化された耐火煉瓦を使用している。また，他の3基と離れた場所にあり，現地説明会に来跡した地元の方の話から，戦後まで使用されていたことが確認できた。第2号炭焼窯には周囲に柱穴が確認され，上屋構造をもっていたことがうかがわれる。

以上をまとめると，今回の調査で，旧石器時代の約2万7千年前～近代までの生活の痕跡を確認した。遺跡付近は旧石器時代に石器製作の場として利用され，縄文時代には狩猟の場として利用されると共に集落が形成された。弥生時代後期後半には，農耕や製糸を営んだと思われる人々が住み，古墳時代にも小集落が形成された。奈良・平安時代の遺構は確認できなかったが，中世には，墓域となったようであり，井戸に投げ込まれた大量の内耳鍋から，近くに集落があったものと考えられる。江戸時代になり再び墓域となった後には，炭の生産が近代まで続く。当遺跡は旧石器時代から近代まで人間生活の舞台となった複合遺跡であることが明らかになった。

註

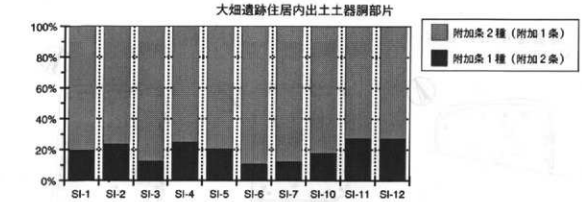
(1) 欠倉遺跡は，当遺跡から北東へ500mほど離れた潮沼前川を挟んだ対岸にある遺跡で，弥生時代後期後半（十王台式期）の住居跡が25軒検出されている。欠倉遺跡から出土した遺物を当遺跡の出土遺物と比較すると次にあげる相違点がある。

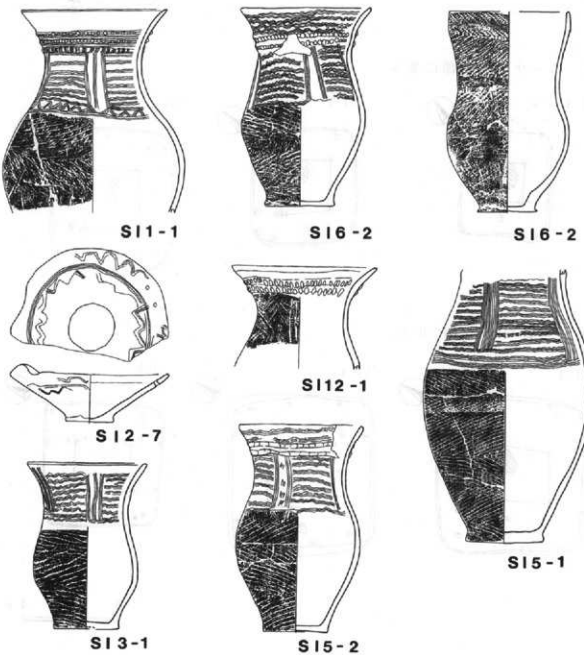
- 中形土器において胴部最大径が比較的下位にある。
- 口唇部に突起がみられる。
- 頸部文様帯の文様構成が規格化されている。
- 隆帯は比較的低く，指頭による押圧が不明確である。
- 櫛歯状工具は多条化を示す。

以上のようなことから，大畑遺跡の十王台式土器は，欠倉遺跡の次の段階の型式の土器が多く，当遺跡の方が古い時期の遺跡であると考えられる。

参考文献

・茨城県教育財団	「原出口遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第94集』	1995年
・茨城県教育財団	「小山・八幡前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第99集』	1995年
・日立市教育委員会	『岩本前遺跡発掘調査報告書』	1995年
・美浦村・陸平調査会	「根本遺跡」『陸平研究所報告2』	1996年
・勝田市文化・スポーツ振興公社	「武田Ⅳ」『勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第5集』	1991年
・板橋区遺跡調査会	『赤塚下寺家番匠免遺跡第1地点』	1997年
・大洗地区遺跡発掘調査会	「鹿笠　鹿島線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」	1980年
・ひいがま遺跡発掘調査会	『ひいがまⅣ』	1977年
・大宮町教育委員会	『富士山遺跡調査報告書』	1979年
・大洗町団子内遺跡発掘調査会	『団子内』	1987年

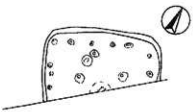




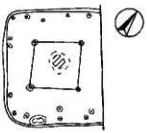
第101図　大畑遺跡住居跡内出土弥生時代土器片分類・実測図

Ⅰ　奥壁を中心に並ぶ

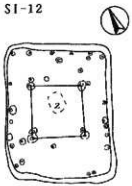
SI-10



SI-11

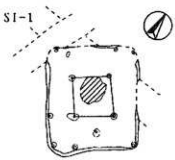


SI-12

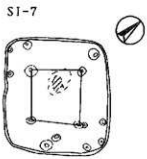


Ⅱ　コーナーの一部に並ぶ

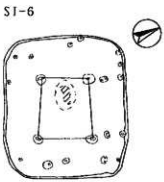
SI-1



SI-7

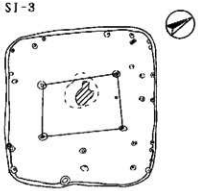


SI-6

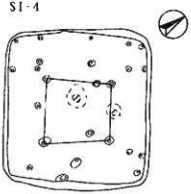


Ⅲ　各コーナー部に並ぶ

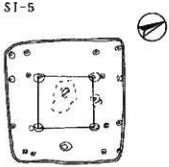
SI-3



SI-4



SI-5



0　　4 m

第102図　大畑遺跡弥生時代住居跡類型

付　章　大畑遺跡自然科学分析

パリノ・サーヴィ株式会社

はじめに

大畑遺跡の発掘調査では，弥生時代の住居跡（SI11）から器高約45cmの壺形土器が，横転した状態で検出された。この土器は器形などから何らかの液体が入れられていたものと想定されており，内部を充填する土壌に内容物の痕跡が残留していることが期待された。

そこで，SI11が廃絶され，土器が埋積されるまで内部に内容物が残存していたことを前提として，内容物に関する情報を得ることを試みることとした。ここで，液体として淡水，海水，醸造物（酒類など）を想定し，自然科学分析調査を実施する。その手法として，淡水か海水かの判別および液体の成分の検討に土壌理化学分析と珪藻分析を行う。また，弥生時代の木道跡周辺における植生や栽培植物に関する情報を得るために花粉分析も行う。

1．試　料

試料は土器内から採取された土壌試料1点であり，同一試料で土壌理化学分析，珪藻分析，花粉分析を実施する。また，土壌理化学分析の対照試料としてSI11覆土下層試料1点を選択した。

各分析項目の点数は，土壌理化学分析2点，珪藻分析1点，花粉分析1点である。

2．分析方法

（1）土壌理化学分析

分析項目は，海水の可能性を推定するためにpH，電気伝導度，交換性塩基，硫化第二鉄態硫黄，有機物などの供給を推定するためにリン酸含量（全量，可給態），窒素含量（全量，可給態）を選択した。

pH（H_2O）はガラス電極法，電気伝導度（EC）はECメーター法，全リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法（土壌養分測定法委員会，1981），可給態リン酸はトルオーグ法（土壌養分測定法委員会，1981），全窒素は硫酸分解－水蒸気蒸留法（土壌養分測定法委員会，1981），可給態窒素は リン酸緩衝液抽出水蒸気蒸留法（小川ほか，1989），交換性塩基はショーレンベルガー法（土壌養分測定法委員会，1981），硫化第二鉄は塩酸洗浄－硝酸・塩酸・臭素水分解法（第四紀試料分析法，1993）でそれぞれ行った。

以下に，各項目の操作工程を示す。

a．分析試料の調製

試料を風乾後，土塊を軽く崩して2mm篩で篩分し，通過した試料を風乾細土試料とする。また，105℃で4時間の乾燥後，分析試料の水分を求める。

風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し，0.5mm篩を全通させ，微粉砕試料とする。

b．pH（H_2O）

風乾細土10.0gを秤りとり，25mlの蒸留水を加えてガラス棒で撹拌する。30分間の放置後，再びガラス棒で懸濁状態とし，pHメーターで測定する。

c．電気伝導度

風乾細土10.0gを秤りとり，50mlの蒸留水を加えて振とうする（1時間）。振とう後，すみやかにECメーターの電極を懸濁液に挿入し，電気伝導度を測定する。

d．リン酸含量（全量）

風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤り，硝酸（HNO_3）5mlを加えて加熱分解する。放冷後，過塩素酸（$HClO_4$）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解の終了後に，蒸留水で100mlに定容し，ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し，リン酸発色液（バナドモリブデン酸・硝酸液）加えて，分光光度計によりリン

酸（P_2O_5）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg／g）を求める。

e．リン酸含量（可給態）

風乾細土試料1.00gを300mℓ三角フラスコに秤りとり，0.002N硫酸溶液（pH3）200mℓを加え，振とうし（室温で1時間），ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採り，混合発色試薬を加えて分光光度計によりリン酸濃度を定量する。この定量値から，試料中の有効リン酸量（P_2O_5mg／乾土100g）を求める。

f．窒素含量（全量）

微粉砕試料1.000mgをケルダール分解フラスコに精秤し，これに分解促進剤3gを加えた後，濃硫酸10mℓを加える。これを徐々に弱火で加熱し，次いで強熱する。分解の終了後，窒素蒸留装置により窒素回収を行い，これを標準硫酸液で滴定して加熱減量法で求めた試料中の水分から，乾土あたりの全窒素量（T－N%）を求める。

g．窒素含量（可給態）

風乾細土試料10.00gを100mℓ三角フラスコに秤りとり，pH7.0リン酸緩衝液50mℓを加えて振とうし（室温で1時間），ろ過する。ろ液をケルダール分解し，水蒸気蒸留法によって窒素量を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分から，乾土あたりの可給態窒素量（Nmg／乾土100g）を求める。

h．交換性塩基

風乾細土試料5.00gを浸透管に秤りとる。これをCEC測定用の土壌浸出装置に装着し，1N酢酸アンモニウム溶液（pH7.0）100mℓを加え，4～20時間で置換洗浄し，交換性塩基を浸出させる。交換浸出された液すべてを200mℓメスフラスコに入れ，水で定容する。定容液の一定量を採取し，適宜希釈した後，原子吸光光度計によりカルシウム，マグネシウム，カリウムを定量する。この定量値から，試料の交換性塩基含量（me／乾土100g）を求める（me：mg当量）。

i．硫化第二鉄態硫黄（FeS_2）

微粉砕試料をさらにメノウ乳鉢で粉砕し，235メッシュのふるいを全通させる。この試料約10gに1Nの塩酸（HCl）100mℓを加え，加熱（80℃で45分間）した後，濾過・洗浄を行う。濾過残渣を乾燥させ（105℃で4時間），再び粉砕した後，試料5gを秤取る。硝酸15mℓ，塩酸5mℓ，臭素水1mℓ，蒸留水20mℓを加え，80℃で30分間加熱分解し，濾過する。この濾液を用い，硫酸バリウム重量法により試料の硫化第二鉄含有量（FeS_2－S%）を求める。

（2）珪藻分析

試料を凍乾で7g前後秤量し，過酸化水素水，塩酸処理，自然沈降法の順に物理化学処理し，珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後，カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後，プリュウラックスで封入して永久プレパラートを作製する。検鏡は，光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い，メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し，珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上を同定・計数する。種の同定は，K.Krammer and Lange－Bertalot（1986・1988・1991a・1991b），K.Krammer（1992）などを用いる。

同定結果は一覧表で示し，その中では海水生種，海水～汽水生種，淡水生種の順に並べ，各種類をアルファベット順に並べた。淡水生種については，塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示し，環境指標種を略号で示す。また，産出した化石が現地性の化石か，他の場所から運搬され堆積した異地性の化石かを判断する目安として完形殻の出現率を求め，考察の際に考慮した。さらに，同定結果を元に珪藻化石の層位分布図を作成する。堆積環境の解析にあたっては，水生珪藻は安藤（1990），陸生珪藻は伊藤・堀内（1991），

汚濁耐性はAsai, K.&,Watanabe,T.（1995）の環境指標種を参考とする。

（3）花粉分析

試料約10gについて，水酸化カリウムによる泥化，篩別，重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離，フッ化水素酸による鉱物質の除去，アセトリシス処理の順に物理・科学的処理を施し，花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し，光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して，出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は，出現固体数の一覧表に表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは，種類間の区別が困難なものである。

3．結　果

（1）理化学成分

結果を表1に示す。

表1　土器内土壌の土壌理化学分析結果（1）

試料名	pH (H20)	EC (ms/m)	リン酸 全量(mg/g)	リン酸 可給態(mg/100g)	窒素 全量(%)	窒素 可給態(mg/100g)
対照試料S11表土（下層）	6.1	9.84	2.23	0.08	0.27	3.34
S111 上器内上壌	6.4	8.19	2.48	0.51	0.3[illegible]	3.86

表1　土器内土壌の土壌理化学分析結果（2）

試料名	交換性塩基 カルシウム(me/100g)	交換性塩基 マグネシウム(me/100g)	交換性塩基 カリウム(me/100g)	FeS2 %
対照試料S111表土（下層）	12.7	3.8	0.1	0.0436
S111 上器内三壌	20.0	4.4	0.1	0.0179

（2）珪藻化石の産状

結果を表2・図1に示す。

表2　土器内土壌の珪藻分析結果

種類	生態性 塩分	生態性 pH	生態性 流水	環境指標種	S111 上器内
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		1
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	R A, U	24
Navicula mutica Kützing	Ogh ind	al il	ind	R A, S	70
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		1
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	R A	16
Pinnularia borealis var. scalaris (Ehr.) Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	R A	8
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	R I	1
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	R B, S	1
Stauroneis obtusa Lagerst.	Ogh-ind	ind	ind	R B	2
海水生種合計					0
海水－汽水生種合計					0
汽水生種合計					0
淡水生種合計					124
					124

凡例　H.R.　：塩分濃度に対する適応性　pH　：水素イオン濃度に対する適応性　C.R.：流水に対する適応性
Ogh-ind：貧塩不定性種　al　il：好アルカリ性種　ind　：流水不定性種
ind　：pH不定性種
ac-il　：好酸性種

環境指標種

RI：陸生珪藻（RA：A群，RB：B群，伊藤・堀内，1991）

S ：好汚濁性種，U：広適応性種（Asai,K.&Watanabe,T.1995）

完形殻の出現率は，約50%である。算出分類群数は5属9種類であり，非常に単調な組成を示す。

産出種の特徴は，陸生珪藻の中でも耐乾性の強いA群の***Navicula muticaが***約55%と優占し，同じくA群の***Hantzschia amphioxys,Pinnularia borealis***が10～20%と多産する。これらの陸生珪藻は，土壌表層に特徴的に多産することから土壌珪藻とも言われている。

（3）花粉化石の産状

結果を表3に示す。花粉・胞子化石の保存状態は不良であり，検出数が非常に少ない。

本本ではコナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，ニレ属ーケヤキ属，草本ではヨモギ属と他のキク亜科がわずかに検出される程度である。

表3　土器内土壌の花粉分析結果

種　　類	Si11 土器内
木本花粉	
コナラ属コナラ亜属	2
コナラ属アカガシ亜属	1
ニレ属ーケヤキ属	1
草本花粉	
ヨモギ属	1
他のキク亜科	1
不明花粉	―
シダ類胞子	
シダ類胞子	9
合　　計	
木本花粉	4
草本花粉	2
不明花粉	0
シダ類胞子	9
総　　計（不明を除く）	15

4．考　　察

土器内土壌のpH（H_2O）は6.4で，対照試料と比べ若干アルカリ性を示す。一般的に海水のpHは7.8～8.3とアルカリ性である。海水の影響を受けているならば，土器内に残留した海塩のため，アルカリ性に傾くと考えられる。しかし，土壌中に富加された塩類濃度の指標である交換性塩基含量（カルシウム，マグネシウム，カリウム）が低い値であり，かつ電気伝導度（EC）も8.19mS／mと低く，対照試料と有意な差が認められない。電気伝導度は土壌溶液中に陰イオン（硝酸イオン，硫酸イオンなど）や陽イオン（カルシウムイオン，マグネシウムイオンなど）の含有量の多いことを意味する。（三好ほか，1983）。さらに，海水の影響を受けた堆積物中に特に認められる硫化第二鉄（FeS_2）も対照試料より低い値となっている。また，珪藻化石でも海生種や汽水生種が全く認められなかった。次に，淡水およびアルコールの可能性を検証するためにリン酸（全量，可給態量），窒素（全量，可給態量）から有機物などの供給を推定した。全リン酸含量は土器内土壌で2.48mg／gと土壌中に含まれている平均的含量であり，対照試料と有意な差が認められないが，可給態リン酸含量が対照試料で0.08mg／100gであるのに対して，土器内土壌で0.51mg／100gと有意な差が認められる。全窒素含量は0.31%と通常土壌中に含まれる全窒素含量としては高い値であるが，対照試料と比べて，全リン酸含量と同様に有意な差が認められない。微生物などによって容易に分解される易分解性有機物を構成する易分解性有機窒素含量の指標である可給態窒素含量は3.85mg／100gであり，対照試料と比べると高い。しかし，全体的に可給態窒素含量が低いこと，可給態窒素含量は変動が大きいことから有為な差があるとは判断しがたい。

以上から，壺形土器内には塩類の富加が認められないために海水が入れられていた可能性は低い。また，淡水中のリン酸は絶対量が低いことを考えると，リン酸の供給源として何らかの有機物の可能性が高いと推定される。しかし，現時点では内容物の種類を特定するには至らず，今後の発掘調査成果を含めて考えなければならない課題である。

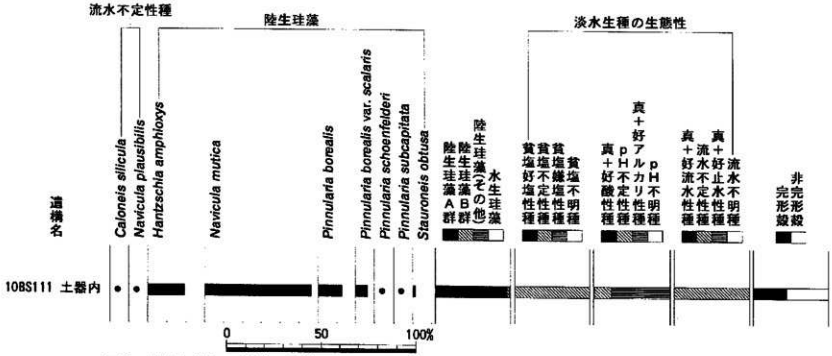


図1　土器内土壌の珪藻化石群集

各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1％未満の種類を示す。

一方，土器内土壌では水生珪藻が極わずかであり，陸生珪藻が優占することから，土器内に水が存在していたとは考えにくい。土器内を充填する土壌は，いわゆる黒ボク土であり，陸生珪藻を包含することが多い。そのため，土器内に珪藻化石を含む土壌が二次的に入り込んだと推定される。

また，花粉・胞子化石も少なく，わずかに検出した化石も非常に保存状態が悪かったことから，栽培植物の有無や古植生に関する検討は困難である。有機物で構成される花粉化石は，土壌微生物の活動が活発な酸化的環境下では分解・消失されやすい。今回，土器内はこのような土壌である黒ボク土で充填されていたことから，花粉化石が含まれていたとしても，現代までに分解・消失してしまった可能性が高い。

今回の調査では，土器内に液体の痕跡が残されていることを前提としているが，今回の結果を見る限り，埋蔵時には土器内に液体が残留していたとは考えにくい。土器が横転した状態で出土していることから，土器内に液体が入っていたとしても，外部へ流出したのかもしれない。

また，今後も今回と同様な形態の壺形土器の内容物について，フローテーション法や洗い出しによる有機物の調査，あるいは土器胎土に染め込んだ珪藻や脂肪酸の分析調査なども行うことで，用途について有効な情報が得られる可能性もある。

〈引用文献〉

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p.73-88.

Asai,K.&Watanabe,T.(1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxonous taxa.Diatom, 10,35-47

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法．354p.，博友社．

土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法.440p.，養賢堂.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境分析への応用．珪藻学会誌，6，p.23-45.

Krammer,K.and Lange-Bertalot,H.（1986）Bacillariophyceae,Teil 1,Naviculaceae. Band 2／1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,876p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer,K.and Lange-Bertalot.H.（1988）Bacillariophyceae,Teil 2,Epithemiaceae, Bacillariaceae,Surirellaceae.Band 2／2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.

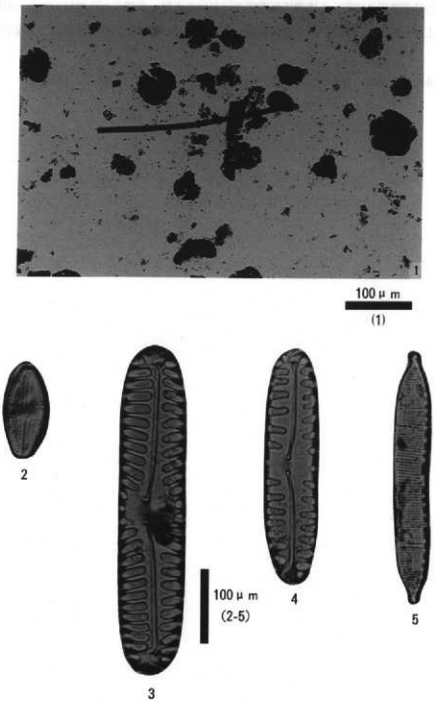
Krammer,K.and Lange-Bertalot.H.(1991a) Bacillariophyceae,Teil 3, Centrales. Fragilariaceae,Eunotiaceae.Band 2／3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer,K.and Lange-Bertalot,H.（1991b）Bacillariophyceae,Teil 4,Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema.Band 2／4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer,K.（1992）PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26.p.1-353.BERLIN-STUTTGART.

三好　洋・鳴田永生・石田昌男・伊達　昇（1983）土壌肥料用語事典,259p.,農文協.
日本第四紀学会編（1993）イオウ分析法，第四紀試料分析法，p119-124,東京大学出版.
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.
農林省農産園芸局農産課編（1979）土壌環境基礎調査における土壌・水質及び作物体分析法（昭和54年11月）.
小川吉雄・加藤弘道・石川実（1989）リン酸緩衝液抽出による可給態窒素の簡易測定法，土壌肥料学会誌，60，p160-163.
ペドロジスト懇談会編（1984）野外土性の判定.「土壌調査ハンドブック」p.39-40，博友社.

図版1　花粉化石プレパラート内状況写真・珪藻化石



1．状況写真（SI11　土器内）
2．Navicula mutica Kuetzing（SI11　土器内）
3．pinnularia borealis Ehrenberg（SI11　土器内）
4．pinnularia borealis var. scalaris（Ehr.）Rabenhorst（SI11　土器内）
5．Hantzschia amphioxys（Ehr.）Grunow（SI11　土器内）

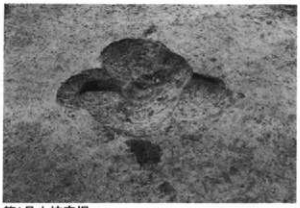
写　真　図　版

大作遺跡

大畑遺跡

大畑遺跡出土弥生土器

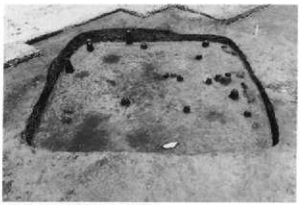
大作遺跡調査終了全景


第1号土坑完掘

第9号土坑完掘

第1号集石遺構完掘

第1号住居跡完掘


第1号住居跡遺物出土状況

第1号住居跡遺物出土状況

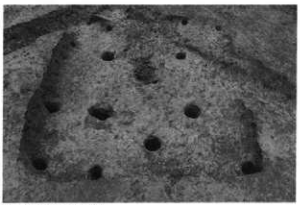
第1号住居跡・第1号竪穴遺構完掘

大畑遺跡遠景

大畑遺跡調査終了風景

第9号住居跡完掘

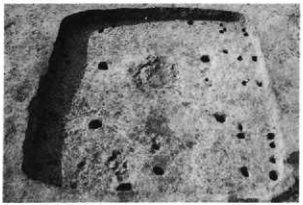
第96号土坑完掘


第1号住居跡完掘

第1号住居跡遺物出土状況

第2号住居跡遺物出土状況

第2号住居跡遺物出土状況


第3号住居跡完掘

第3号住居跡遺物出土状況

第4号住居跡完掘

第4号住居跡遺物出土状況

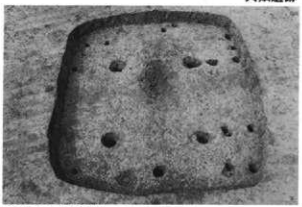
第4号住居跡遺物出土状況

第4号住居跡遺物出土状況

第5号住居跡完掘

第5号住居跡遺物出土状況

第5号住居跡遺物出土状況


第6号住居跡完掘

第6号住居跡遺物出土状況

第6号住居跡遺物出土状況

第6号住居跡遺物出土状況

第7号住居跡完掘

第7号住居跡遺物出土状況

第7号住居跡遺物出土状況

第10号住居跡完掘

第10号住居跡遺物出土状況

第11号住居跡完掘

第11号住居跡遺物出土状況

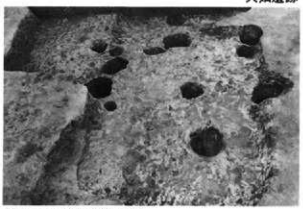
第12号住居跡完掘

第8号住居跡完掘

第1号方形竪穴遺構完掘

第2号方形竪穴遺構完掘

第3・4号方形竪穴遺構完掘


第4号方形竪穴遺構完掘

第1号地下式壙完掘

第1号井戸完掘

第9A・B土坑完掘

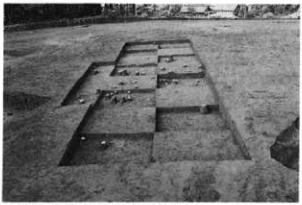
第1号井戸遺物出土状況

第9号土坑馬骨出土状況

第44号土坑完掘

第54・55号土坑完掘

第1・2・3号墓壙完掘

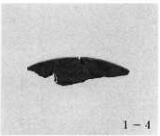

第1号石器集中地点遺物出土状況

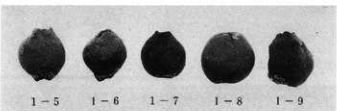
第2号炭焼窯跡完掘

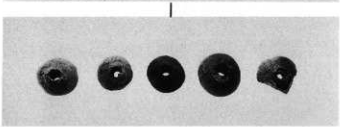
第1号炭焼窯跡完掘

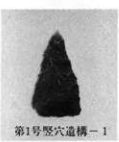
第3号炭焼窯跡完掘

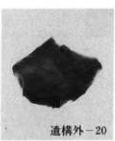
第4号炭焼窯跡完掘

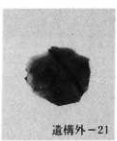


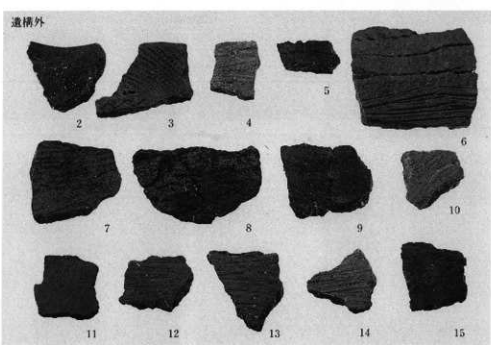






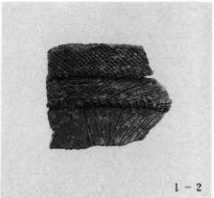


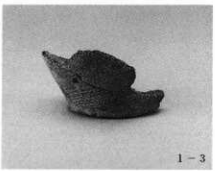




第1号住居跡・第1号竪穴遺構・第9号土坑・遺構外出土遺物

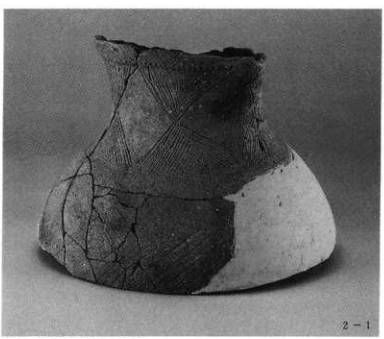
1－1


1－2


1－3

1－4

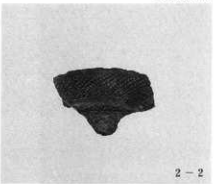
1－5

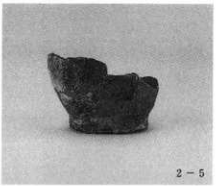

2－1

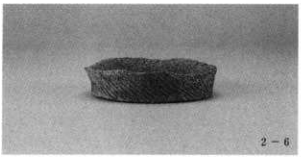
1－6

2－4

第1・2号住居跡出土遺物



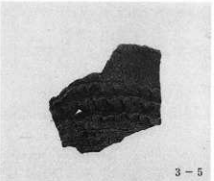




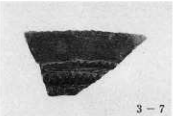
第2・3号住居跡出土遺物

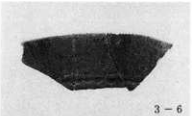
3－2

3－4


3－5

3－8


3－7

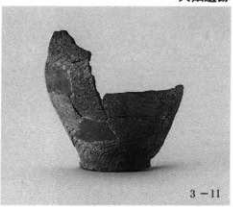

3－6

3－9

3－14

第3号住居跡出土遺物

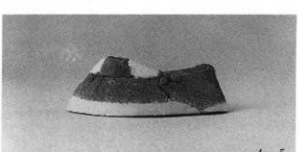
3－10


3－11

3－12

3－15

4－2


4－5

4－6

4－7

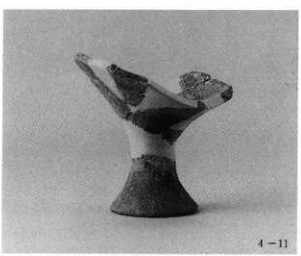
4－9

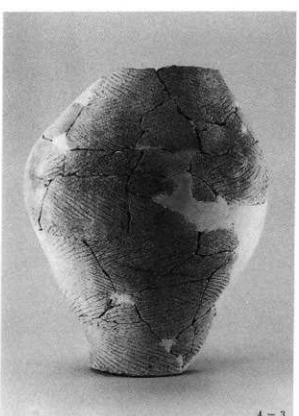
第3・4号住居跡出土遺物

4－4

4－10

5－7


4－11


4－3

4－8

5－8

第4・5号住居跡出土遺物

5－1

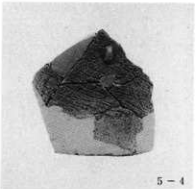
5－2

5－5

5－6

第5号住居跡出土遺物

5－3


5－4

6－1

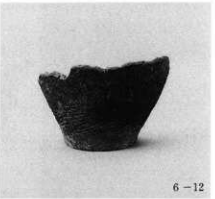
6－2

6－3

第5・6号住居跡出土遺物

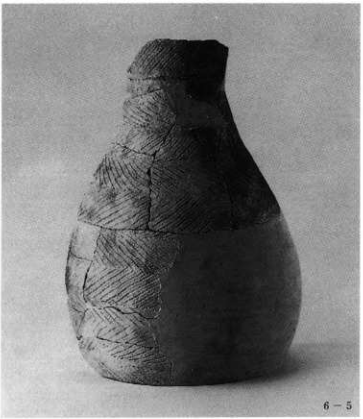
6－4

6－11


6－12

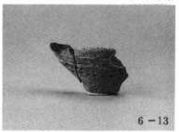
6－6

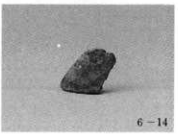
6－7

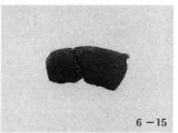

6－5

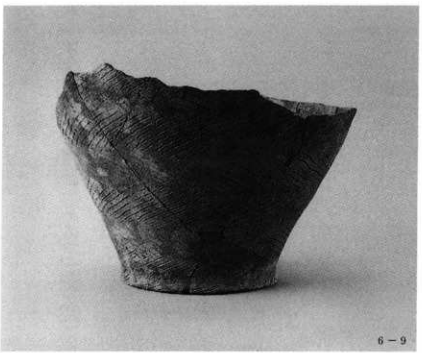
第6号住居跡出土遺物

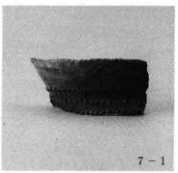
6－8


6－13


6－14

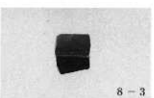

6－15


6－9


7－1

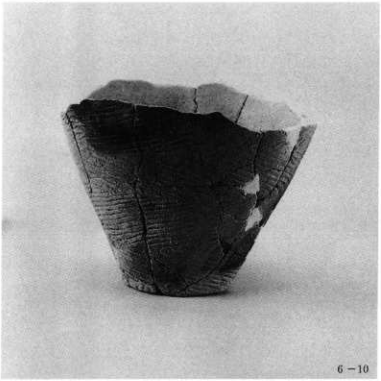
7－2

8－1


8－3

8－2

第6・7・8号住居跡出土遺物


6－10

7－4

7－3

10－1

10－3

10－2

10－4

10－5

第6・7・10号住居跡出土遺物

11－2

11－1

11－6

11－7

11－5

11－8

11－11

第11号住居跡出土遺物(1)

11－3

11－4

11－10

11－15

11－12

11－14

11－13

第11号住居跡出土遺物(2)

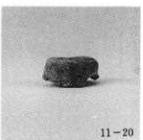
11－9

11－16

11－17

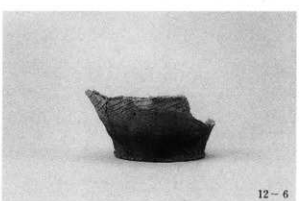
11－18

11－19


11－20

11－21

12－1

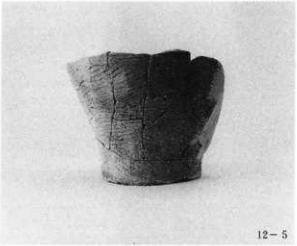

12－6

12－2

12－8

第11・12号住居跡出土遺物

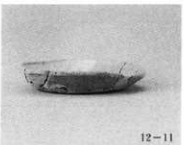
12－4

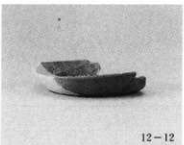

12－5

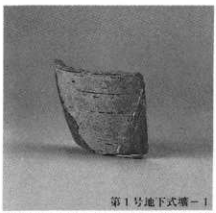
12－7

12－9

12－10


12－11


12－12


第１号地下式壙－１

第１号井戸－17

第12号住居跡，第1号地下式壙，第1号井戸出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

8

第1号井戸出土遺物

9

10

11

12

13

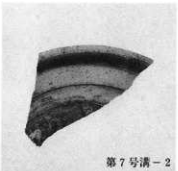
14

15

16

第1号井戸出土遺物

第1号溝－1

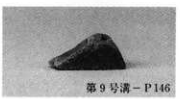

第7号溝－2

第9号溝－4

第9号溝－5

第9号溝－6

第10号溝－8

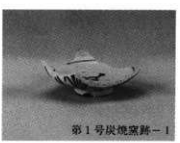

第9号溝－P146

第3号炭焼窯跡－1

第3号炭焼窯跡－2

第11号溝－9

第2号炭焼窯跡－1


第1号炭焼窯跡－1

第1号不明遺構－1

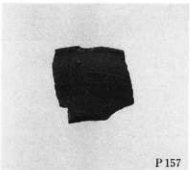
第2号不明遺構－1

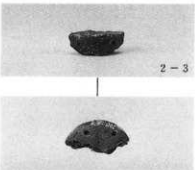
第2号不明遺構－2

第1・7・9・10・11号溝，第1・2・3号炭焼窯跡，第1・2号不明遺構出土遺物

2－1

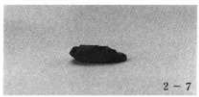
2－2


P157


2－3

P156

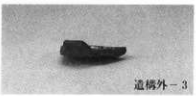
2－4


2－7

2－6

遺構外－1

遺構外－2


遺構外－3

遺構外－4

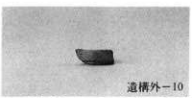
遺構外－5

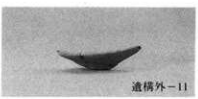
遺構外－6

遺構外－7

遺構外－8

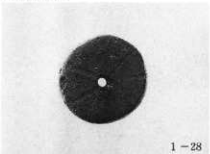
遺構外－9

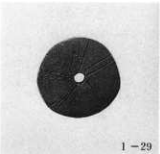

遺構外－10


遺構外－11

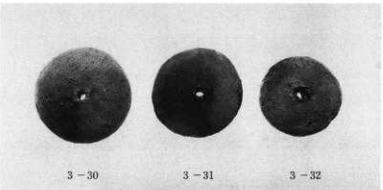
遺構外－12

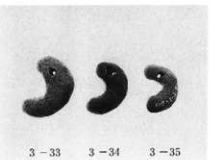
第2号遺物包含層，遺構外出土遺物


1－28


1－29

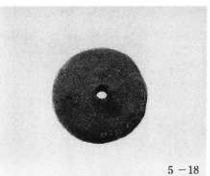
4－22　4－23


3－30　3－31　3－32

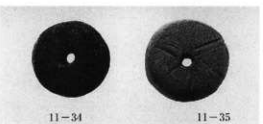

3－33　3－34　3－35

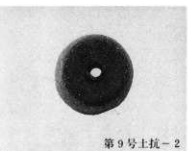
6－28

8－4

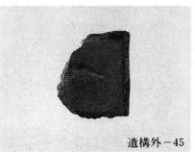

5－18

7－15

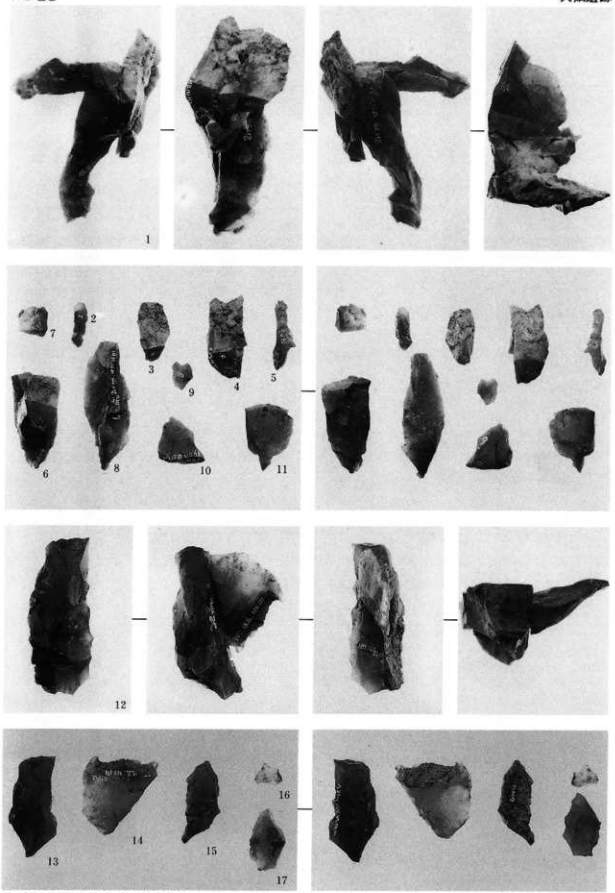

11－34　11－35


第9号土坑－2

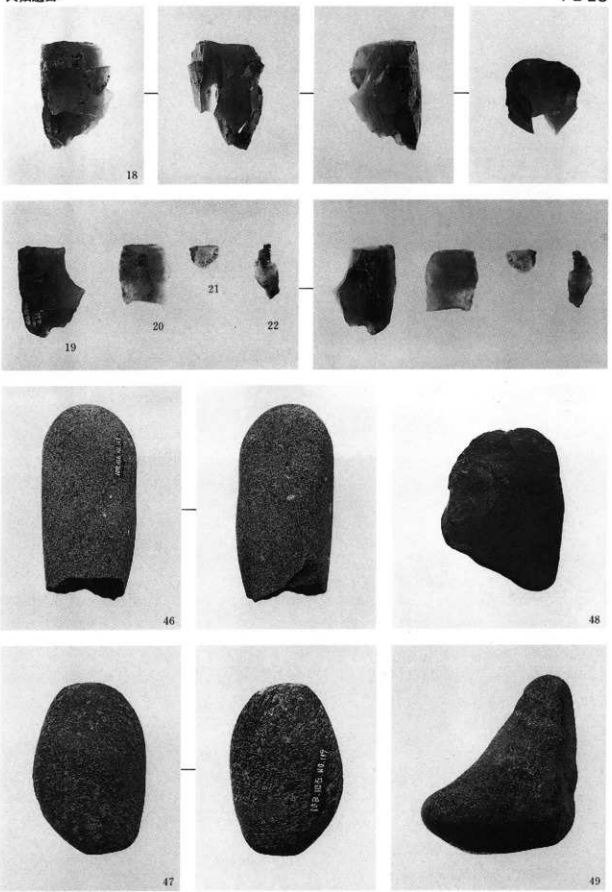
遺構外－44


遺構外－45

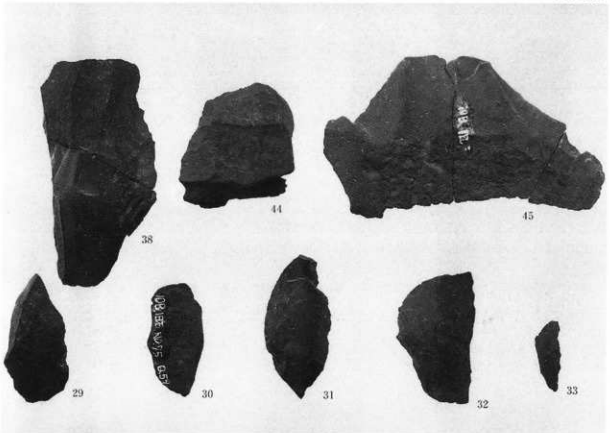
第1・3・5・6・7・8・11号住居跡，第9号土坑，遺構外出土遺物(土製品)

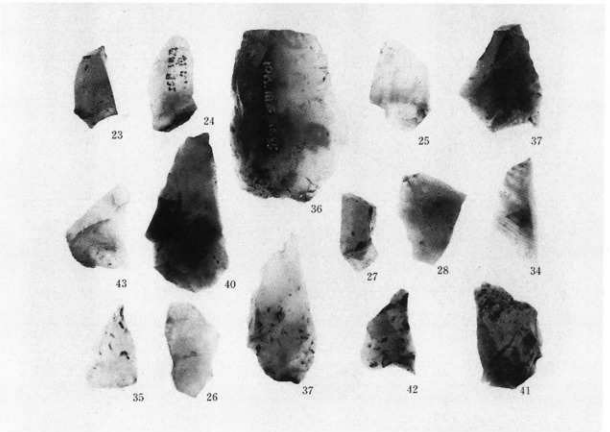


第1号石器集中地点出土遺物(1)



第1号石器集中地点出土遺物(2)





第1号石器集中地点出土遺物(3)

1－31

1－30

3－36

3－39

4－27

3－37

4－24

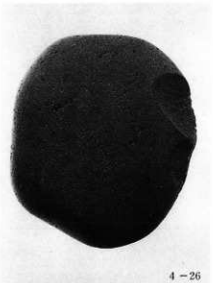
3－38

4－25

第1・3・4号住居跡出土遺物(石器)

10－13

7－16


4－26

4－28

5－19

6－30

6－29

11－38

第4・5・6・7・10・11号住居跡出土遺物(石器)

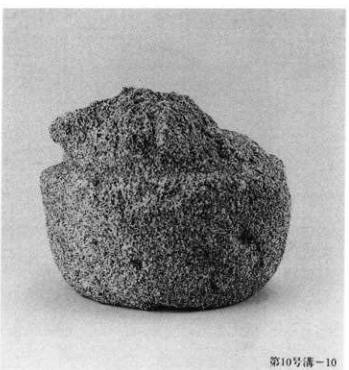
12－19

第7号溝－3

11－36

11－39

12－20


第10号溝－10

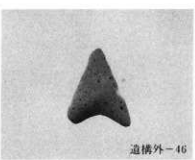
第11・12住居跡，第7・10号溝出土遺物(石器)

遺構外－48

第２号遺物包含層－51

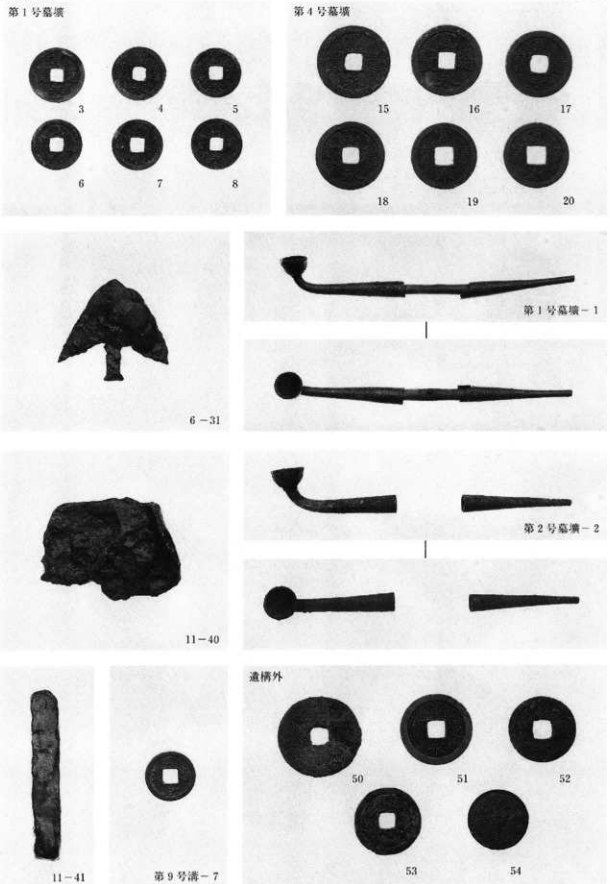
遺構外－49

第２号遺物包含層－50


遺構外－46

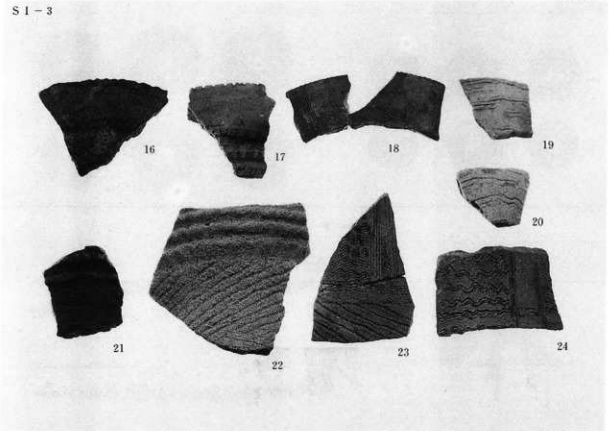
遺構外－47

第2号遺物包含層，遺構外出土遺物(石器)

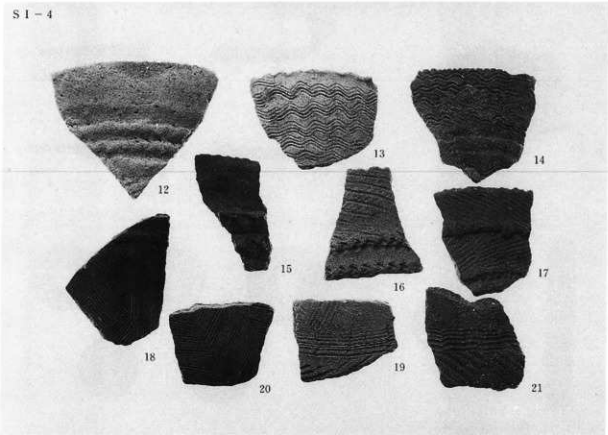


第6・11号住居跡，第1・2・4号墓壙，第9号溝，遺構外出土遺物(金属製品)

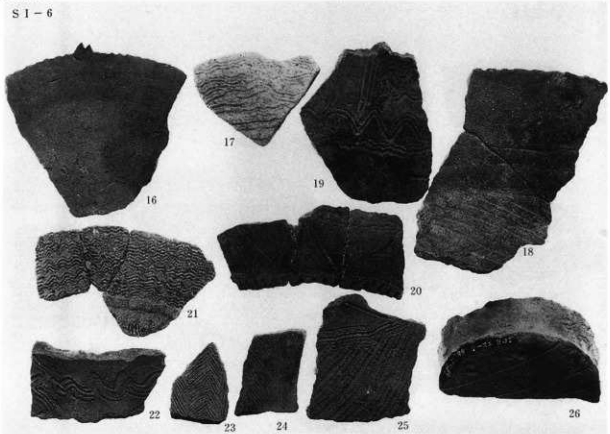
S I－3

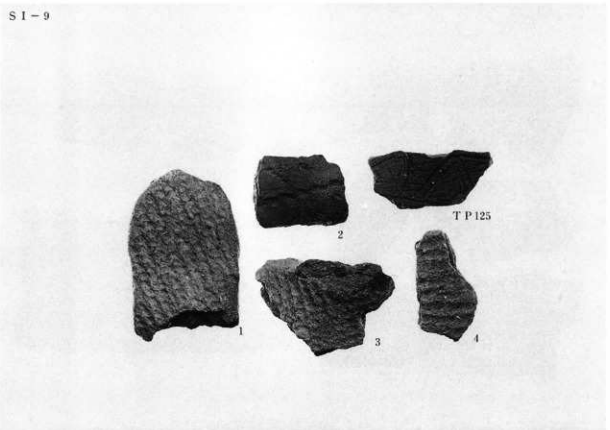


S I－4



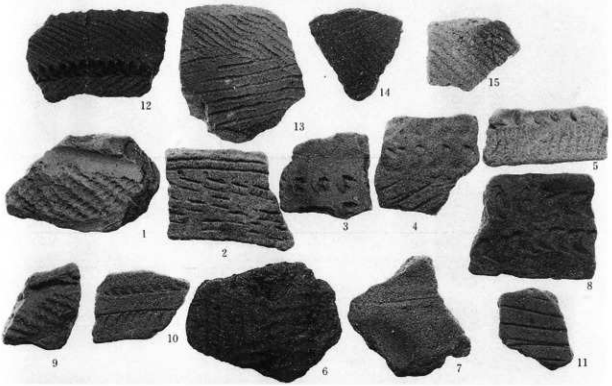
第3・4号住居跡出土土器片



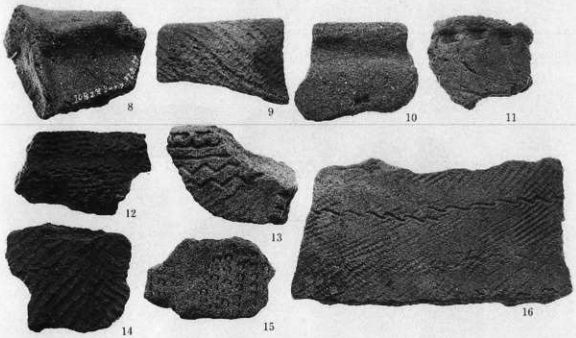


第6・9号住居跡出土土器片

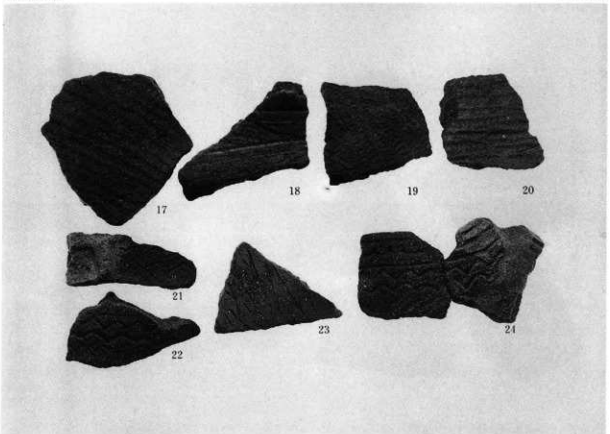
第1号遺物包含層

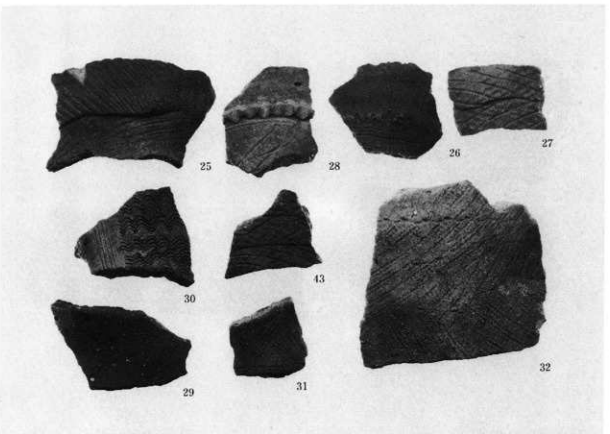


第2号遺物包含層

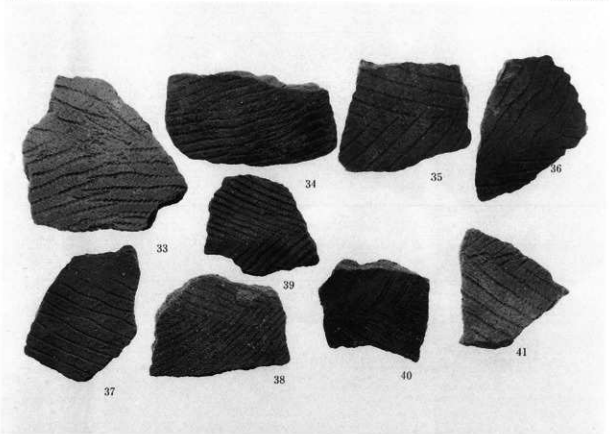


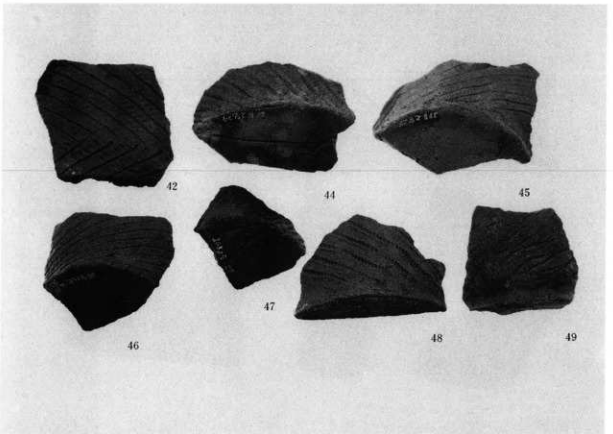
第1・2号遺物包含層出土土器片



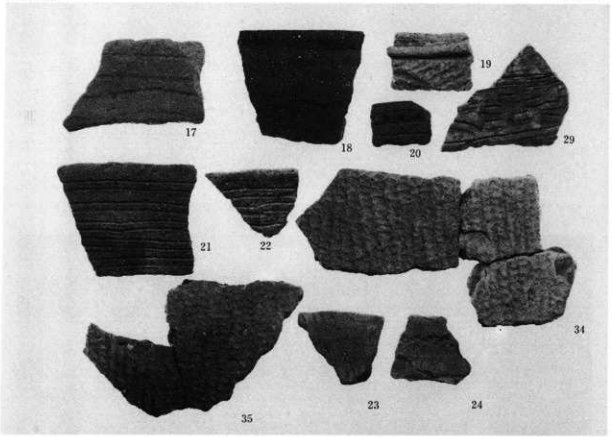


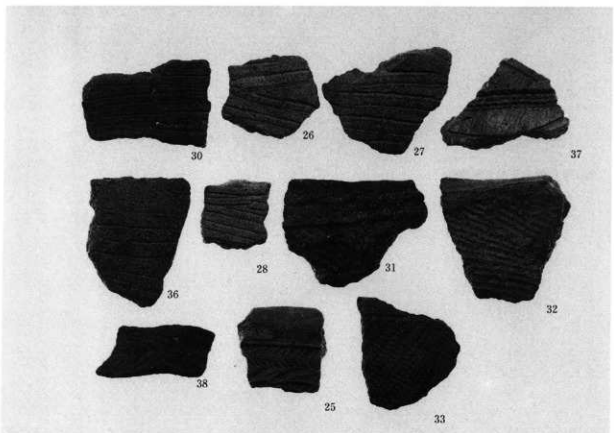
第2号遺物包含層出土土器片





第2号遺物包含層出土土器片





遺構外出土土器片

第1号井戸出土内耳鍋集合

茨城県教育財団文化財調査報告第136集

北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

大作遺跡
大畑遺跡

平成10（1998）年3月16日　印刷
平成10（1998）年3月20日　発行

発　行　財団法人　茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地2号
茨城県生涯学習センター分館内
TEL　029－225－6587

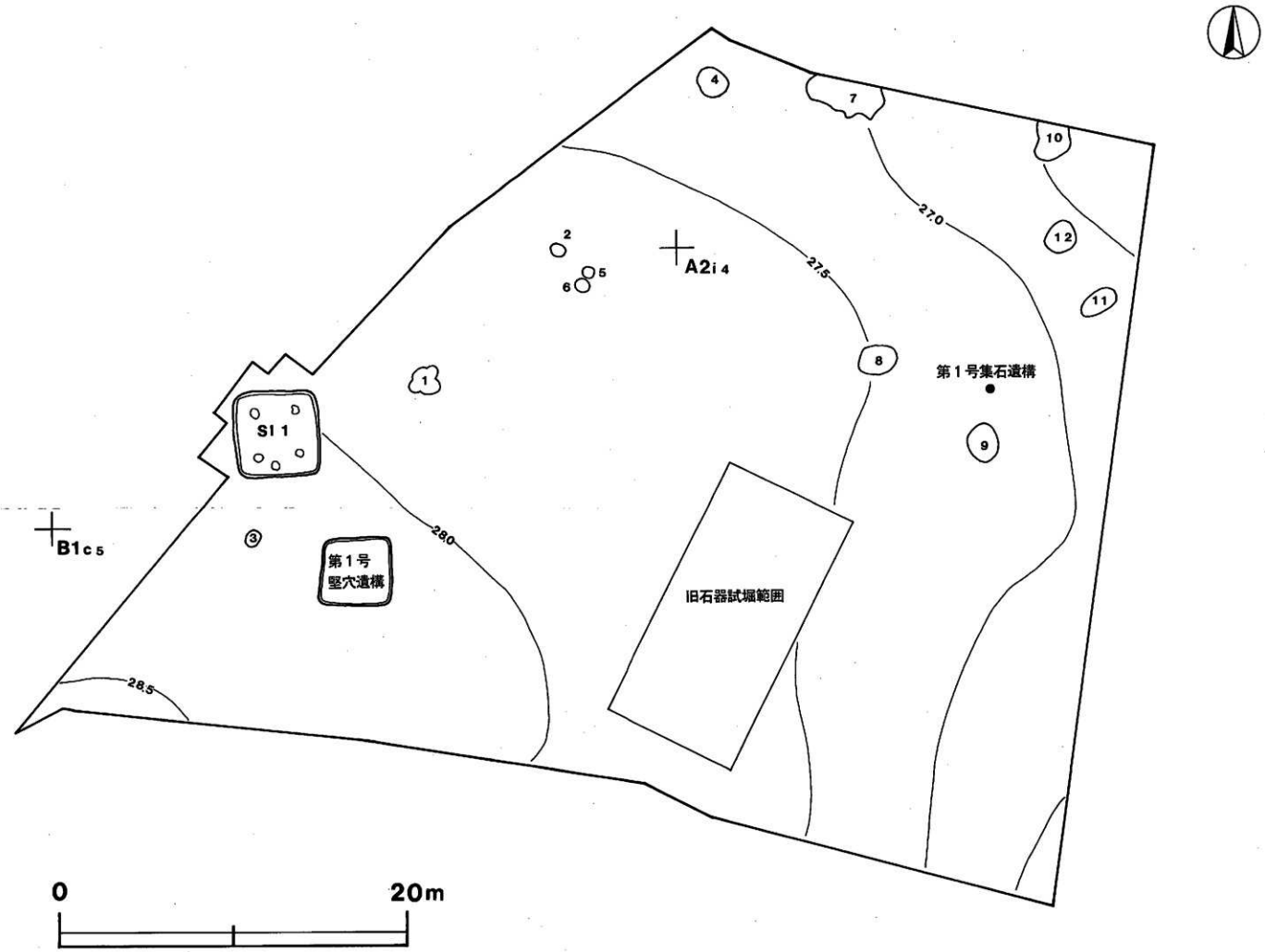
印　刷　野沢印刷株式会社
TEL　029－248－0117

付　　図

茨城県教育財団文化財調査報告第136集

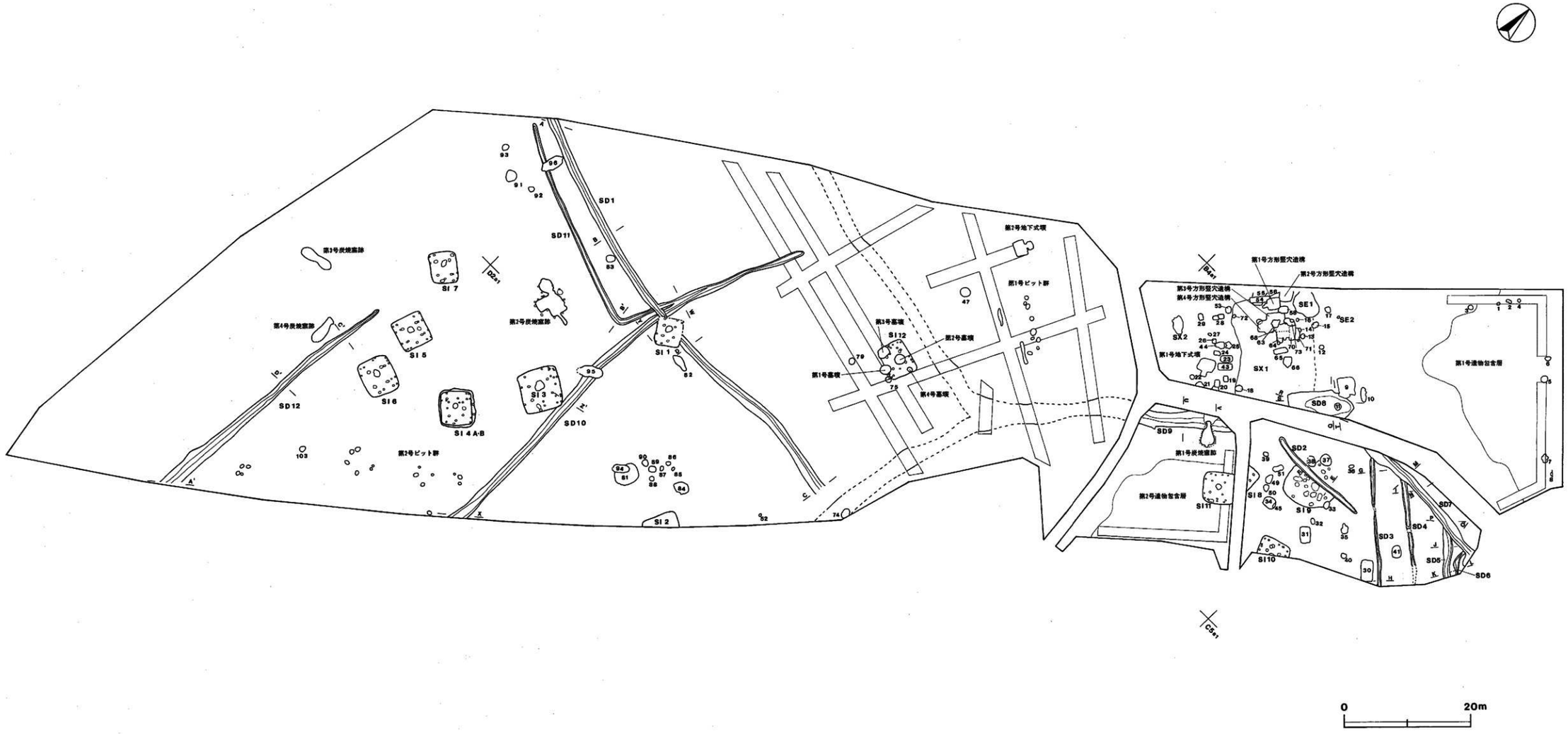
大作遺跡

大畑遺跡



付図1　大作遺跡遺構全体図

210.231
I 11
NK
986/3003　筑波大学図書館



付図２　大畑遺跡遺構全体図

210.231
[11
NE
9861 3003　筑波大学図書館